塞を、一月二日に比島の首都マニラを攻陷し、マレー方面に於てはあらゆる困難を克服して長駆峇達隨所に頑敵を壓倒撃滅し、二月十五日シンガポール要塞の敵をして無條件降伏せしめ以て米、英の東亞に於ける三大據点を覆滅せり。

この間グアム島、英領領ボルネオ、その他の戰略的諸要所をも相次いで攻略して敵側の連絡線を寸断し、また泰緬國境シャン山系の天嶮を突破して深くビルマに、更に南方遠く赤道を越えて蘭領東印度諸島に作戰行動を開始し、ビルマ方面に於てはペグー及びラングーン周辺に於て敵軍主力を撃滅したる後、三月八日首都ラングーンを完全に占領し、蘭領東印度方面に於ては三月五日首都バタビヤを攻略し、爾後敵軍主力をバンドン附近及びスラバヤ附近に両断包囲してこれに猛攻を加へ、三月九日つひに敵全軍をして全面的無條件降伏せしめこゝに我が陸軍は開戰以來三ケ月にして西南太平洋に於ける敵聯合軍の主要根據地を覆滅し、皇軍の威武を中外に宣揚せり。

二、我占領地は適切なる軍政の下治安著々回復し、各住民の眞摯なる協力に依り復興の機運旺なるものあり。

三、開戰以來各方面とも將兵の志氣極めて旺盛にして、我が軍陣醫療の完備と相俟つて熱帶の酷熱の地に行動すること既に九十余日に亘るも熱性疾患極めて少數にして、作戰上に及ぼせるこれが影響は殆ど皆無なり。

註＝某兵站病院の一月末日に於ける調査によれば入院患者千二百三十二名中マラリヤ患者は僅に九十名なり

種目	飛行機			戰車	火砲	機關銃	銃器	自動車	鉄道車輛	船舶	艦艇	人員	
方面	撃墜	撃破	鹵獲								撃沈破	俘虜	遺棄死体
馬來	一五一	三四四	一〇	四六六	九六	二、〇二一	三、四四〇	一、〇九六	二九五	八	四、〇八〇	一、〇〇一	三、一八四
比島	一四（四六）	一五（六〇）	—	三六	六六	四一	一五、六四	四一	一五	一、一〇〇	九一	一、九六六	一五、四四
緬甸	一六（四三）	一三（六〇）	一	九四	四四	六六	三、三五	二一〇	一七	一、九六六	一五、〇四三		
蘭印	八（一四四）	一六六（八〇）	—	四四	一〇六	四、三四四	五四四	四一	二	九	五、四四〇	六八五	
英領ニューギニア	二（一四）	—	五	八	六	四四	六五	三一〇	—	一〇	—	五九一	三〇〇
香港	三（一）	一四	五	一〇	一三一	一、〇二〇	六八八	一、四四〇	三〇九	一四一	五	二、三四一	一、四五五
瓦無	—	—	—	—	二	二四四	八二二	一四四	—	二	—	四四四	—
合計	四四〇（一四四）	六六一（一〇〇）	三	四六八	一、四四四	四四〇三	八、四〇四	六六、四四四	四、三一〇	四六四	二四、〇六六	九、四四	九、九九

註考＝括弧内は不確實數、マレー方面の遺棄死体は「ジョホール、バル」突入のものなり

（八）第七十九議會における第二次戰況報告

（1）陸軍大臣報告

昭南島方面におけるシンガポール攻略部隊は同市接收後、直ちに次期作戰に移り一部は昭南島南方のバタム島、ビンタン島を占領し、主力はそれ〳〵新たなる任務についてゐる。

スマトラ島方面においてはわが落下傘部隊のパレンバン奇襲に呼應した地上部隊が海軍との緊密なる協同の下、一部を以て二月十五日スマトラ島南部の東にあるバンカ島の要地を占領し、主力はムシ河を遡り、同日夜より逐次パレンバン附近に到着し、擬進せる落下傘部隊と完全に合体し、同部隊が收めた戰果、特に同地附近の燃料関係諸施設を確保した。同方面の部隊は各一部を以て南方及び西方に進撃し、二月二十日より二十四日の間においてスマトラ島南部の各要地を占領して各地方を掃定すると共に、スマンカ灣の敵海軍基地を殲滅した、又パレンバンより西北進した部隊は長駆二百キロを前進して二十六日サロランゲンを、二十八日には更にその西北方百二十キロのムアルボンゴウを攻略し、三月四日にはジャンビーを占領して同地附近の油田地帶を確保した。

ジャバ島方面においては、一部の部隊は二月十九日先づジャバ島の東隣にあるバリ島を攻略して、ジャバ島と小スンダ列島とを分断し、またわが航空部隊の二月十九日以來連日有力なる部隊を以て困難なる洋作戰を行ひ、ジャバ島各地の軍事諸施設、なかんづく敵航空基地を空襲して、二月十九日同廿四日の如きはそれ〳〵敵機四十五機または四十一機を撃墜若くは炎上撃破する等の戰果を擧

四、開戰以來三月七日までに判明せる帝國陸軍の綜合戰果前回の如し。

（2）海軍の戰果

大本營発表（三月七日午後三時半）開戰以來三月七日迄に判明せる帝國海軍の綜合戰果左の通り

	撃沈	大中破	拿捕	我方の損害
	米 英 蘭	米 英 蘭	米 英 蘭	
戰艦	五 二 四			
航空母艦	三（水上機母艦一を含む）			
甲級巡洋艦	一			小破一（修理完成）
乙級巡洋艦	四 二 四	八 一 一		小破一（修理完成）
駆逐艦	八 一〇 四	六 五		沈没四 中破一
潜水艦	四四 一五			特務潜航艇沈没五
砲艦	七 六 一			
敷設艦	四 二			
特務艦	二 一三 二一			沈没一
掃海艇	四 二			沈没五、大破一
魚雷艇	九			
船舶	一〇五万〇六〇〇噸	九万三〇〇〇噸	調査中	沈没二七
飛行機	撃墜四六一	撃破炎上一〇六	同上合計	自損及未帰還 一二二

勝利の歴史

げ、敵航空勢力を殆ど壊滅したのみならず、この間敵巡洋艦四、駆逐艦一隻に直撃弾を與へ、帝國海軍の善戦健闘と相まつてわが上陸兵團の輸送並に爾後の作戦に遺憾なからしめた。わが上陸部隊は海軍と相協同して三月一日未明ジヤワ島西北端アウラン岬附近バタビヤ東方バトロール附近及びスラバヤ西北方ケラガン附近の敵前上陸を敢行した。西方に上陸した部隊は三日夕にはチサダネ河の線に進出、五日既に敵首都バタビヤを占領、又他の部隊は同日夜有力なる敵の軍事基地バイテンゾルグを夜襲してこれを占領し、直ちにバンドン要塞に向ひ敵を急追した。東方に上陸した部隊は二日既にケラガン周辺のレンバンチエブ、ツバンを攻略し、主力は五日スラバヤ西南方約六十キロのジヨンバンを占領し、七日午後スラバヤに突入した。またこの方面の一部は克く敵中深く進撃して五日ジヨクジヤカルタの敵を屠り、引續き海岸道を突進、ジヤバ島南岸における敵最大の退却路たるチラチヤツプに迫つた。中央バトロール附近に上陸した一部隊は逸早くその先遣隊をもつてカリジヤチ飛行場を奇襲奪取し、わが航空部隊をこれに躍進せしめると共に、更にその一部は挺進所在の敵の逆襲を粉破しつゝ五日には早くも敵がジヤバ島最後の要塞と恃んだバンドン要塞の北側に迫り、極めて優勢なる敵に対し敢然攻撃した。

バンドン要塞守備軍は七日夜遂に敵守備軍司令官自らわが第一線に來り停戦を乞ふに至つた。わが第一線部隊長は敵をして直ちに抵抗を止むべきこと並に翌八日時刻を定めて更に會見すべき旨を告げ、八日午後三時五十分に至り蘭印總督はその陸軍長官以下を從へ、カリジヤチ飛行場に到着、彼等はわが現地最高指揮官の全面的無條件降伏要求に対し、バンドン附近のみの局地的降伏を主張して譲らず、よつてわが方は依然武力解決を要する場合あるを顧慮し、万般の準備を進めた。翌九日午後三時蘭印總督も遂にわが要求に服し、十万に近き蘭印軍及び英米濠軍は全面的無條件降伏をなすに至り、飽くまで抵抗を呼号した蘭印は上陸以來旬日を出でずしてわが手に帰した。

チモール島ポルトガル領についてはわが軍は自衛上この地域に作戦せざるを得なかつた。然しながら帝國は極めて公明正大なる措置を採り、ポルトガル側が中立的態度を保障する限り領土保全を保障し、自衛上の目的達成の上は同島より撤退する旨を明かにしポルトガル側も十分これを諒解した。こゝにおいてわが一部隊は二月廿日チモール島ポルトガル領の要衝デリー及び蘭領クーパンに敵前上陸を敢行し、同島の英蘭濠軍を降伏せしめ蘭印、濠洲間交通連絡の遮断に成功した。

ビルマ方面作戦中の部隊はマルタバン占領後わが航空部隊との緊密なる協同の下、嚴に企圖を秘匿しつゝ進撃し、二月十六日乃至十九日の間ビリン河畔において一個團强の敵を捕捉撃滅してシツタン河の線に進出し、三月二日夜以降逐次同河の敵前渡河を決行して七日午後要衝ペグーの敵を撃破してこれを占領し、八日午前十時遂に敵首都ラングーンを陥れ、ビルマ援蒋路を完全に遮断した。

南方における戦況は概ね以上の通りであるが、開戦以來三月十日までに判明致した南方における綜合戦果について主要なるものをいふと、俘虜は累計二十一万を超え、敵に與へた飛行機の損害は約千六百機に達し、鹵獲したものは火砲約二千百門、小銃、機関銃、軽銃等約十九万挺、戦車、自動車、鉄道車輌等約二万八千輌等莫大な数に達する見込みである。

右の外、ランゲーン攻略に伴ふ戦果は未だ判明してゐないが、この戦果もまた相當多数に上るものと豫想せられる。なほ蘭印の諸施設及び資源には一部の損壊はあるが、その大部は無事これを接收し得る見込みであつて、破壊せられた諸施設についても、蘭印側は日本軍指導の下誠意をもつてこれが復旧を実施すべき旨申出てゐる。又この間支那においては連續不断の討伐を実施して治安は逐次回復し、わが北辺の護りも亦嚴として益々蒼きを加へつつある。皇軍の作戦は着々として進み緒戦の戦果亦極めて大なるものがあるが、大東亞共榮圏建設の大事業は將に今後にあることに想ひを致し、軍は毫も小成に安んずることなく益々士氣を昂揚し至嚴の軍紀を保ち、以て完全にその重責を果さんことを期してゐる。

（2）海軍大臣報告

今回のジヤバ島攻略及びビルマの首都ラングーンの占領は、インド洋方面を含む廣大な西南地域の制海制空權獲得を完成し、もつて大東亞戦争の戦局に更に一大段階を進めたものである。以下最近の主要なる戦況につき説明する。

東インド諸島方面においては、シンガポール陥落後敵聯合軍はジヤバ島を最後の據点と恃み、海上及び航空兵力の大部をこれに集中し、なほ後方より米英両軍を増派して最後の抵抗を期した。これに対し西においては、二月十五日陸海軍部隊協同の下に先づバンカ島を攻略して據点を占め、引續き海上部隊をもつてスマトラの要衝パレンバンに通ずる水路を啓開して、陸軍輸送船團を護衛する翌江作戦に成功し、勇敢なる陸軍部隊の奮闘により二月十七日パレンバンを完全に占領した。

これと同時にジヤバ島方面に対し、殆ど連日大規模なる空襲を決行して敵本據の主要兵力を破摧し、また東方チモール島並に濠洲の要衝ポート・ダーウインを空襲して、敵聯合軍の後方連絡並に補給の機能を失はしめた。即ち二月十九日海軍航空部隊の行つたポート・ダーウイン空襲は敵の艦船十四隻を撃沈し、所在の飛行機二十六機全部を撃墜破致したが、濠洲本土に対するわが軍最初の大規模なる攻撃として、敵側に與へたる有形無形の打撃は蓋し甚大なるものがあつた。次いで陸海軍部隊は緊密なる連繋の下に二月十九日、二十日それ〴〵バリ島及びチモール島に果敢なる上陸作戦を敢行し、迅速に要地を占領してこの方面作戦上の有力なる地歩を占めた。

右作戦中二月廿日夜バリ島東ロンボク水道において我駆逐艦二隻は、巡洋艦及び駆逐艦より成る有力なる敵米蘭聯合艦隊に対し勇敢なる夜戦を決行し、一挙にして敵駆逐艦四隻を撃沈し、巡洋艦二隻及び駆逐艦一隻大破の大戦果を挙げた。かくてジヤバ島に対する包圍態勢の完成を見たので、帝國海軍部隊は陸軍輸送船團を護衛し大規模なるジヤバ島上陸協同作戦を決行したのである。

わが艦隊が二月廿七日東西両方面より輸送船團を護衛してジヤバ島に接近するや、敵の有力なる艦隊が行手にあつて反撃の姿勢をとつてゐるのを発見、こゝに廿七日薄暮より三月一日午前まで約一晝夜半に亘りスラバヤ沖、バタビヤ沖において壮夜壮烈なる海戦を行ひ、敵の聯合艦隊を一挙に全滅せしめたのである。この戦闘においてわが損害は掃海艇一隻沈没、駆逐艦一隻小破したのに対しわが軍の撃沈した敵艦は米國甲巡ヒユーストン、英國甲巡エクゼター、濠洲乙巡パース及びホバート、オランダ乙巡デ・ロイテル及びジヤバ合計六隻を初めとし潜水艦

七隻、驅逐艦八隻及び砲艦、掃海艇各一隻、總計廿三隻である。かくして三月一日末明豫定の上陸作戰は極めて順調に実施された。上陸軍の急速なる進擊に呼應し海軍部隊は機を失せず、ジヤバ島周辺の廣大なる區域に亙り、殲滅並に救援又は脱出を企圖する敵艦船の掃蕩を行ひ、三月一日より八日に亙る期間において米國乙巡マーブルヘツドを初め驅逐艦二隻、砲艦一隻を撃沈し掃海艇二隻を捕獲した外敵輸船五十二隻約二十万トンを撃沈した。この間、また濠洲本土に対しても有力なる海軍航空部隊をもつて長駆ブルーム、ウインダム等敵軍事上の要地に対し爆撃を加へ敵を震駭せしめた。

右の如き我方の進擊に対し、敵もまた頻りに遊擊作戰を試みて二月一日マーシヤル群島方面を初めわが南洋方面に対し數次の攻擊を加へて來たが、わが海軍部隊は常に周到迅速なる作戰によりその都度大攻擊を與へてこれを撃攘してゐる。即ち去る二月廿一日ニューギニヤ東方洋上においてわが南洋郡島方面に向ふ有力なる敵部隊を発見するやわが航空部隊は機を失せずこれに殺到し、新式中型航空母艦一隻を撃沈し、他の一隻にも大損害を與へ敵飛行機十機を撃墜した。次いで二月廿四日大鳥島（ウエーキ島）方面に、また三月四日南鳥島に対し同樣に敵は攻擊を加へて來たが、いづれもわが反擊により飛行機及び艦艇に少からざる損害を被つて敗退してゐる。

轉じてハワイ方面においては、帝國海軍航空部隊は二月四日夜半同港を急襲して海軍工廠を爆擊し、又米本土沿岸においても帝國潜水艦は去る二月廿四日夜カリフオルニヤ州沿岸サンタバーバラ附近の軍事施設に対し、大膽なる砲擊を加へ共に敵國に対し多大の衝動を加へた。

以上はシンガポール陥落以後における帝國海軍作戰の主なるものであるが、開戰以來今日までに擧げた戰果を綜合すると、撃沈したものが

戰　艦	七隻
航空母艦	三隻
巡洋艦	十二隻
驅逐艦	廿二隻
潜水艦	四十四隻
その他艦艇	四十二隻
合　計	百三十隻

となり、大破または中破致したものは戰艦四隻及び巡洋艦以下各種艦艇合せて七十二隻である。商船においては撃沈百廿八隻六十八万トン、大破九十二隻卅万トンの外に拿捕致したもの大小五百二隻廿一万トンがあり、飛行機は撃墜破合せて一千五百五十四機に達してゐる。

これに対して我方の損害は驅逐艦四隻、潜水艦四隻、特殊潜航艇五隻、特務艦一隻、掃海艇五隻、運送船二七隻が沈没し、また飛行機の損失は一二二機に過ぎぬ。先に申上げた甲巡、乙巡各一隻の損傷は何れも軽微で、既に修理完成してジヤバ作戰に参加し赫々たる戰果を擧げてゐる。しかるに敵が今なほ我方の艦船損失について荒唐無稽なる宣傳をなしあるやに聞くが、わが損害は右の通りであつて、帝國の発表は常に正確を期してをるのである。重ねて申上げるが巡洋艦以上の損失は今日まで一隻もありませぬ。

以上の如く帝國海軍作戰は極めて有利に展開しつゝあるが、これを大東亞戰爭の全局より觀るとき、今日までの作戰は基礎を固めたるに過ぎないと申すべきで、敵が鋭意戰力增强に努め頻勞挽回を期しゐる事実に鑑み、眞に戰爭の勝敗を決するは緒つて今後に在りと考へる。

二　ハワイ海戰

八日午前六時の第一回発表において、西太平洋において米英軍と交戰狀態に入つたことが発表されたが、同日午後一時の第二回発表は帝國海軍が『八日末明ハワイ方面の米國艦隊並に航空兵力に対し決死的大空襲を敢行せり』と報じ、世人の想像に絶したこの大奇襲作戰の壯擧に全世界を驚倒せしめた。

ハワイは日本を距ること三千百浬、アメリカからは二千浬の洋上にあつて、アメリカ海軍の対日渡洋進攻作戰の最も重要な根據地であり、アメリカは眞珠灣軍港の鎮護に十億ドルの巨費を投じ、地中海のジブラルタルと共に世界の二大軍港として、アメリカが世界に誇つてゐたところである。アメリカ海軍をハワイを頂点としてアラスカのダッチハーバーと、パナマとを結ぶ線を底辺とする三角形こそ太平洋防衛線であり、他國の侵入を許さぬアメリカの生命線であつた。対米戰爭の血祭に、わが海軍が屈指萬千里、太平洋を渡つて敵の牙城を搗るといふ雄圖にして大膽極る逆手戰法に出づべしとは、世界の軍事專門家が誰一人として想到し得なかつたところである。

ハワイ進攻は日本人をも含めて世界人類すべての意表に出でた大奇襲作戰であつた。帝國海軍がアメリカの正面に対して堂々と攻擊を加えたことは、わが海軍の自信と、卓拔せる戰略とを表明するものとして、國民を奮げて必勝の信念を抱き、その武功を確信したのである。

開戰劈頭の大戰果　果然午後八時四十五分の大本營発表は左の如き驚異的大戰果を報じて、世界を震撼せしめた。わが國民は感涙に咽びながら、全身を耳にしてこの報道を聽き入つたのである。

敵戰艦撃沈二、大破四

——海軍劈頭の大戰果——

大本營海軍部発表（八日午後八時四十五分）

一、本八日早朝帝國海軍航空部隊により決行せられたるハワイ空襲に於いて現在までに判明せる戰果左の如し

戰艦二隻轟沈、戰艦四隻大破、大型巡洋艦若干四隻大破、（以上確定）、他に敵飛行機多數を撃墜破せり、我が飛行機の損害は軽微なり

二、我が潜水艦はホノルル沖に於いて航空母艦一隻を撃沈せるものの如きも未だ確実ならず

三、本八日早朝ガム島空襲に於いて軍艦ペンギンを撃沈せり

四、本日敵國商船を捕獲せるもの數隻

五、本日同作戰に於いてわが艦艇損害なし

我に天佑神助あり　アメリカ海軍の太平洋艦隊は特に同年恒例の大演習を中止して眞珠灣に集結し、同灣内外で絶えず猛練習を行ひ、戰爭勃発當時には眞珠灣を中心に大体戰艦九隻、甲巡五隻、乙巡六隻、驅逐艦十五隻、航空母艦二隻、潜水艦十隻位が碇泊してゐたやうである。わが海軍がことさらに日曜の

未明を狙ひ、しかも太平洋戰爭は先づ通商破壞戰から開始されるであらうといふ通說を一擲して、堂々艦の主力部隊の攻擊を敢行したことは、全く敵の虚を衝く大膽不敵の奇襲作戰であつた。しかし日本がまさかハワイを攻むることはあるまいと信じきつてゐたことは確に油斷であつた。しかも十二月八日の數日前からハワイ一帶は相當猛烈な暴風雨が續いたためアメリカ海軍も哨戒を中止した。八日に至つて暴雨は霽れたが、風は尙强かつた。それでこの日も哨戒は実施されなかつた。ハワイからの報道は、日本空軍は山にスレスレに殆ど這ふやうに低空飛行をしたために、音は聽えたが機影は見えなかつた。そのうちに飛行機が見えたと思つた時は、もうアメリカ艦隊の真上に來られてゐたと傳へてゐる。防空砲火が始つたのは爆擊が始つた後であつた。この暴風雨もまた正義を加護する天佑であつた。

わが軍がアメリカの正面を衝いたことはアメリカを驚倒せしめた。朝日新聞の細川ヴェノスアイレス特派員はアメリカの狼狽振りを報じて左の如く傳へてゐる。『アメリカとしては日本がやつて來るとしてもハイランドを目標にしてやるものと思つてゐたところ、ハワイ、マニラ、シンガポールを一擊にやつたのだから、裏口が危いと思つてゐたのに、日本は玄關口からやつて來たので、狼狽はその極に達してゐる。アメリカからこちらに流れて來る情報も、全く手も足も出ない狀態で、今のところ宣傳をしやうにもしかねる始末である』

米軍の驚愕狼狽　ホノルル電報は、日本海軍航空部隊爆擊機大編隊はハワイ時間七日午前七時三十五分（日本時間八日午前三時五分）ホノルルに初空襲を開始した旨報じた。白堊館も七日日本軍がハワイ空襲をした旨公表した。ストツクホルムで接受したBBC放送は八日日本空軍のハワイ攻擊狀況を次の如く報じた。

『日本空軍のハワイ攻擊により米英多數が死亡し三千名が負傷した。死者のうち三百五十名はホノルル飛行場爆擊の際死亡したもので、一般市民の死傷者はまだ発表されてゐないが少數の見込み、日本軍の空襲は全く寝耳に水だつたので、ホノルル放送局から「只今放送局が爆擊されてゐる」と放送した時市民は殆んどこれを信用しなかつたが、間もなく日本飛行機が頭上に現れ、飛行場や海軍基地に爆擊を投下したしてから、やつと本當だと氣がついた程であつた。第一の編隊は真珠灣を空襲し、島内各地に機銃掃射を浴せた上で、更にヒツカム飛行機に向ひ、同所にも甚大な損害を與へた。真珠灣は米國太平洋艦隊の基地であり、日本軍の意圖の奈辺にあるかを示唆するものである。軍艦三隻は攻擊を受けうち、戰艦オクラホマは火を発した、米國驅逐艦一隻は全速力で港外に出て行つたが、間もなく猛烈な砲聲が起つた恐らく海戰が行はれたものと思はれる』

アメリカが如何に狼狽し、混亂に陷つたかは、パナマから南米某地を経由して來た情報によると、航空母艦、エンタープライズがハワイ沖で沈沒に瀕したので艦上機七十余機は地上基地に歸還すべくハワイに飛來したところ、さてこそ再度の空襲と漸く準備の整つた地上砲火は米機が舞下るところを狙つて一斉に火蓋を切つた。上空の米機は驚いて無電で『我は味方なり』と発信したが、狼狽した敵は聞かばこそ、撃つて撃ちまくり七十余機を悉く撃墜してしまつた。また港湾附近にあつた一潜水艦は一輸送船を発見、わが艦艇の急襲と早合点し、直ちに魚雷を放つてこれを撃沈した。沈められた米船の乗組員五、六十名は辛うじてボートに乗移り陸地に向つて漕ぎ帰つたところ、日本軍の敵前上陸と信じて一斉射撃を浴せボート諸共海底の藻屑と消えてしまつた。

敵も我が大戰果を確認　BBC放送は七日日本空軍の攻擊により、米戰闘艦オクラホマ（二九、〇〇〇トン）は火炎を起し、また戰闘艦ウエスト・ヴアージニア（三一、八〇〇トン）は撃沈された旨報じた。八日ワシントン來電によるとホワイト・ハウスも八日わが奇襲作戰の大戰果を確認して次の如く戰況を発表した。

一、米軍はハワイ諸島周辺において今なほ交戰中である。

一、七日日本軍のオアフ島攻擊によつて蒙つた米軍の損害は最初の豫想より遙かに甚大に上る見込である。

一、真珠灣において米戰艦二隻轉覆し、他の數隻は大破した。

一、米駆逐艦一隻が爆破され他の小型艦數隻は大破した。

一、ハワイ諸島の米陸海空軍基地は日本空軍により爆擊され數棟の格納庫が破壞された外、多數の飛行機は役に立たなくなつた。

一、サンフラン・シスコから救護に赴いた米爆擊機多數はハワイに到着した。

一、オアフ島における死傷者數は未だ確定されてゐないが、死者約三千名、負傷者一千五百名に上る見込である。爆擊はホノルル市中にも投下されたが市民の死傷者は少なかつた。

真珠灣の大惨害に驚愕したルーズヴエルト大統領は現地調査のためノツクス海軍長官をハワイに急派したが、その帰來を機にアメリカは日本軍のハワイ攻擊による損害を発表したが、それによると日本空軍は〇〇機乃至〇〇機の編隊を以て九時間に亘り連續六回ホノルルを空襲した、市民の死者は僅に四十九名にすぎないが、陸海軍の戰死者は千五百名、負傷者千五百名に上つてゐると。

海軍の偉功を御嘉尙

開戰劈頭において敵を先制し早くも英米の東洋艦隊軍事基地を潰滅せしめ致命的の打擊を與へ赫々たる戰果を擧げたわが聯合艦隊司令長官山本五十六大將に対し　畏くも　大元帥陛下には十日次の如き御勅語を賜つた

【大本營海軍部発表】（昭和十六年十二月十日午後四時）　本十日聯合艦隊司令長官山本五十六に左の勅語を賜りたり

勅　語

聯合艦隊ハ開戰劈頭善謀勇戰大ニ布哇方面ノ敵艦隊及航空兵力ヲ撃破シ爾攻ヲ奏セリ

朕深ク之ヲ嘉尙ス將兵益々奮勵シテ前途ノ大成ヲ期セヨ

十三日午後三時大本營海軍部は『さき』にハワイ海戰の戰果につき主力艦二隻撃沈せる旨発表せるところ、その後に至り撃沈せる主力艦は三隻なること確実となれり』と発表し、『さきに発表された撃沈戰艦はオクラホマ及びウエスト・ヴアージニアの二隻なりしが、その後に至り撃破の確実となれる他の一隻は第一戰艦戰隊旗艦アリゾナ（三二、六〇〇トン）なりと推定せらる。ハワイ海戰において主力艦の撃沈せられしもの三隻なりとは米側において逸早く発表せるところなる

も、わが海軍においては十分慣軍を期し各方面の報告を徒つてその実證を確めたる上今回の発表を見るに至りたるものなり』との註を加へた。

嶋田海相は同十六日召集せられたる臨時議會における戰況報告において始めてハワイ奇襲作戰が『航空部隊及び潜水艦部隊を中心とする有力なる部隊』により『白鷺決死の殲襲』が敢行されたことを明かにした。

敗戰の隱蔽に汲々　ハワイ海戰の偉大なる戰果は、その敵に與へた打擊が余りにも深酷であり、重大であるため、さしも傲頑稱るアメリカにおいても、事実を隱蔽するために、事実を曲解し、歪曲してひたすらデマ放送に浮身やつすのみである。十日ルーズヴエルト大統領は自らハワイにおいて日本航空母艦一隻を撃沈したと放送したが、わが方の反駁に遭つて翌日狼狽して右放送を取消した。太平洋艦隊の潰滅に驚愕したノックス海軍長官は急遽ハワイに飛び、損害の実情を調査して十五日ワシントンに帰來したが、ハワイ海戰における損害を戰艦三隻即ちオクラホマ、アリゾナ及び標的艦ユタと発表し、ウエスト・ヴアージニア以下主力艦の損傷をこの老朽標的艦を以て隱蔽せんと試みた。

一、戰艦アリゾナは直撃彈により沈没、戰艦オクラホマは顚覆した。旧式戰艦ユタも沈没した。

一、駆逐艦カツシン、ダウンス、シヨー、水雷敷設艦オグラ外一隻も沈没した。

一、剩餘の艦艇は修理に数箇月を要する見込である。

一、航空母艦、重巡、軽巡の全部並に剩餘の駆逐艦、潜水艦は損害なく敵艦隊を捜索中である。

一、海軍死傷者中戰死士官九一名、下士及び兵二千六百三十八名、小計二千七百廿九名、戰傷士官廿一名、下士官及び兵六百三十六名、總計六百五十七名、合計三千三百八十六名。

一、海軍機の損失は極めて大きく、なかんづく地上にあつた飛行機の損害は甚大であつた。

一、陸軍機の損害も甚大で若干の格納庫も損傷をうけた。

一、眞珠灣の港湾施設に損害なく、石油タンクその他にも被害はなかつた。

一、日本軍はオアフ島の軍事施設に関し完璧なる情報を有してゐたと思はれる。

敗戰査問委員會の報告　アメリカ政府は十七日ハワイ敗戰の査問委員を任命した旨発表した。委員會には大審院のロバーツ判事、委員に退役陸軍少將フランク・アール・マツクロイ、ワシントン部隊所屬の空軍旅團長ジヨセフ・ビー・マツクナレイ、元海軍作戰部長スタンドレー少將、同リーブス少將の五名が任命され、一行は十二月二十三日ハワイ着、直ちに調査を開始した。

同委員會の報告は昭和十七年一月二十四日発表されたが、ハワイ敗戰がキンメル前太平洋艦隊司令長官及びシヨート前ハワイ空軍司令官の『職務怠慢』によるものとして次の如く報告してゐる。

キンメル及びシヨートは昨年十一月廿七日にマーシヤル陸軍參謀總長及びスターク海軍作戰部長より日本軍攻撃の危機に関し前以つて警告と命令を受けてゐたにかかはらず、何等の顧慮をも拂はなかつた。もし両人が右警告及び命令に從つて万全の措置を採つてゐたならば、災害を未然に防止し得たのである。日本軍攻撃の當日、即ち十二月七日午前六時三十分米海軍輸送船アンタレス号（五〇五〇トン）は眞珠灣沖の航行禁止水域内で日本潜水艦一隻を目撃、海軍

哨戒機及び駆逐艦ワード号（一、〇六〇トン）は午前六時四十五分同潜水艦を攻撃した。右に関する報告は午前七時十二分に當直士官の手許に達し同士官は參謀長に報告したが、この報告にもとづき何等の警報も発せられなかつた。しかも七日朝には如何なる諸務をも遂行し得る狀態にある將兵が十分に存在してゐたのである。ハワイの日本機來襲探知機で勤務中の一士官は午前七時二分北西方百三十哩の上空に多数の飛行機を探知、同七時廿分當番士官に報告したが、同士官は未経驗であり、且つ米機が右に該當する時刻にその附近を飛行するやの情報を入手してゐたため、発見せる飛行機を友軍機と誤認して、何らの處置も採らなかつた。眞珠灣の機雷網は艦船を通行せしめる外は、通常夜間には閉されてゐるのであるが、十二月七日午前四時五十八分に歸海艇二隻を通行せしめるため開放したまゝ午前八時四十分まで閉鎖されなかつた。

太平洋艦隊司令長官罷免さる　十二月十七日のワシントン電報は、ノックス海軍長官がキンメル太平洋艦隊司令長官をハワイ敗戰の責任者として第十四海軍區司令官に左遷し、その後任に海軍省海事院長官チエスター・ニーミツツ提督を任命した旨正式発表した。ニユミツツ提督着任まで太平洋第二戰隊司令官ウイリアム・パイ少將が司令長官を代理した。陸軍省もまたハワイ空軍司令官ウオルター・シヨート中將の責任を問ひ、同中將を罷免し、カールトン・エモンス中將をその後任に任命した。両敗戰責任者は査問委員會の報告に本づき一月下旬共に豫備役に編入されたが、米國朝野には軍法會議に附すべしとの聲が昂りつゝある。

米太平洋艦隊全滅す

十八日午後三時大本營海軍部はハワイ海戰の詳報を発表し、米太平洋艦隊の全滅を明かにしてアメリカの逆宣傳を粉砕して全世界を驚倒せしめ、一億國民の感激を新にした。

大本營海軍部發表【十八日午後三時】

一、ハワイ海戰の戰果に関しては確報授受の都度発表しありたるところ攻撃実施部隊の目撃並に攻撃後の寫眞偵察等により左の通り綜合戰果を擧げ、米太平洋艦隊並にハワイ方面敵航空兵力を全滅せしめたること判明せり

（一）撃沈戰艦五隻（カリフオルニヤ一隻、メリーランド型一隻、アリゾナ型一隻、ユタ型一隻、艦型不詳一隻）甲巡または乙巡二隻、給油船一隻

（二）大破（修理不能または極めて困難なるもの）戰艦三隻（カリフオルニア型一隻、メリーランド型一隻、ネヴア夕型一隻）軽巡二隻、駆逐艦二隻

（三）中破（修理可能と認むるもの）戰艦一隻（ネヴア夕型一隻）乙巡四隻

（四）敵附海軍航空兵力に與へたる損害＝銃爆撃により炎上せしめたるもの約四五〇機、撃墜せるもの一四機、右の外撃破せるもの多数、格納庫一六棟を炎上せしめ二棟を破壊す

二、同海戰において特殊潜航艇を以て編成せる我が特別攻撃隊は警戒厳重を極むる眞珠港内に決死突入し、味方航空部隊の猛攻と同時に敵主力を强襲、あるひは豊潟夜襲を決行し、少くとも前記戰艦アリゾナ型一隻を撃沈したる外大なる戰果を擧げ敵艦隊を震撼せり

三、我方の損害＝飛行機二十九機、未だ歸還せざる特殊潛航艇五隻
四、八日擊沈せるも確実ならずと発表したる敵航空母艦は沈没を免れ〇〇港内に潛伏中なること判明せり

かくて全艦隊覆滅す

アメリカ太平洋艦隊全滅の壯烈なる情況を綜合すれば左の如くである。

◇擊沈されたカルフオルニヤ型一隻は火藥庫に爆彈の直爆をうけて忽ち轟沈
◇メリーランド型一隻は魚雷および爆彈により艦体まつ二ツに切断
◇アリゾナ型一隻は魚雷爆彈により同じく艦隊切断
◇オクラホマ型（ネバタ型と同じ）一隻は魚雷により轟沈
◇他のアリゾナ型一隻は特殊潛航艇の魚雷襲擊によつて擊沈
◇大破のカリフオーニヤ型一隻は魚雷と爆彈で
◇メリーランド型一隻は爆彈命中し大火災を起し猛炎に包まれ
◇ネバダ型一隻また爆擊により大破した
◇中破のネバダ型一隻は魚雷の命中によるもので、擊沈された二隻の甲巡は一万トン級主砲八インチ砲を備へた新鋭艦、中破した乙巡四隻は一万トン級で主砲六インチ砲を備へたものを含みこれは米國だけに存在する特殊な艦型である

敵艦の性能任務

大本營海軍部よりハワイ海戰における赫々たるわが軍の戰果が発表されたが、擊沈または大破されたと推定される敵軍艦の性能任務及び司令官、艦長名は大要左の通りである。

【カリフオルニヤ艦戰艦】カリフオルニヤ（一九一二年竣工）テネツシー（一九二〇年竣工）の同艦あり【排水量】三万二千六百トン【速力】二一・五ノット【備砲】主砲十四インチ砲十二門、副砲五インチ砲十二門、高角砲五インチ砲八門
【カリフオルニヤ号】戰闘部隊旗艦、パイ中將臨乘、艦長ハンクレー大佐【テネツシー号】第二戰艦戰隊旗艦、バクレー少將臨乘、艦長レオーダン大佐
【ネバダ型戰艦】オクラホマ、ネバダの二艦あり、何れも竣工は一九一六年、排水量】二万九千トン【速力】廿ノット【備砲】主砲十四インチ砲十門、五インチ砲十二門、高角砲十二門
【ネバタ号】艦長ロツクウエルス大佐【オクラホマ号】艦長ホイ大佐
【メリーランド型戰艦】メリーランド（一九二一年竣工）コロラド、ウエストバージニヤ（ともに一九二三年竣工）【排水量】三万一千五百トン【速力】廿七ノット【備砲】十六インチ砲八門、五インチ砲十二門、高角砲五インチ砲八門
【ウエストバージニヤ号】戰闘部隊戰艦群旗艦兼第四戰艦戰隊旗艦アンダーソン少將臨乘、艦長マークランド大佐
【メリーランド号】艦長マツキー大佐
【アリゾナ型戰艦】アリゾナ、ペンシルバニア（ともに一九一六年竣工）【排水量】三万三千一百トン【速力】廿一ノット【備砲】十四インチ砲十二門、五インチ砲十二門、高角砲五インチ砲八門
【ペンシルバニア号】太平洋艦隊総旗艦、キンメル提督臨乘、艦長クツク大佐
【アリゾナ号】第一戰艦隊旗艦、艦長バルケンブルグ大佐
【ユタ型】排水量二二・〇〇〇トンその他不詳、米國は標的艦と稱してゐるが改裝を施し戰艦として艦隊に編成されてゐるものと思はれる。以上何れも艦齡は比較的古いが、何れも最新式の改裝を施して最新鋭艦同樣の性能を持つてをり、未改造のものは何れも本國基地に置かれてゐた。

太平洋制覇の基礎確立

何人かこの大戰果を豫期したであらうか、眞珠灣の奥深く潛み、時來らば太平洋を馳せて東亞の平和を攪亂せんと企圖してゐたアメリカ太平洋艦隊は我が海軍航空部隊の猛襲と、一死報國の權化ともいふべき謳められたる新兵器、特殊潛航艇の英雄的攻擊の前にあへなくも全く潰え去つたのである。眞珠灣内に碇泊せる太平洋艦隊主力艦九隻のうち五隻轟沈または擊沈、大破損傷せるもの三隻、修理可能と見らるるもの僅に一隻であるから、同艦隊は全滅したわけである。また第二陣の巡洋艦戰隊の基幹となる巡洋艦も擊沈二隻、大破二隻、中破四隻といふ殆ど殲滅に等しい大打擊のため、太平洋艦隊は全くその機能を喪失し、空軍及びその地上設備は全く潰滅した。アメリカ太平洋艦隊はここに全滅して太平洋における攻擊作戰能力は完全に喪失した。帝國海軍は開戰劈頭において太平洋の新しき歴史の一頁を飾る大金字塔を樹立したのである。

太平洋艦隊の主力艦九隻を失つてアメリカは一朝にして第二流、第三流の海軍國に轉落した。昭和十六年春ノースカロライナ、ワシントンの三万五千トンの二大新鋭戰艦の就役により、アメリカは十八隻の主力艦を有し、世界最大の海軍國となつたが、更にスターク案によつて大西洋艦隊の擊備に狂奔し、セカンド・ツー・ナンの海軍力によつて世界制覇の野望を逞うしてゐたのである。しかるに今や大東亞戰の驍頭において十八隻の主力艦は一擧にその九隻を屠らるるに及んで、その野心は脆くも潰えて、彼我の勢力は全く顚倒した。アメリカの嬶みとするところは太西洋艦隊に區する戰艦九隻にすぎないが、その中にはニューヨーク、テキサス（共に一九一四年竣工、二七、〇〇〇トン）アンカース（二六、〇〇〇トン）艦齡二十六年の老朽艦であるか、または改裝を完了せざる戰艦で、海戰に活躍し得るのはノースカロライナ、ワシントンの両新鋭艦とアイダオ級三隻のみである。目下、建造中乃至は建造契約が出來てゐるのはワシントン級（三五〇〇〇トン）四隻、アイオワ級（四、五〇〇〇トン）四隻であるが、これが完成は一九四二年以後のことであるからアメリカ海軍の実勢力は半減したわけである。敗戰調査のためハワイに急行したノツクス海軍長官が眞珠灣内に曝された太平洋艦隊の残骸を見て、呆然自失したと傳へられるのはさもありなんといふべきである。

五対三の劣勢を我に要求してアメリカの東洋支配を確立せんとしたその海軍政策はこゝに全く終焉を告げた。イギリス海軍はマレー沖海戰において最新鋭の二主力艦を擊沈され、太平洋における米英主力艦はこゝに全滅し、わが海軍の太平洋制覇の基礎はこゝに確立されたのである。

『われ奇襲に成功せり』

ハワイ實戰記　先陣編隊指揮官〇〇中佐

【〇〇基地朝日特電一月一日発】大東亞戰爭緒戰の榮えある戰勝に明け初めた〇〇基地――西太平洋は眞珠灣軍港に米太平洋艦隊を一擊の下に覆滅した殊勲の凱鷲が滴々たる闘志をその儘に悠然と並んでゐる。眞珠灣一番乘りの大編隊群の指揮官〇〇中佐は愛機に還し眼差しを注ぎながら當時を語つた。

あの古今未曾有、全世界を震撼した大戰果をあげながら淡々と語る面さし、まるで訓練飛行からでも帰つたかのやうだ。

Z旗再び太平洋上に飜る

我々は海上でオアフ島攻撃の命令を受けた。當時艦は一路東へ向つて航行してゐた。待ちに待つた命令がいよ〳〵來た。その命令をうけて流石に興奮と感激で体が熱くなるのを覺えた、全員は甲板に整列して攻撃命令を受けたのである。その時檣頭高く上つたのは実にZ旗である。皇國の興廢を賭けて、三十六年前日本海海上に上つたZ旗は再び太平洋上に飜つたのである。その大洋上の激しい風にはためいてゐるZ旗を仰いでゐる中に、これを見上げてゐる全員の眼にいつしか涙がにじみ出て來た。それは皇國興廢の歴史的瞬間が再び我々の双肩に殉つて來たその感激である。我々の航空部隊指揮官は『各員粉骨碎身霧つてその任務を全うせよ』と親しく訓示された。またとない重大な一戦に参加し得る喜びが、その時強くこみ上げて來た。間もなくZ旗が降されると、全速力をあげて東へ〳〵と邁進してゐる母艦の早さが初めてはつきりと意識された。將兵の意氣は大いに揚り、すでに敵を呑むの概がある。

列風下母艦を進發

當時の天候は、やゝ不良化する狀態であつたが昂然たる將兵は天候など問題にしてゐなかつた。整備員も搭乗員も一諸に戦ふんだといつて、我々に白い鉢巻を與れた。遂に進発命令は下つた。その時の指揮官の命令は『奇襲作戦に成功せり、全員突撃せよ』その寸前聰明の中に長濤は母艦を左右に動揺させ海上はいまだ薄暗く、耳許にヒュー〳〵とかすむ風が強く、天候は相變らず悪い。それもそのはず、當時北東十七米の強風が吹き荒んでゐたのだ。高度千五百米から二千米にかけて漠々たる密雲が立籠めてゐる。大編隊の飛行機群が母艦を離れてせまい眞珠灣に殺到するには良好の狀態ではなかつた。日ごろの演習や訓練なら飛行を見合すところだが、この日この朝を期して多年の訓練は續けられて來たのである。狀態の良不良などは問題にならない。午前〇時〇〇分進発、一機また一機、前後左右に動揺する不安定な甲板から飛出して行く。上空で編隊を整へながら母艦から次々と舞上つて來る友機へ思はず『シツカリやれ』の激勵の眼を向けた。すでに編隊を整へた我々は、一路全速力でハワイ目がけて殺到した。しかしハワイに到着するまでの間といふものは、指揮官としては一番心配であつた。四千マイルに近い遠くべき長途の航海後、しかも悪天候のハワイ沖附近に到着した母艦の位置に誤差はなかつたであらうか、もし誤差があれば我々の飛行機は當然オアフ島に到着できない。間もなく機上で旺盛な日の出を迎へた。普通南洋方面の海上では三十マイル、多い時は五十マイルの遠望がきくものだが、今は漠々たる密雲にさへぎられて殆ど見通しがきかない。ハワイは標高千米の山を背負つてゐるから、少くとも到着の二十分前から見えるはずである。

見事、主力艦に命中

間もなくオアフ島に到着のはずだと望遠鏡で眼をこらしてゐると突然足許に海岸線がクツキリと現れた。見える、見える、敵の飛行場も見える、今ぞ全員攻撃の時機である。編隊は直ちに展開した。各隊はその任務の相違によつて、或は高度を高くとり、或ひは低く下げ、洪然たる攻撃姿勢に移つた。眞珠灣は朝霧の中に未だ眠つてゐる。港内は甚つたやうな静かさで、投錨してゐる船からは一本の煙も立上つてゐない。整然たる兵舎の群、山頂に這ひ上る自動車道路ののた打つやうな白線、海岸にヅラリと並んだ重油タンクは眞白に塗られて、何處からでも絶好の攻撃目標だ。それに進なる港内には敵の太平洋艦隊の主力艦が二隻づつ組になつて整然と投錨してゐる。早くも雷撃機は亂雲を切つて一直線に突込んで行く。眞珠灣は浅くてせまいので編隊の雷撃は極めて困難である。そこで雷撃隊は單機になつて、或るものは海面すれ〳〵にまで舞降り、或るものは戦艦の胴腹二、三百メートルまで接近して、こゝぞとばかり魚雷を発射した。忽ち白い二條の雷跡が海面を這つて突進して行く。つい見とれてゐると敵主力艦の艦側から物凄い水柱が上空に向けて飛上つた。見事に主力艦の横腹に命中したのだ。その水柱は上空の雲の峰と高度を競ふかのやうに上つた。あとから〳〵と水柱が續いて湧上つてくる。時間にすれば僅か三、四分のことである。だが敵の対空防禦砲火は未だ眠つてゐる。戦闘機も未だ挑戦して來ない。奇襲は完全に成功した。奇襲の大戦果は見事曝つたといふべきである。『われ奇襲に成功せり』と母艦に向つて第一報を打電した。

悠々と待つ爆撃の順番

續いて島の中央にある第二の目標ホイラー飛行場に眼を轉じた。ここには、二百機以上の戦闘機と爆撃機が群つてゐたがすでにわが急降下爆撃隊と戦闘機隊が猛烈果敢な攻撃を加へてゐた。飛行場に引出されてゐた敵機からは、紅い焔が揚り、格納庫もまた濛々たる黒煙を揚げて、既に潰滅の有様である。恐らくガソリンが炎上してゐるのであらう。黒煙は天を掩はんばかりに擴がつてゐる。敵機が上昇して反撃し得られないのも、この有様だからだ。すでに獲物がこのやうな有様なので再び機首を轉じて敵の主力艦に狙ひをつけた。二隻づつ並んで投錨してゐる戦艦はまたとない絶好の目標である。一隊が片方を狙へば他の一機は別の戦艦を襲ふ。しかも雷撃機が襲つた後に急降下爆撃機が襲ひ、さらに我々の大型爆撃機が襲ひ、絶え間ない攻撃である。一番機が攻撃を加へると百メートル位の水柱が上るそれへ後續機が突込むと被害を受けるので、水柱が消へるまで悠々と待つてゐる。だから上空で敵の高角砲にさらされてゐる時間が自然長くなる。しかも大空に悠々と爆撃の順番を待つてゐるのだ。このころになると、雷撃機隊の攻撃は最も凄烈を極めたものとなつた。敵に思ひ切つて接近し、魚雷を落して機首を立直すところを狙撃されて、機体は火炎に包まれてしまふ。しかも火逆襲となつた雷撃機はなほも稠密な魚雷発射を續け、最後に敵艦目がけて眞一文字に突込み、火花を散らして自爆するのを私は確にこの眼で見届けた。

特殊潜航艇の輝く戦果

續いて急降下爆撃機が眞一文字に飛込んで行く。すると間もなく敵飛行場の格納庫、飛行場に並べてあつた飛行機から紅黒い焔がメラ〳〵と立上つた。この雷撃機と急降下爆撃機が思ふ存分第一撃を加へて機首を立直してゐる頃、漸く敵の高角砲弾が我々の周囲に炸裂し始めた。今度はいよ〳〵我々の大型爆弾投下の順番である。私は隊列の最先登に立つて、眼下の巨船に照準をつけた。氣流は大變悪く、水平爆撃の照準がつかない。一発の無駄な爆弾も出してはならぬと思つてやり直した。高角砲弾の中を悠々と旋回してゐる。今度は成功だ。爆撃投下に移らうとする機体は物凄いショツクを受けた。振返ると背後に爆煙火の柱が五百メートルばかりも高く天に沖してゐる。これは後で分つたことだが、雷撃機隊、急降下爆撃機隊、戦闘機隊と、さらに一層困難な水中攻撃を敢行した特殊潜航艇との緊密な協同作戦があげた戦果の一つであつた。これは敵戦艦の火薬庫が爆発したのだ。すでに雷隊の下半分はけし飛んで海面に

はおびたゞしい重油があふれ出てゐる。確かにアリゾナ型だ。敵の高角砲の射撃は漸く猛烈になつて編隊の周圍には石礫で投げつけるやうに砲彈が炸裂してゐる。間もなく指揮艦橋の左舷体に大きな穴があいた。ついで五番機にも當つたと見えてガソリンタンクからガソリンが漏洩してゐる。それでも離れずについて來る。爆撃任務がすむと自爆する決心でゐるらしい。『狀況知らせよ』と信号すると『補助タンクのみ』と平然たる返答が入つて來た。生死を超えた平然たる態度である。

朝暾の眞珠灣凱歌高し

攻撃の目的を果して引揚げようとすると、既に朝暾は眞珠灣を明るく照し出してゐた。打ち見れば朝の光の中に黝沈した戰艦一隻は船体が切断されて、海面にドス黒い油を残すのみであり、その他には見にくい赤腹を出して沈没してゐるのが二隻、また四十五度に傾斜して刻々に沈みつゝあるのが一隻、炎々として燃え上つてゐるのが三隻、フォード島海岸の敵戰艦は悉く傷ついて。眞珠灣上空で我々は燃料の許す限り何回もく旋回した。我々がこの眠でハツキリと確認したことではあつたが万一にも傷ついた友機が帰つて來るのではないかといふ淡い希望を持つたからであつた。われくが母艦に無事帰還すると入れ代つて第二次攻撃隊が出発した。敵太平洋艦隊の残存兵力に止めの刀を刺さんがためである。

殉忠報國の精華・特別攻撃隊の偉勲

眞珠灣襲撃における海軍航空部隊の偉大なる戰果の中に、灣内深く潜入して敵の主力艦に強襲を加えた特別攻撃隊の、英雄的な殊勲が織り込まれてゐたことは

當時既に一應の輪郭だけは明かにされてゐたところである。すなはちハワイ海戰の後十日を経た十二月十八日の大本營発表は、輝く戰果を報じた後『同海戰において、特殊潜航艇をもつて編成せる我が特別攻撃隊は警戒厳重を極むる眞珠灣内に決死突入し、味方航空部隊の猛攻と同時に、敵主力を強襲あるひは皇國夜襲を決行し、少くも戰艦アリゾナ型一隻を撃沈したる外、大なる戰果を挙げ敵艦隊を震撼せり』と始めて特別攻撃隊の壯挙が明かにされ、國民等しくその壯烈なる行動を想見して、心然ゆるばかりの強い感激に打たれたのである。しかもこの発表の末尾に『未だ帰還せざる特殊潜航艇五隻』と記された悲痛な文字を見た時、この簡潔な辞句に盛られたる壯絶なる迫力に胸を打たれ、誰か涙せき上ぐるばかりの厳然たる心境に誘かれなかつたものがあるであらうか。そしてわれらはこの秘められたる特殊行撃隊の行動の詳報と、これに参加して眞珠灣頭に忠魂をとどめた勇士の氏名が公表される日を待ちわびてゐたのであるが、三月六日その全貌が発表され、感銘更に新なるを覺ゆるのである。

大本營發表（三月六日午後三時）

特別攻撃隊の壯烈無比なる眞珠灣強襲に関しては既に公表せられたるところこの世界の心膽を寒からしめたる攻撃の企圖は、攻撃を実行せる岩佐大尉以下数名の将校の着想に基くものにして、数箇月前、一旦緩急あらはこれを以つて聖忠報國の本分を懲し度しと案を具し夙かに各上官を経て聯合艦隊司令長官に出願せるものなり。聯合艦隊司令長官は慎重熟討の結果成功の確算あり、收容の方策また講じ得るを認め志願者の熱意を容れることとせり。本壯擧に参加せる下士官また帝國海軍優秀者中の最も優秀なる人物たり。いづれも参加将校の平素より固く信頼せる部下にして、各上官と生死を共にすることを念願しありしをもつて、今回の企圖に際しても特に志願者を募ることなく、淡々たる心境のうちに上官よりそれぞれ隊員として参加せしめ度旨願出で、聯合艦隊司令長官より希望通り参加を命ぜられしものなり。

爾來部内に対しても厳に機密を保持しつゝ短時日の内に用兵者、技術者渾然一体となり工員に至るまで不眠不休、晝夜兼行にて製造実験に、或は準備訓練に心血を注ぎたる結果、今次開戰に先立つ緊急の際に完成を見たるものにして、攻撃に参加せる将士の聖忠無双の精神および技術工作関係者の熱誠とともに、帝國海軍の卓越せる技術を厳く世界に誇るに足らん。

而して実行に當りては、收容に関し万全の方策を講ぜられたるは勿論なるも敵主力を攻撃したる後は、警戒一層至厳を極むべく海底に横はる沈没敵艦の残骸を縫ひ、狹長なる水道を通過、猛烈なる反撃を脱過帰還することの困難は豫想に難からず、万一に備へ自爆の準備を怠へたることは帝國海軍軍人として當然とするところなり。

かくて御稜威の下、天佑神助を確信せる特別攻撃隊は某月某日枚を銜んで壯途につき、眞珠灣目指して突進、沈着機敏なる操縦により厳重なる敵警戒網ならびに複雑なる水路を突破、全艇豫定の部署に横り港内に進入、或ひは白鷺强襲、或ひは夜襲を決行、史上空前の壯挙を敢行、任務を完遂せるのち艇と運命をともにせり。なかんづく夜襲による「アリゾナ」型戰艦の撃沈は遠く港外にありし友軍部隊よりも明瞭に認められ、十二月八日午後四時三十一分（布哇時間七日午後九時一分）即ち、布哇における月出二分後、眞珠港内に大爆発起り火焔天に冲し灼熱せる鉄片は空中高く飛散、須臾にして火焔消滅、これと同時に敵は航空部隊の攻撃と誤認せるものか、熾烈なる対空射撃を開始せるを確認せり、また同日午後六時十一分（布哇時間午後十時四十一分）特別攻撃隊の一艇より襲撃成功を無線放送、午後七時十四分以後放送途絶、同時刻ごろ自爆もしくは攻撃せられたるものと認めるものもありたり。

晝間強襲に関しては敵艦隊において僅にこれを認めたるものあるが如きも殆どその何ものたるかを判別し得ざりしが如く、港内混乱の際のため戰果の絶大なりしことは確信しあるも、今のところ航空部隊による戰果と判別困難なり。

出発に際しては攻撃終了せば帰還すべき命を受けありしも、遂に帰還するもの無かりしは、或ひは味方航空部隊の爆弾、魚雷下しつゝある敵艦に肉薄（史上類例なき至近距離）强襲し、或ひは長時間海中に潜伏、月出を待ちて離頂し晝間攻撃による損傷少き敵主力艦を確認攻撃したるなど、全隊員生死を超越して攻撃效果に專意し、帰還の如きは敢てその念頭に無かりしによるものと断ずるの外なし。かくの如く古今に絶する殉忠無比の攻撃精神は、実に帝國海軍の傳統を遺憾なく発揮せるものにして、今次大戰史勝頁の一大偉勲といふべし。

武勲拔群　天聽に達す

海軍省発表（昭和十七年三月六日午後三時）昭和十六年十二月八日布哇海戰において、特殊潜航艇を以つて布哇軍港に突入し、偉功を奏したる特別攻撃隊に対し聯合艦隊司令長官より左の通り感状を授與せられ、右の旨海軍大臣より奏

上せり

感　狀　　特別攻擊隊

昭和十六年十二月八日開戰劈頭、挺身米國太平洋艦隊主力を布哇軍港に襲擊し、友軍飛行機隊と呼應して多大の戰果を擧げ、帝國海軍軍人の忠烈を克く中外に宣揚し、全軍の士氣を顯揚し、全軍の士氣を顯揚したるは、その武勳拔群なりと認む

仍て茲に感狀を授與す

昭和十七年二月十一日　　聯合艦隊司令長官　山本五十六

九勇士、二階級を特進

海軍省發表（昭和十七年三月六日午後三時）特別攻擊隊員中の戰死者に対し、昭和十六年十二月八日附特に左の通り二階級を進級せしめられたり

任海軍中佐　海軍大尉　岩佐直治
任海軍少佐　海軍中尉　横山正治
同　同　古野繁實
任海軍大尉　海軍少尉　廣尾彰
任海軍特務少尉　海軍一等兵曹　横山薫範
同　同　佐々木直吉
任海軍兵曹長　海軍二等兵曹　上田定
同　同　片山義雄
同　同　稲垣清

護國の神・特別攻擊隊　平出大佐放送

尊く散つた特別攻擊隊、その日の誇勇士の面影について、海軍報道部課長平出大佐は三月六日午後八時からマイクを通じて、言々句々聽くものすべて、感涙誘ふ發表を行ひ、純忠に燃える勇士達の大精神を讃へて次の如く放送した。

世界平和を使命とする日本の大精神を嚙みにじり、皇國日本の生命さへも狙はんとした暴戾なるアメリカに、破邪顯正の劍を下すに當りまして捨身をもつて敵の腹中に飛込み、猛然これに第一撃を加へ、身もまた護國の花と散つた特別攻擊隊の偉業に鬼し謹んで發表致します（發表文は別項、大本營發表）

更に附け加へて申上げたいと存じますが、今こゝに護國の忠靈の微動を偲びまつることは、一億國民が忘れることの出來ない第三回目の命日を控へ一入感激の新たなるものがあります。

この勇士達は、日頃から上官の信任厚く、同僚後輩からは尊敬の的であつた優秀な人物ばかりでありますが、いづれも眼中出世なく、榮達なく、快樂なく、わが身さへなく全く『自己』といふ觀念を捨てて、ひたすら大君と祖國に全身全靈を捧げ戀し殉國二十余體にして雄々しくも護國の花と散つたのであります。

この攻擊は、發表にもあります通り、岩佐中佐以下、數名の將校の着想に基くものでありまして、自ら工夫をこらし、一朝有事の際はこれをもつて聽忠報國の本分を盡したいものと、人力をもつては至難と思はれるこの大壯擧を案出致したのであります。爾來數箇月といふもの自分達の護擊に万に一つも失敗あつてはならぬと、人目を忍んで訓練に訓練を重ね、言語に絶する苦心を續けたのでありますが、かくして開戰となりますや、挺身眞珠灣の奥深く進入し、身を敵の艦底に叩きつけんばかりの猛襲を敢行し、然るのち從容として死についたのであります。今やアメリカ側の報道などを加味して私の想像によりその攻擊の模樣を申上ようと存じます。

枚を銜み灣内潜入　特別攻擊隊が枚を銜んで眞珠灣口を潜入せんとしますや防潜網が張られてをり、機雷が無數に敷設してあり、さすが敵の警戒は嚴重でありますが、しかし特別攻擊隊は百錬の勇士揃ひ、沈着機敏な操縱によつて難なくこれを突破します。

このとき『わが事既に成れり』と勇士たちは微笑み合つたことと思はれます。指揮官以下眞に一心同体人も艇もこれまた渾然一体をなしてをります。灣内の複雜な水路ものかは、われ遲れじと全艇奥へ奥へと突入いたします。やがて潜望鏡に映るは、行儀よく二列に並んだ敵主力艦の集團ではありませんか。勇士達の滿足が思ひ遣られます。各艇攻擊を開始致します。ある巨艦目がけて接近、猛然第一撃を加へまたある艇はその脇の胴腹をえぐります。このとき潜望鏡にチラツと見えるのは空からする友軍機の活躍です。友軍機は今果敢な爆撃の眞最中らしい。勇士達の勇氣はいよ〳〵百倍一艦といへども撃ちもらしてはならじと、歯を食ひ縛つて頑張ります。さらに次の攻擊に移らんとする時であります。敵の駆逐艦一隻、潜望鏡を発見したものか横合から衝突にやつて參ります。そこで手こたへを確認する暇もなく、水中深く潜没して難を避けた艇もあります。このころ敵の砲彈は雨となり、空からする飛空部隊の攻擊はいよ〳〵猛烈を極め、魚雷走り、爆彈飛び、灣内は忽ち大混乱に陥りました。從ひまして水中よりする戰果も絶大であつたと思はれるのでありますが、航空部隊の戰果と判別することは、困難な狀況だつたのであります。

月下再び强襲　晝間の猛烈な戰鬪を海底に潜んで聞きながら、逸る心を押へて日没を待つた特別攻擊隊の一艇は、艇内に持參した組木細工の玩具など相手に時間を消してゐたことと思ひます。これは敵に容易に出來ない事であります。遂に夜に入り月の出を待つて强襲を敢行致します。我が一艇は晝間攻擊による損傷の少い敵主力艦は無いかと探し求めて肉薄接近して行きます。見れば敵艦の巨体は月光を浴びて、くつきりと影繪となり、攻擊の好目標です。『発射始め……』指揮官の号令に、最後の襲擊が決行されます。見敵必殺の精神こめた魚雷に狂ひはありません。轟然たる爆音が灣内をゆるがせ數百メートルの火の柱が一時天を焦します。と見るや、白波を蹴つて悠然司令塔が水上に浮かび出ました。沈着大膽な指揮官は、今し巨体眞二つに裂けて崩れ沈まんとする敵艦の断末魔を、確認したのであります。宿望今ぞ成る、月光仰ぐ年若き顔者達の胸中如何ばかりであつたでありませう。この敵艦轟沈は遠く灣外にありました友軍部隊からもはつきり認められ、大爆発と共に天に沖する火焔が灼熱した鉄片を空中高く吹き上げるのさへ望見されたのであります。時は十二月八日布哇時間に致しまして七日午後九時一分、月の出二分後のことでありました。戰は終りました。

『襲撃に成功せり』　しかし特別攻擊隊の勇士達はつひに帰らなかつたのであります、布哇時間午後十時四十一分に特別攻擊隊の一艇からの『襲撃に成功せり』の無線放送が最後のものとなりました。隊員寝に生死を超越し、最後

まで撃滅のみに專念し、生還のごときは念頭に無く、あるものは撃沈され、あるものは自爆致したことと認められるのであります。激して死に赴くはその例少しとしません。しかし冷靜ことに處し、身をもつて信念を貫いた至高至純の沒我の壇地。鬼神も泣くこの絶対犧牲の大精神こそわが武士道の花であり、わが民族精神の精華であります。かかる例が世界の歴史に唯の一つでもありませうか。私どもその偉勳を思ふだに、肅然として總身の血のふるへるのを覺えるのであります。純忠無比なる特別攻撃隊の壯擧は長くも天聽に達しました。大君を護り奉り、祖國安泰の礎たるために生れて來たやうな勇士達は、これを聞きまして、今宵地下で如何ばかり感激の嬉し涙にむせんでゐることでありませう。

『只今より征きます』　死あつて生なき門出あつても勇士達は、冷靜沈着にして、日常訓練の出動の際と、いさゝかも變つた所がなかつたのであります。出発直前のことでありますが、勇士達は揃つて戰友と談笑し、ある若い勇士は『襲撃が終つたら上陸して、こいつにものを言はせてやりたいな』と無邪氣にピストルを取り出してなで廻し、またある勇士は、新しい肌着と着かへたうへ『軍装を着て行くべきだが暑いから作業服で御免蒙らう』などと悠々身支度を行ひ、またある勇士は『爆雷攻撃を受けぬやうにしろヨ』と戰友がいふのを聞いて『ナーニそれまでには、敵のどてつ腹に大穴があいてるさ』と何の思託もなく大笑ひして一同を爆に卷き『明くる日のルーズヴェルトの泣き事を、俺も聞いたぞ』と閲覧の前で』と即興の一句をよむといふ余裕綽々たるものがあつたのであります

またある酒好きの勇士に対して、戰友が『大戰果をあげて帰つてくれ、その時は大いにやらうぜ』と勵ませば、ニコ〳〵し乍らいつもの言葉の『ウム飲まう』

とは一回も口に出さなかつたさうであります、この勇士達は『帰る』とか『万一にも生きて』といふ如き言葉は口にすべきでないと考へてゐたのでありませう。更にある勇士は残る戰友の肩を叩いて『お互に最後の最後までしつかりやらうぞ、今度會ふのは九段のお社だ』と激勵してゐたといふことであります、やがて、いざ出発の時刻です、普通の出陣には『行つて参ります』と上官に申告するのでありますが、その日勇士たちは『何何中尉、あるひは何々少尉だゝいまより征きます』と力強く述べ『行つて参ります』とはいはなかつたのであります。

『しつかり頼むぜ』『大丈夫だ』壯途を送る挨拶が交されます。征くも、残るも、送るものも、送らるるも感激の一瞬でありました。この時に及んで、なほ出で立つ勇士達は自若たるもので、年若い一士官は『お弁當を持つたり、サイダーを持つたり、チヨコレートまで貰つて、まるでハイキングに行く樣な氣がする』と勇んで飛び込んだと言ひます。この年若い勇士の胸のうちにその時チラツと幼かつた頃の樂しい遊足の思出が浮かんだのでありませう。遊足の懐しい思出でに胸ふくらませて、勇士は雀躍死地に飛び込んだのであります。

君のため何か惜まむ　後で判つたのでありますが、勇士達は身の廻りは整然と處理し、上官や、同僚に対する謝恩の言葉や公務上の記録、意見など書き残したものはありましたが、遺言らしいものは余り多くございませんでした。その中にある勇士の辭世があります。

君のため何か惜まむ若櫻、散つて甲斐ある命なりせば
いざ征かむ網も機雷も乘り越えて、撃ちて貫珠の玉と砕けむ
靖國に會ふ嬉しさや今朝の空

これは勇士達全員の感慨であつたと思ひます。この悟り、この信念口に言ふは決して難くはありません。しかし勇士達は默々として身をもつてこれを実行したのであります。勇士達は、その言行から察して唯單に勝つといふだけでなく『心の米英撃滅』すなはち長年にわたつて文化を通じ、思想を通じて日本國民の精神に食ひ込んでゐる『自分さへよければよい米英観念』を駆逐、撃滅しなければならぬといふ信念を持ち、且つ実行してゐたやうに考へられます。

大東亞戰爭は、実に形に現れた米英の暴戾なる勢力を東亞から駆逐するとともに、目に見えない『利己的唯物的米英観念』を、心から一掃することによつて初めてその成果を期し得られるものではありますまいか。勇士達の行動はかゝる点から致しましても好個の亀鑑を示したものといふことができませう。

こゝに銘記しなければなりませんことは、かゝる己を滅して、國家に殉ずる犧牲的大精神は、偉大なる母の感化によるところ大であることであります。勇士達はいづれも申合せたやうに孝行で有名でありました。

母の精神感化　ある勇士は休暇になれば、短い時間の時でも必ず実家へ帰り母親にお伴して一日を送るのが何よりも楽しみだつたといふことでありますが、これによつてもその一端を窺ふことが出來ませう。それだけに母親が勇士達を慈み育てた蔭の力は絶大で、こゝに家のため夫のため、子供のため己を顧みずして働き續け、そこに無上の幸福を見出す、母親の厭身的な精神感化が偉大なる力となつて勇士達のなかに生長してゐたのであります。かゝる偉大なる日本の母親なくして、どうしてこのやうな純忠な益良夫が生れませう。己を空しくして子供の中に生きる母親は、すなはち國家の中に生きる母親であります。撃米英の軍人が優勢な相手と見れば逸早く逃れ、死の危険多しと見れば、これに近寄らないことを念とする実情と、この勇士達の心意氣とを比較致しますとき、それは何たる大なる相違でありませう。その蔭に米英の母達の利己的、享楽的氣分と、その子供達との因果関係を見落してはなりません。

米國にありましては、海軍軍人とは、只で世界を見物し、法外の、給與を受け以て世に快適幸福なる生活を送る職業なり。と定義してゐる程であります『命あつてのもの種』といふ自己本位の思想が根強く彼等を支配してゐることは、唯今までの幾つもの海戰の生存者達の言動からしても明瞭なものであります。わが一死奉公の赤忠に燃える勇士達の大精神と、自己のより幸福生活を追求する人生観とする米英軍人氣質は、実に霄壤も霄ならざるものがあるではありませんか。

海行かば水漬く屍　大東亞戰爭開始以來わが海戰運勝につきましては全世界唯驚嘆するのみでありますが、その裏に、かゝる大死一番身を捨てゝ祖國を聽り拔かんとする傳統の大精神、脈々として流れてゐるのを知りましたならば、ただ大和民族の血の尊さに感涙を下げる外はありますまい。しかしてこの樣に世界に類なき無限の力の湧き出る源が畏くもわが現神大君にあるのを思ひますとき、御稜威の尊さに唯々感激あるのみであります。顧みまするに神武天皇がみいくさを率ゐて九州美々津港を舟出し給うてより二千六百年、今に續くこの湯しくも雄々しき大和魂！　その中に燃え立ち燃え續けるものは『海行かば水漬く屍、大君の辺にこそ死なめ』の烈々たる心意氣であります。それは皇國日本の躍進とともに益々輝きを増し、時あらばこの勇士達のやうに燗漫と咲き誇るでありませう。

軍の神卽平和の神　大東亞戰爭如何に長期にわたりませうとも、强敵さらに現れませうとも、祖國が必要とする瞬間、かゝる七生報國の勇士達は幾度にても生れ更つて護國の固めに任ずるは必定でありまして、その數の足らぬといふ憂のごときは毛頭ないのであります。

特別攻擊隊の勇士達は『軍の神』であると同時に『平和建設の神』でもあるのであります。大東亞戰爭のあとに來るものは世界永遠の平和でなければなりません。その時こそ『軍の神』は『平和の神』となるのでありませう。唯今の破壞は破壞のための破壞でなく建設のための破壞だからであります。

この護國の勇士は、われ〳〵日本國民の子であり、兄であり、弟であります。我ら國民の血管の中樞にかゝる純忠無比なる血潮が流れてゐることを明かに示して與れましたことは、何かに迷つた時の個人の立場からも、また國難に會つた國家大事の際にも何たる心强い事でありませうか。私は繰返して申します。一時に微するは易く從容死に就くは難し、今は長期戰のなほ緒戰期であります。謹んで特別攻擊隊諸勇士に關する發表を終ります。

三　在支米英兵力の潰滅

十二月八日米英両國と交戰狀態に入るや支那派遣の帝國陸海軍部隊は機を失せず、同日拂曉來敵國兵力を潰滅し、一齊に敵性租界に進駐するとともに、敵國權益の處理を開始した。

支那派遣軍總司令官聲明

支那派遣軍總司令官聲明（十二月八日午後零時半發表）対米英開戰は自存自立を全うせんとする努力の長期的決斷たると共に、東亞を米英覇道の桎梏より解放して新秩序を建設せんとする東亞民族の熱願にして、また支那事變の必然的發展なり。派遣軍は支那大陸に於ける米、英側の敵性を斷乎排除し、南方作戰に呼應して重慶側に対する封鎖隔絶を徹底し、衆々戰力を統合發揮して敵抗戰力の撃碎につとめ、以て蔣政權の潰滅を期す。日華両國民は派遣軍の決意と実力とに信頼し、斷乎重慶側の策謀を排撃し、相携へて興亞の聖業に精進し以て一意聖史的偉業の完成に邁進せんことを願む。

米英砲艦を捕獲、撃沈

支那方面艦隊報道部十二月八日午前九時発表＝吉賀支那方面艦隊司令長官は本八日日本は米英両國と戰爭狀態に入るを以て午前五時二十分幕僚を軍使としてそれぞれ上海在港の英ペトレル、米ウエーク両砲艦に派遣し上海方面における安寧秩序維持のため降伏勧告文を交付せしめ英艦はこれを拒絶せるを以てやむを得ずこれを撃沈せり。米艦は降伏せるを以て捕獲せり。

この日午前五時十五分わが支那方面艦隊の軍使二名はそれ〴〵内火艇を賦つて上海在港の米砲艦ウエーク号、英砲艦ペトレル号に乗込み直ちに先任参謀に左の如きわが古賀支那方面艦隊司令長官の降伏勧告文を手交して、その卽答を求めた。

大日本帝國と貴國とは既に戰爭狀態に入れり。本職は上海港在泊中の貴艦艇の降伏を勧告す。本勧告に対し直ちに本軍に回答せらるべし。本勧告を拒絶または退去準備をなし或は船体兵機などを破壞し或は戰闘配備に就くを認めた場合は本職麾下兵力を以て直ちに攻擊すべし。

時まさに五時二十分、初冬の朝は尚深い闇の帷に包まれてゐる。願諦すれば白の火箭、拒絶すれば赤の火箭が打ち揚げらるることに手筈が決められてゐる。五時三十分英艦ペトレルからの赤の火箭が揚げられた。拒絶である。續いて同三十二分米艦から白の火箭が揚つた。願諾である。間髪を容れず、わが軍艦の巨砲は攻擊の火蓋を切つた。在支米英勢力に対する鬨聲の第一弾である。ペトレル号は同五十八分早くも火炎を起し、六時五分黄浦江底に消え去つた。一方降伏した米艦の乗組員一同はわが陸戰隊に收容され、極頭高く旭日旗がはためき、上海の米英勢力は一擧にして覆滅し去つた。

軍艦多多良と命名

なほ米艦ウエーキ号は十二月十五日帝國海軍艦籍に編入せられ、軍艦多々良と命名された。艦名多多良は弘安四年夏七月元軍十余万の來襲に際し鎮西の寡兵これを邀撃、御稜威の下全國民の殉國的團結は天佑と相俟つてつひに元軍を殲滅し當時の大國難を見事に克服した歴史的戰勝の地名に因むものである。

上海共同租界に進駐

午前十一時上海陸海軍部隊は蘇州河以南の共同租界に各その一部を進駐し、わが占領地域内における重慶政權の抗日運動の策源地は全く皇軍の制壓下に置かるるに至つた。これより先午前八時堀内上海総領事は陸海軍高級参謀と共に工部局を訪問、参事會議長、警視総監と會見、租界の治安維持に対する重大申入れをなし、工部局の協力を要求し、敵性孤島は平靜裡に皇軍の手に收められた。

上海陸海軍最高指揮官布告

在上海陸海軍當局は戰闘開始と同時に、租界の治安維持に關し上海方面大日本陸海軍最高指揮官の名を以て左の要旨の布告を発した。

今回大日本帝國と米英両國間に戰闘狀態が発生したので、日本軍は租界内の治安確保のため、こゝに共同租界の安寧秩序と繁榮を維持するにある。日本軍は正當業務に從事する租界内一般良民に対しては、何等他意を有しないが、この方針は敵性國國籍の良民に対しても同樣である。又日本軍は一般民衆の私有財産に対しては利敵行爲をなす場合を除きこれを絶対尊重する。故に一般民衆は日本軍の意を体し安んじてその業につくべし。但し治安を攪乱し、日本軍令に違反し或は公共施設を破壞損傷し物資を隠匿する者に対しては、軍律に照らして嚴重處罰す、故に布告に対し一般の忠実なる遵守を希求する次第である。

北支米英軍の武裝解除

日米英戰爭勃発に伴ひ、北支軍では八日午前八時卅分交民巷内の米國大使館に対し在北京アメリカマリン百廿名の武裝解除の勧告を発し、同時に交民巷内各國居留民にも疎開勧告の布告を発した。

天津においても松井部隊は八日午前八時歩武堂々進駐を開始、米國海兵隊エッチ・エル・ブラウン大佐以下六十三名の武裝解除を行ふと共に英租界にも進駐、英米の權益を接收した。

天津、北京、秦皇島のアメリカ陸戰隊は何れもわが方の武裝解除勸告を受諾したので八日午後一時それ〴〵武裝解除を行つた。人員は北京百二十名、天津五十名、秦皇島三十名である。

北京防衛司令官布告

北京防衛司令官は北京市在住二百万の一般市民に対し八日午後左の如き布告を発した。

今次日本帝國と米合衆國及び英帝國との間に戰爭狀態発生せるに依り、日本軍は本八日英國兵營を占領し米駐屯軍は我が勸告に依り武裝を解除したり。此際民衆に対しては何等被害を及ぼさざるを以て、一般に鎭靜を保ち其業に安んずべし。但し當分の間、城門の開閉、城門の通過人馬の檢査を行ふ。

天津防衛軍布告

〇〇部隊は八日天津英租界に進駐し同時に左の如く布告を発した。

大日本帝國軍隊は英租界に進駐し、その外周を封鎖すると共に租界重要点を占領せり。爾今同租界の行政は天津防衛司令部これを統監す。但し現機構には何等變更なく、たとへ英米系と雖も敵性を有せざるものは妄りに危害を加へることなく、その私有財産を没收するが如きこともなく、租界内在住者はよく日

軍の指示に從ひ安んじてその正業を繼續すべし。しかれども蔑性行爲あるものは國籍の如何を問はず嚴重處斷し假借する所なし。

北支各地の英米權益接收

日本の、対米英宣戰布告と同時に我が軍當局が接收した北京における英米系銀行、商社は左の通り

△北京（一）米系＝美孚煤油公司寶時洋行、テキサス洋行、アジア火油公司其の他十五（二）英系＝匯豐銀行、顧中運銀煙草股份有限公司、開灤鑛務局、六國飯店、利通飯店、增茂洋行、仁記洋行、尙交民巷區域外居住英米人數は米系十四名でその大半はキリスト教傳教師であり北支蒙疆には英國人二千七名、米國人千三十三名が居住してゐる。

△濟南　八日早朝日米英が交戰狀態に入るや、〇〇部隊で滿濟南總領事館と協力在濟米英國領事館に対し職務停止を通告し、米國系濟路大學並に管下の英米トラスト煙草工場、スタンダード、亞細亞石油會社支店その他同國系商社に対し夫々合法的措置を講じた。

△開封　河南省における英米人權益は八日午前中に接收、在留米人六十七名、カナダ人四名を我方で保護することとなつた。

廣東英租界に進駐

廣東沙面英租界は八日午前八時半本營裡に進駐を完了し、敵國權益の心理も順調に進捗した。進駐に先だち日本軍は租界當局者に対し、日本軍進駐の意圖は租界の安寧秩序の維持にあり、假令敵性國籍の民衆と雖も利敵行爲若しくは治安擾乱をなさざる限り何ら害意を有するものにあらざることを通達したところ、租界當局者も直ちに日本軍の意を諒とし、進駐は頗る本營裡に完了したのである。

四　皇軍タイ國に進駐す

イギリス軍の南部タイ侵入並に同地域の鉄道管理の陰謀は、昭和十六年十月上旬のシンガポールにおけるイギリス極東軍會議において、企畫され、イギリスはタイ國に対し、日本軍がタイ國に侵入した場合は軍事的援助を與ふる旨を申入れ、十一月中旬イギリス極東軍司令官はタイ國ダムロン海軍大佐並にスラナロン陸軍中佐をシンガポールに招致して、軍事祕密協定につき重要協議を遂げ、シンガポール発ロイター通信がマレーに進駐せるオーストラリア軍五万のタイ國侵入の準備成れりとの報道は不用意の間にその機密の一端を暴露したものであつたが、その後マレー及びビルマのタイ國境には益々大軍が集結され、爆撃機主力はマレー東北部に集結され、タイ國全土をその制壓圏下に置き、十二月に入つてタイ國侵入の準備は完成するに至つた。

日本軍通過を承認

【駐タイ帝國大使館八日午前四時発表】かねてよりイギリス軍が十二月八日南タイに侵入の計畫の確證を摑みをりたるところ、果然八日早曉マレー國境を突破し侵入を開始せり。日本軍は南太平洋の平和維持と、タイ國の獨立維持につき、タイ國政府と交渉を開始すると共に、タイ國の獨立を救ふため直ちにこれを反撃、英軍をタイ國外に掃蕩しつゝあり。

坪上大使は八日午前七時情勢の急展開に急遽東部國境方面より歸來せるピブン首相と皇軍のタイ國通過並に便宜供與力に就き交渉したところ、ピブン首相はわが方の眞意を諒解し、東亞新秩序建設に協力するため一大英斷を以て、わが方の申入れを快諾し、坪上大使とピブン首相との間に左記要領の日タイ協力に関する協定成立し同日午前十時半（タイ國時間）署名を了した。

一、泰國は東亞に於ける緊急事態に處するため、日本に対して日本軍の泰領通過を許すと共に通過のため必要なる凡ゆる便宜を供與し、且つ速に日泰両軍の間に発生の可能性ある衝突を回避すべき措置を講ず。

一、日本は泰國の獨立、主權及び名譽を尊重することを保證す

八日早朝日本軍のタイ國通過並に便宜供與に関する交渉成立せるを以て、シヤム灣頭に待機せる部隊は直ちに歩武堂々上陸を開始し、また佛印タイ國境にあつた部隊は長蛇の如きトラック縱隊を以て、沿道のタイ國民の歓迎に應へつつ九日には早くもタイ國首府バンコツク附近に進駐を終つた。右につき同日大本營陸海軍部及び情報局よりそれ〴〵左の如く発表された。

大本營陸海軍部発表（十二月八日午後九時）＝帝國陸海軍は緊密なる協同の下に本八日午後泰國に友好的に進駐を開始せり

情報局発表（八日午後八時二十分）日本軍の泰國内通過に対する泰國側の便宜供與に関し、本八日午後零時三十分日泰間の交渉成立せり

在タイ國日本軍司令官は十日午前七時左の如き宣言を発した。

泰國に在住する印度、マレー、ビルマ、支那人等東亞諸民族にして帝國の敵

國たる英、米、蘭諸國に國籍を有するものと雖も、われらに敵対し皇軍の行動に有害なる行爲をなさざる限り、敵性國民と認めざるにより安んじて業に就くべし。但しこれら人民のうち泰國領土より敵國領土に逃避せんとする者に対しては、敵性國民と認め断乎たる處置に出づべし

皇軍の進駐と共に中華總商會の代表で抗日運動の指導者であつた余子良等は逸早く逃亡したが、在タイ華僑中最指の富豪である陳景川等中華總商會の幹部は日本軍司令官の布告により、十日わが大使館に出頭し重慶と絶縁しわが軍に協力を誓つた。

タイ國政府は十日夜ラヂオを以て十日夜より戒嚴令を布く旨次の如く発表した。

十日午後十時四十五分（當地時間）よりタイ全國土に対し戒嚴令を布く、國民一般はこの令に違反せざるやう注意せよ

日タイ攻守同盟の締結

日、タイ間の友好関係を更に確固不動ならしむるため、坪上駐タイ大使とピブン首相との間に日、タイ攻守同盟締結につき十一日午前十一時（日本時間午後一時）意見の一致を見るに至つた。日、タイ友好條約はこれによつて新事態に即應して強化され日、タイ両國は東亞新秩序建設に完全に一体化することとなり、陸海軍の赫々たる武勲と共に、米英の策動を排してタイ國はわが戰線に参加するに至つたことは、日、佛印軍事協定の成立と相俟つて、西南太平洋におけるわが戰略的地位を著しく強化したものである。

右につき十一日午後一時情報局から左の如く発表された。

情報局発表（十一日午後一時）本日午前十一時（泰時間）坪上大使、ピブン首相間に日泰攻守同盟締結につき意見の一致を見たりとの報告を受けたり

タイ國も米英に宣戰を布告

皇軍のタイ國進駐、日、タイ攻守同盟の成立によりタイ國は事実上対米英戰爭に参加し、皇軍との協同作戰を開始してゐたのであるが、タイ國政府としては國土防衛に專念し、積極的に宣戰布告を行はなかつた。

しかるに暴戾なる英軍は南部タイに侵入し、更に一月八日午前四時十分イギリス軍飛行機二機はバンコックを空襲し、同日正午には中部タイのラヘラン上空にも數機のイギリス戰闘機が飛來したが、うち二機はわが軍の地上砲火によつて撃墜された。一月二十四日夜イギリス軍飛行機は再び首都バンコックを空襲して無辜の市民を殺傷する非道を敢てした。ここにおいて全國土を擧げて憤激したタイ國は遂に一月二十五日正午正式に米英両國に宣戰を布告、午後二時ピブン首相はラヂオを通じて全國民の奮起を要請した。宣戰布告と共に、過去一ケ月余日本軍と協力、タイ・ビルマ國境において嚴然と國境警備に就いてゐたタイ國軍數十万はビルマに対し怒濤の如き進撃を開始した。

五　マレー沖海戰

開戰劈頭アメリカの太平洋渡洋進攻作戰の前進根據地を襲撃して太平洋艦隊を全滅せるわが聯合艦隊の偉勳天衢に達し、長くも　天皇陛下には十二月十日山本聯合艦隊司令長官に激賞と光榮とに輝ける日、わが海軍航空部隊はイギリス東洋艦隊の主力をマレー半島クアンタン東方海上に捕捉し、勇躍これに猛攻を加へ、戰艦レパルス号を撃沈し旗艦プリンス・オブ・ウエールズを撃沈し、開戰三日にしてイギリス東洋艦隊の主力を全滅する偉大なる戰果を擧げた。無敵海軍の威力いよ〳〵揚り、國民の感激と歓喜こゝに窮る。

大本營海軍部発表（十日午後四時五分）帝國海軍は開戰劈頭より英國東洋艦隊、特にその主力艦二隻の動静を注視しありたるところ昨九日午後帝國海軍潜水艦は敵主力艦の出動を発見、爾後帝國海軍航空部隊と緊密なる協力の下に捜索中、本十日午前十一時半マレー半島東岸クアンタン沖において再びわが潜水艦これを確認せるをもつて帝國海軍航空部隊は機を逸せずこれに対し勇猛果敢な攻撃を加へ、午後二時二十九分戰艦レパルスは瞬間にして轟沈し同時に最新式戰艦プリンス・オブ・ウエルズは忽ち左に大傾斜、暫時遁走せるも間もなく午後二時五十分大爆発を起し遂に沈没せり、こゝに海戰第三日にして早くも英國東洋艦隊主力は全滅するに至れり。

イギリス海軍省も十日正午左の如きコンミュニケを発表してマレー沖敢戰を確認した。

海軍省は左の如く発表するを遺憾とす。即ちシンガポールよりの報道によれば、戰艦プリンス・オブ・ウエールズ号（艦長J・C・リー大佐、トーマス・フイリツプス東洋艦隊司令長官坐乘）並に戰艦レパルス号（艦長J・G・テナント大佐）は撃沈されたり。詳細については同艦とも空中よりの攻撃によつて撃沈されたりとの日本側発表以外何らの報告なし。

チヤーチル首相も同日下院において『余はここに潜君に対して出來るだけ早く報告しなければならぬと信ずる悲報を入手した』と前置して、二主力艦の撃沈を報告した。サンフランシスコ放送局は乗組員四千五百名が両艦とその運命を共にしたと報告した。イギリス國民はダンケルクの敗報以上に銷沈し、イギリスの立場は獨ソ開戰以前よりも更に危殆に瀕するに至つたと感ずるに至つた。この悲観的観測は各新聞の論調に明かに反映した。

兩艦の性能

プリンス・オブ・ウエルズ（三五、〇〇〇トン）号は一九三七年起工、同三九年二月進水、一九四一年就役、主砲十四インチ砲十門、五インチ砲廿五、高角砲十六門、搭載飛行機四機、機銃四十八、飛行機射出機二基を具へ最新を誇る極東艦隊旗艦にしてトマース・フイリツプス提督が坐乘してゐた。高速戰艦レパルス号（三二、〇〇〇トン）は一九一六年起工、同十六年竣工速力廿一ノット半、主砲十五インチ砲六門、四インチ砲十二門、機銃廿三、搭載飛行機四機、飛行機射出機一基、なほプリンス・オブ・ウエルズ号の姉妹艦としてキング・ジヨージ五世号がある。

海軍航空隊の偉勲を御嘉尚

マレー沖海戰においてわが海軍航空部隊が英東洋艦隊主力を殲滅したる赫々たる戰果に対し畏くも　大元帥陛下には十二日聯合艦隊司令長官山本五十六大將に次の如き優渥なる勅語を賜つた。

【大本營海軍部発表】（十二日午後七時半）大元帥陛下には本日海軍幕僚長を

召させられ聯合艦隊司令長官に対し左の勅語を賜はりたり

勅　語

聯合艦隊航空部隊ハ敵英國東洋艦隊主力ヲ南支那海ニ殲滅シ威武ヲ中外ニ宣揚セリ

朕太タ之ヲ嘉ス

かゝる偉大なる戰果を擧げたマレー沖海戰に関し、十一日午前十一時二十分の大本營発表は、我方の損害は飛行機三機を失つたに過ぎなかつたことが公表されその余りにも一方的勝利に対し全世界を驚倒せしめた。

「敵艦見ゆ」――殊勲の第一報

日米交渉が大詰に入つた十一月中旬、イギリス海軍當局は新にアジア艦隊を編成し、トーマス・フイリツプス大將を司令官に任命した。フイリツプス大將は旗艦プリンス・オブ・ウエールズに坐乗、戦艦レパルスを率ゐ、十一月十八日ケープタウンを出港、高速力でインド洋を横断、十二月二日シンガポールに入つた。イギリスが世界に誇る三大要塞の一たるシンガポールは優勢なる海軍勢力を擁して更にその威力を倍加した。両艦は十二月八日開戦劈頭におけるわが常鷲の夜間爆撃下から脱し、わが輸送船團を求めて北上を開始した。かねてその動靜を注視してゐたわが海軍部隊が如何にしてこれを発見し、捕捉殲滅したか、左に海軍報道班員の報告を記録する。

（三月五日〇〇基地林海軍報道班員発）『敵艦見ゆ』との信濃丸の電波が遥れたなら日本海海戦はどうなつてゐたか。『レパルス型敵主力艦二隻見ゆ』の潜水艦の眼がなかつたら、マレー沖海戦の口火をきつたわが潜水艦はマレー沖海戦のあと幾多の作戦に参加し燦々の戦果をあげて〇日〇〇基地に帰つて來た。艦体の塗料は剝げ赤錆びたその姿は長期間にわたる苦闘を物語つてゐる。同艦を訪ひ『敵艦見ゆ』の歴史的な状況をT司令、H艦長から聞いた。

わが潜水艦は開戦と同時にマレー沖に進出、僚艦とともに嚴密哨戒に従事した。この時既に『敵主力艦二隻シンガポールにあり、出撃せば直ちに撃滅すべし』の命令を受けてゐたのである。十二月八日は朝から天候惡く、スコールがしばしば襲來し視界極めて不良であつたが、マレー東岸における陸軍の戦前上陸に協力しわが潜水艦は厳重な警戒の目を光らせてゐた。もちろん艦体は海中に隠し潜望鏡が唯一の眼であつた。午後三時十五分、その潜望鏡に突如二つの黒点が映つた。左方遠雨雲が低く漂ふところに見えた。この黒点は見る〳〵大きくなつて來る。H艦長は眸をこらした。二隻艦隊となつて北上してゐる。一隻はマストが甚だしく高く艦橋が特異な形をしてゐる。

これこそレパルスではないか。敵主力艦隊先登の一番機はこれよりもう少し艦橋も低く艦型も不明なるも堂々たる三万五千噸級主力艦である。好敵見参、直ちに襲撃体形を整へた。折しも猛烈なスコールが襲來した。百メートル先も見えない。わが潜水艦はこの時まづ第一電を発した。然るに無念スコールが通り過ぎるや忽然として敵戦艦は視野から消えてしまつた。

浮上進撃、二時間再び艦影　午後二時分浮上進撃に移る。最大の速力でこゝぞと思ふ方向に驀進した『右に噛りついても捉へずんば止まず』司令の命令である。この時〇〇から電報が入つた『飛行機偵察によれば敵主力艦はシンガポール軍港にありといふ、レパルス型に間違ひなきや』との文面、直ちに返電は打たれた『一番艦は新鋭戦艦、二番艦はレパルスに間違ひなし』大物の発見に〇〇も慎重を期してゐるのだ。

浮上進撃二時間、わが目標に狂ひはなく午後六時半に再び艦影を発見した。この時敵二隻は今までの北上体形から旋回して西に向ひつゝやがて南方に進度を變へ、わが潜水艦に正面切つて進んでくる。魚雷は装填された『射て！』といへばすぐ飛び出すやうに用意された。乗員一同聲を発するものもない。急速潜水により艦内は靜寂そのものとなつた。撃たずんばやまずの氣魄だけが艦内にもつてゐるのだ。

はるかに、敵はまたも反轉し北上しはじめた。機を逸せず浮揚進撃に移つたがその時飛行機二機前方より艦尾に向つて突進して來た。敵飛行機の哨戒である。刻々敵は離れる。逃がしてはならない。眼前にある姿を眺めながら、わが潜水艦はやむなく急速潜航を行ひ、この結果敵主力を見失つた。これよりさき〇〇からの飛行機の寫真偵察の結果『シンガポールに敵影なし、レパルスに間違なし、撃滅すべし』の命令が來た。僚艦も飛行機も出動したに違ひない。しかし敵はわれを知らざるものゝ如くマレー沖を游弋してゐる。かくて一旦飛行機の攻撃より離退したわが潜水艦は再び浮揚進撃に移つた。午後九時、南海の空も漸く暮れ初め、しかも細雨となつた。視界は二キロに及ばぬ。敵にぶつかれば、その時わが潜水艦と心中だ。『用意、射て！』の命令では間が延びる『射て！』と唯一言の命令で魚雷が飛出すやう手配も定まつて乗員一同緊張した。

おゝ空に海鷲の大編隊　明くれば十二月十日、長時間にわたる雨天狹視界のあと、遂に敵艦を見出し得なかつた。しかし僚艦がこれを捕へたことが無電に入つた。刻々わが機の猛烈な活動ぶりが入る。

午前十一時頃であつた。数十機から成るわが海軍航空隊の大編隊が二つ潜水艦の上空を過ぎて行つた。大きな魚雷をしつかりとその腹に抱いた海鷲の姿、乗員は艦上に並んで帽子を振つた。日の丸輝く頼もしい戦友の羽搏きに『しつかりやれよ』と叫びながら見送つた。あの魚雷を叩き込んでくれるだらう。果せるかなレパルス撃沈の報が入つたのは午後二時であつた。つゞいて午後二時五十分には他の主力艦をも轟沈の快報が入つた。『偉いぞ常鷲！』乗員は手をとりあつてその戦果を祝福した。その新型主力艦がプリンス・オブ・ウエールズであつたことは、その日の夕刻大本營の発表によつて司令以下が知つたのであつた。

マレー沖海戦の全貌

【〇〇基地にて村上海軍報道班員一月二十七日発】世界海戦史上不滅の金字塔をうちたてたマレー沖海戦に参加せる約〇〇名の勇士から記者は親しく海戦の模様を聴き得たのでこゝにもつとも正確にして詳細なる全貌を全國民に贈る。

昭和十六年十二月九日曇過ぎである。〇〇基地の兵舎の一隅では各攻撃隊の指揮官選が汗塗れになりながら作戦を練つてゐた。

シンガポール軍港にある英東洋艦隊旗艦プリンス・オブ・ウエルズと戦艦レパルスを如何にして撃滅するかといふのである。だが敵は軍港深く立籠つて出港する氣配もない。一日撃沈が遅れゝば我が方の作戦は一日不利を増すのだ。部隊長

の攻擊命令を待つのみだ。寸刻も躊躇は許されない。暫くの沈默が一座を支配してゐた。このときだつた哨戒中の潛水艦から『敵艦發見』の報告は來た。一同は思はず總立ちとなつた。つひに來たのだ。この日のため、たゞこの日のためにのみ死よりも苦しい猛訓練を積んで來た皆なのだ。『万歳』疎くやうな喜びが思はず一同の口を衝いて出た。『各部隊直ちに出發用意』の命令は八方へ飛んだ。

夕刻早くも第一陣が飛び立つた。日沒までは僅かに一時間半しかない。目的地点までは相當遠い。日沒迄に敵を發見出來るかどうか全く判らない。だがやつつけるのだ。各部隊は勇躍基地を飛び立つた。

天候はひどく惡く上つても上つても分厚い雲だ。時々雲の切れ間から海が見える。雲の密度は益々濃くなつてゆく。雲の下では物凄いスコールが暴れてゐる。南方特有の荒天だ。何時の間にか視界は全く暗くなつた。何も見えない唯ときどき雲の中に、難航する僚機の翼の燈火が烈しく上下するのが見えるばかりだ。目的地点でスコールを衝いて雲下に出て見たが、敵影影は既になく海上は鈍く不氣味に光つてゐるのみだ。視界は全く利かず索敵は全く絶望、万事休した。隊長機から反轉の命が出た。

無我夢中で飛んで來たのだつたが帰りの脚は重い。妙に疲れたやうな腹立たしさでいつぱいだつた。其地へ帰り着いたが飛行場は真暗だ。直ちに明朝の攻擊準備だ。操縱士のみはぜひとも睡眠をとるべしといふ命令だが誰も眠れない。

全員晩飯をとつてゐない。だが誰も食事のことなどは忘れてしまつて明朝の準備と攻擊の計畫に夢中だ。夜のうちに敵艦がシンガポールに逃げ込みはせぬかと思ふと、ちつとして居られぬ焦だたしさに襲はれるのだ。

十日午前三時四十分、待ちに待つた潛水艦から報告が來た。敵艦は二十節の速力でシンガポールへ逃走中といふのだ。今度こそはと誰の眼にも固い決意が燃え上つてゐた。整備員は燃料積込みに急ピッチをあげる。迫跡だ。時速二十ノットとすればアナンバス諸島の南方五十海里位の洋上で追ひつける見込はある。索敵の○機は夜明けを待たず勇躍出発した。

『敵主力艦見ゆ』　いよ〳〵出発だ。どの顔を見ても徹夜の疲勞など微塵にもない。はち切れんばかりの戰闘意欲が顔いつぱい滴ち溢れてゐる。瀧明の基地で出擊の訓辞をする○司令の眼は決意と緊張でギラ〳〵光つてゐる。『千戰一遇の好機である、全力を盡してやれ、みんな死んで帰るのだ』『はい死んで帰ります』司令の訓辞に答へるやうに極めて自然に全員のまなざしがかう答へた。少しの不自然もなかつた。死といふことがこのときほど容易に當然に思へたことはなかつた。午前七時五十分、○○部隊の雷擊隊と爆擊隊が出発、續いて○○部隊の雷擊隊が相次いで離陸。

昨夜の惡天候に引きかへ今日は何といふ天佑であらう。○時間も飛んだらう。すでに報告された海上まで來てゐる。だがどこにも敵影は見えない青い海原が廣しもなく擴がつてゐるのみだ。各隊が微かな焦躁を覺えながら相前後して引返しはじめたころだつた。三番索敵機は眼下に敵艦らしい五つの黒点を発見して確めるため雲下に高度を下げたとき、突然先登の艦上にパッと赤い信号を認めたかと思ふと遥か下方でパッと白い煙が上つた。雷たれてゐるのだ。敵艦だ。かう直感した。キイを叩いた。『敵主力艦見ゆ、北緯四度、東経百三度五十五分』午前十一時四十五分、歴史的な第一報だつた。

スコール宛らの彈幕

反轉中○○部隊機はこれをキヤッチ一路機首を北方へ向けた。目指すはクワンタン東方五十マイルの洋上である。續いて零時五分、第二報は

『敵主力は駆逐艦三隻より成る護衛を伴す、航行順列はキング・ジョージ型レバルス』

と報じてきた。機内には期せずして歓聲が揚がつた。全搭乗員の目は一ツになつて海上に鋭きついてゐる。十数分位たつたときだつた。○○部隊長の率ゆる爆擊機隊は雲下遥に南下中の敵主力を発見した。おゝ見よ！プリンス・オブ・ウエールズを一番艦にレバルスがこれに續きその手前には一番艦を圍むやうに駆逐艦三隻が三角陣をつくつて先行してゐるではないか。堂々たる縦陣警戒航行順列だ。各艦の蹴立てる眞白い波がひどく印象的に眼にしみる。零時四十五分『突込め』の号令が僚機に傳はる。高度を下げると敵艦は一齊に防空砲火を撃ち始めた。機の上下左右に際間もなく高角砲彈を炸裂する。各機は次ぎ〳〵に巨彈を投下、一彈は見事に二番艦レバルスの中央部に命中、炭黒色に塗つた胴体が噴き出した、爆擊隊はさらに大きく彈幕のなかを旋回し二度目の爆擊に移らうとしたとき、○○雷擊隊の一隊は敢然敵艦目がけて雷擊に移つてゐた。左右に分れた雷擊隊の一隊は右よりウエールズへ、猛烈な雷擊を加へてゐる。巨大な水柱が両艦から数本あがつた。命中したのだ。一分間に六万発の彈丸を発射する二十五聯装の二十ミリポム・ポム銃三基、二十聯装一基、四十粍の八聯装四基の高角機銃と五・二五インチの副砲十六門、四・七インチ高角砲四門を有するプリンス・オブ・ウエールズはその全防空機能を挙げて必死の防禦を行つてゐる。

ざーつざーつとスコールのやうに彈丸の幕が行手を遮ぎる。空一面○○メートル位の高度に黄色い硝煙がたちこめ、炸裂する砲彈の破片が海上一面に砂塵を投げつけたやうに物凄いしぶきを立てゝゐる。目も口も開けられぬやうな烈しさである。

あゝ三番機自爆

續いて○○雷擊隊隊の大編隊が敵艦を発見したのは午後一時半頃だつた。雲下にちらと敵影を見たかと思つた瞬間、視界は蒙々たる乱雲層で断たれてしまつた。海面○○メートル位から○○メートル位まで覆ぐ分厚い雲である。約十分間夢中でこれに突込んだ。一寸先も見えぬ雲中を僚機は見事編隊を崩さず隨いて來てゐる。一時四十八分、雲が切れた。下を見ると目指す敵艦の胴体が眼下に横たはつてゐるのだ。隊長機を先登に突込めの態勢をとる。雲を出ると雨のやうな砲火だ。見る見るうちに視界は黄色い硝煙で蔽はれてゆく。

まづ隊長機が海面すれ〳〵まで突込んだ。續いて○機の全機がプリンス・オブ・ウエールズ号に猛烈に驟ひかゝつた。とその瞬間、ウエールズ号の胴体からマストの倍程もある水柱が上つた。命中したのだ。續いて数本水柱があがつた。魚雷発射と同時に各機の巨体は艦橋すれすれにウエールズ号を飛び越え、艦橋目がけて激しい機銃を浴せかけた。○隊○○機はこのとき二番艦へ驟ひかゝつた。轟然レバルスの後尾に水柱が上つた。二番機が火達磨となつて海中に自爆したのと同時に、二番機の放つた魚雷がレバルス号の眞中に命中二本目の水柱が上つた。

續いて艦首すれ〳〵に眞紅な火焔が一條の煙幕のやうな帯を引いてはしつた。三番機が自爆したのだ『番生』一瞬前の胴に怒に近い感情がこみ上げた。だがそ

れは直ぐ消えて『立派だ、見事な最後だ』といふ感歎に襲つてゐた『こんな美しい死に方が出來ればそれでよいのだ』誰の胸にも不思議に同じ氣持が動いてゐた。

レバルス轟沈す　高角砲の目のくらむやうな曳光の中で、レバルスの水兵が甲板に倒れてゐる姿がはつきり見えた。わが掃射を避けるやうに、右手で顏を蔽つた兵もゐた。機は大きく旋回してゐる。振り返るとレバルスは黑煙に包まれて大きく傾斜し、ウエールズも左に傾きグッと速力が落ちてゐた。『万歲』喚長がまつ先に叫びだした。續いて機内にはどつと勝鬪が沸きおこつた。このとき、左前方の驅逐艦が突然猛烈に爆破し瞬時に海中に沒してしまつた。僚機の放つた魚雷一発が見事に命中したのだ。間髪を入れぬ轟沈であつた。

續いて最終隊の〇〇爆撃隊が痛手を蒙つて逃げ惑ふ敵艦の上空に姿を現した。痛手を蒙りつつも敵の砲火は依然として衰へない。流石に英國海軍だ。思ひきり高度を下げて爆撃に移つたときだつた。突然機体が竹蓆で撫でられるやうな音がした。砂礫のやうな高角砲彈が命中してゐるのだ。全機プリンス・オブ・ウエールスに直撃を敢行、うち一彈は後部甲板の櫓に見事命中したのであらう。轟然たる爆音が起つて茶褐色の火焰が立上つた。旋回して振り返れば戰艦レバルスがまさに沈沒してゆくところであつた。眞黑い煙がこの巨大な戰艦をおし包んだかと思ふと一瞬にして巨体は海中に沒してしまつた。いまははや海上一面にたゞ黃褐色の油が煙るやうに擴がり、無數の浮流物の漂ふ中に二隻の驅逐艦が救助作業を續けてゐる。最後の止めを刺した〇〇爆撃隊はかくて全機歓呼のうち引揚げて行つた。このころ三番雷撃機は第一報を打電して以來依然上空を旋回、二時間にわたる海空の死闘を逐一報告し續けてゐたものであつた。レバルス沈沒を目撃した同機はさらに高度を下げた、いまはウエールズの最期を見とどけるばかりである。

不沈戰艦三十秒で沈沒　中央と艦尾から濛々たる黑煙を吐き、左に大きく傾きつゝウエールズは八ノット位の速力で走つてゐる、その直後を驅逐艦が一隻追尾してゐる。だん〳〵速力が落ちてきた。いよ〳〵最後かと思つたとき驅逐艦はズーツとウエールズの舷側に近づいて來た。その途端續いて二回プリンス・オブ・ウエールズの巨体に大爆発が起つたと同時に艦尾から『不沈戰艦』の巨体は徐々に沈みはじめたのだ。『英國の誇』の名が示すやうに從容として沈んで行くのだ。約三十秒、沈まざる戰艦は遂に全く姿を沒してしまつた。附近一面の油の上を强烈な南の太陽がギラギラと光つてゐた。なぜかひどく物靜かな光景であつた。夕刻近く死闘を終へた荒鷲は續々基地に歸還した。あゝ多年艱へぬいた海軍魂は遂に不沈戰艦を沈めたのだ。迎へる〇〇隊司令は泣いてゐた大任を果した搭乘員も泣いてゐる。地上勤務の人達も泣きながら戰友の手を握りしめるばかりだ。何もいへない。たゞ抑へきれぬ感動が嵐のやうに全員の胸中を走り廻るのみだ。翌々日〇〇隊の一隊は再び激戰場の上空を飛んでゐたが、眼下には何事もなかつたやうに蒼い波頭が輝いてゐた。この波頭へ向けて搭乘員達は大きな花束を落してやつた。最後まで闘ひ抜いた英海軍の數千の英霊よ眠れ、戰ひに强い海鷲のやさしい心遣りであつた。

かくて英東洋艦隊主力全滅す

轟沈されたレバルス号に乘込んでゐたC、B、C放送局特派員モシル・ブラウンは万死に一生を得て両艦の生存者百余名と共に十一日シンガポールに到着、フイリツプス司令長官が海中に姿を消したことを語り（同夜シンガポール放送は同大將の戰死を確認し、レートン中將がその後任に任命された旨発表した）具にマレー沖敗戰の模様を報じ、わが荒鷲の旺盛なる闘志と、優秀なる技術とを激賞した（このアメリカ放送局員はその卒直なる觀戰記がイギリス當局の忌憚に觸れてシンガポールより退去を命ぜられた）

『十日午前十一時過ぎ日本の爆撃機隊は高度〇〇フイートを保ちながら、私の乘組んでゐたレバルス号にぢり〳〵と迫つてきた。私は恰度甲板に立つてゐたが、空は晴れてゐたので日本機が近づいてくるのがはつきりとみえた。わが艦の高射砲は忽ち一齊に火を吐き砲彈の炸裂する音は轟然として耳をつんざいた。日本機もこれに應じて爆撃を開始し、ここに壯烈な海空戰が繰展げられたのであるが、一彈はわが艦の舷側すれすれに落下、このためわれ〳〵甲板にゐたものは、頭から海水を浴びてずぶ濡れになつてしまつた。間もなく一彈はキヤタパルトデツキを突き抜けて艦内に落下し火食堂の下で爆発した。このためレバルス号の飛行機は飛び出すことが出來なかつた。十一時四十分傍艦プリンス・オブ・ウエールス号は命中彈を受けたやうであつた。わが通信兵が齊射開始の号令を絶叫するや否やわが艦砲は猛然火蓋を切つて怒号し始めた。一機また一機と日本機は次々にわが艦を襲撃、レバルス号はこれを避けべく懸命の努力を拂つた。十一時四十五分更に多數の日本爆撃機が約〇〇フイートの高度を保つて荒鷲の如く上空を旋回し始めた。砲彈の轟音は耳をうち爆発の火花は目を射つた。その中を日本の雷撃機は勇敢に海上〇〇ヤードの低空まで急降下しては再び機首をもたげて舞上つた。十一時四十八分、日本機は〇〇ヤードの上空から空中魚雷一彈を舷側に投下した大きな水煙となつて火柱がさつと立ちのぼつた。續いて他の雷撃機がわがレバルス号に襲ひかゝつてきた。獰く稀の低空飛行だ、十二時一分、われわれはまたまた日本爆撃機の襲撃に襲はれたが、わが艦は必死となり十四吋砲以外の全備砲を開いて應戰した、十二時三分〇〇台の雷撃機が〇〇ヤードの低空から攻撃してきた。今度は十四吋砲まで動員し一齊砲射を試みた。十二時廿分今度は日本爆撃機〇〇機と雷撃機〇〇機が〇〇ヤードの低空で艦の周圍を氣味惡い音を立て旋回し出したと見る間に、同機は猛烈なスピードでわが艦めがけて急降下し、それと殆ど同時に胴体から大きな魚雷がパツと射たれた。監視兵があぶない！　と叫んだ聲と一緒に、魚雷は轟然たる音をたてゝデツキに激突、間近にあつた私は無意識のうちにデツキに腹ばひになつた。しかしこの一撃でレバルス号はみるみる傾きはじめ、それから一分とたゝぬうちに再び右舷に前と同じやうな大衝撃を受け、遂に艦尾を海中へぐつと突込んで間もなく沈沒してしまつたのである。私は間髪をいれず海中にとび込み、しばらくしてのち幸にも傍艦によつて救助されシンガポールに送られたのであるが、日本空軍の勇敢さと技術の優秀さには、今まで日本空軍弱しと聞かされてゐただけに驚嘆してしまつた。

米英海軍作戰に重大修正

プリンス・オブ・ウエールズは一九四一年五月就役したばかりのイギリス海軍の至寶である。大西洋でドイツ戰艦ビスマルクとの海戰に際しても、イギリスは同艦を彈着圏外に置いた程大事をとつた位である。レパルスもまたイギリスが誇る高速戰艦であつたが、一瞬にして轟沈し、不沈戰艦と豪語したプリンス・オブ・ウエールズもわが海軍の一擊に脆くもマレー沖海底深く葬り去られ、ネルソン以來の傳統もわが海軍の前に潰え去つたのである。

チャーチルに非難集中　マレー沖敗戰の悲報は海國イギリスを氣死せしめた。ストックホルム來電によれば、二戰艦擊沈はイギリス朝野の囂々たる論議の的となり、十二月十四日の下院の討議においては各議員より『何故に両艦は陸上機により防衛し得なかつたか』『両艦の空中及び水中攻擊に対する防備力はドイツ戰艦ビスマルクの如く强靱であつたか』『軍當局の作戰計劃は果して用意周到であつたか』等に軍、政府總攻擊の質問が續出し、同時に戰艦対飛行機の優劣問題、東亞におけるイギリス空軍の勢力、シンガポール防備强化の問題が白熱的に論議され、議場は第二次欧洲戰爭勃発以來かつて見ざる程の興奮と混乱とを呈した。これに対しチャーチル首相は『日本空軍には、高射砲のみによつて應戰さるを得なかつた、』と答弁して、イギリス空軍が戰爭に參加しなかつたことを確認し、更に『イギリスの東洋空軍は制限された機數を以てすべての要求を滿さねばならず、特にシンガポールにおける空軍部隊は全力を擧げて、日本空軍の攻擊に対し、飛行場防衛に作戰されねばならなかつた。從つて両艦が飛行機の援助を受くることは不可能であつた。それにも拘らずフイリツプス提督が倘かつ危險區域を航行したことは雲が低く垂れ込め、視界が利かず、敵機に発見される懼れなしとしたからであるが、ついに雲の切れ間より日本偵察機に発見さるるに至つた』旨を說明し、日本空軍の前に完全に屈服せざるを得なかつたことを自認した。議會の非難は首相に集中され、下院の保守党議員スタートン少佐は文書を以て首相に質問書を提出して、対空防禦が完全であつたか否かに就いて回答を要求し、サウスビー保守党議員も詳細なる報告を要求したが、首相は遂に矢面に立たなかつた。ロンドンのデーリー、エキスプレス紙は十六日の紙上でイギリス空軍の缺陷に対して鋭い批判を加へ、クレター島の戰鬪においてはドイツがマレミ空軍基地にある最も精鋭なる空軍と三万のイギリス地上部隊に猛攻を集中してこれが擊破に成功した、マレー半島での日本軍はこのクレター島におけるドイツの戰法を想起せしむるものがあるとして、マレー半島東北岸を死守出來なかつたことが遂に両艦の犧牲をもたらし、シンガポールへの非常な脅威となつたことを指摘した。

『日本戰爭の本質を一變す』　マレー沖海戰によつて、日本空軍に対する米英の恐怖は更に倍加された。十四日BBC放送局は左の如き海軍專門家の見解を放送して、イギリス海軍作戰の根本的建直しを要調した。

『樞軸対英米の鬪爭は既に三年有半に過してゐるが、海軍力を有せぬ樞軸側の戰法は陸においていかなる戰果を擧げても、大英帝國の死命を制するに至らず、この意味でこの両陣營の戰ひは何年経たらと截然たる結着のつきかねるものだつた。しかるにこの戰爭の本質は日本海軍の乘り出しによつて根本から修正されるに至つた。すなはち日獨伊の対英米共同戰線は樞軸側に怖るべき海軍力を加ふることにより、英帝國の死命を制し得る可能性を孕んだのである。しかもこの日本海軍はスペインのインヴインシブル・アルマダ(無敵艦隊)擊破以來三世紀半に亙つて保持しつゝあつたイギリス海軍の海上覇權に强烈な打擊を與へ、イギリスに次ぐ無敵海軍と見られたアメリカ海軍に決定的痛擊を與ふるの大戰果を擧げるに至つた。しかもその作戰の特徴はわれわれ世界第一海軍國の夢想だにし得なかつた純粹に日本的なものである。有名な海軍批評家バイウオーター氏は太平洋作戰を論ずるに當り「日本海軍のハワイ襲擊は絶対不可能」と論斷してゐたが、日本海軍は見事にこの權威者の定說を打破した。またプリンス・オブ・ウエルズ、レパルス両艦擊沈に當つて示した日本海軍航空部隊の威力は、今次大戰開始直後航空機対主力艦の優劣が燒んに論ぜられ結局主力艦の優位勢を認めるに至つたわれわれの定說を再び根本から覆すに至つたもので、今後一層の研究を要するものだ。とまれ日本海軍の出現は今次大戰の性格を根本から變改し、わが海軍の作戰に、重大な修正を要請しつゝあるものでプリンス・オブ・ウエルズの代りに一万トン巡洋艦エジンバラを東亞水域に派遣する等のこともこの基本的問題を究明した後でも遅くはあるまい。』

米國の主力艦編重主義の再檢討　アメリカにおいてもハワイ敗戰の衝撃から興奮を取戻すにつれ、アメリカの戰備に対する反省が各方面から要望さるるに至つた。ウシントン來電によれば議會では『主力艦か爆擊機か』の問題が論議の中心となり、政府に対して主力艦偏重主義の再檢討の要求が集中された。傳統的な海軍至上主義の米英においても、一九四〇年春のノルウエー作戰、十一月の英軍雷擊機によるイタリアのタラント軍港襲擊、一九四一年のドイツのクレタ作戰等において、何れも多数の大型艦艇が空軍のためにあえなく擊沈大破された実例に鑑み、漸く海戰における空軍の威力を高く評價し、空軍の擴充に轉換しつゝあつたが、ハワイ海戰、マレー沖の海戰における日本空軍の完勝は更に彈くこの傾向を急角度に上昇せしめんとする氣運を醸生するに至つた。殊にアメリカにおいては海軍水面艦艇九十万トンの擴張案が上程されてゐたので、この論議は右擴張案を如何に處理すべきかに關聯し、この理論を具体化すべき実際問題に驀進し白熱的論議が闘はさるゝに至つた。上下両院においても空軍主張者が俄然激增し、ペート上院議員の如きは『爆擊機が何故にもつと重視されてゐないかは不可解極ることだ』と政府攻擊の聲明を発表した。ニューヨーク・タイムスも十二月十四日の紙上において長距離重爆擊機重視の必要を說いて左の如く述べた。

空軍は最早單なる補助兵力と見做すとは出來ぬ。主力艦の建造を中止すべき理由こそないが、優先權は長距離爆擊機及び飛行艇に與へられねばならない。

六　米太平洋中央進攻路の潰滅

大東亞戰爭開戰罹頭ハワイ、マニラ、シンガポールの米英の三大軍事據点を强襲して、一擧にこれに據る艦隊勢力を覆滅したわが軍は、同八日ミツドウエー、ウエーキ、グアム諸島にも猛擊を加へ、或は水上艦艇による砲擊により、或は航空部隊の猛爆擊により陸上軍事施設を破壞、越えて十日陸海軍協同の下にグアム島に敵前上陸を敢行し、十二日完全にこれを占領した。

この開戰第一週における一聯の大作戰は、アメリカの太平洋中央進攻路を徹底的に破碎し、島田海相が十二月十六日第七十八臨時議會における戰況報告において述べた通り、『ハワイより東亞に至る戰略並に交通上の要地は一擧にしてその機能を破壞』するにあつたのである。

ハワイ――ミッドウエー――ウエーキ――グアム――マニラ――シンガポールを結ぶ線は、わが國土に重大な脅威を與ふる强力な包圍陣であり、艦隊と基地とを以て、海軍兵力の二大構成要素とするアメリカの傳統的海軍政策を以てすれば正に太平洋のマジノ線としてアメリカが自負したものであつたが、わが精鋭の一擊にあつて脆くも潰えさつたのである。十二月十六日のジョンストン、ペーカー両島の攻擊は二十二日ウエーキ島占領、フイリツピン――ボルネオにおける作戰と相並んで第二週における重要なる作戰といはなければならぬ。

太平洋諸島を砲擊

帝國海軍艦艇は十二月十七日以來、太平洋上に散在するマウイ、ジョンストンサンド、パルミラー等の各島嶼に対し攻擊を反覆し飛行機格納庫、無線電信所等重要軍事施設を破碎したことが、同三十一日大本營から發表された。

わが潛水艦はアメリカ本土沿岸及びハワイ方面に作戰し敵海上交通に深刻な打擊を與へつゝあつたが、十二月二十五日までの擊沈船舶十隻七万トン、大破船舶三隻三万トン、損害を與へた船舶は五隻約四万トンに上つた。

十二月三十一日わが海軍艦艇はハワイ島ヒロ港、マウイ島カフルイ港、カウアイ島ナウイリウイ港を急襲攻擊し、各港主要の軍事施設を破壞炎上せしめ、ヒロ港においては埠頭に碇泊中の敵艦艇一隻を擊破してアメリカの心臟を寒からしめた。朝日新聞ブエノスアイレス一月二日發特電によるとヒロ港の損害は特に甚しく、同港に集結してゐたアメリカ潛水艦多數が損傷を蒙つたと報じた。

ミッドウエーを猛砲擊

大本營海軍部發表（十二月九日午前十時五十分）帝國海軍艦艇は昨八日午後ミッドウエーを急襲、猛烈なる砲擊を加へ同島の飛行機格納庫、燃料庫などを炎上せしめたり、我方損害なし

ミッドウエー島は、日本から二千二百マイル、サンフランシスコから二千八百マイルの地点によるところから、この名稱を與へられた。直徑五マイルの珊瑚礁に圍まれた小礁群で、最大のサンド島も長さ一マイル、幅半マイル、面積八百五十エーカーにすぎないが、錨地としてヴエルズ灣を擁し、吃水四十フイートまでの艦船を收容し得る。一九三五年太平洋横斷航空路が開拓さるゝや本島は中繼地として基地工事が完備され、翌年更に水上機基地となつたが、一九三七年一月一日太平洋防備制限條約滿期失效と共に、アメリカは本格的に海、空軍基地として軍備の增强を圖り、これによりハイウオーターの論じてゐる如く、アメリカはハワイより更に西方一千マイルにその作戰基地を進めたのである。

グアム島占領

アメリカ海軍省は十二月七日（日本時間八日）日本空軍がグアム島を攻擊した旨發表した。サンフランシスコ發同盟電も同地に遂した情報として、グアム島が日本軍包圍下にあり燃料タンク及びホテルは目下炎々として燃えてゐることを報じた。

ワシントン當局は八日グアム島に日本空軍の十八機よりなる重爆擊機編隊が午前八時四十五分と、また六機編隊が午後二時四十五分と二回に亙つて襲來し痛烈なる爆擊を浴びせたとの米國アジア艦隊司令長官トーマス・ハート提督の報告を公表した。

グアム島に敵前上陸

大本營陸海軍部は『十日午後二時二十分帝國陸海軍は十日未明緊密なる協同のもとに敵の抵抗を排除してグアム島の上陸に成功せり』と發表した。敵前上陸に成功せるわが海軍〇〇陸戰隊はアプラ港四周の要地に進擊しこれを完全に占領し、三千トン級油槽船一隻を拿捕し、アメリカ海軍少佐以下三十名を捕虜とした。

また一方陸軍部隊はその主力を以て首都アガニアを占領し、總督兼要港司令官マクミラン、同副總督ヂイルス以下三百五十名を捕虜とし、同地に監禁されてゐた邦人二十五名を救出し、十二日完全に同島を占領した。

アメリカ海軍省は十三日左の如きコンミュニケを發表して日本軍のグアム島占領を確認した。

グアム島の通信はラジオによるも有線電信によるも、最早不可能となつた。全島が占領されたことは疑ひない。同島には四百名の水兵と百五十五名の陸戰隊員がゐた筈である。グアムからの最後の報告によれば、日本軍は同島を反覆爆擊し、數ケ所の地点から上陸した。

同島占領後鹵獲品中に多數の毒ガス兵器が発見された。わが軍の神速なる作戰によつて敵はこれを使用する暇がなかつたが非人道にしてかつ國際條約において使用を禁止されてゐる兵器が準備されてゐたことは、アメリカが勝利を得るためには如何なる手段に訴ふることをも辞せないことを示す鉄證である。

西太平洋の最前哨據點覆滅

グアム島はアメリカの西太平洋における最前哨據点で、横浜から二千四百キロ、マニラから二千五百キロの北緯十三度二十六分、東經百四十四度四十三分の洋上にあつて、面積三百六十平方キロの小島である。一八九八年パリ條約によつてアメリカがスペインより奪取したもので海軍省の直轄下に置かれ海兵隊が駐屯し、沿岸防備の艦艇が配備されてゐるほか、汎米航空會社のクリツパー飛行艇の発着地として航空施設が完備してゐる。

アメリカ海軍當局は東洋進攻の前進基地として早くから同島の要塞化を要望してゐたが、その位置がわが南洋委任統治領の島々に包圍されてゐるためと、またワシントン條約によつてその武裝が制限されてゐたゝめ曰ひなく着手するを得なかつたが、一九三六年、同條約の廢棄により太平洋無條約時代が出現すると共にグアム島武裝案は俄然再燃してアメリカ議會の論議を捲き起し武裝費成派は同島の武裝によつて比島防備を强化し得ること、ハワイ、米本土の防備が容易となること、太平洋進攻作戰が有利となること等を强調したが、反対派はその地理的脆略と、日本を徒に刺戟することを擧げて海軍當局の要求を拓否して來た。しかし國際情勢の急轉によりアメリカは遂に一九四一年三月サモア島と共にグアム島の防備强化を含む三億四千五百万ドルに上る海軍基地建設工費豫算案の議會通過に成功した。このうち莞し當りグアムに充てられた豫算は四百七十万ドルであるが

グアム島を獨立の海軍基地たらしむるためには、少くも一億五千万ドルを必要とするであらうから、上記の建設費位では有效な防備施設を行ふことは固より不可能であるが、かゝる武裝も何ら工事の進捗を見ぬ前に皇軍の麾中に帰するに至つた。グアム島の失陷によつてアメリカの太平洋中央進攻路はその第一關節において切斷され、フイリツピンは孤立無援の窮地に陷つたのである。

米領諸島の軍事施設撃砕

ワシントン來電は、アメリカ海軍省は日本艦隊が十二月十六日終日ハワイ群島中のカワイ島に猛烈なる砲火を浴せてゐると発表したと。またリスボン來電でアメリカ海軍當局は日本軍艦が十六日ハワイ群島中のマウイ島南岸キパフルにある米海軍施設並にハワイ南西千七百キロの海上にあるジョンストン島に対し過去二十四時間に亙り砲撃を行つてゐると発表したと報じた。

右につきわが大本營海軍部は同十七日午後三時三十分帝國海軍艦艇が十一日アメリカ基地ベーカー島、十六日ジョンストン島を攻撃し敵軍事施設の大部分を破壊したことを明かにした。

ジョンストン、ベーカー両島とも、飛行基地の設備を完成し、中央進攻路を切断されたアメリカとしては、これをゲリラ戦の根據地とし、またオーストラリア、蘭印、シンガポール方面に飛行機、飛行艇を空輸して空軍の増強を圖らんと企圖してゐたのであるが、わが着実なる作戦によつて太平洋上の敵基地は次々にその軍事的機能を失ひ、米英の壊滅は殆ど断ち切らるゝに至つた。

ウエーキ島占領

ウエーキ島はわが南洋委任統治領の東北隅外側に位し、東京から三千五百キロ、ホノルルから三千四百キロ、ミツドウエーから一千九百キロを距てゝゐる珊瑚礁で、ビール、ウエーキ、ウイルクスの三島よりなる。全面積、二平方マイル海拔三メートルの小孤島にすぎないが、ハワイ——ミツドウエー——ウエーキ——グアム——マニラを結ぶいはゆるアメリカの太平洋中央進攻路の中間基地として重要視され、一九三四年アメリカ海軍省の直轄となつてから、アメリカ政府は同島防備のため一千五百万ドルの國防豫算を以て潜水艦基地、小艦艇基地、飛行基地等を完備して全島を要塞化し、約三千の海兵隊をして守備し、一九四一年二月からは大統領令を以て軍用以外の立入りを禁止してゐた。

激浪を衝いて強襲上陸　大東亞戰開始當日の十二月八日ニューヨーク発のアパス電は、日本軍がウエーク島を占領したことを報じたがわが大本營は九日午後三時十分の発表において【八日帝國海軍〇〇航空部隊はウエーク島を空襲し、敵飛行機九機を撃破しまた燃料タンクを炎上せしめたことを明かにした

十一日のサンフランシスコ発電は、同日太平洋方面からウエーキ島において日本空軍の爆撃を免れたクリツパー機一台が帰還したことを報じた。同機はハミルトン艇長指揮の下にマニラに向つて飛行中ラヂオによつて日米開戦の報を受けたので直ちにウエーキ島に引返へしたが、ウエーキ島到着後同島は日本空軍の猛爆を蒙つた。ハミルトン艇長の目撃談によれば、日本機の数は多く重要施設数ケ所は大損害を受けた模様である。ハミルトン艇長のクリツパー機は難を逃れ、辛ろじて爆撃が終つてから出発してミツドウエー島に飛行し、同地にあつた汎米航空會社の従業員全部を收容して漸くサンフランシスコに辿り着いたのである。

アメリカ海軍省は十九日再度日本空軍の爆撃を受けた旨発表した。二十一日には三度空襲を受けたと公表した。

この間沈黙を續けてゐたわが大本營は同二十四日ウエーキ島に関する第二回の発表によつて、二十二日夜半同島に强襲上陸したわが陸戦隊が翌二十三日午前完全に同島を占領したことを公表した。

大本營海軍部発表（二十四日午前十一時）

一、帝國海軍は激浪烈風を冒して二十二日夜半ウエーキ島を攻撃し、わが陸戦隊は頑强なる抵抗を排除しつゝ敵前上陸を敢行し二十三日午前十時半同島を完全に占領せり

二、同方面の作戦においてわが方駆逐艦二隻を失へり

【註】一、米國はウエーキ島防備のため一千五十五万四千ドルの國防豫算を以て潜水艦基地、小艦艇基地、飛行基地及び陸上飛行場を完備し、これを要塞化し、約三百名の海兵隊これを守備す、高角砲陣地、機銃陣地及び飛行機により極めて頑强に抵抗せり

二、ウエーキ島は洋上の珊瑚礁にしてつねに激浪と烈風にさらされ特殊の天候海上の狀況など攻撃極めて困難なるところなり

三、なほ開戦前は汎米航空輸送會社のハワイ島との中間着陸場として用ひらる米陸海軍はこれを中継基地として、飛行機その他を東亞方面に增强しつゝありたり

凄絶！ウエーキ島攻略戦

帝國海軍は激浪烈風を冒して二十二日夜半ウエーキ島に猛攻撃を加へ、わが陸戦隊は時を移さず敵前上陸を敢行したが要塞化された全島の高角砲陣地の機銃陣地等の地上砲火を縦横に動員し、残存飛行機もまたわが軍の攻撃に必死の抵抗を試み、彼我の激戦数刻にわたつた。朝日新聞天藤特派員は同島を視察し、同島占領の偉勲に輝く勇士より當時の實況を聞き左の如く報じてゐる。

【ウエーキ島にて天藤特派員発】帝都を東南に距ること三千五百キロ、わが南洋諸島の東北隅外側に位しハワイの外郭防禦陣地として、またハワイ、ミツドウエー、ウエーキ、グアム、マニラを結ぶいはゆる米國の太平洋中央進攻路の中間基地としてその地位を重要視されたウエーキ島の攻略こそは、グアム島の占領とともにわが咽喉笛にぐつと突出した短刀を拂ひ落し、逆に敵の胸部にピタリとピストルを突きつける結果となつたのである。それだけに敵の抵抗は頑强を極め、その上激浪、烈風の自然の防空を突破して突進したわが海軍の勇戦こそ、かの日露戦争における旅順閉塞隊に比すべく同作戦で駆逐艦二隻と多数の將兵を失ひ、今次大東亞戦において最も多くの犠牲者を出したことによつても如何に激戦であつたかゞわからう。記者は海軍報道班員として末知のウエーキ島に第一歩を印した。

いまだ激戦の跡生々しい戦場に、早くも断乎として守備につく敵前上陸の勇士なんのほこらしげもなく、これが一命を捨てゝ銃火の中を突撃した勇士かと思はれるほど默々と任務を全うしてゐる。兵隊さん達を珊瑚礁の断崖に、あるひは〇

○陣地に防ぎて戰闘狀況を、あるひは涙なくしては聞かれぬ勇戰物語をつぶさに聞くを得た。

遥く離れた太平洋上の作戰ゆえにほんの少しも銃後の人々に知らされなかつたこの攻略戰を一日も早く報道しその眞相を傳へたいと記者の胸は躍るのである―

『接岸成功！成功！』

はる〴〵と洋上を進むことのいかに困難なことか、激浪と戰ひながら我が軍がウエーキ島を目前にしたのは二十三日午前零時過ぎだ。眞暗闇に島の一端が僅かに見えるだけだ。用意は着々と整ひ戰闘が開始されたのは午前零時三十八分である。十數メートルの烈風と山なす激浪は全員乘換を許さない。今はこのまゝ突進あるのみ。五百米の彼方から〝接岸用意！〟の悍壯な命令が下る。全員パツと甲板上に伏せた。○○名を乘せた○○艇はフルスピードでそのまゝウエーキ島の岡岸目さして驀らに突込んだ。ガー、ガー、ガーと浅瀬につゝかけたが見事乘り切つた。敵岸に艇もろとも突進しようといふのだ。突如、遥浅の珊瑚礁に轟然と乘りあげた。航海長の「接岸成功！成功！」の聲が烈風にかき消されるやうに飛ぶ。驚くべき捨身の新戰法だ○○部隊の勇士達である。轟音に眞夜中の夢を破られた敵は、横から這ひ出してパツと照らす探照燈早くも五吋平射砲の第一彈は艇上に炸烈、艇長○○大尉は頭部と背部に、航海長○○中尉も頭部に、○○三曹、○○一曹も負傷、○○一水、○○二水は無念戰死したのである。

『山』と『川』との合言葉

それつと縄と縄梯子を傳はつて一斉に勇士達は海中に飛び込む。見れば驚ち麗く敵彈に艇は炎々と燃え盛つてゐる。遥浅とはいへ首も出ぬ深さだ。激浪は容赦なく足場をさらふ。海岸まで數十米の海中を敵の十字砲火を浴びつゝ泳ぎつかねばならぬ。敵は壕壕から砲台から七・七ミリ機銃、十三ミリ機銃、五インチ平射砲、三インチ高角砲の直射と猛烈な火力を集中する。突如眞赤な火箭が闇空にパツと上つた。敵前上陸成功の合圖だ。續いて○○部隊の左翼には○○部隊が、○○部隊も成功した。最左翼ウイルクス島にも○○部隊別動隊がこれまた海岸にとりついた。ウエーキ島最右翼にも○○部隊○○隊、○隊が上陸した。一斉に花火のごとき火箭が揚る。

海岸にとりついた勇士達は岩陰々々を傳ひあるひは珊瑚礁の砂浜を一寸刻みに匍匐前進して行く。五十米の直前から直射を浴びせる敵の曳光彈が眼前にあるひは頭上を越えて氣味悪い後味を残しては消える。しかもなほ勇士達はまつしぐらにゐるものごとく。鬪のごとく敵陣地目指して突進したのである。

○○部隊は東へ、○○部隊は西へと方向を轉じ、それ〴〵直前の高角砲台の背後へと廻回した。眞暗闇の中をあるひは灌木地帶に突きあたり、或は無數に放置してゐた作業用トラクターやキヤタピラを手さぐりで敵陣地に肉薄したのである。わが勇士達はこの間一発の銃聲も発しなかつた『山』は『川』の合言葉を唯一の綱りに最最獨特の突撃につぐ突撃、ワアツと喚聲とともに肉彈戰を敢行しては機銃陣地を突破したのである。

隊長無言の指揮

南の空は明けやすい。午前三時にはもうしらじらと明るい。やうやく全貌を現した砲台に迫ることあと二十米、この時敵のベルグマン銃は一斉に火蓋を切つた。高角砲台の下に據つた敵ギヤンゲ張りの移動特射だ。一瞬頭部にグワン!!と衝動を受けた○○兵曹長はやられたと思つたがすぐ正氣づいた。鉄兜に手をあて、見ると幅章ははねとばされてぐつとひつこんでゐる

が奇蹟的に貫通を免れたのである。肩を並べて戰況を看視してゐた内田謙一郎隊長はと見れば、あツうつ伏してゐる。隊長殿、隊長殿、引き起して見れば無念！眞正面から眉間を射抜かれて名譽の戰死だ。まだ身体は温い。腕時計ばかりがコチコチと動いてゐる。時正に午前四時五分、兵に命じて直に部隊長を背負はせ○○兵曹長指揮に當つた。だが部隊長は兵の背中で軍刀を握つたまゝ最後の戰闘まで部隊と行動を共にし、飽くまで無言の指揮を續けその任を全うしたのである。あゝもう一寸ほんの一寸敵彈が高かつたら……今は詮ない嘆みではあるが……勇士達は涙を拂つて奮然と起つた。足をやられた○○隊長も佛掌しつゝ指揮をしてゐる。○○部隊長も胸部貫通の重傷を負つた。

敵司令官を生擒

肉薄する勇士の頭上に突如轟々たる爆音が飛來した。友軍機だ。敵陣地めがけて痛烈な爆撃が開始された。勇士たちの顔に生氣が溢れる。手榴彈が飛ぶ。擲彈筒が唸る。喚聲があがる。突撃また突撃、さしも頑强に高角砲台に據る敵兵を全滅こゝに岡岸の敵防備陣地は突破されたのである。午前六時四十分、激戰六時間余にわたる奮戰の賜である。ふとふり返つて見れば負傷した○○艦長、燃える艇と運命を共にぜんと艇に残り嚴然と艇上に佇立、手もちきれんばかりに振つてゐる。よくやつてくれたぞ、有がたう！ありがたう。うち振る手先から無言の聲が傳はつてくる。生死を超越した身とはいへ勇士の胸をぐつと衝く感激の一瞬であつた。蒼顏、鬚面にほろりと露がこぼれてゐた。

このころウエーキ島最右翼に上陸した○○部隊の別動隊はこれまた機銃陣地を突撃で突破、手をあげる敵兵を武裝解除しつゝ東進するうち突如小型自動車が突進して來るのを発見、しばらく様子を見てゐるとグツと急停車、こちらの様子を窺つてからパツクし始めた。よく見ると黒服の士官らしいのが二名乘つてゐる。逃がしてたまるものか。○○喜六隊長の命令一下、ワツと喚聲をあげて突込んで行つた。敵はもはやこれまでと観念したか、そのまゝ下車、白旗をかゝげて車外に飛び出して來た。白旗を用意しつゝもなほわが軍の兵力と狀況如何によつては反撃せんと偵察してゐたのである。○○隊長は直にこの士官を先登に白旗をかゝげさせてストツプ・ファイアー〴〵（停戰せよ）を連呼しつつ北進、そこゝの壕から手をあげて出て來る敵兵を武裝解除し、さらに敵幹部を引きつれて○○部隊長は南岸へとストツプ・ファイアーを命ぜしめたのである。この最初に白旗をかゝげた士官こそ敵ウエーキ島の司令官カニンガム中佐であつたのである。

ウイルクス島の激戰

しかし一方○○部隊別動隊が上陸したウイルクス島のマリンたちは、最後まで抵抗を續け、わが兵力少しと見れば逆襲に逆襲を繰り返し、突撃の白兵戰を展開、彼我差し違へて共に倒れるの激戰となつたのである。午後零時半やうやく停戰命令が傳へられ、こゝに全島の戰ひは終りを告げたのである。この時、ウイルクス島のわが勇士は僅かに九名で奪つた砲台を死守したのである。南の風にはた〴〵と日章旗は躍いた。万歳！万歳！感激のどよめきが全島を壓し、空陸相呼應してうち振る手に手に喜びを分つたのである。頭上に翻るわが空軍、全島をとりまく艦艇に敵心膽を寒からしめ降伏の腮を固めしめたことも見逃せないが、優れた火器、天然の要害を利するウエーキ島占領の殊勲こそは忠勇なる陸戰隊の奮戰の賜であることはいふまでもない。大東亞戰史に燦と輝く金字塔は築かれたのである。敵の敗因は種々あらう。しかし最後まで死守する、最後の一兵まで戰ふといふ氣魄と粘りの精神的訓練の缺如がその第一

にあげられる。戰へるだけ戰つたのだ。戰つた後に手をあげる。それは決して恥ではない。それまでに死んだのは運が惡いのだ。そこに彼ら敗戰の眞の姿がありありと感ぜられる。皇軍勇士の忠勇さよ、偉大さよ、それは彼らには永久に謎であるかも知れない。

米太平洋中央進攻路の切斷

十二日皇軍のグアム島占領によつてアメリカが西南太平洋に延してゐた猛爪はその第一關節を切斷された。いままたウエーキ島の失陷によつてその第二關節が斷たれたのである。かくてハワイの外郭防禦陣地はこゝに潰滅し最後の頼りとするフイリツピンとの聯絡は全く遮斷されて、マニラは全く孤立無援となり、アメリカの太平洋進攻の野望はいよ〳〵完膚なきまでに粉碎されたのみならず、太平洋艦隊の全滅によつて、アメリカの対日作戰は飛行機または潜水艦によるゲリラ作戰以外になくなつた時、グアムに引續きウエーキの基地を失つたことは対日ゲリラ戰の展開をも極めて困難ならしむるに至つたのみならず、逆にわが海軍が戰略據点として活用するに至つて、帝國海軍による太平洋制海權はいよ〳〵確固不動のものとなつたのである。

大鳥島と命名　ウエーキ島は昭和十七年一月二十一日現地〇〇部隊長の命名により大鳥島と假稱され、クリツパー機が淀泊したピール島が羽島、上陸作戰に激戰が展開されたウイルクス島が足場と呼ばるゝことゝなり、わが領土最東端の鉄壁の要塞としてその護りに就いた。

米艦ラングレー撃沈

わが潜水艦は一月八日ジヨンストン島西南方海上において米水上機母艦ラングレーを撃沈したことが同九日大本營から公表された。

同艦は一一、〇五〇トン、速力十五ノツト、五インチ砲四門を備へ、一九一三年建造、一九二〇年航空母艦に改造され、一九三七年再び水上機母艦に改造された。搭載機二十四。開戰と同時に比島キヤビテ軍港から遁走、行方をくらましてゐたが闘志満々たるわが潜水艦の眼を逃るゝこと能はず、遂に太平洋の藻屑と消え去つた。

ハワイ軍管區は二月十日、アメリカ軍輸送船ローヤル・チー・フランク号は一月二十八日ハワイ近海において日本海軍潜水艦の魚雷攻撃を受け沈没したと公表した。

再び眞珠港を空襲

大本營発表（三月九日午前十時五十分）

帝國海軍航空部隊は三月四日夜半ハワイ眞珠湾を奇襲し同港復旧工事に狂奔中の敵海軍工廠に數トンの命中彈を浴せて、その重要個所を爆砕せり、我方敵の照射、砲撃を受けたるも被害なし

わが海軍航空部隊の第二次眞珠港空襲はアメリカ海軍當局が國内的な政治的対策として企圖しつゝあつた海上ゲリラ戰の根據地としての眞珠港の軍事的施設の再建を根底から覆滅したものであり、海軍工廠の重要軍事施設と共にアメリカ海軍將兵の士氣を徹底的に粉砕したであらう。世界の視聽が反樞軸西南太平洋聯合軍の最後の根據地であるジヤバ島の攻略戰に集中されつゝある折柄、わが海軍航空部隊が長駆してハワイを空襲した余裕は太平洋の制海空權が全くわが方の掌握するものであり、航母集團攻撃隊が出撃する都度わが海軍の捕捉するところとなり、惨憺たる敗北を重ねつゝある事実と相俟つて、アメリカ海軍に対する國民の信頼はいよ〳〵稀薄となるべく、この第二次空襲の與ふる政略的效果もまた深甚なるものがあるであらう。

七　香港を攻略す

大本營陸海軍部発表（八日午前十時四十分）我軍は本八日未明戰闘状態に入るや機を失せず香港の攻撃を開始せり

支那事變勃発以來皇軍は大陸に戰つて五年、抗日軍の壊滅に赫々の戰果を納めながら、しかも尚事變の完遂に成功し得なかつたのは、一に我が占領地の背後に残る敵性租界と敵性國領土とのためであつた。就中香港はイギリスが領有して以來一世紀に亙る、経營を基礎とする支那侵略の軸心據点であつた。皇軍の廣東攻略後も、この地は英蔣聯絡の基点とし、援蔣工作の一大策源地であつた。援蔣物資はビルマ・ルートと共にこの地より輸送せられ、香港を把握せざる限り、廣汎なる支那沿岸の封鎖も畫龍点睛を缺くの憾みを感ぜしめ、実に一億國民の憤懣はこの一小島に集中した。大本營の香港に対する攻撃開始の発表は支那事變を戰ひ勝つて來た國民にとつて感激更に新なるものがある。この発表をこそ國民は如何に待望したであらうか。

支那より香港を割譲せしめたイギリスは一八九八年九龍半島を租借してこゝに堅固なる要塞を築造し、支那駐屯軍の司令部をこの地に設置し、シンガポール及びポート・ダーウインを結ぶ戰略三角形の頂点をなし、実に支那及び日本に凝せられたピストルであつた。

全島要塞化す　香港要塞は九龍半島を縦走する山系が海に臨んで聳え屏風の如き威壁で圍繞さるゝ天險の要害であり、同島の西端沙湾から東端海岸まで東西二十キロ、縱深六キロの間大小一百數十のトーチカを築き、巨大なる針鼠の相貌を呈してゐる。海に面した正面防禦は香港島、ストーンカツター島に点在する大中小各種の重砲により防禦されてゐる。その威力は遠近両戰に自由である。また九龍の啓德飛行場は小規模ながら香港島の対空防禦には十分と稱せられ、またトーチカの構造は大部鉄筋コンクリートの頑强なもので、小口径火砲の掩蓋砲座を有し、國境附近の各要衝には監視哨、隠蔽壕が設備されてゐる。

イギリスはワシントン條約で香港の防備强化が禁ぜられたにも拘らず、砲台を築造し殊に九龍正面陣地に対しては昭和七年より十二年までの間に豫算十數億の巨費を投じて金城湯池化した。これを守る兵力は歩兵七千、砲兵四大隊、野戰重砲、山砲、高射砲合計約四千五百、戰車、工兵、通信兵等の部隊若干で總計一万七千、裝備は相當機械化され歩兵各中隊には數十台のトラックと五十台以上の戰車とを有し砲兵は重砲多く野砲これに次ぎ十一月中旬にはローソン代將の指揮するカナダ兵部隊が增强されたが、その兵力は不明である。空軍は陸上機、水上機約二十四機、海軍は駆逐艦三隻を主体に、砲艦、敷設艦、給油船、哨戒艇等約五

十隻を有し、時速八十キロ以上の快速艇でビクトリア港内の警備に當つてゐる。兵員はイギリス人九百、支那人二百五十。この外戰時正規軍に編入させる義勇軍五千、相當優秀なる裝備を有する警察隊約四千を有してゐる。尙編成裝備は總督が總司令官に任じ、各部隊長は英人佐官、インド人將校は大尉を限度とし、下士卒はインド人を主体とし、支那人若干を加へて編成してゐる。

敵空軍を制壓　次いで同日午時五時の大本營発表は「南支方面帝國陸軍飛行隊は八日早朝香港北方の敵飛行場を急襲し、同飛行場にありし十四機中十二機を低空銃撃を加へこれを炎上せしめたり、我方に損害なし」と報じ、開戰と共に我が航空部隊は敵の機先を制して先づ敵の航空勢力を制壓したことを明かにした。古賀支那方面艦隊司令長官は同日正午香港方面の作戰に関し左の如き宣言を発すると共に、在上海總領事館を通じ各外交官憲及び海軍側に通告した。

本官は十二月八日正午、香港植民地（英領香港及び英國租借地）の全沿岸を本官の指揮下に属する海軍力を以て封鎖し、これを維持すること並に右封鎖地域内にある友邦及び中立國の船舶に対し、封鎖地域を退去するため三十六時間の猶豫期間を與ふべきことを宣言す、右封鎖を破らんとする一切の船舶に対しては國際法及び帝國と中立國との條約に據りこれを處理すべし

九龍半島を掃蕩　わが攻略部隊は八日未明殆ど敵の抵抗を受くることなく國境線を突破、九日夜には早くも九龍の背面敵の本防禦線前面に進出して攻撃準備を行つた。十日未明わが西山部隊は敵主陣地の突角地点に対し勇敢なる夜襲を決行してこれに成功した。同日早朝直ちに、敵が近代的裝備を施せる半永久築城陣地たる本防禦線に対する攻撃が開始された。攻撃は極めて順調に進捗し

同日正午この本防禦線の最重要地点たる金山（標高三百メートル）を奪取、ここに香港要塞本防禦線攻略の死命を制した。金山は旅順口の激戰地たる二百三高地に當る鍵鑰点である。わが軍は更に猛攻を続けて十二日九龍市一帶の地區を完全に攻略して敵を九龍半島より駆逐し、引續き香港島に対する攻略を準備した。実に攻撃開始以來僅に八十四時間にすぎない。

香港總攻撃を開始　シンガポール、マニラ、ハワイABCD包圍線の各軍事據点は開戰と同時に皇軍の攻撃を受けて、敵の前進據点たる香港は全く孤立無援の窮地に置かれた。しかもそこには無辜の市民百五十万を擁する香港市街がある。皇軍は武士道を発揮してこれを戰禍から救ふため十三日爆撃を中止し軍使多田中佐をヤング總督の下に派して左の要旨の親書を手交して降伏を勧告した。

今やわが攻城砲兵の戰と勇敢無比なるわが空軍は香港島を指呼の間に望み、これが覆滅の準備完了せり。即ち香港市の命脈は既に決し、勝敗の數は自ら明かなり。こゝに貴軍の運命と在香港無辜の民百万の上に思を致す時、わが攻撃軍は事態を推移するままに委する能はず、開戰以來貴軍よく戰ふと雖も、この上の抵抗は百万の老若男女と無辜の民の生命を絶つに至るべく、これ貴國の騎士道より見るも、將またわが武士道よりいふも、ともに耐えざるところなり。總督深くこゝに思ひを致し直ちに開城會議の開催を承諾せられよ。もしこの勧告にして容れられざらんか、余は涙を呑んで実力の下に貴軍を屈服せしむる方途に出づべし。

これに対しヤング總督はわが大隊の勧告を全面的に拒絶した。よつてわが攻略部隊は十四日拂曉より一斉に砲撃を開始し、彼我の砲聲、爆音は殷々轟々として全香港島を震憾した。翌十五日も前日に引續き早朝より攻撃の手を弛めず、午前十時二十分より敵要塞摩星嶺に対し一斉砲撃を開始しこれを完全に破壊沈黙せしめた。空軍も午前八時より爆撃を開始し午前午後に亙り反覆爆撃を行ひ、香港は終日サイレンの狂音に暮れた。BBC放送はヤング總督が、九龍は日本軍に譲るも、香港は最後の一兵に至るまで死守すると豪語してゐることを宣傳した。

十七日午前二時よりわが重砲は一斉に砲口を開き各砲台に集中砲火を浴せるに至つたので、同日朝來反撥する氣力なく全く沈黙するに至つたので、四日間に亙る猛攻撃も午前十時を期して一先づ停止された。

同日の猛攻撃に対しB・B・C放送局はイギリスが既に香港の死滅を徒らに拱手傍観するの外なき現状にあることを認め次の如く放送した。

十七日行はれた日本陸海空軍による香港猛攻撃は熾烈を極めた。制海權は既に日本軍の手にあり、空もまたイギリス機の飛翔を絶対不可能ならしめてゐるので香港の運命は既に決つた。今はどの程度に原形が残されるかの問題に過ぎない。香港は今や死刑の宣告を受けたと同様だが、われ〳〵はこれに救援を送るべき何物もないし、アメリカの援助もまた期待出來ない現状である。

この日までにわが海軍は陸軍に緊密に協力しつゝ海空より攻撃を續行し、砲艦一隻、魚雷艇六隻を撃沈し、駆逐艦一隻、砲艦二隻及び敵船一隻を大破、摩星嶺その他の軍事施設に甚大なる損害を與へた。

再び降伏を勧告　わが軍はこの日再び軍使を派遣して降伏を勧告したが敵はつひにこれを受け容れなかつた。同夜十一時半より本格的砲撃が開始され、十八日に入つて最高潮に達した。明日新聞の道端、宮本司令部派員は同夜の凄絶な砲撃戰を左の如く報じてゐる。

低く垂れた雨雲と火煙黑煙に蔽れた香港の花は午後七時早くもとつぷりと暮れた。砲撃はます〳〵激化し、香港島ら吹き飛べとばかり撃ち込む。砲聲は天地を震撼し、家屋は地震の如く揺れる。顔を突合して話し合ふ言葉もはつきりと聞きとれぬ位だ。八時、九時、十時、機銃の音も交つて最攻撃はいよ〳〵絶頂に達する。十時半頃砲聲は急に止んで遠鳴りの如く、どーん、どーんと響き、機銃の音のみはつきりと聞ゆる。敵の探照燈は交錯してゐる。この夜九時五十分わが有力部隊はあらゆる敵の抵抗を排除して勇猛果敢なる敵前上陸に成功したのだ。

これより先午後八時水道突破の先遣部隊の各精鋭部隊は九龍半島の最南端獅魚門、啓德飛行場、セメント工場塩頭の三渡渉点に、折柄の闇に乗じて集結を終つた。午後九時二十分、舟船は兵を満載して一響に靜かに棧橋を離れた。エンヂンの音を殺した手漕櫓の音、砲聲もぴたりと止んだ。数十隻の舟艇は敵地に進む。時折り火災の火の手が高く強く上り、海を赤く染める。五分、十分二十分、対岸に人魂のやうな青い信号彈が射ち揚つた。おゝ上陸成功だ。青白い閃光、一閃、續いて反対側からも一閃、同時に腸をえぐるやうな機関銃の一斉射撃、見守るこちら岸に悲痛の氣がさつと漲り、第二番隊も滑り出した。第二陣岸壁到着の友軍の信号彈だ。九時四十五分暗闇を頭から冠るやうに首を突出して見つめる。香港岸壁のプレマー・ヒル、太古清船造船所、リギヨモンバスの各所に取りついた先遣隊の精鋭は海辺を圍繞する鉄條網、百メート

ル毎に崖壁を圍むトーチカ、勇敢に陣地から立ちはたがつて來る敵兵の手榴彈、軽機の掃射、上陸を待ち受けつゝ銃の火蓋を切つた敵の反擊の中を悠々岩壁をよぢ登る勇士、十字砲火の眞只中を肉彈を打込む兵、いまぞ香港の地に一歩を踏込んだ勇士達は、たゞひたぶるに强引に突入してゐる。イギリス軍を追つて追つて追ひまくつて日の丸は怒濤の如く推し進む。

敵前上陸に成功　十八日夜わが第一線部隊は敵の猛射を冒し機雷網を敷設した幅約二千メートルの水道を突破して香港要塞の東部、西部の上陸作戰に成功した。敵は豫想以上に頑强に抵抗したが、わが勇猛果敢なる攻擊に逐次壓迫せられ、二十日には香港島西半部の大半はわが軍の手に帰した。山岳要塞地帶のイギリス軍に猛攻を加へつゝ前進を續けたわが軍は二十二日午後十一時果敢なる夜襲戰を以て敵の永久的要塞にして香港全島を一睨に收め得る金馬倫附近高地を占領し、敵最後の據点太平山、奇力山の咽喉を扼するに至つた。敵はビクトリア・ピーク、奇力山、太平山、摩星嶺の復郭陣地により最頑强な抵抗を試みる。わが熾烈なる爆擊、砲擊とこれに呼應する健脚部隊の肉彈攻擊によつて刻々有利に進展、カナダ派遣軍は殆ど潰滅的損害を受け、司令官ローソン代將、ハンニ大佐及び派遣軍參謀の首腦部が悉く戰死した旨カナダ國防省より発表された。

わが軍門に降る　ヴイクトリア・ピークは島内の最高峰でその傾斜面に死角を利用して洞窟を掘り、掩蔽壕やベトンのトーチカが幾重にも設けられ側防火器も見えざる火網を張り廻らして防備嚴重を極め、敵軍またこれに據つて頑强に抵抗したが、わが軍は虱潰しにこれを制壓するに及び、つひに力盡き二十五日午後五時五十分遂に降伏を申出でわが軍門に降つたので、同七時半停戰命令が下された。

この日の歴史的情景を朝日新聞の太田、宮本、平尾三特派員は次の如く報じてゐる。

同日午後四時半わが第一線部隊が〇〇山の線に一氣に突進した。少し前頃から敵方の銃聲はピタリと熄んだ。そして同五時白旗を竹竿の先に掲げた四人の英將校が、〇〇山の北麓のわが第一線の前方に現はれたのだ。〇〇部隊本部となつてゐる〇〇に案内されて來た一行はR・G・ラム中佐、H・W・F・スチユワアード中佐、H・T・ベネット航空中佐ら香港守備隊の幹部將校で『ヤング總督の代理として降伏するために來た』と告げた。總督の委任狀も持つてゐないので第一線部隊は本部隊に連絡をとり、その結果改めて日本時間の午後五時三十分總督およびモルトビー少將自身の出頭を要求した。五時前後から敵側第一線のあちらこちらに白旗があげられた。かくて約束の時間より十分前午後六時二十分ヤング總督およびモルトビー少將以下四名の幕僚が、總督府より大通りを自動車で現はれた。我が軍は依然銃口を構へた攻擊態勢をとつてゐた。かくて〇〇部隊本部に現はれたのである、一行がペニンシユラ・ホテルに姿を現すや、三階の海に面した一室に一行を持受けてゐた攻城軍最高指揮官と幕僚は緊張の面持で立上る。部屋の各所に点じたいくつかの蠟燭の光に、日英代表者の顔が瞬間引締る。ヤング總督が部屋にはいると記者團が一齊にカメラを向ける。總督は興奮を包みきれず、やにはに手を振つて『よしてくれ、よしてくれ』ととがつた聲をして叫んだ。眼は心なしか血走つて、自分の感情を抑へきれぬ面持である。やがて攻城軍指揮官とヤング總督との間に次の如き一問一答

が行はれる。

問　貴官は全軍に抗戰を中止せしめよ。

答　私はイギリス軍全軍に直ちに一切の抵抗を止めるべく命令し、私は捕虜となるためやつてきた。

問　それなら無條件降伏と認めて可なりや。

答　結局無條件降伏を承認する。

問　貴官は獨り捕虜となつても、全英軍が抵抗中止の命令を守らねば無條件降伏と認め難い。

答　責任をもつて貴意に副ふことにする。

我が指揮官の問に總督は悲壯な眼差しを向ける。十八日間にわたる英軍必死の防戰は終り支那大陸における英國の勢力は完全に掃蕩された。時に七時五分、あちこちの獄はにはかに明るくともされるうちを、總督は設けられた一室に今は落着いた足どりで消えて行つた。二十六日は總督一行ならびに攻城軍代表が香港島に渡り、香港の治安維持ならびに諸物件の破壞を防止すべく全面的に努力することとなつた。

皇軍市内に進駐　二十六日午前一時三十分香港攻城軍陸海軍代表はイギリス陸軍司令官C・M・モルトビー小將以下五名と會見、左記要旨の申渡しを行ひ、英軍側はこれを受諾し、全面的協力を誓つた。

(一) 香港市内の平和と秩序とを保つため日本軍は今より一部兵力を香港市内に進駐す

(二) 貴官は全責任を以て日本軍に対する英軍の抵抗を停止すべし

(三) その他の事項は別に指示せしむ

わが軍は二十六日午前零時を期して市内及び英軍陣地に進駐して英軍の武裝を解除した。午後六時にはビクトリア・ピークに大日章旗がはためき、全島の占領を完了した。

わが海軍も二十五日夜半香港港内に進入し、港内に残存した英艦艇十数隻を捕獲し、ストーンカッターに陸戰隊を上陸これを占領した。わが海軍の戰果は以上の外砲艦三隻、駆逐艦一隻、魚雷艇六隻、哨戒艇一隻を撃沈または大破せしめてゐる。

在留邦人を救出　香港の降伏により、開戰と同時に英軍のために總領事官邸に監禁された矢野總領事以下館員二十一名、スタンレー半島の刑務所に收容されてゐた二十五名の在留民及びケネデー路千鶴館に收容されてゐた十二名の日本婦人、数名の台湾婦人が無事皇軍によつて救出された。

イギリス植民省は香港陷落に関し二十五日次の如きコンミュニケを発表した。

香港防衛の陸海軍司令官はこの上日本軍に抵抗することの不可能なるを悟りこの旨總督に通告したるところ、總督は降伏に必要なる手段をとる旨宣言した。

陸、海軍最高指揮官　同日午後九時四十五分大本營陸海軍部は香港方面陸軍最高指揮官は酒井隆陸軍中將、海軍最高指揮官は新見政一海軍中將であることを発表した。

香港攻城軍の總指揮官酒井隆中將は、二十數年の在支生活を通じて支那で生き支那で自己を完成した將軍である。支那事變では都陸長として北支の緒戰から京

漢線方面の作戰に武勳を樹て冀州、保定の會戰から翌年二月京漢線を黃河北岸にまで追ひつめ、徐州會戰における開封、蘭封の作戰に活躍、部隊長としての手腕を十二分に発揮した。昭和十四年興亞院の成立とともに北支の喜多中將と並んで蒙疆連絡部長官となり蒙疆政府の育成と經濟建設に努力し帰還後部隊長を経て今回の最高指揮官に補せられ、今次の赫々たる戰果は將軍を知るものにとつてけだし當然とうなづかしめるものがあつた。

香港攻略に陸軍と協力、武門の譽れに輝く新見政一中將は南支方面海軍最高指揮官の現職にある。何れも海上冥要職にあり、第一線に花々しい活躍をつゞけてゐる酒井提督を生んだ明治四十一年組である。兵學校長を経て昭和十六年四月南支方面海軍最高指揮官となつた。赴任後、福州攻略戰に功を樹て、また八月の南部佛印進駐には擔派部隊諸送の作戰を見ごと完了して名をあげた。

陸軍の戰果　大本營陸軍部発表（一月七日午後四時）＝帝國陸軍部隊香港要塞攻略の綜合戰果左の如し

（一）鹵獲品　飛行機五機、銃器九八八挺、機関銃一、〇二〇挺、火砲一二二門（内訳＝各種小口徑火砲五八門、高射砲一九門、重砲十糎榴弾砲八門、同加農砲六門、十二糎臼砲三門、十五糎榴弾砲八門、十五糎加農法二門、二十四糎加農砲八門）各種砲弾一八、三〇〇発、戰車（軽装甲車を含む）一〇輌、自動車一、四七〇輌、鉄道車輌三〇九、魚雷艇二隻、燃料＝揮発油、潤滑油、石油その他各種油多量、その他糧食、建築材料、軍用機材多数（二）撃墜（破）飛行機一四機（三）撃沈（破）艦船、砲艇四隻、船舶一三隻、（四）俘虜　一一、二四二、遺棄屍体一、五五五五（註）右戰果は十二月三十一日までに判明せるものにしてその後調査に依り相當増加せる見込なり（五）我軍の損害　戰死六七五、戰傷一、四〇四

海軍の戰果　大本營発表（一月十日午後四時）＝香港方面帝國海軍の一月八日までの綜合戰果左の通り

（一）撃沈艦艇、駆逐艦一、砲艦四、魚雷艇七、給油船一、敷設艇二、哨戒艇八（二）拿捕船舶大小百十隻、（三）拘束處分機雷二二八個、なほ我方は小型輸送船（三百トン級）一隻觸雷沈没せり

（註）拘束處分とは掃海艇、駆逐艦等にて捕獲せる機雷を爆発處分すること

英軍の死傷　一萬二千　カナダ國防相ラルソンは二月三日下院において香港攻略戰におけるイギリス軍の損害は、カナダ兵を含めて死傷一万二千名に上つた旨発表した。

香港攻略を御嘉尚

大本營陸海軍部発表（廿七日午後六時）大元帥陸下には本日陸海軍幕僚長を召させられ支那派遣軍總司令官並に支那方面艦隊司令長官に対し左の勅語を賜はりたり

勅　語

支那派遣軍及支那方面艦隊ハ緊密ナル協同ノ下ニ開戰劈頭適切ナル措置ヲ以テ在支敵國權益ヲ處理スルト共ニ迅速果敢ニ香港ヲ攻略シ英國ノ重要ナル根據ヲ覆滅シタリ

朕深ク之ヲ嘉尚ス

ただに関係陸海軍將士の光榮たるのみならず、ひいて全皇軍と全國民の感奮興起するところである。一億同胞は征戰第三の勅語を拜誦して聖慮の宏大に感激し一億一心大東亞戰爭の完遂に邁進し、瞬時も早く大御心を安んじ奉らんとの決意をいよいよ固くした。

入城式の盛觀

二十八日は朝來空を蔽つてゐた密雲もすつかり晴れ渡り、香港島最高峰にしてもつとも抵抗の强かつたヴイクトリア・ピークの頂上には折柄の微風を受けて日章旗が高らかに翻つてゐる。まさに好個の香港入城日和である。午後二時九龍側の戰闘司令所を出発した酒井攻城軍最高指揮官は武勳將兵を閲兵しつゝ、碼頭より香港島プレーマー角の第一回敵前上陸地点に感激の第一歩を印し、上陸部隊長新見香港方面海軍最高指揮官など〻轡を並べて馬を進め凛列する將兵に温かい眼ひの眼を投げつゝ靡々と行進、午後四時十分入城式を滞りなく完了、一同自動車を連ねて海岸通りを疾駆、山腹總督官邸に至り、香港入城祝賀の盃を高らかにあげたのである。この日、陸海の両荒鷲は大編隊をもつて空よりこの入城式に參加祝賀傳單を撒布するとともに高等飛行の妙技をつくし、香港水道に堂々その威容を誇る大小艦艦のただずまひも厳かに躍進日本の戰捷譜は奏でられたのである。

次いで官邸前廣場において占領祝賀式を行つた。先づ各部隊長は厳肅に勅語傳達式を擧行、陸海支那派遣軍司令官の奉答文を朗讀し天皇陛下の萬歲を奉唱して午後五時半閉式した

香港占領地總督部設置

大本營は一月十九日香港占領地總督部を設置し、占領地總督には磯谷廉介陸軍中將が発補せられた旨発表した。占領地總督は、主としてわが占領に帰した香港島に関する軍政を綜括的に統轄するもので全く特殊の機関であり、これによつて香港の治安行政その他に万全を期し、香港島の行政、発展に遺憾なからしめんとして設置されたものである。從つて台灣總督、朝鮮總督とはその性質、機能において全然趣を異にし純軍令機関として設けられたものでありこの点特に注目すべき新措置である。磯谷占領地總督は二月十九日着任、二十日就任した。

英帝國崩壞の端緒　かくて香港要塞はつひに陥落した。大東亞戰開始以來最初の英國領土の完全喪失である。欧洲第二次戰爭勃発以來イギリスは欧洲戰線においては未だ二つの植民地をも譲らず、英帝國全領域を死守し續けて來たのであるが、大東亞戰爭開始以來僅に十八日にして、その東亞における一角は潰滅し英帝國崩壞の端緒を開いたものである。香港攻略を支那事變完遂の観点と、イギリスの支那侵略の歴史的視角から観るとき、本作戰のもつ意義はいよいよ重大である。香港はイギリスの百年に亘る支那侵略の本據であり、支那事變においては抗日政權援助の策源地として、支那軍閥の完遂を妨碍する最大の據点であつた。いま國民的悲願の凝集する事變の痛が剔抉せられたことは國民の等しく感謝措かざるところである。米英蔣合作據点の覆滅によつて重慶の抗戰力補給と奥地建設とは重大なる困難に逢着した。

皇軍の開鑿第一日における北京公使館區域、天津英租界、上海共同租界の接收と相俟つて、一世紀に亘り支那を蚕食し、東亞の平和を攪乱し來つた米英の軍事的、政治的、經濟的據点が香港を最後として支那大陸から一掃され、支那解放の

黎明が訪るゝに至つた。東亞民族を米英の羈絆から解放せんとする大東亞戰爭の目的が先づ支那において達成されたことである。

對日包圍陣の弱體化　香港はシンガポール及びマニラとを結ぶ米英の東亞侵略の戰略的三角形の頂点に立つてゐた。從つてこの一言の崩壞はシンガポール、マニラをそれぞれ孤立せしめ、その対日包圍陣を著しく劣弱ならしめた。また米英両國の要請にもとづき、重慶が宣傳に躍氣となつてゐた廣東周辺における重慶軍のわが香港攻城軍に対する反擊策動の企圖も、香港の陥落によつて完全に水泡に帰した。ハワイ、マニラ沖海戰における大勝に續いていま香港の攻略なる。無敵皇軍の赴くところ忽ち大東亞新秩序建設の旗幟翻翻をひるがへるを見るのである。

八　フイリツピンを席捲

大東亞戰爭勃発の十二月八日帝國陸海軍航空隊は緊密なる協力の下にフイリツピンの敵航空兵力並に主要飛行場を急襲し、イバにおいて四十機、クラーク・フイルドにおいて五十乃至六十機を擊墜した。その中にはアメリカ空軍が威力を世界に誇示し、敵陣營から太平洋に戰爭勃発の日にはその活躍が期待された空の要塞十七型超重爆擊機四十機、長距離爆擊機の大部分が含まれてゐた。これらの爆擊機は日米破局の際には一擧に日本本土を空襲する企圖を以て比島に集結してゐたものであるから、その全滅はアメリカの戰略を一瞬にして粉碎したものであつた。

敵航空軍兵力を潰滅　開戰劈頭先づ敵の機先を制して敵航空兵力を潰滅したのは更に重大なる意義があつたのである。フイリツピン群島中最大の面積を有し、且〇軍事、政治経済の中心をなしてゐるルソン島は面積四〇〇平方マイル、山脈は南北に縱走し、平地は東、西海岸及び中央に僅に開けてゐるにすぎない。東海岸はあたかも台湾の東海岸と同樣な地形で断崖絶壁をなしてゐる。從つてルソン島の海岸線は非常に長大であるが、上陸に適する地点は極めて乏しい。山地は殆ど原始林に蔽れて作戰行動は不可能に近い。河川の流域には濕地帶が多い、かゝる地形においては作戰場の最初の困難は上陸地点の獲得といふことである。しかもフイリツピン作戰はマレー作戰後に行はれただけに、企圖秘匿もまた困難である。ここにおいてわが航空部隊は皇軍の上陸行動を妨害すると豫想された敵航空勢力を先づ徹底的に擊滅し、友軍の上陸地点獲得を容易ならしむるため、陸海軍航空部隊緊密なる協力の下にアメリカ空軍の根據地イバ、クラーク・フイルド等に対して猛烈果敢なる爆擊を加へ、これを潰滅することに成功したのである。

マニラの戰慄　マニラ電報は日本空軍は八日マニラの北方約百キロのストツセンベンを猛爆した。同地陸軍の発表なきは、ヘラルド・マニラ紙によれば通信機関が全部破壞されたためであらうと報じ、マニラ発第二軍は同日ブオート・ウイリアム・マツキンレー及びニコラス飛行場を空襲し、また日本空軍の一隊はアメリカ陸の短波放送発信所を爆擊し、附近一帶炎々として燃上しつゝあると傳へた。（アメリカ陸軍司令部は九日、日本空軍は約十機の編隊を以てニコラス飛行場に猛爆擊を加へ地上勤務員その他に百十名の死者を出したと公表した）ワシントンのホワイト・ハウス當局は日本飛行機がダヴアオを攻擊しつゝあるとの情報を入手した日本軍はまたルソン島の東南方パラワン島及びマニラに近いバギオを攻擊してゐると発表した。ダヴアオからの情報は日本空軍はダヴアオ碇泊中のアメリカ航空母艦を爆擊したと報じた。サンフランシスコで入手したマニラよりの情報は、ルソン島を空襲した日本空軍の一隊は八日ルソン島の北部一帶に対し『日本軍は速に戰火を收めて比島人をアメリカの支配から解放する』旨の傳單を撒布したと。八日のマニラ大空襲は激烈を極め九日に至るもマニラは前夜の恐怖から救けきらないらしく、九日朝八時のマニラ放送アナウンサーは慄えを聲で支離滅裂の放送を行つたが、その放送を綜合すれば前夜の空襲に怯えきつた市民は續々避難を始め、拂曉までに八万に達したといふ。

比島當局は開戰以來二十四時の間に二万五千の在留邦人を檢束した。一番大量に檢束されたのはダヴアオで一万八千人の邦人檢舉のために警官の大增員が行はれ、邦人経營の麻畑は政府に接收された。

わが海軍航空部隊は十日もマニラ方面を大擧空襲し、アメリカ航空兵力の大半を擊碎した。空中戰鬪において四十五機以上を擊墜、地上銃爆擊により三十六機を爆破炎上、キヤビテ海軍工廠においては、命中彈六個を以て繫留中の敵駆逐艦潜水艦及び特務艦各一隻を大破し、ニコルス飛行場の格納庫、倉舎を爆破大火災を生ぜしめた。

九日も前日に引續き攻擊が續行された。わが海軍航空部隊は九日午前敵の猛烈なる照射反擊を冒しニコルス飛行場に対し夜間爆擊を敢行し、飛行格納庫を爆破し、二ケ所に大火災を生ぜしめた。わが潜水艦も同日午前マニラ湾深く進入してアメリカ軍用船（一五、〇〇〇トン）一隻を擊沈した。

無血上陸に成功　開戰以來陸海の航空部隊相協力し敵航空勢力の撃滅に重点を指向し、概ねその目的を達せるを以て、機を失せず、十日未明緊密なる共同の下にルソン島北岸アパーリ方面及び西北海岸方面に行動したわが先遣部隊は敵前上陸に成功し、東亞におけるアメリカ領土に感激の日章旗を掲げた。かねてアメリカが防備完成を呼号し、またわが上陸は開戰第三日にして敵には豫知されてゐたにも拘らず無血上陸に成功するを得たのは寧ろ意外としなければならぬ。十二日わが一部隊はルソン島東南端レガスピー附近の上陸に成功した。

南部方面の敵はわが軍の上陸に先だち退却を開始した模樣で、敵の戰意は微弱であつた。これら各方面の上陸部隊は各々當面する敵を駆逐し先づ敵航空基地を占領し、逐次上陸兵力の增强と共に、空軍の協力の下に、南北相呼應し前進行動に移つた。

わが航空部隊はルソン島に飛行前進根據地を推進して以來緊密に友軍の進擊に協力し、十三日には海軍航空部隊はニコルスフイルド、デルカルメン、カバナツアンに対して猛烈なる攻擊を加へ一機を擊墜、四十三機（内大型九機）を地上銃爆擊し、潜水艦一隻を攻擊爆沈した。この日敵機の挑戰し來つたもの僅に一機であつたことは開戰以來連日に亘るわが猛攻擊により敵空軍が潰滅に瀕してゐることを物語るものである。陸軍もまた同日ルソン島の各重要空軍基地を攻撃し小型戰闘機一機を擊墜、大型爆擊機二機を炎上、その他爆擊機及び戰闘機四十機を爆砕すると共に格納庫、貯油庫を反覆爆擊して大火災を生ぜしめた。敵の残存空軍

勢力は大小合せて四、五十機に低下し、しかもこれらの敵機はマニラ附近にゐたたまらず、四周の小島に塗を置し、時々わが上陸地点方面を襲撃して船舶に爆撃を加へてゐた。

ダヴアオを占領　二十日未明わが陸海軍部隊は敵の抵抗を排除し新にミンダナオ島に上陸、頑強な敵の反撃を粉砕して同日午後五時首邑ダヴアオを完全に占領し拘禁中の邦人一万二千余名を救出した。二十一日までに敵に與へた損害は俘虜六百、敵の遺棄死体約二百である。ミンダナオ島はフイリツピン群島中ルソン島に次ぐ大島でわが九州の二倍弱の面積を有する。在留邦人は一万八千人に上り、この地の特産である麻は殆ど邦人の獨占するところである。二十日アメリカ軍はダヴアオ退却に際し監禁中のわが同胞に対し機銃の乱射を浴せ、死者三十余名、負傷者四十余名を出すの残虐非道を敢てし、感謝者アメリカの豺狼の如き假面を暴露した。ダヴアオ占領によりルソン、ヴイサヤと並んで比島三防衛の一翼をなすミンダナオ島防衛地區の據点は覆滅せられ、比島攻略に一時期を劃するに至つた。

ワシントン當局は一月二日日本軍がミンダナオ島の西南方スル群島政廳の所在地ホロ島を占領したことを公表した。

マニラ包圍の態勢なる　わが主力部隊は二十二日未明強力なるわが海軍掩護の下に、マニラ北方二百キロのルソン島西岸リンガエン灣に上陸を開始し、當面の敵約三ケ師に大打撃を與へたる後マニラ北方約百キロのカバナツアン附近の陣地による敵を撃破した。また一部隊は二十七日リンガエン灣東方のバギオを占領し邦人六百五名を救出した。一方二十四日マニラ東方ラモン灣に上陸したわが北上部隊は所在の敵を撃破し、南北相呼應してマニラに向つて電撃戰を展開した。

二十四日アメリカ政府はアメリカ東亞軍司令官より左の報告を接受した。

日本軍は二十二日強力なる部隊をルソン島に上陸せしめたが、同時に戰車その他の重兵器の揚陸にも成功した。これらの戰車は既に米比軍との戰闘に參加してゐる。

皇軍の東西南北四方面からするマニラ包圍態勢はここに完成し、四方面地上部隊の分進合撃の巨大なる鉄環は急速に壓縮された。これに協力する陸海軍航空部隊は制空権を確保し、その主力をもつてマニラ周辺の敵軍事施設並に主要據点を潰滅した。

軍政機關首都を撤退　十二月二十五日香港陥落はマニラに一大衝撃を與へた。四方面よりの皇軍の分進合撃によりフイリツピン政府及びアメリカ軍政各機関は遂に二十六日マニラより撤退を開始した。ケソン大統領は『政府はマツクアーサー東亞軍司令官の勧告により政府を他に移轉することに決した。余は軍司令官と協力移轉先より引續き政務を處理する』と聲明し大統領の有する非常時權限により内閣の改組を断行し、九名の閣員を四名に減ずるに至つた。アメリカ軍司令部も撤退に先だち最後のコンミユニケを以て悲痛なる戰況を発表、マニラ防衛の危機を市民に警告した――『東南よりマニラに向つて進撃しつゝある日本軍の壓力は刻々増大しつゝある。同方面では熾烈なる戰車戰が展開してゐるが、わが軍の損害は甚大である。一方北部戰線でも日本軍は砲火を集中して壓迫を加へつゝある。日本空軍の活動も日一日と激化しつゝある』二十八日ワシントン経由のマニラ電は、リンガエン灣防衛に當つてゐたウエインライト大佐麾下の米比軍隊は皇軍の攻撃を支へ切れず續々南方に敗走中で、皇軍はこれを追つて沿岸平野地帶並にパンパンガ平原地方に通ずるマニラ街道に沿つて潮の如く殺倒しつゝある。一方南部戰線ではアテイモナン地方における皇軍の壓力はいよいよ増加しつゝあり、マニラに通ずる二條の街道を進む皇軍の進撃が急なるため米比軍は戰車歩兵の救援部隊を増援して防衛に努めてゐると傳へた。

大規模の旅順口　マニラを中心とする米比軍の防衛は首都マニラを圍んで西方に米國アジア艦隊の據点キヤビテ軍港を抱き、更にマニラ港の入口を扼してコレヒドール全島に近代的要塞を構築し、北方のオロンガポ要港、南方のバタンガス要塞を以て固むるといふまさに鉄壁の要塞で、この全体がマニラ要塞を構成し規模を大きくした旅順口を想起せしむるものがある。

マニラ攻略戰局面は、西方のリンガエン灣からマニラ間にはこゝを流れる河川に沿つていはゆる中央ルソン平野の一大平原が開けてゐる。しかしこの大平原のほぼ中央部のタルラク東方に屹立するアラヤツト山は、標高約千メートルの山でこの平原を見下す戰略要点を形成し、マニラ防衛のため西海岸からの攻撃を必死に喰ひとめんとする米東亞軍の據点として、マツクアーサー司令官は當時この方面の防備に腐心し、同島常駐の米兵、比島人兵合はせて約五、六万の主力はこの方面に集結し防衛の訓練を重ねてゐたものだ。

二十四日皇軍が上陸したラモン灣はこれとは全然事情を異にし、マニラまで約一〇〇キロとはいへ、この間にペイ湖、ボンボン湖等の大湖沼が横たはつてゐるほかに、マニラまでは至るところ重疊たる山嶽をなし自然的要害をなしてゐるが皇軍はこの山を跨みこえて進撃をつゞけ、盧を衝かれた米軍は局章狼狽その極に達した。わが作戰は空軍により島内全基地ツゲエガラオ、クラークフイールド、イバ、ストツクフエンパーク、ニコラスフイールド等々を完全に叩きつけ制空権を確保し、つづいての上陸作戰であつたから米軍の脆弱性は輪がかけられた。

マニラを中心に包む要塞地帶防衛の米比聯合軍は合して約五、六万、米軍から成る主力の正規國防軍と、最近國防軍に編入された比島人軍とから成り、裝備も相當近代的に機械化され一九四一年の大國防計畫以來飛躍的に強化された。

マニラ包圍の鐵環壓縮　皇軍の怒濤の如き進撃に敵軍はいよいよ死地に陥つた。アメリカ東亞軍當局は二十八日マニラの北方、リンガエン東方六十四キロにある戰略上の要衝タユグで大激戰が行れてゐる旨を発表したが、二十七日アメリカ陸軍省も『アメリカ軍は豫定の退却を行ひ、有利なる防禦陣地に後退した。日本軍の進撃部隊は二手に分れ、一は海岸の平地地帶より進み、他はロサリオよりウルダネタ（パンガシナン州）に通ずる、幹線通路に沿つて進撃中で既に幾多の敵の突破に成功した』と公表してゐる。マニラよりの情報は日本軍がマニラ占領を前にしてマニラ市民に対し、直ちにマニラ郊外アンティポロノ、モンタルバン地方へ避難せよとの勧告を発したことを報じた。二十九日マツクアーサー司令官はマニラ北方のパンパンガ州に主力を集結、防禦線を短縮したと発表し、マニラは陥落寸前の形勢となつた。

マニラの危機はアメリカを焦慮せしめた。アメリカはフイリツピンの危殆に対し拱手傍観見殺しにする外なき情勢にあるが、一般國民は『アメリカ艦隊は一体

何をしてゐるのか』との非難の聲が昂るに至つたので、アメリカ海軍省は二十九日に至り次の如き聲明を発表してアメリカ國民及びフイリツピンを慰撫せんとした。

アメリカ艦隊は何も携手傍観してゐるわけではない。迫つてフイリツピン防衛に対する積極的援助を招來すべき善謀の作戦計畫が遂行されるであらうことを、フイリツピンに対し確信する。

リスボン電報はニューヨーク情報として、『マニラ市内外はわが猛攻の結果三十一日から一日にかけて名狀すべからざる混乱に陥つたもののごとく、マニラと無電通信連絡に必死となつてゐるアメリカ西岸の諸無電局もマニラ時間三十一日午前六時半（東京時間三十一日午前七時半）限りマニラからの自動式機械発信を蕪受しなくなり、その後十一時頃（東京時間正午頃）に至り漸くマニラから手動式モールス符号による発信が復活されたが、それも一時間足らずで不通となつた。更に三十一日午後から一日にかけてRCA、マツケイ、グローブ、ブレスワイヤレスの四通信會社が相前後して完全に沈黙し、アメリカ側からの必死の呼出しにも何らの應答をも與へなくなり、アメリカに入るマニラ戦況ニュースは軍用無電で断片的にワシントンへ集るだけとなり、アメリカ側の憂色頗る深いものがある』と報じた。

敵首都陥落す　ワシントン陸軍省當局は一月一日、左の如く言明して重大危機の切迫せることを裏書きした。『有力なる戦車隊及び機械化部隊を有する日本軍は南北両方面よりマニラを指してひたすらに進撃を續けてをり、現在南部防衛線はマニラから自動車で僅か〇〇分の近距離にあるため、マニラは今や重大危機に曝されるに至つた。日本爆撃隊は巷から道路の制覇權を確保してをり米比防衛軍はマニラ南方のサンタ・クルス及びバグサンハンその他ブラゲナ州の大部分を抛棄するの已むなきに至つた』

マニラ防衛を断念せる敵主力部隊は陸路續々バタアン半島（マニラ湾北西部）の南岸に退却を開始し、その一部は海を渡つてコレヒドール島要塞に遁走した。

かくて南北よりするわが軍のマニラ進撃は着々進展し三十一日南下部隊はマニラ北方四十キロのアンガツトに進出、北上部隊も同日リバ及び北方マシキユリン山麓（マニラ南方八十キロ）の敵陣地を突破してマニラに向つて猛進撃を續け遂に昭和十七年一月二日午後敵首都マニラを完全占領して、監禁中の在留邦人三百三十名を救出し、更にコレヒドール島要塞及びバタアン半島の要害に據る敵に対し攻撃を續行した。

敵はわが猛攻撃を支へきれず、苦肉策として一方的にマニラの非武装都市を宣言し、日本軍の爆撃は無防備都市の寺院、教會、文化施設にまで行はれたと誹謗の宣傳をなしてゐたが、マニラ撤退に際し市街に火を放つてこれを焦土と化せんとした。皇軍は常に無辜の市民に危害を及ぼすことを懸念し專らマニラ周辺の軍事施設を攻撃目標とし、同市内にも相當の軍事施設があるにも拘らず、指揮官はこれが攻撃中止を命じてゐたのである。しかるに堕劣なる米比軍は文化施設を破壊炎上してこの罪科を皇軍に轉嫁せんと企圖したものである。

リンガエン湾上陸以來のマニラ攻略の快速進撃は今次大東亞戦爭の新記録を樹立したものである。上陸地点からマニラまで二百キロを満十一日間で進撃し一日の行程約二十キロ、その間、敵の堅陣、湿地を熱帶特有の酷暑と熱氣を克服して

アメリカの東亞據点を蹂躙したのである。

陸軍の戦果　大本營発表（一月十五日午後四時）マニラ攻略に當り得たる戦果中一月十二日迄に判明せるもの左の如し

△火砲四門△機関銃三十挺△銃機一万三千△銃砲弾六十七万四千九百発△自動車五百輌△鉄道車輌七十六輌△船舶多数△揮発油其の他油類多量△糧秣、被服衛生材料多数

海軍の戦果　大本營海軍部発表四日午後五時三十分＝比島方面に於ける帝國海軍の現在までの綜合戦果左の通り

（一）飛行機撃墜一〇三（内大型一五、飛行艇四）撃破二五七（内大中型七三、飛行艇二二）綜合計三六〇

（二）艦艇及び船舶撃沈＝駆逐艦四、潜水艦七、船舶五大破＝特務艦一、船舶三〇中破＝駆逐艦一、小型哨戒艇二、船舶四拿捕＝船舶一

米國作戦の根本的訂正　マニラはフイリツピンの首都であり、軍事、政治、経済及び文化の中心である。マニラの占領はルソン島の制覇を意味し、先に攻略したダヴアオと相俟つて、フイリツピンの要衝は完全にアメリカの羈絆より脱し、フイリツピン人のフイリツピンに解放せらるゝに至つた。フイリツピンの喪失はアメリカの世界制覇の野望を撃摧した。アメリカは東亞における唯一の足場を失ひ、世界國家のアメリカより、米洲大陸國家としてのアメリカに転落した。

マニラ陥落を契機として米英の戦略は重大なる打撃を蒙つた。先づマニラを重要なる一環とする対日包圍陣は切断され、米英は大西洋においてのみ合作し得らるるのみで、その戦略は根本的な訂正を要求するに至つた。先にウエーキ、グアムを失ひ、いままた比島を喪失してアメリカはその太平洋進攻作戦の最大據点を奪はれ、太平洋艦隊の全滅に次いでの打撃を受け、艦隊による反撃は勿論、通商破壊を企圖するゲリラ作戦もまた極めて困難となるに至つた。

バタアン半島掃蕩戦

マニラ攻略と相前後して、皇軍は一部を以てマニラ市とキヤビテ軍港を警備し主力は新に上陸した部隊を併せ、一月三日より五日に亘りパカロフ及びパラツク附近の敵陣地を突破し、七日更に敵の堅固に占領してゐたテイナルヴイアン、ヘルモサ、バランガの敵陣地の一角を奪取した。わが攻略部隊は攻撃を續行し、九日タヘルモサ南方の敵を撃破し、多数の鹵獲品を得た。この鹵獲品中に催涙性ガス手榴弾多数を発見した。翌十日主力部隊は敗敵を追撃して南進、また一部隊はバタアン半島の錯雑した地形を利用し、堅固な陣地に據つて抵抗する敵を撃破して十日スビツク湾東岸の要衝オロンガポを、十二日にはグランデ島を占領し、要塞砲二門を鹵獲した。

次いで主力部隊は十四日半島東岸のマバタン河を渡つて、要衝アブイカを攻略一方オロンガポよりの進撃部隊は二十一日半島西海岸の要害マウベンを激戦の後占領、更に一部を以て峻岳を横断して二十五日東岸のバランガを完全占領し、二十八日オリオン南側に進出しサマツト山麓の敵に猛攻を加へて、鉄桶の内に敵を壓縮し、僅に余喘せしめた。比島派遣軍最高指揮官本間中將はバタアン半島殲滅後における記者團との會見において、『大体バタアン半島の敵を自分はいはば俘

勝收容所に入れてゐるやうなものだと思つてゐた。どうせ敵は反擊する力もないし、といつてこの半島から逃出すことも出來ぬのだ。收容所が建物でなく、山であつたのである』と語つてゐる。

敵將妻子と共に逃亡　ワシントン軍當局は三月十八日比島アメリカ軍司令官マツクアーサー大將が部下將兵を見殺しにし妻子及び參謀長少將サラーランド、參謀代將ジヨージ等の幕僚を伴ひコレヒドールを脫出、空路オーストラリアに到着したことを発表した。後任にはバタアン半島軍司令官ウエインライト少將が任命された。

マツクアーサーの逃亡はその比島戰線における退り口から見て決して意外のことではなかつた。彼の戰略は比島人の犧牲の上に実行されたものであつた。ルソン島防衛戰にも常に第一戰に立たされたのは比島人であつた。バタアン半島においても疲勞困憊した比島人は半島の峻嶮な山中に追込まれて絶望的な抗戰に駆り立てられ、アメリカ將兵はコレヒドール要塞の地下深く砲火を避けてダンスに耽り美食を貪つてゐたのである。マツクアーサー大將が壓倒的に優勢な日本軍の壓迫によりいよ〳〵窮地に陥つた時、突如比島將兵を戰線に拋棄したまゝ逃亡したことは、以上の諸事実の單なる帰結にすぎない。

總攻擊開始さる　皇軍はバタアン半島の密林奥深く逃込んだ米比敗殘軍には眼もくれず、大東亞戰の大局に注目して南方作戰の觀定に全力を傾注してゐたが、マレー、ジヤバ、スマトラと敵包圍陣の潰滅を終つたので、一轉してバタアン敗殘敵軍に最後の鉄槌を下すべく、四月三日神武天皇祭を期して午後三時總攻擊を開始した。

總攻擊はまさに壯絶そのものであつた。敵第一線陣地は東岸リマイより標高五百八十六メートルのサマツト山を経て西岸バガクに至る線、即ちバタアン半島中央部の東西両峰をつなぐ線にわたつて電流線地雷、ダイナマイトを敷設した幅員三百メートルの障碍物を設け、これに配するに密林中の幾何學的要塞陣地を敷設し、眞に不落を誇る要害を形成してゐた。同日午後三時の總攻擊に先立つ午後二時、密林中に布陣したわが巨砲は幽谷深山に吼え一齊射擊の火蓋は切られた。〇〇基地よりする陸鷲の大編隊また陸續サマツト山を中心とする敵砲座に対し、凄愴熾烈亟つぶしの爆擊を加へた。サマツト山は敵殘存抵抗主陣地マリベレス山域の敵銃砲火陣における腦髄を成すところ、間断なき我が砲爆擊にもめげず、敵砲火の熙酬また言語に絶する凄絶さを極めたが一齊進擊は豊なほ暗き密林、峻嶮を攀ぢつゝ夜を徹し黎明に臨いて猛攻また猛攻のゝち五日午後零時五十分中央方面〇〇部隊右翼部隊はつひにサマツト山頂を征服し、同七時半には同山南麓に進出した。こゝに敵第一線は決潰し、同部隊左翼隊また同日午後五時同山東山腹を縫ひつゝ右翼隊に並進、右翼方面を進擊する〇〇部隊は猛襲ぐ密林中、胸を没する清渓の谷を梯子の渡渉によるなど道をマリベレス山の主峰、標高一、四二〇メートルのバタアン峰に進路をとる。東岸沿ひの驀出街道をゆく〇〇部隊は東岸に敵を誘導殲制しつゝ陽動作戰をとり、鋭鋒をマリベレス東斜面のオリオン山に向けつゝ呼應進擊、敵は後方より陸續増援部隊を繰出し頑强に抵抗し、園田曼之助戰車部隊長は敵砲彈のために壯烈な戰死を遂げた。しかし遂にわが猛襲、猛砲擊を浴びつゝ策の施しやうもなく第二陣地まで潰走した。こゝに食入つた右翼方面〇〇部隊左翼部隊は八日午後二時リマイ山頂を極めてさらにその南麓に進出

中央をゆく〇〇部隊先鋒は休止の暇もなく同日午後五時東峰要衝リマイ南方を突破してリマイ河の線に達し、このとき海沿ひ街道をゆく〇〇部隊は同日午後零時四十五分リマイを完全占領して同じく南方に進出した。一舉第二陣地を喪失したバタアンの米殘敵は、マリベレスおよびコレヒドール島要塞を結ぶ尺寸保全の地に絶望しつゝコレヒドールに臨むバタアン南端カブベン、シンマン、マリベレス附近に待機中の船舶、舟艇に殺到したが、徒にわが海空陸よりする猛砲爆擊の好餌となるにすぎなかつた。

總崩れとなつた米比軍を急追してわが軍は九日正午東南海岸の要衝カブカベを占領し、また溝淵部隊は十日正午敵の最後の抵抗陣地標高一、三五五メートルのマリベレス山を奪取して、バタアン半島最南端の敵軍根據地マリベレス市に殺到市外周辺各所において屍山血河の凄滲なる死闘を決行して市街に突入、軍事施設を爆砕してバタアン半島最後の防衛線を寸断、敗敵は、續々白旗を掲げて投降し十一日バタアン半島全域はわが武威の前に慴伏した。

比島方面陸軍最高指揮官　十三日午後四時二十五分大本營から比島方面陸軍指揮官は本間雅晴陸軍中將であることが公表された。

比島の全作戰を指揮し覆面をぬいだ最高指揮官の本間雅晴中將は敵アングロサクソン民族の性情を深く知ること今日陸軍部内の第一人者である。英國には駐官、佐官、將官時代を通じて前後六箇年の長きにわたつて駐在、英國及び英國人を身を以て経驗して來た將軍である。第一次大戰では三年間、戰爭最中の英國に駐在し、しかもイギリス出征軍の第二軍に從軍武官として戰場に臨んでゐる。フイリツピン作戰は、巧緻を極めた上陸作戰から僅か三旬でマニラを攻略して作戰

の一段階が終り、敗殘の米比軍がバタアン半島、コレヒドール島に潜り込んでからはその後三箇月、一見極めて地味な封鎖作戰に終始したが、日本海上の一孤島たる佐渡ケ島に生れた本間將軍は北國人特有の粘りで、この作戰を力强く指揮した。陸大教官、印度駐在武官ののち、遅くも秩父宮殿下の御附武官として滿三年六箇月の長きにわたつて側近に奉仕し、その後昭和十二年の英帝戴冠式に秩父宮殿下が御名代として御渡英遊ばされた際も晴れの陪行を仰せつかつた。駐英大使館附武官として二箇年ロンドンにゐたが、ジユネーブの軍縮會議でも活躍した。しかし將軍が最も活躍したのは滿洲事變直後、荒木陸相の下で陸軍省新聞班長としてよく日本の眞意の宣傳に努めたことである。例のリツトン調査團派遣の當時は優れた語學と経驗によつて終始その衝を啓くことに努めた。支那事變の初期は軍の中央部にあつて活躍し、のち北支の第一線部隊長、漢口會戰ではインテリ部隊をひきゐて江南警備に轉戰、昭和十四年の天津英租界の封鎖には部隊長として活躍、戰前は台灣軍司令官として南方をにらむ地位に在つた。

俘虜四萬を突破　大本營発表（十四日午後四時十分）比島方面帝國陸軍部隊のバタアン半島要塞總攻擊開始以來、四月十二日までに判明せる戰果の主なるもの左の如し

一、俘虜　少くも四万を下らず、内バタアン軍司令官キング少將、第一軍團長ジヨンズ少將、第二軍團長パーカー少將、比島軍司令官フランシスコ少將および師團長旅團長十數名を含む、なほ米國軍は六千七百名あり

二、鹵獲品　重砲およびその他の火砲百九十六門、機関銃約三百二十挺、自動小銃約五百挺、小銃約一万挺、戰車（装甲車を含む）百二十四輌、その他弾薬資

バタアン殲滅戰を語る

大本營〇〇參謀

大本營から派遣せられた〇〇參謀は、三月三十日、東京を出発して第一線に飛び、バタアン攻略戰に終始彈丸雨飛下の第一線で作戰に參畫、三日の總攻擊開始以來の作戰に當り、三、四、五、六日と四日間の我が空陸完全一体化の作戰によつてバタアンの大局既に決せるを見、八日歸京したが、硝煙の臭ひなほ生々しい戰場の狀況について九日次のやうな談話を行つた。こゝではマレー軍作戰主任が語つたマレー血戰記にもおとらぬ凄絶な近代的立体戰がジヤングルの森にこだましつゝ展開されて行つた戰鬪の実相が生々しく語られ、同時にアメリカ軍のいはゆる『英雄的抗戰』の実体が何であつたかゞ明かにされてゐる。

バタアン半島戰の特質　南方全作戰と比較してバタアン半島作戰の特質はどこにあるかといふと、大本營としては、この方面に逃げ込んだ敵を一部の兵力で封鎖してゐる、その代りにマレー、ビルマ、蘭印方面の大局の作戰を早く結末をつけるといふ全局の作戰指導をした訳である。そこで、マレー、蘭印ビルマ方面の作戰が非常に順調に行つて早く結末を結んだので、バタアン方面になし得る限りの兵力を集めた。砲兵、戰車飛行機など、近代兵器を出來るだけ集中して一擧にこの敵を覆滅するといふことで、この方面においては、いはゆる正奇合せ行ふといふ奇の戰法でなく、正の戰法、具体的にいへば近代兵器を集めて一体戰をこゝに実行した。三日には攻擊を開始し、數日にしてこの正面二十キロ幾深三十キロにわたる約四、五万の敵を覆滅したといふことになる。バタアン作戰の特質は大局から見ると以上のやうに他の方面の主要作戰をやつて、兵力が余つて來たのでここへ持つて來て一擧にこれをやつたといふこと、ここに陸軍の出來るだけの近代兵器、兵力を集めて短期間に壓倒したといふ二点である。

砲擊に山容變る　次に現地で見聞したことを申上げると、三日には總攻擊を開始したのであるが、二日に私は細かく第一線をまはつて見た。この日第一線は夕刻には敵陣地前約百米位まで切迫してゐた。總ての準備は終り軍司令官の總攻擊開始の命令を待つてをつたといふやうな狀態であつた。またこの方面は非常な山岳地帶で戰局の進展に伴ひ砲兵、自動車をどんどん追隨させねばならぬ。それらの道も日本軍の工兵がやつたのであるが、台湾の青年がこゝへ行つてゐて非常によく働いた。道路は皆第一線に追隨出來るやうに整備されたのである。二日の日にこちらの砲兵はまだ一発も彈丸を射たなかつたが、反対に敵はオリオン山附近に十五サンチの非常に優秀な大砲を持ちサマツト山西北の砲兵あたりが、日本軍が近くにあることを判断して相當こちらの砲兵陣地なり、第一線部隊を射擊して來たものである。しかし日本軍の砲は三日になつてはじめて猛然起つて射つといふ狀態であつた。總攻擊の三日の夜明けまでに私はこの軍砲兵の戰鬪司令所にあがり、軍砲兵司令官の傍にゐたがこゝに集めた砲は數百門、この方面の作戰に參加した飛行機數も數百機、戰車も數百台使つてゐた。

三日の午前九時數百門の軍の砲兵は砲兵司令官の命令一下火蓋を切つたのである。砲兵といふのは一ぺん試射といふのをやつて彈丸が當るか、當らぬかを点檢して、その内に效力射と言つて最後に效力のある射擊をやる訳であるが、各種の

準備がよく行つてゐたので午前九時に效力射準備の試射をやつたが第一発からすでに效力射になつてゐたのである。あとから第一線の歩兵聯隊の話を聞いても砲兵の第一発といふのは危ない所であるけれども、最初から、敵陣地に命中して敵前五十米位まで切迫しておつた友軍の歩兵は一発も味方の彈丸を蒙つてゐなかつた。こちらは數百門の砲兵を集中してをり砲擊の目さましかつたことはちよつと他の戰場ではみられないやうなものだつた。午前十一時ごろになるとこの一番堅固なサマツト山の敵兵がバラ〳〵と陣地をすて〻退くのが見える。本當にサマツト山といふものゝ様相が變るかと思はれるくらゐである。

壯烈なる夜襲敢行　一方、友軍の爆擊隊は爆彈を積んで來ては落し落しては また積んで來て投下し、しかも大膽極まる低空飛行を敢行して、主として後方の敵砲兵陣地を爆擊した。砲兵司令所で、友軍飛行機の爆擊をみてゐるとサマツト山より低く全くハラ〳〵させられた。かくの如く歩砲空軍をもつてした敵陣地制壓は午後九時から始つて午後三時までこれが續けられた。この間約六時間、その狀態、その光景は壯絶とも何ともちよつと形容出來ないくらゐであつた

敵陣地はこれで全く壓倒沈默させられた。あとから陣地を調べてみても陣地に着いてゐた敵兵は失神狀態になつてゐた。さうした猛烈なる砲爆擊が續いて午後三時既定計畫通り、わが砲兵の砲擊はピタリトやみ、同時に敵陣地五十メートル附近まで近接してゐた歩兵は一斉に起ち上り突入開始……さういふ狀況が手にとるやうに見える。間もなく一、二時間経つと豫定通りこの最前戰の敵陣地を奪つたといふ報告があつた。

さうするとこつちの砲兵は奪つた陣地に向つて射擊して來る敵の機関銃、あるひは今まで現れなかつた敵の砲兵が現れて歩兵を射擊するのをまたこちらの砲兵が潰し、歩兵がまたやるといふ狀況で三日は日没に入つた。その夜になると第一線は各所において夜襲を敢行した。敵の砲兵は晝間はわが砲擊に壓倒されてゐるが、夜になるとどこからか現れて主としてわが砲兵に向つて砲擊して來た。そして私の止まつてゐる百米ほど近くにオリオンの砲兵が射ち出す砲彈が集中して來た。夜中のことではあり、砲彈は近辺に炸烈する、第一線歩兵が夜襲してゐる。非常に悽愴なる景観であつた。

戰車土壘を拔く戰法　四日、五日、六日と砲兵、飛行機、戰車など各種の兵種が機械の組み合せによつて針が動くやうに非常に緊密なうまい組合せによつてドン〳〵豫定の陣地が取れて行つた。そして早くもサマツト山――これは敵の主抵抗陣地帶の一番骨幹の山である――この山が五日正午頃ち、六日には敵第二線陣地――主として米軍が守つてゐる陣地――の全体に進出した。これを要するに以上のやうな経過でドン〳〵敵陣地を拔かれたので敵はゐたゝまれなくなつたものであらう。日本軍が思ひ切つた兵力を集めてこれらの近代兵器をうまく組織して敵陣地の骨幹に対して突破を試みると本營に何といふか、よくニユース映畫でみる戰車が土壘を拔くやうに拔けてしまつた。つまり絶対大丈夫といふ戰法でやつたのである。なほ、敵の主力はサマツト山にだけで八個師團ゐたが死んでゐる兵隊はみな比島人で米兵はほとんどゐない。彈丸もまだ二、三箇月分位はあつた。食糧には大分困つてゐたらしく近頃は比島兵は米の中に粟の入つたおかゆを食べてゐたが、しかし全然食糧がなくなつたといふ狀態ではない。コレヒドール、バタアン半島の堅固度合を申せば戰術的にみて大体香港、シンガポー

ルと似たものである。

かくて總攻擊開始以來僅に八日、米西戰爭以來半世紀に亙つてアメリカ政府が巨費を投じ、最新科學の粹を集めて築城した體貌二十キロ、縱深三十キロの不落を誇つた無比の堅壘も皇軍決死の猛攻に敢えなく潰え去り、アメリカが『英雄的抗戰』として世界に宣傳した米比防衛軍も全くその脆弱振りを暴露した。バタアン半島の戰定によりアメリカの東亞における前進基地は全面的に覆滅し、その東亞侵略の企圖は根底より挫折したのである。

バタアン半島敗北は米比軍の抗戰を唯一の樹めとしてゐたアメリカ人にとつて大きな失望をもたらした。バタアン防衛軍を極力英雄視し、これによつてアメリカ軍の威信を保たしむべく大いに宣傳してゐたアメリカにとつて、日本軍がマレー、ジヤバ作戰を終へ、一度本格的な攻擊を開始するや忽ちにして崩壞し去つたことは、その宣傳が余りに大きかつただけに、その反動的失望は極めて大きなものがあるやうである。民衆の余憤はスチムソン陸軍長官に対する不滿となつて現れ、その更迭論まで叫ばれるに至つた。ニューヨーク株式市場が十四日一九三七年以來五年振りの新安値に落ちたのは、主としてバタアン半島の敗報に対する悲觀氣分の現はれと見られた。

ミンダナオ戰定戰

先にダヴアオを占領し、附近一帶を戰定した部隊は十二月二十五日ミンダナオ西南方のホロ島を占領し、飛行場その他の要域を收め、五月六日全島の掃蕩を終へた。フイリツピン群島第二の大島である同島の制壓はルソン島戰定と相俟つて全比島を戰定する南北の二大戰略的要衝を形成するものである。

セブ島を攻略

わが陸軍の精鋭部隊は四月十日、フイリツピン南部要塞戰定作戰の火蓋を切り午前六時半ヴイサヤ諸島の中心セブ島の東西海岸三ケ所の地点から敵前上陸を敢行、敵の抵抗を排除して猛進擊を續け、同日午後六時フイリツピン第二の都市セブ市に突入し、比島人小學校内に監禁されてゐた邦人二百八十六名を救出した。わが軍の進攻に狼狽した米比軍五千はダイナマイトを以て全市街を爆破炎上せしめ、山岳地帶に敗走した。このアメリカ軍の焦土戰術により人口十四万、マゼランが四百年前に第一歩を印したフイリツピン最初の首府セブ市も一朝にして灰燼に帰した。

十六日わが軍はセブ市北方二十キロの山岳地帶に立籠る米比軍殲滅の火蓋を切り、航空部隊の協力の下に三方面から猛攻擊を加へた。敵は死体三百五十を遺棄して四散した。

パナイ島占領

わが陸海軍部隊は緊密なる協同の下に四月十六日パナイ島の南岸イロイロ市及び北岸キヤピス市を奇襲し、無血上陸に成功、午前八時イロイロ市に突入してこれを占領した。敵は虚を衝かれて反擊の氣勢全くなく、敗走に際しセブ市に倣つて焦土戰術に出で市街の三分の二は灰燼に帰した。

十七日午前四時わが軍はパナイ島の西岸サンホセ市の南方三キロのマランドーグ海岸に舞ひ上陸し直ちにサンホセ市を占領、イロイロ、キヤピス両市と共にパナイ島三州の首都はすべて皇軍の手に帰した。

サンホセ占領部隊は、十八日夕刻同市西北方二十五キロにあるアンチケ銅山を占領した。同銅山は殆ど未開発であるが含銅率五%鑛床は瘤狀をなし、一部は露出してをり、露天堀りが可能なので早くも年内に搬出が期待されてゐる。

敵は中央部山岳地帶に敗走したのでわが軍は南北より挾擊態勢を緊縮し十九日ウマラオ南方で驍勇なりこゝにパナイ島南北を貫く幹線道路は完全にわが掌中に帰した。敗敵は武器を棄て山林中に四散した。

上陸作戰に協力した海軍部隊は二日間に亙り附近海面の啓開、脱出敵艦船の監視に當つてゐたが、水路を啓開して十七日イロイロに入港した。パナイ島附近の海面は無數の島や入江が散在して、敵潜水艦の巣と見られてゐたところであるがこれが完全に掃蕩せらるるに至つたため、比島沿岸、諸島間の交通は急速に復活し、治安は殆ど回復するに至つた。

パナイ島はルソン島の南方に位し、面積は一万千五百万キロ、人口百三十余万比島群島の交通の要衝に當り、サンフエルナンド、イロイロ、カチクラン、カチス、ラムブナオの五飛行場を有してゐる。

イロイロ市は同島の東南端に位し、米、砂糖、麻等の集散地である。ケソン大統領はここに逃れ血を吐いて死んだのだ。

ギアラス島占領

わが海軍部隊は四月十五日午後ギマラス島西岸のサンタ・アンナ湾に上陸、同港湾施設を確保したが、更に十八日午前九時同北部落のサンタ・ロザリオ港に砲戰隊を揚陸、敵の抵抗を受くることなく埠頭施設、重油タンク等を占領した。ギマラス島は約一キロのイロイロ水道を隔ててパナイ島に接し、東西二十キロ、南北約四十キロの小島である。

ルソン、ミンダナオ、セブ、パナイ、ギアラス等諸島の占領により、東南太平洋上に、東經一一六度から一二六度、北緯四度から二二度に亘り南北千百マイル東西七百マイルの間に群在する大小七千八十三の島嶼の死命を制したので、若干の島嶼に敗敵の蠢動するものがあるとしても、全島戰定作戰上何らの威力、痛痒を感ぜしめないであらう。

コレヒドール要塞攻略戰

バタアン半島の完全攻略に伴ひ米比軍は僅かマニラ湾口のコレヒドールの一孤島に氣息奄々として余喘を保つにすぎない狀態となつた。コレヒドール要塞はすでに我が占領に帰したマリベレス軍港からは約十キロ、カビテ軍港からは約四十キロの地点にあり、長さ七キロ、幅僅かに二キロの孤島である。アメリカ軍はここに霞々として近代的要塞化を試み、數十年間苦心構築した堅壘で十二吋加農砲七門、十二吋臼砲十二門、十吋加農砲二門、七吋加農砲一門、七吋榴彈砲十八門、六吋加農砲七門、六吋以下の大砲數十門、附近三島嶼にはこの外に十四吋加農砲八門、十二吋加農砲八門、六吋加農砲門を裝備してゐる。これによる兵力は、四月十七日のワシントン放送によれば、歩兵第三十一聯隊戰闘部隊、國民軍を含む一ケ旅團、騎兵第二十六聯隊、比軍歩兵第五十七聯隊、比軍工兵第十四師

隊、工兵第三師團、看護兵敎ケ部隊で、將官十六名に達してゐると。しかし四月十日以來わが荒鷲の猛爆と痛烈なる砲擊にさらされ、比島米軍司令官ウエーンライトはここになほとぢこめられてゐるものの、この要塞の前進基地たるバタアン半島を失つたコレヒドールは完全に海上の一孤島と化し、十一日以來その砲火も次第に沈默するに至つた。

十三日はアメリカ陸軍省はコレヒドール島の防衛は最早望み薄であるとして左の如く発表した。

最近の二十四時間を通じ日本空軍は次ぎ次ぎへと空襲を繰返へしてゐる。一方対岸の高地から日本軍重砲は間斷なき砲擊を加へてゐる。同島の食糧狀況は現在のところ缺乏してゐないが、同島への如何なる物資の補給も出來る見込みがない。

アメリカ陸軍省は十六日また日本空軍の連續的爆擊に悲鳴をあげ左の如く発表した。

大東亞戰以來コレヒドール島は二百六回に亘り爆擊されたが、四月九日以來の空襲は加速度的に增加し、今日まで既に六十五回に及んでゐる。

强行上陸して完全攻略

大本營発表（五月五日午後五時五十五分）比島方面帝國陸海軍部隊は五月五日午後十一時十五分コレヒドール島要塞に対する强行上陸に成功、五月七日午前八時同島及びその他マニラ湾口諸島の全要塞を完全に攻略せり

バタアン半島攻略後帝國海軍は陸軍と協力してコレヒドール要塞にその鋭鋒を向け、海鷲は殆ど連日巨彈の雨をその諸砲台、飛行場の諸施設等あらゆる軍事施設に注ぎ、全くこれを破碎し去り敵高速艦等を爆擊沈沒せしめた。また水上艦艇は同要塞周辺海上を厳に封鎖し米國政府をして『コレヒドールの救援は絶望である』との悲鳴をあげしめた。

コレヒドール島要塞に対する敵前上陸は、五日端午の節句の夜を期していよ〳〵決行された。連日に亙る我が猛烈な砲爆に要塞砲はほとんど破壞しつくされ、移動砲一門となりながらもなほ射ちまくるこの要塞に対し同夜十時四十五分から十五分間わが巨砲陣の一斉集中砲擊が加へられ、その彈幕のなかを我が第一回敵前上陸部隊は同島北側東寄りのインファントリー岬（歩兵岬）とキャバルリー岬（騎兵岬）の間に舟もろとも玉砕するばかりの勢ひで正十一時果敢きはまりなき敵前上陸を敢行、敵は重火器と探照燈を猛烈に浴びせかけて南麟のカバーリオ島と軍艦島からは銃砲彈を射つて來たが、上陸部隊は機雷原を飛り越え、鉄條網を踏み破つて同十一時十五分大東亞戰史に輝く敵前上陸に成功、空高く信号彈を射ちあげた。○○岬に取りついた丸山部隊は直ちに東部海岸を一氣に攻めて六日午前一時コレヒドール飛行場を完全に占領、コレヒドール島に最初の輝く日章旗を掲げた。六日午前四時さらに第二回下陸部隊が敵の猛烈な抵抗を排除して强行上陸に成功、第一回下陸部隊とともに月明下の突擊を續行、幅約五百メートルの同島中央部を南北に縱断、島中央部の最高地点マリンタ・ヒル要塞を同十一時占領し敵の死命を完全に制したものである。

わが神速果敢な総攻擊により米比軍は六日夜半遂に総崩れとなつた。わが軍は混乱する敵軍に立直る暇を與へず急追してラムサイ、グオスウエイ、ヘーン、ホイレル、ゲアリー各砲台を占領すると共に、サンホセ軍港に進出し、六日午後十一時米比軍司令官ウエーンライト中將、コレヒドール要塞司令官モーア少將、参謀長ビープ代將以下を捕虜とし、七日午前八時全島を完全に占領した。

五日深更コレヒドール島の敵前强行上陸作戰開始されるや、わが艦艇部隊は直ちにコレヒドール島はじめマニラ湾口の諸島に対しても猛烈な艦砲射擊の火蓋を切り敵火砲を沈默せしめて、わが陸上部隊の强行上陸を援護、また海鷲部隊の精鋭も眼前にわが部隊の强行上陸を見てをこがましき蠢動の擧に出でんとする敵陣に命中彈を浴びせて上陸作戰に協力、海陸空一体の皇軍の真髓を遺憾なく昂揚したのである。

戰史無比の戰果

谷萩陸軍報道部長談

比島方面わが陸海軍部隊は、五月七日午前八時コレヒドール島要塞その他のマニラ湾口諸島の全要塞を完全に攻略した。さきにわがバタアン半島掃定作戰により米國比島守備軍の主力は撃滅せられたのであるが、残存部隊はコレヒドール島要塞等に據つて依然はかない最後の抵抗を試みてゐた。特にマニラ湾口のコレヒドール島は全島針鼠の如く悉々くこれ要塞であり、かかる所に対し上陸作戰を決行し、さらにこれを攻略することは極めて至難なる作戰である。比島方面帝國陸海軍部隊の精鋭はバタアン半島の快勝後、周倒なる準備を整へ戰機を窺ふこと二旬余、五月五日午後十一時十五分敵要塞の直前に敢然上陸を强行し、僅々三十二時間にて敵全軍を撃滅し世界戰史に比類なき燦たる記録を残した。

思ふに本作戰地方面は米西紛爭直後アギナルドを主將とする比島軍が三年有余にわたり執拗なる抵抗を繼續し米軍を惱ましたところである。本年一月マニラを失つた米軍もこの故事にならはんとしたのであらうが、八日間でバタアン半島を失し、僅か一日余りでコレヒドール島その他を失し、米國民の一縷の希望もこゝに全く消滅したのである。かくて米國は東亞に殘存せしすべての據点を喪失した。こゝに帝國は必勝の戰略態勢を强化し得た次第である。

米國の根據覆滅を御嘉尚

大本營発表（七日午後七時十分）大元帥陛下には本日陸海軍幕僚長を召させられ南方方面陸軍最高指揮官並聯合艦隊司令長官に対し左の勅語を賜りたり

勅語

比律賓方面ニ作戰セル陸海軍部隊ハ緊密適切ナル協同ノ下ニ開戰初頭敵航空戰力ヲ撃破スルト共ニ諸方面ニ困難ナル上陸作戰ヲ敢行シ勇戰奮鬪迅速ニ首都馬尼剌ヲ占領シ又險要ヲ恃ミテ抵抗セル頑敵ヲ壊滅シ以テ東亞ニ於ケル米國ノ根據ヲ覆滅セリ

朕深ク之ヲ嘉尚ス

インド洋作戰を推進

コレヒドール要塞は、七日朝、わが比島方面作戰部隊によつて完全に攻略さ

れ、天皇陛下には陸海軍部隊が比島方面において五箇月にわたる勇戰奮鬪克くその目的を達したるを嘉尚あらせられ、寺内最高指揮官、山本司令長官に対し優渥なる勅語を賜はつた。聖慮のほど誠に感激に堪へないところである。

大局的に観ればフイリッピン作戰は皇軍が首都マニラを占領した一月二日において既に決したのである。それにも拘らず、米軍はフイリッピン人軍隊を補として、バタアン半島よりコレヒドール島まで絶望的な抗戰を續けたのは、大東亞戰爭勃発來以來の打續く慘澹なる敗北の政治的軍事的失態を多少とも瞞着せんとする対内政策に利用せんとしたがためである。

コレヒドール要塞の陷落はルーズヴエルト大統領の偽瞞政策を暴露し、止め度なきアメリカの敗退にアメリカ國民の政府當局に対する非難はいよいよ激化するであらう。

コレヒドール要塞の陷落は直接にはマニラ灣の利用價値を倍加し、比島の再建工作を促進すると共に、マニラ灣の確保によりインド洋作戰は背後に何らの不安を感ずることなく推進せしめ得らるることとなり、その戰略的意義は極めて重大である。

九　北ボルネオ島戡定戰

大東亞戰爭は第二週に入つた。皇軍は開戰第一週においてハワイ、シンガポール、マニラの米英三大軍事據点を強襲し、これに據るその海、空軍勢力を覆滅した。

第二週に入つて戰局の中心は南支那海に移つた。南支那海はわが対米英作戰において主要なる戰場をなすものである。北は香港を據点として、東はフイリッピン群島、西はマレー半島、南は英領ボルネオを以て圍繞せられ、米英は香港、マニラ、シンガポールを據点とする戰略三角形を形成してゐるのである。

これに対し皇軍は、開戰第一日香港攻略戰を開始すると共に上陸作戰を敢行し第三日より第五日に亘りフイリッピンのルソン島に対しその南北両端に上陸して挟撃態勢を完成した。佛印及びタイ國とは十一日それぞれ軍事協定及び攻守同盟が締結せられ、南支那海を圍る米英の対日包圍陣は皇軍の同次各個撃破作戰によつて、その位置に拘束せられ、統一ある共同作戰を不可能ならしむるに至り、南支那海の制壓は僅にその南辺に英領ボルネオを剰すのみとなつたのである。

英領ボルネオは世界第二の大島であるボルネオの七分の二を占めてゐる。河川に沿ふ平野以外の山岳地帶は鬱蒸たる原始林に覆れてゐる。北部海岸の少数地点に石油產地がある。イギリスは東亞における情勢が逼迫するにつれ、この油田地帶に対する日本軍の進撃を慮つて、大東亞戰爭勃発の三ケ月程前から石油施設中の重要部分の破壞、機械の搬去を行つてゐたが、皇軍がマレー上陸作戰を決行した翌十二月九日油田施設に放火して退去した。

英領ボルネオに敵前上陸

帝國陸海軍新精鋭部隊は緊密なる協同の下に十二月十六日未明風速二十メートルの烈風を衝いて英領ボルネオの敵前上陸に成功し、香港、マレー、フイリッピンにおける作戰の進展と相俟つて南支那海を全く制壓するに至つた。

ミリ、ルトン、セリヤの三地点に上陸せるわが軍は堅固なる陣地を突破し、附近一帶の英軍を掃蕩した。ミリ附近は海が浅く、船は沖がかりをしなければならない上に、浪が高かいために敵前上陸は困難を極めた。敵の抵抗は相當烈しかつたが、勇猛果敢な皇軍の攻撃に一たまりもなく潰滅した。サラワク國王チヤールス・ブルツクは國土防衛の責任者であつた、シンガポール當局を彈劾して『總督よ、英大臣の筋の入つたネクタイを御持參の諸君よ、卿らは今こそ迫放さるべきである。余がシンガポール訪問の際、サラワクが襲撃さるれば、空軍が援助に赴くとの確約はどうなつたか』と痛憤した。

ミリ（サラワク王國）セリヤ（ブルネイ土侯國）とは、共にバラム河には位し國境を狹んで相接してゐる。ミリは油田の発見により十数年間に一漁村から首都クチンに次ぐ都市に発展した。油田はイギリス資本のサラワク油田會社が経營してをり、昭和十年の年產額は六十六万トンと稱されてゐるが、油田の狹い割合に產額の多いところから油脈は頗る豐富なものと推測されてゐる。セリヤにはマレー石油會社があり、この両油田の原油は送油管で五マイル隔てたルトンの精油所に送られ、ここで精油される石油は全英帝國中の第三位を占め、イギリス東洋艦隊の主要なる給油槽であつた。

サラワク首都を占領

二十四日拂曉敵潜水艦及び航空機の攻撃を排し英領ボルネオ西南地區の上陸に成功した陸海軍新鋭部隊は所在の敵を壓倒し、二十五日クチン南方において一千名の敵を撃破して同日午後四時四十分サラワク王國の首都クチンを完全に占領し、附近の敵を掃蕩して主要航空基地を占領した。この戰鬪においてわが軍の損害は戰死一名のみであつたが、敵の戰車四輌、自動車五十輌、火砲十一門等を鹵獲し、敵二百名を俘虜とする大戰果を收めた。同方面の作戰において帝國海軍は敵潜水艦二隻を撃沈、大型機十機を撃破したが、わが方もまた駆逐艦及び掃海艇各一隻を失つた。シンガポールのイギリス軍當局は、サラワクより敗退したイギリス陸軍は昭和十七年旦關領ボルネオの元關印軍と合体した旨を発表した。

クチンはサラワク王國の首都、人口二万五千、北ボルネオの政治的、経済的中心地である。この方面の確保により石油その他の重要資源の獲得を一段と有利にしたのみならず、南支那海を全くわが制壓下に置きマレー、關領ボルネオ、ジヤバ、スマトラに対する軍事的脅威を強化した。

ブルネイに入城

北ボルネオの中央に位するブルネイ王國はかねてより皇軍の進駐を希望してゐたが、十二月三十一日わが軍は國王以下住民の盛んなる歓迎を受けつゝブルネイ市に入城し、翌一月一日にはその北方のラブアン島を平和裡に占領した。

更に一月三日わが軍はブルネイの東北方約七十キロのウエストンに上陸し、ゼツセルトン、ポーフオードの敵六百を武裝解除し監禁中の邦人二百九名を救出した。

以上各方面の作戰において十二月十七日以後一月十七日までに撃破破せる敵機

は二百七十九機の多數に上つた。その他一月十四日までに判明せる綜合戰果は鹵獲品、戰車砲甲車七八台、火砲一〇五門、重機關銃一〇九挺、自動車二、二五三輛、鉄道車輛三九六輛、俘虜二、五六九名、そのほか銃器、彈藥、液体燃料、鋼ゴム、糧秣、被服等莫大なる數量に達した。

北ボルネオの戡定なる　一月二十四日北部英領ボルネオの要衝にして『日本人植民地』として知らるゝタワオを占領し、邦人五八七名を救出した。

かくてわが軍は北ボルネオに作戰開始以來一ケ月にして英領ボルネオの要衝を悉く掌中に收め、油田地帶を全く確保した。

皇軍は二月四日その一部隊を以て、タワオ北方百キロのラハツドダツを占領し英領ボルネオの戡定戰は概ね完了した。

英領ボルネオ方面に作戰中のわが軍は一月二十四日新鋭部隊を以て北方海岸の要衝にして英領ボルネオの首府、サンダカンを占領して山本領事以下在留邦人二十名を救出、敵の重機關銃二挺、銃器三八九挺を鹵獲した。わが軍は更に海上二浬のバハラ島に監禁されてゐる邦人五百六十四名を救出した。

北ボルネオ方面陸軍最指揮官　北部ボルネオ方面の陸軍部隊統率と占領地の統治を行はしめるために陸軍最高司令部が設置され、その指揮官に侯爵前田利爲陸軍中將が親補された旨四月十一日大本營より発表された。

かくて北ボルネオの軍政建設の本格的発展を示唆する軍政布陣が構成され、油田の復興建設をめぐる北ボルネオの建設は戡定作戰完了後二ケ月にしてこゝに强力なる段階を迎へるに至り、一世紀に亘る英國の統治は完全に清算され、大東亞圏の一翼として政治、經濟、文化の全般に亘り更生の逞しき建設が展開さるることとなつた。

前田侯爵は旧加賀藩主の出、第一次欧洲大戰の際には英軍に從軍したのを始め欧洲に留學すること前後三回、大正九年平和條約の実施委員、英國大使館附武官として主として欧洲において活躍した。次いで陸軍大學校長、滿洲第一線部隊長等の要職を歷任し、昭和十四年豫備兵に編入、貴族院議員として政界にも活躍してゐた。北ボルネオ方面陸軍最高指揮官として最適任者の一人といふべく、北ボルネオの開発に多大の期待がかけられてゐる所以である。

十　シンガポールを屠る

昭和十七年三月十日、朝日新聞社主催の第三十七回陸軍記念日大講演會において陸軍省軍務課長佐藤少將は大東亞戰爭の開戰時機の選定について如何に苦心が拂はれたかを明かにして次の如く述べた。

凡そ戰爭で最も大切なことは通常二つあり、その一つは開戰の時機選定宜しきを得て緒戰に大なる戰果を獲ることであり、その二は眞に雌雄を決すべき最大會戰に勝利を獲ることである。……大東亞戰爭における開戰時機の選定上考慮を要したるは戰時物資の貯藏量とマレー方面上陸作戰のための戰術的諸要件であつた。

日米交渉が何うしても打開出來ぬとあれば、開戰時機の如何は眞に國家の死活を分つものであつた。即ち、開戰と同時に貯藏戰略物資は急速に消耗するその消耗曲線と、作戰によつて新に逐次獲得し得る新生產曲線とが完全に調和せられなければ、單身の繼續は不可能である。一方マレーの上陸作戰は潮と月と季節風の關係が重大なる影響を持つものであり、これらの關係上十二月八日は最後的の好機であつた。上陸作戰のための戰術的諸要件と、戰略物資の消耗曲線と新生產曲線との關係その他敵の対日包圍陣戰備の增强等を考慮するならば、もし我が國が遲疑逡巡して十二月八日を外せば戰機を逸し、帝國は著しき苦境に立たねばならなかつた。

コタバル血の上陸

かくて皇軍は最終の機會を摑んだ。わが精鋭は山下軍司令官統率の下に十二月八日マレー半島に対する戰史未曾有の大膽下敵の上陸作戰を敢行したのである。

十二月十六日、第七十八臨時議會において、木村陸軍次官は戰況報告において、マレー上陸作戰部隊の偉功を讃へ次の如く述べてゐる。

この時英領マレー東北部に突進せる部隊は堅固なる海陸の備へを頼む頑强なる敵と激戰を交へ、しば〳〵危險に瀕したが、勇戰奮鬪遂にその上陸に成功し、損害をものともせず、引續き敵の主要飛行根據地に殺倒し、これを占領し以て全般の上陸作戰を容易ならしめ軍旗の下、英領マレー一番乘りの偉功を立てた。

十二月八日未明敢行されたこの佗美部隊のコタバル敵前上陸は、大東亞戰の緒戰を飾る壯烈無比の決死的奇襲作戰であり、世界戰史に曾つて見ざる上陸作戰である。

コタバルは英領マレー北部の要衝で優秀なる飛行場を有し、三千の地上兵力を配して第一線陣地の海岸線にトーチカを構築、海中だけでも水際障碍物が三條に亙つて敷設せられ、第二線陣地の市街、飛行場の線には更に堅固な陣地帶を配備して防衛に努めてゐた。こゝに佗美部隊は壯烈なる決意の下に、シンゴラ、パタニ、パンドンの三地点に対する我が主力部隊の敵前上陸を容易ならしむる重大任務を帶びて、決死的敵前上陸を强行した。コタバル附近の海上が敵航空勢力圏内にあるばかりではなく、泊地上空を援護する荒鷲部隊は遠く佛印基地から飛翔して來なければならなかつたので、當時友軍機が上空から援助することは困難であつた。

十二月八日拂曉佗美部隊長の率ゐる精鋭はコタバル沖の泊地に進入せんとするや敵はこの飛行場より數次に亙つて、我に対し反覆執拗なる反擊を加へ、上陸妨害の擧に出でた。兵學の常識からいへば、かゝる敵の航空勢力圏内で、しかも敵航空根據地の眼前に上陸することは殆ど不可能と思はれたが、この壯擧は當時の上陸作戰全般の上から是非必要であり、また皇軍は任務の前に不能の文字はないのである。即ちもし佗美部隊の上陸にして不成功に終つたならば、マレー方面の主力部隊の上陸は不能となるのである。重大なる任務、この重責の前には佗美部隊長以下一兵に至るまで敵飛行機も敵艦もなく、白兵、肉彈を以て水際障碍物を强行突破し、堅固なる陣地に據る敵四千を强襲してこれを奪取その日夕刻には早くも長驅海岸より二キロにあるコタバル飛行場を占領、九日コタバル市街を占領し、他の方面の上陸を援護した。コタバル決死隊の『血の上陸』を朝日新聞の入江特派員は次の如く報じてゐる。（昭和十七年一月一日）

輸送船〇〇などが、うねりの大きいマレー東岸の間を靜かに蹴つて、コタバ

ル飛行場に近い〇〇キロの海辺サバツクの沖合に入つて來たのは八日の午前〇時、濃霧は所々に高さ二千六百メートル、十八夜の月が白く海を照らしてゐた。コタバル飛行場海辺は一帶の椰子林で、上陸地にはたゞこのサバツクの三キロの海辺があるばかり、靜かにわが上陸用舟艇が降ろされた。

各舟艇から一齊に白波を蹴つて陸地を目指して驀進する數十の舟、その上に決死の上陸勇士、今こそ待ちに待つた上陸が始つたのだ。海上〇キロの波を蹴つて波打際にどつと乘りつけたわが勇士、岸近く狂ふ一丈五尺位の卷波も物ともせず、とび込んで行く。その刹那海岸から信号彈が眞青に上つた。氣附いた敵兵は一齊に射擊を開始したのである。

敵前上陸を恐れた敵軍が必死で築いてゐた海岸のトーチカから速射砲の撫靈が猛烈な集中銃火をわが舟艇に向けて射擊して來る。パリンパリンと敵側に中るなかを水に飛込んだわが勇士は波間を、全身に波をかぶりながら突進して行く、二、三分せぬうちに頭上に敵飛行機が現れた。續いて次ぎ次ぎに椰子林を越えて眼と鼻との飛行場から飛出して來る敵空軍のブレーンハイム、ロツキード・ハドソン爆擊機、両翼に青と赤との環をつけて、月に浮ぶわが輸送船目がけて必死に襲ひかゝるのだ。

射ち出すわが高射砲、機関銃、見る見る數を增していとむ敵に夜空を眞赤にさせて壮絶な戰である。一方第一回のわが上陸勇士は水際に突進した。わづか十メートルのところに張りめぐらされた三條の鉄條網、それに地雷をつけて正面には大きなトーチカ、右手にもトーチカ、十字砲火が雨、霰と降つて面も上げられぬ風である。しかもこの中をわが勇士はよく一人が鉄條網にとびついて、地雷諸共に散れば、その屍を越えて後が次の鉄條網に飛びついて第二の地雷と共に壮烈に吹き飛ぶ。つづけ、突擊路開かば續け、とわれ勝ちに地雷の山をこえて行く勇士、上海事變に肉彈三勇士を生んだわが精鋭がたゞ驀らに進む壮烈な姿である。月が白く照る海面ではここでもまた激戰が續けられた。夜空をひつきりなしに襲ふ敵機の爆彈の雨だ。

水中に落ちて數十尺の巨大な水柱をあげる爆彈、入りまじり、立ちまじりマレー半島東南の英機のありつたけを集めて防衛してゐる夜である。

銃眼に肉彈で蓋

わが荒鷲は遠くボルネオ海の乱雲に阻まれて來ることが出來ない。これ等と蘇のやうにたかつて來る執拗な敵機、不利な狀況の中で必死に戰ふ舟艇隊はこの爆彈と機銃の嵐を縫つては、陸と船の間を往復する部隊長攝井大尉、吉田、木谷、高司各中尉の率ゐる艇隊だ。上空からつけ狙つてはわづか五米ぐらゐの高さまで襲つて來る敵機をジグザグに避けながら應戰する勇士を乘せて岸へ、岸へ——輸送船の中の一隻から巨大な焰が揚つた。あゝ〇〇丸はつひに敵機の二彈が命中したのだ。炎々と火焰を海に映じて燃えるわが船——『おのれ！』全員が痛憤の眥を裂く、あゝみよ〇〇丸のやゝ燃えのこつた前部にも後部にもわが勇士が高射砲についたまゝ射擊しつゝ、ロツキード、ハドソン二機を續けさまに火の玉にして擊墜する。その傍にはまだ舟艇に乘らない勇士が銃を手に戰ひつゝ慌てず、騒がず舟艇を待つてゐるではないか。

第二回目の舟艇が輸送船を離れるころから空襲はますゝ痛烈を加へた、その中をわきめもふらず突き進む舟艇長木谷中尉の乘る艇が轟拗に迫つて來る。敵機と戰ひつゝ行く艇はたゞ岸へ、岸へ——岸辺の戰景が一段と凄絶を加へた。頑強に抵抗する大型トーチカが砲火を吐いてあらゆじめ測定した波打際のわが兵士を掃射する『よし俺がやる！』〇〇部隊の中から飛出した一人の兵士が砂を蹴つて走ると聲一杯万歳を叫びつゝトーチカの銃眼にガバとばかり抱きついた。何といふ壮烈、身をもつてトーチカの蓋をしたのだ『ソレツ！』瞬間にトーチカの側面へ廻つた勇士らは手榴彈を投げる。中には暴虐なイギリス兵に鍵をかけられて入れられたまゝやむなく必死の防戰をしてゐた六人のオーストラリア兵インド兵がゐたのである。一つのトーチカは破つた。噴水の如く突込む勇士、その先鋒に立つは〇〇部隊長『俺が一番長いこと生きた、眞先きに死ぬぞ、さあ續け』今度は椰子の林の中に待ち構へる砲兵陣地に手榴彈と日本刀をかざして、斬込む勇士、前面にある大きな三つのクリークも何かあらう。救命具をつけたまゝ飛込んでは進んで行く。大砲がない、機関銃がない、揚陸の直後のためにないのだ。肉彈をもつて敵にぶつつかる勇士、最初のクリークの幅は約二町、水煙が物凄くあがる中を阿修羅の如くわが勇士は進んでゐる（中略）

白々と明け行く南の岸に壮烈極りなき激戰また激戰、空襲と敵彈の中を身を挺して実に十二時間、八日正午一齊に椰子林を縫つてコタバル飛行場に〇〇部隊は一團の熱火となつて突ツ込んだ。敵が逃げる時に放つたガソリンの焰、各所の火の海、その中に敵屍を越えてわが〇〇部隊は遂に突入したのだ……

支那事變において示された皇軍の敵前上陸作戰における威力は、世界の上陸作戰王として世界の認むるところであるが今回のコタバルにおける上陸作戰の如きは戰史未曾有の强襲上陸作戰であつた。上陸作戰は制海、制空權を確保したる後において遂行されるのが原則であるが、コタバル上陸作戰の如きは組織を經ること五千キロ、敵の航空根據地に至近の地点に向つて、敵の制空權下において强行されたものである。上陸地点附近にはわが友軍の飛行根據地なく、ためにこの上陸作戰に協力する友軍飛行隊は佛印方面の根據地より七、八百キロの前方において地上部隊の上陸援護に任じなければならず、この作戰の遂行には絶大なる困難が豫想されたのであつた。しかも、上陸部隊は直ちにコタバル飛行場を占領しわが航空基地として使用し得たことは、緒戰において早くも敵に対し回復し難き大打擊を與へたのである。十日のマレー沖海戰において、イギリス東洋艦隊の主力艦二隻が海鷲によつて無惨な最後を遂げたのに対し、イギリス議會において非難が集中せらるゝや、政府當局が『コタバルを失つた結果二戰隊警に対する空軍の協力が不可能となつたからである』と弁明してゐることによつて、この間の消息は窺へるであらう。

マレー半島を席捲

コタバル上陸部隊のコタバル飛行場によつて、後續主力の上陸を可能にし、これによつて爾後の作戰は急速に進展した。

シンゴラ方面に上陸のわが部隊は直ちにペートン方面に南下して、ジツトラ・ラインに進擊した。ジツトラ・ラインは敵が六ケ月前より堅固に構築せる陣地であつて、少くとも三ケ月はもち耐え得るといふ確信の下に、一ケ師團を以て防衛せしめてゐたのである。しかるにシンゴラ附近に上陸せるわが軍の一搜索部隊が

先づこれと衝突するや、勇力を以て果敢なる攻擊を斷行し、激戰の結果相當の死傷を出したが少しも怯まず、敵陣の突破を敢行し、この間に來襲せる主力部隊と共に敵を挾擊したので敵は遂に潰亂狀態となり、抵抗僅に半日にして退却した。この緒戰勝敗の影響が英軍全般に波及し、その士氣を沮喪せしめたがために、再後の作戰は著しく容易となるに至つた。マレー作戰において世界戰史未曾有の快進擊を行ひ得たことは、この戰鬪において敵に徹底的打擊を與へたことに負ふところ大である。

爾後地形は山地となり、惡天候と敵の反擊を擊碎し、幾多の困難を排除して堅固なる陣地を突破して英領深く進入した。その他の方面は概ね敵の大なる抵抗を受けなかつた。

ペナン占領

一方西海岸の鉄道線路方面を追擊せるわが部隊は、十四日國境線を突破、インド軍第十一師團を潰滅し火砲三十門を鹵獲した。敵は抗戰手段として道路の破壞に非難な努力を拂つた。わが進擊部隊は爾後敵の大なる抵抗を受くることなく前進を續け、十六日にはペナンの對岸スンゲイパタニを占領、翌十七日にはペナンを占領したペナンにあつたイギリス軍並にイギリス人は日本軍の進入に先立つて退却し、日本人殘留者五十七名が治安維持に當つてゐた。わが航空部隊はペナンより退却する敵の輸送船舶に對し果敢なる爆擊を加へ、これに多大の損害を與へた。ペナンはシンガポールより歐洲航路に通ずる海上の要衝に當り、これが皇軍の手に帰したことは直接インド洋に重大なる脅威を與ふることゝなつた。ペナンではゴム二千トン、米五百石、錫一千三百トン、自動車一千輌、ガソリン五百瓩等莫大な鹵獲品があつた。

クアンタン占領

コタバル方面から、東海岸を南下したわが部隊は十二月二十三日トレンガヌを出発、八日間に二百余キロを突破して三十一日には要衝クアンタンを、一月三日夜にはその西方の飛行場を占領した。同飛行場はシンガポールの北方二百八十キロに位する重要な航空基地であつて、これが占領はシンガポールをわが戰鬪機の活動圏内に入らしむる重要な意義をもつものである。

マレー東海岸はコタバル東南約百キロのクアラ・トレンガヌまでは立派な自動車通路があるが、同地以南の海岸には道路らしきものはなく、從つてわが干潮時を利用して海岸を前進する等多大の辛苦を拂つて、西海岸方面の進擊作戰は質應してひたすら進擊を續け、パハン河を敵前渡河し退却する敵を急追して十五日にはジョホール州境附近にあるエンドウに迫つた。

スリム殲滅戰

ペナン攻略の主力部隊は次いでペラク州に進入し、二十三日世界第一の錫生産地タイピンを占領、更に敵の破壞した道路、橋梁を修理し、密林地帶を切り開いて進擊を續けて二十六日ペラ河を渡つて二十八日正午ペラク州の首都イポーを攻略、同地の飛行場を占領して、シンガポールに対し直接脅威を與へ得る航空基地を獲得した。

三十日カンパル附近の堅固な敵陣地に対する包圍攻擊を開始した。敵はわが猛攻に耐えず、一月二日夜より退却を始むるに至つた。我軍は直ちに追擊に移り七日トロラク、スリム附近において堅固な陣地を構築した敵に対して攻擊を加へた。敵は數線に亘り戰車障碍物を設け、近代的築城を施した堅陣に據り頑强に抵抗したが、わが軍は有力なる航空部隊の協力の下に、戰車部隊を骨幹とする步戰砲工統合戰力を以て敵陣地の要部を突破貫徹することに成功し、敵約二ケ旅團を殲滅し、戰車（輕裝甲車）五十輌、重砲十三門その他各種火砲五十五門、自動車五百余輌を鹵獲し、俘虜二百を得た。敵の遺棄死体は三百を下らなかつた。

後續部隊は引續き本道路方面及び海岸道路方面から追擊を續行すると共に、舟艇機動部隊を以て、敵飛行機及び潜水艦の襲擊を避けつゝ秘に海上を機動してクラン州南方モリブに上陸し、要衝マレー聯邦の首府クアラ・ルンプールの背後に進出した。敵の意表に出でたこの巧妙なる作戰により、專ら地の利を頼みとした敵は士氣沮喪し、遂に陣地を棄てゝ退却を開始し、わが先鋒部隊は十一日これを占領した。

皇軍は破竹の勢を以て敗敵を急追し、十二日にはカヂヤン、カンポン、テンキルの線を通過し、ネグリ・センビラン州を経て早くもマラツカ州に進出、十四日夕刻ゲマスクに突入した。

一月十六日ゲマス附近の天險に據る敵を擊破してジョホール州の中部クルアンに殺到した。

また海岸沿ひの部隊は一月十五日マラツカを占領、その夜早くもムアル河を渡河してヨンペンに急進して、中央部隊正面の敵の退路を遮斷した。

海上機動部隊の偉功

十二月三十一日西海岸ルムトを進発したわが海上機動部隊は敵海空軍の妨害を排除してマラツカ海峡を海上機動し、ウタンメリン、スランゴール等の海岸に上陸して陸上敵主力の背後を衝き、一月十六日にはシンガポールの西方約百十キロのパトパハ港に奇襲上陸して同地飛行場を占領した。

マレー西岸部隊の破竹の進擊はこの海上機動部隊の剛膽なる行動に負ふところ大である。東條陸相は、一月二十一日の第七十九議會における戰況報告において『この機動部隊が世界に誇る英海軍の制壓下にあるマラツカ海峡を機動し、シンガポール軍港の咽喉ともいふべき地点に上陸を決行し、敵に多大の脅威を與へたことは、正に皇軍第一線の烈々たる氣魄を覗ひ得ることゝ思ふ』と激賞してゐる。

クライを攻略

一月二十日ムアル河左岸バクリ、バリツトスロン附近で敵の獨立第四十五旅團を殲滅、赫々たる戰果を收めた後、二十三日には更に要衝パトパハとセンガラン間の約二十數キロに亘る敵の縱深陣地を攻略、敵の頑强なる抵抗を擊破し、二十六日パトパハを完全に占領した。この突破部隊は更に一擧レンジット附近に進出し、約四千の敵に対し潰滅的打擊を與へた。この戰鬪でわが軍は敵戰車三十九輌、中、小口徑火砲実に百六十四門、自動車二百四十三輌、その他多數の兵器資材を鹵獲した。爾後敗敵を急追しつゝ概ね海岸道に沿ふ地區を前進、二十九日にはポンチアンケチル附近で敵の抵抗を擊破、三十日夕刻クライに進出した。

一方中央地區を進擊中の部隊は一月二十四日午前ヨンペン反びパロー附近の敵を擊破後、同日夕刻アエルヒタム、クルアン附近の敵に対し航空部隊協力の下に攻擊を加へ、夜襲戰を併用して敵を擊退、二十五日夜半遂にこれを占領した。

爾後皇軍は一部隊を東方カハン、ゼマラン方面に轉進、東海岸方面から進擊する部隊に策應せしめ、主力は敵の破壞した道路、橋梁を修理して進路を辿り、敵の執拗なる反擊を排除しつゝ追擊を續け二十六日夕シンパンレンガム、レンガム

の線、二十八日午後ラヤンラヤン、三十日にはクライを攻略した。

東海岸方面を進擊した部隊は一月二十四日メルシン河の渡河作戰を準備し、二十六日この渡河に成功、二十七日にはメルシン、ゼマラン間の地區に進出した。航空部隊も全力を擧げて地上部隊に協力し、エンドウ附近上空ではわが輸送船團の掩護に任じ、來襲した敵機三十八機を擊墜し赫々たる戰果を收めた。

戰爆聯合の大航空部隊は屢々シンガポールを空襲し、同市周辺の飛行場を徹底的に爆擊して敵の戰意を挫いた。この間の戰果は擊墜六十四機（うち不確実十一）擊破十一である。

ジョホール・バハルを陷落　かくて西海岸、中央、東海岸の三方面から南進した部隊は敵を撃破、追擊を續行、一月三十一日夕刻その先鋒はシンガポール島対岸ジョホール・バハルを陷れた。マレー半島は上陸作戰開始以來僅かに五十五日、踏破行程一千一百キロ、本作戰の一大特色である舟艇による海上機動部隊の活動距離は実に六百五十キロに達した。この間作戰部隊の戰闘回數九十二回、敵の破壞した橋梁修理二百五十回に上つた。戰果の主なるもの次の如くである。

俘虜約八千、遺棄死体約五千、敵約二ケ師團を潰滅した。鹵獲品（破壞したものを含む）火砲約三百三十門、機関銃五百五十挺、戰車（裝甲車を含む）約二百五十輌、自動車約三十六輌、糧秣、燃料は軍の自活に十分な程である。かくしてマレー半島進擊作戰は將兵の謀勇戰によつて極めて順調に進捗した。皇軍はシンガポールを眼前に望み、士氣いよいよ旺盛攻略の準備を進めた。

マレー半島作戰開始以來ジョホール・バハル攻略までに獲得した綜合戰果中主なるものは次の如くである。

（一）遺棄死体　五千（二）俘虜　七千八百（三）擊墜破飛行機　四百五十四機（四）擊沈船舶五十五隻（五）鹵獲品　火砲五百三十門、重軽機関銃五百五十挺、銃器四千挺、戰車（裝甲車を含む）二百五十輌、自動車三千六百輌、鉄道車輌八百三十二輌

エンダウ沖海戰　一月二十七日わが駆逐艦二隻はわが輸送船團攻擊を企圖し、シンガポールを出擊したイギリス駆逐艦サネット及びバンバイヤー二隻をマレー半島東岸エンダウ沖に発見、直ちにこれに果敢なる攻擊を加へ、こゝに二対二の同等勢力の駆逐艦戰を展開して、敵サネット号を撃沈、その乗員若干を捕虜とした。バンバイヤー号は火災を起したが夕闇にまぎれて遁走した。我に一弾一片の被害なく、大東亞戰開始以來最初の艦艇同志の対戰においてもわが海軍艦艇の砲術の威力を遺憾なく実證し、しかもわれに一弾一片の被害のなかつたことはイギリス海軍の傳統を粉砕し、彼我実力の懸隔を現実に示したものであつた。

敵両駆逐艦はいづれも東洋艦隊所属でサネット号は一九一九年竣工、九〇五トン、四インチ砲三門、二十一インチ魚雷発射管四門、乗員九十九名、バンバイヤー号は一九一七年竣工、一、〇九〇トン、四インチ砲四門、二十一インチ魚雷発射管六門、乗員百三十四名である。

戰史空前の快進擊　かくて皇軍は十二月八日宋明シンゴラ上陸以來僅々五十五日にしてジョホール・バハルに至る一千一百キロを席捲した。然るに、この戰史においては一作戰の最高距離は二百キロとされてゐたので、この常識を完全に覆へしてその五倍半に及ぶ一千一百キロの長大戰線を一気に撃破して世界戰史に不滅の大戰果を擧げたのである。

作戰開始に當つての上陸作戰の困難については先きに述べた。しかもマレー作戰は日本戰史空前の熱帯作戰であり、半島の錯雜せる地形を蔽ふ一面のジャングル地帯を通じて僅に西岸の磯貫鉄道路が開かれてゐるのみである。この道路には数キロに亘る堅固なる鞏深陣地が構築されてゐた。東海岸はクアンタン以南全く道路なく、人跡未到のジャングルを突破せざるを得なかつた。それにも拘らず一千一百キロを五十五日間で突破し、一日実に二十キロの進擊速力を示したことは全く戰史未曾有の記録である。支那事變で神速を謳れた漢口作戰もこれに及ばず、わが戰史に新記録をつくつたマニラ攻略戰も、リンガエン湾上陸以來の十一日間の記録であるから、マレー作戰が五十五日の長期に亘つて二十キロ以上の平均速度を保持したことは、世界軍事專門家の等しく驚異としたところである。電擊戰を以て鳴るドイツ軍の東部作戰進擊の速度も十九キロ强に止つたのである。

シンガポール要塞攻略戰

シンガポールはイギリスが東亞侵略の軍事據点として四億ドルの巨費と尨大な鉄量と多年の日月とを以て建設したものであり、その防備はジブラルタルと共に難攻不落を誇つた世界二大要塞の一であつた。要塞の備砲は戰前の偵察による重だつたものだけでも

フラカンマチ要塞　二十五サンチ加農砲八門、十五サンチ加農二門、フェパ要塞　陸類砲合五、ペナル要塞　二十五サンチ加農砲四門、チャンギ要塞　四十五サンチ加農砲三門二十五サンチ加農砲二門、二十四サンチ加農二門

十五サンチ加農以上のみでも二十六門を下らず、マレー半島において敗退し同要塞に據るに至つた火砲もまた相當の数に達した。陸正面は海正面に比して多少の〇〇を蔵してゐたがイギリス軍は戰機の迫るにつれ無数の臨時築城を施し、遂にジョホール・バハルからシンガポールに通ずる唯一の通路たる陸橋を爆破して、大陸より絶縁し、防備おさおさ怠りなかつた。

その守備兵力はわが総攻擊開始當時において正規兵五万至六万師團、義勇隊二個旅團を基幹するものと判断されてゐた。

水道强行渡過に成功　一月三十一日ジョホール・バハルに突入したわが部隊は、ジョホール水道を挾んでシンガポールの敵軍と交戰しつゝ、周到なる準備を進め二月七日夜シンガポール島眞北に横はるウビン島に敵前上陸を敢行してこれを占領し、敵をこの方面に牽制した。八日夜いよ〳〵総攻擊の火蓋は切られた。わが攻擊部隊は九日午前零時四十分シンガポール西北地區においてジョホール水道の强行渡過に成行した。攻擊部隊は沿岸一帯に密生するマングローブのジャングルを伐り拓き、泥濘胸に達する濕地を强行突破し、敵の頑强なる抵抗を排擊して猛進擊を續け密切なる歩砲協同の下に九日午後七時テンガー飛行場を占領した。敵はこれに対しバンヂヤン西北高地、カウグンバック山を経てテマ山南側高地に亘り、主抵抗陣を布き、わが軍の進擊を阻まんとしたが、皇軍の士氣いよ〳〵昂まり十日夕には標高四百三十七メートル高地を奪取した。この日ブキ・テマ山附近の激戰において第一線兵團長牟田口陸軍中將は戰傷を負つたが依然陣頭に起つて指揮をとつた。翌十一日紀元の佳節にを迎へて意氣衝天の皇軍は

拂曉ブキテマ山の要衝を奪取し、シンガポール市街を指呼の間に俯瞰して、敵に降伏を勧告した。

マレー方面陸軍最高指揮官　九日午後五時大本營から、マレー方面陸軍最高指揮官は山下奉文陸軍中將であることが発表された。

シンガポール攻防戰こそはまさに世界史の分水嶺にも似た一大會戰であり、全世界の神経と視聽はことごとくこの一戰に集中されてゐた。これとともにわが攻略軍の最高指揮官山下奉文中將の存在もまたひとしほ感慨を唆るものがあつた。二世紀にわたつてイギリス東亞軍の野望に最後の断を下し得るに適はしき武將として山下將軍はまさに屈指の將軍たるを失はない。現陸軍に名將は済々たるものであるが、山下中將ほどに東亞の宿敵イギリスと関聯のあつた將軍も少くない。支那事變では部隊長として勃発當初の北支南苑、廊坊、房山の戰鬪に偉勳を樹てたが、三年前の天津イギリス租界の敵性問題をめぐつての當時の紛爭では北支軍の幕僚長として思ひ切つてイギリス租界封鎖を断行した。北支の山野にあつて將軍は支那事變の背後に英米あることを早くも洞察し『この事變は百年戰爭』だとの感慨をもらしたものである。いま軍を指揮してイギリス軍とマレーで戰ひ牙城シンガポールを攻略したのであるが、イギリス軍と戰つて疾風五十五日、一日二十キロの作戰速度をもつてマレー半島を席卷したそのマレー作戰の指揮統帥は実に鮮かさを極めた。

『ポムペイ最後の日』　一方ジョホール・バハル方面に待機してゐたわが部隊は九日夜ジョホール水道の敵前渡過を強行し、直ちにマンダイ山附近の敵陣地を攻撃してこれを占領した。

わが航空部隊は極めて緊密有效に地上部隊の攻撃に協力した。ブキ・テマ山を占領した部隊は敵に息つく暇を與へず攻撃を續行し、その快速部隊の一部は早くも十一日午前八時シンガポール市街に突入した。

敵はわが方の條理を尽した降伏勧告にも應ぜざるのみならず、ブキ・テマ山東北地區において執拗なる逆襲を反覆し、必死の抵抗を試みた。こゝにおいてわが軍は断乎これを撃滅するに決した。十二日午前十時総攻撃を開始するに先立ち山下最高指揮官はシンガポール市民に対し左記布告の投下を行つた。『英國軍はわが人道的降伏勧告を容れず、市民を犠牲にして抵抗を継續する模様である。市民は、安全なる地域を求めて日本軍の入城を待て、皇軍の救助の手は君らの上に延びるであらう』コースウエー橋方面から南下した北方陸正面部隊は十三日拂曉來貯水池周辺の敵軍主力に猛攻を加へ、同日夕刻には早くも貯水池北辺のジャングル地帶の線に進出し、こゝに北、西、南三方面より包圍の鉄環を壓縮しつゝ大殲滅陣形を彊成、わが第一線部隊は航空部隊及び砲兵、特に重砲兵部隊との密接なる協同の下に、五日間に亙り連夜彊襲の猛攻撃を加へた。APシンガポール通信は『十二ケ所から火を発し、黑煙は濛々として天を蔽ひ、炎熱の太陽もために暗くポムペイ最後の日もかくやと思はれる』と報じた。

コースウエー橋南方から進撃し、三二七高地北方正面の高地に肉薄したわが部隊は十三日朝來アンモキア溪谷に対し壯烈なる突撃を敢行してこの高地を深く突入し、ジリ押しのわが包圍陣がこの正面から楔入し、敵陣に痛撃の度を加へ、包圍殲滅の態形は次第に壓縮された。

包圍鐵環を壓縮　戰局は大別して貯水池高地爭奪戰、シンガポール市街と市街西方のキャブロード要塞攻撃との三方面に別れ、彼我の砲聲殷々として雄壮なる要塞攻略戰を展開した。

ブキ・テマ・ラインを突破して南方を迂回したわが右翼部隊は十二日夕刻にはブキ・テマ南方四キロにある標高七五高地を奪取して引續き東方に進撃し、十三日朝パシヤバンジャン附近のキャブロード要塞を攻撃し、十四日朝來シンガポール市街に対する猛攻撃を開始した。このキャブロード要塞は、その対岸のブラカンマチ要塞と共に、貯水池高地に対し、敵が自軍を掩護砲撃し得る戰略地形にあるので、わが攻略軍の同要塞に対する猛攻は敵に深酷なる打撃を與へた。

両貯水池の三七二高地に対しては、ブキ・テマ砲台附近における壯烈なるわが肉彈戰の敢行によつて、これを完全に壓縮し、戰局は特に北方正面から次第に動搖し始むるに至つた。即ちブキ・テマ高地西方から攻撃したわが部隊は同高地東方二キロの鶏鳥場東側一帶の堅壘を屠り、十二日の夕刻には高地の奥深く突入して、貯水池高地を西南方から制壓するに至つた。

一方三七二高地北方正面から南下した部隊は貯水池北側のジャングル地帶を突破し、その一部は十三日朝來アンモキア溪谷の突撃戰を敢行して高地に據る敵陣に突入して、北方敵陣地に楔を入れて二分した形となり、殲滅線の中心たる三七二高地に対するわが包圍陣はこゝに鉄く凝結された。

敵がシ島要塞鑑城に當り破壞したコースウエー橋は、十一日一度修復されたが敵砲火のため再度破壞された。しかし十三日夕刻には完全に復旧され、わが後方線は一段と強化するに至つた。

脱出艦船を殲滅　われに数倍する敵は強大なる要塞砲の砲門を一斉に開いて頑強に抵抗を試みたが、わが軍の猛攻に次ぐ猛攻に漸次市街に追ひつめられ、チャンギー、ブラカンマチ、カニング、ランジャンの各要塞も十三日來のわが巨砲陣と航空部隊の側撃を受けて十四日來砲聲とみに衰へわが軍の前進を更に進捗せしめた。即ち右翼部隊は十四日午前中に二七〇高地附近に進出、ブキ・テマ方面より前進中の中央部隊は鶏鳥場東南一一〇高地より南貯水池の南方一〇五高地に進出した。また長駆して敵の退路遮断を企圖する左翼部隊は南貯水池の東側地區に進出し、敵が生命の源泉を頼むピース及びマクリッチ両貯水池を奪取敵の生死與奪の權はわが掌中に落ちた。かくて三方面より包圍網を壓縮して敵を市街に追ひ詰めた。日章旗はシンガポール市街の東北西三方に翻々とひるがへり、鉄壁内の敵は降伏か全滅の外なきに至つた。

わが艦隊はシンガポールよりの脱出を企圖せる敵艦艇並に輸送船團を同島南方海面及びバンカ海峡方面に捕捉攻撃し二月十日より十四日までの間に合計三十二隻を撃沈破又は擱座せしめた。その戰果は次の如くである。

一、撃　沈　アレスーサ型軽巡（又は大破）一、特設巡洋艦一、潜水艦一
砲艦二、敷設艦一、特務艦一、三万トン級輸送船一、八千トン級輸送船四、三千トン級輸送船一

二、撃　破　駆逐艦一、駆逐艦一、特務艦二、輸送船一〇、魚雷艇一

三、擱　座　敷設艦一、輸送船一

セレター軍港占領　わが海軍先遣部隊は十四日セレター軍港に敢然進入し、所在の残敵を掃蕩、同日正午イギリス海軍鎮守府を占領し、屋上高く軍艦旗を掲揚した。

セレター軍港はイギリス東洋艦隊の根據地で、イギリスが日英同盟廢棄と共に建設に着工、二千二百万ポンドの巨費を投じて一九三八年二月十四日大乾ドックの竣工を機に竣工式を擧げ、恰度滿四年にして皇軍の手に歸したのである。軍港はジヨホール水道のウビン島要塞を外郭陣地として附近一帶の防備を固め、多數の重油タンク、五万トンの主力艦を收容し、駆逐艦九隻を一時に入渠し得る世界最大の浮ドックなど海軍根據地としての施設に万全を盡してゐた。第二次欧洲戰爭以來軍港周辺を特別區として日本人の通行を禁止し、附近の日本人経營のゴム林から日本人を放逐して軍港の機密保持に焦慮してゐた。

敵將軍門に降る

皇軍が制空、制海權を掌握してゐるためイギリス軍がシ島を脱出することは全く不可能に近い。皇軍の猛攻に耐へかねて十五日午後に至り敵は遂に降伏を請ふに至つた。

十五日午後十時十分大本營は左の如き歴史的発表を行つた。

大本營発表（二月十五日午後十時十分）馬來方面帝國陸軍部隊は本十五日午後七時五十分シンガポール島要塞の敵軍をして無條件降伏せしめたり

朝日新聞の酒井、大立両從軍記者は英將無條件降伏申入れの歴史的情景を左の如く傳へてゐる。

十五日午後二時半、わが中央街道進撃〇〇部隊の前面、シンガポール街道ブキテマ・ロード北方約四キロのブキ・パラウン高地南方において大きな白旗を掲げたイギリス軍參謀シ・エー・テイ・ワイルド少佐が兵三名を伴れて軍使となり停戰を申出でた。我方から直ちに杉田中佐が軍使となり同軍使と會見、日本語をもつて『無條件降伏に同意するならば停戰する。降伏の意思を有するや』との質問に対し、同少佐は『降伏の意思あり』を答へ、かくて午後四時十五分會見を終り、イギリス軍は午後五時半を期し、軍司令官自ら皇軍占領地に條件交渉のため來るべきことを約した。約束の時間よりやゝ遲れて午後六時四十分マレー軍総司令官エー、イー、パーシバル中將は參謀代將ゲー・エス・トーランス・軍政部長代將アイ・エー・ニユービキン、參謀少佐シー・エツチ、テイ・ワイルドの四名が會見場所と指定されたブキ・テマ三叉路北方約二キロのブキ・パトにある三四八高地の中腹にあるフオード自動車工場の前の街路に流線型の自動車を止め、自動車の前部に大きなイギリスの國旗と白旗の二本を立て四人肩を並べて同工場の前に歩を進めた。この自動車に從つてわが杉田參謀の車もピタリと停止し、會議の場所へ進んで行く。會議の場所は三つ並んだ部屋の最南部、針金で編んだ椅子を透して燃える シンガポールの形相は痛ましい。約五万遷れて山下軍司令官は幕僚を從へ同室に入込み互に握手を交した

『これに書いてある條件をお肯きになれば應じます。我々はイエスかノーかの返答を聞きたいのです』といふ軍司令官の眼光鋭々と鏗き人を射る。やがて十日午後十時を期しイギリス軍はマレー軍司令官及びマレー總督を日本軍の位置に連來れたり降伏條件の保證とすること、午後十一時までに全員の武裝解除をすること、皇軍一千名を十五月夜シンガポールに入れ英軍の武裝解際を監視することなど主なる條件を全面的に認め、無條件降伏したのである。時に七時五十分、歴史的會見は砲聲既に止み、夕の陽射しなほ明るいうちに終つたのである。

十六日午前八時皇軍の先遣部隊は市内に進駐、政府を始め各重要建築物に大日章旗を掲揚した。

午前九時わが軍代表は英軍軍政部長ニユウビキン少將以下英軍代表とシンガポール接收に関し協議した。山下最高指揮官は降伏英軍の措置に関する協定の成立と同時に聲明を発して、民衆の嚮ふところを明かにした（別項大東亞建設大綱參照）

南方方面陸軍・最高指揮官寺内大將

シンガポール陷落の日、十五日午後十時十五分大本營から南方面陸軍最高指揮官は伯爵寺内壽一陸軍大將、同総參謀長は塚田攻陸軍中將であることが発表された。香港を屠り、マニラを拔き、いままたイギリスの東亞侵略の牙城シンガポールを粉碎し去つた豪快無双の南方大作戰の最高指揮官はこゝに鎬綜として覆面をかなぐり棄てたのである。

大東亞戰爭の南方方面最高指揮官と総參謀長との首腦部構成は、さすがに歴史的人事である。各方面軍の作戰を統帥する最高首腦として、前陸相寺内壽一大將総參謀長塚田攻中將の起用は全軍の重石として、その役割を果さしめるところにある。けだし日露戰爭に大山元帥が滿洲軍総司令官に兒玉大將を総參謀長に起用した人事を想起せしめるものがあつた。寺内大將は、現陸軍部内での最高長老である。南方全軍の重石としての貫祿が與へられてゐるのも故なしとせず、いはゞこの最高人事の着想は全く日露役の成功をそのまゝ踏襲したと見るべきで、今回の赫々たる戰果も誠に故なしとしない。

大將は陸軍三長官のうち參謀総長を除く二要職に歴任した。しかしその本質は軍政家でなくて、飽くまで第一線にあつて指揮する野戰軍の統帥である。將軍の経歴もまた軍中央部にあつて成長してゆくといふ普通コースとはちがつて師團長も二度勤め、台灣軍司令官をやり、その後軍事參議官、陸軍大臣をやるまで殆んど全部地方の第一線勤務に終始してゐる。この経驗が軍司令官、最高指揮官としての自己陶冶にどれだけいゝ経驗を與へたかわからぬ。事実支那事變でも大將は北支軍最高指揮官として幕僚をして心服指ぐ能はざらしむる重石的役割を果した。一年三箇月に亙つて在任し、昭和十三年五月中支の畑大將と徐州會戰をやつてのけるまで縱横に野戰軍指揮官としての手腕を発揮し、部下諸將軍をして思ひ切りのびゝと腕を揮はしめてゐる。將軍のこの持味こそ、今次世界戰史に不朽の一頁を畫した南方諸軍の統率に磐石の重石として無言の力を感ぜしめる所以である。

塚田総參謀長は一年余參謀次長として軍令中樞の企劃に任じ今次大戰の勃発に際し総參謀長として現地軍任に就いた。支那事變では中支軍の松井石根大將の幕僚長としてその手腕を発揮した將軍である。事變で最も敵戰とされた上海戰、杭州灣の敵前上陸、南京攻略戰を皚皚にあつて軍の統帥を補佐、こゝで並々ならぬ経驗を得てゐるが、この二つの経驗は、今回南方軍の首腦として寺内大將を輔け上陸作戰に次ぐ上陸作戰と空、歩、砲完全一体化の近代戰を陣所にやつてのけ世界歴史に一新紀元を劃した今次の赫々たる作戰指導に十分ものをいつた訳である。中支軍幕僚長から帰還後一時陸軍大學校長をやり軍令畑を文字通り歩いて來た点、野戰総指揮官肌の寺内大將ともつともいい人的結合をなしてゐる。

シンガポール攻略を御嘉尚

大本營發表（十六日午前十一時四十分）――大元帥陛下には本日陸海軍幕僚長を召させられ南方方面陸軍最高指揮官並聯合艦隊司令長官に対し左の勅語を賜はりたり

勅語

馬來方面ニ作戰セル陸海軍部隊ハ緊密適切ナル協同ノ下ニ困難ナル海上護衛並輸送ト果敢ナル上陸作戰トヲ敢行シ炎熱ニ耐ヘ奮鬪ヲ冒シ長驅進擊隨所ニ勁敵ヲ破リ神速克ク新嘉坡ヲ攻略シ以テ東亞ニ於ケル英國ノ根據ヲ覆滅セリ朕深ク之ヲ嘉尚ス

チャンギ要塞に收容されてゐた在留邦人二十四名は十六日午後八時わが軍に救出された。

帝國海軍の艦艇〇〇隻は水路の啓開を終つて、十七日早朝舳艫相銜んで入港した。

山下最高指揮官は十九日午後幕僚を從へて入城、二十日午後三時ラッフルス大學校庭で合同慰靈祭を行て、陣沒將士の英靈を弔つた。

マレー作戰の陸軍綜合戰果

（一）シ島攻略戰の綜合戰果

大本營發表（二十一日正午）マレー方面帝國陸軍部隊のシンガポール島要塞攻略戰において收めたる戰果の主なるもの左の如し

一、俘虜　軍司令官以下總數約七万三千（將官級二十八名）なほ負傷兵約八千は市内主要ホテルに收容治療を加へつゝあり

二、鹵獲品　大威力軍砲その他各種火砲約三百門、機關銃二千挺以上、小銃約五万挺、戰車（裝甲車を含む）約二百輌、各種自動車約一万台、自動二輪車約二百台、彈藥大威力軍砲彈ほか極めて多數、その他軍需資材多數、船舶一万トン級汽船一隻、五千トン級タンカー三隻その他大小舟艇多數

三、我軍の損害は目下調査中なるもジョホール水道渡渉後の戰死傷者は約三千の見込みなり

▲將官級俘虜二十八名　シンガポール島攻略戰の赫々たる戰果は別項の如く大本營から發表されたが俘虜は軍司令官以下將官級二十八名を加へて七万三千の多數に達してをりその主なるものは左の如くである

軍司令官陸軍中將パーシバル、第三軍團長中將ヒース、第十一師團長少將キー、第十八師團長少將スミス、濠洲第八師團長少將カラガン、要塞守備司令官少將シモンス

シドニー來電によればブオード濠首相はシンガポール戰線に於ける濠洲軍の損害は一万八千名に上り、シンガポール方面軍濠洲軍司令官ベネット將軍は目下日本軍により抑留されてゐる旨廿一日發表した。

（2）マレー作戰陸軍綜合戰果

大本營發表（三月二日午後四時三十分マレー上陸以來シンガポール島要塞攻略までに收めたる綜合戰果次の如し

一、敵に與へたる損害、俘虜九五、〇〇〇、遺棄死体約二五、〇〇〇、擊沈破飛行機五五一機、擊沈破艦艇及び船舶一〇一隻、鹵獲品飛行機一七、機關車（裝甲車を含む）四五〇輌大威力軍砲その他各種火砲六三〇門、機關銃二、五五〇挺、自動小銃及び小銃五二、〇六二挺、各種自動車一三、八三〇輌、鉄道車輌八三二輌、大小船舶その他兵器彈藥資材多數

二、我軍の損害　戰死三、二八三名、戰傷六、一〇一名、飛行機自爆八、未歸還二八、不時着その他損傷三六、計七二機

海軍の綜合戰果

シンガポールの攻略は固より山下軍司令官の率ゐるマレー作戰部隊の疾風枯葉を捲くが如き力戰奮鬪によるものであるが、これに緊密な協力を行つたわが海軍の奇襲勇戰もまたわれらが感激を以て想起するところである。

即ち開戰劈頭帝國海軍はイギリス東洋艦隊の主力をマレー沖に壊滅して制海權を掌握したため皇軍は常に好む時、好むところに向つて上陸作戰を可能としたのである。海軍がマレー作戰に寄與した第二の点は敵の來援を完全に封殺し、マレー總督トーマスをして『援軍來らず、賴むはただ神のみ』との悲鳴をあげさせるに至つたことである。海軍がマレー作戰に協力した戰果の大略は次の如くである。

海軍作戰經過

△十二月八日　帝國陸海軍は緊密な協同の下にマレー方面の奇襲上陸作戰に成功

△帝國海軍航空部隊はシンガポール、テンガー、セレター飛行場を夜間爆擊す

△四月九日はグアタンを攻擊、敵機十機を擊破、またマレー東方海面において七千トン級英國商船一隻を大破す

△同月十日　帝國海軍は英國東洋艦隊主力プリンス・オブ・ウエールズ、レパルスの戰艦二隻及び大型駆逐艦一隻を轟沈、英東洋艦隊主力を壊滅しマレー方面の制海權を掌握す

△同十二月廿九、三十日　シンガポール周辺の敵軍事施設に対し數次の夜間爆擊を敢行し軍事施設、駐屯軍總司令部、セレター、カラン飛行場等を爆破す

△一月一日　大擊シンガポール、テンガー、センバワン飛行場を爆擊、各所に大火災を生ぜしむ

△同二月二、三日　シンガポールを大爆擊

△同月十六、十七日　シンガポールを爆擊し敵新鋭機十九機ならびに大型機數機を擊墜破す

△同月十八日　シンガポールを爆擊し敵機十五機を擊墜、軍港施設並に油槽群を爆破す

△同月二十日　シンガポール西南方海面を索敵し六千トン級商船一隻を爆破しラブアン港外にて商船數隻を爆擊

△同月二十一日　シンガポールを大爆擊し同軍事政治中樞數ケ所を炎上、敵船二隻を爆沈破し更に敵機十二機を爆破

△同月廿二日　シンガポールを大爆擊し敵機四十六機を擊墜破し、特務艦一隻を爆沈

△同廿七日　帝國驅逐艦はマレー東岸エンダウ沖において英驅逐艦サネツトを撃沈その乗員若干名を捕虜とし「バンバイヤー」を敗走せしむ
△帝國海軍航空部隊はシンガポールを攻撃し敵機五機を撃破し数機に損害を與へ、また敵船一隻を撃破す
△同月二十八日　帝國海軍航空部隊はスマトラ島パタン港の敵輸送船團を爆撃し商船十一隻を爆沈破
△同月二十九日　シンガポールを攻撃しセレター飛行場格納庫群七ケ所炎上、附近施設を壊滅す、なほ残存敵機二機を撃墜
△同月卅日　シンガポール南方スマトラ島東岸バンカ海峡方面の敵輸送船團を攻撃し大型商船三隻を大破沈没または航行不能ならしむ
△二月三日　シンガポール南方海面において一万トン級商船一隻を撃沈す
△二月八日　バンカ島附近を索敵攻撃し約一万トン級商船一隻を撃沈
△二月十一、十二、十三、十四日　シンガポール方面帝國艦隊はシンガポール脱出を企図せる敵艦艇ならびに輸送船團を同島南方海面およびバンカ海峡附近に捕捉攻撃し三十二隻を撃沈破または擱坐せしめ、帝國海軍部隊は未明シンガポール・セレター軍港に進入し同日正午これを占領した

綜合戰果──公表分

一、艦艇撃沈破総数十六隻（イ）撃沈、戦艦二、軽巡一、特設巡洋艦一、駆逐艦二、砲艦二、敷設艦一、特務艦二（ロ）撃破、巡洋艦一、駆逐艦一、特務艦一二、魚雷艇一
二、船舶計四十二隻（イ）撃沈十五（ロ）撃破二十七
三、飛行機、撃墜六十五、撃破六十九、合計百三十四
四、わが方の損害飛行機八

絶對不敗の態勢成る

イギリスの東亞侵略の牙城シンガポールはかくて遂に陥落した。死闘猛攻七日間、全世界の耳目をこの一地に凝集したシ島攻防戦は英軍が我が軍門に下り、日章旗は開國の空高く燦として輝き、世紀の偉業はこゝにその礎石を定むるに至つたのである。われらはシ島攻略の意義の極めて重大なるを痛感し、皇軍の人爲を絶する勇戦に対して銃後の感激はいよ〳〵白熱化するばかりである。

大本營陸軍報道部長大平大佐は十五日シ島陥落に當つて左の如き談話を発表し、大東亞戦争の大局はこゝに全く決し、我國は十年、百年を戦ひ抜く絶対不敗の態勢をとり得るに至つたとの宣言を行つた。

さきに疾風枯葉を巻くの概をもつて全マレー半島を席巻せる帝國陸軍部隊の精鋭は、二月八日以來敵の眼前において堂々「ジヨホール」水道の障碍を突破し、猛攻わづか七日にして敵がその難攻不落を豪語し、世界にこれが死守を誓約せる「シンガポール」要塞を完全に攻略し、島上高く感激の日章旗をひるがへしたのである。これまつたく御稜威のもと前線將兵の勇戦奮闘によるものであつて、一億國民の感激これに過ぐるものなく、世界またわが無敵皇軍の威武に驚倒したところである。

抑々今次米英撃滅の宣戦布告せらるゝや、帝國陸軍はわが海軍との密接なる協同のもとに、東亞における米英の軍事諸據点に対し、同時大渡洋作戦を敢行、まづ香港ついでマニラを屠るとゝもに雲烟五千キロの波濤を蹴つて英領マレーの一角に壮絶なる敵前上陸を敢行、爾來約二ケ月南方特有の地厳、熱嶽を冒して優勢なる敵野戦軍を随所に撃滅し、強靱なる突破力と神妙な機動力とをたくみに併用して一千百キロを超ゆる戦野を征服、さらにジヨホール水道を強行渡過して敵最後の牙城シンガポール島要塞の攻城開始後僅々七日にして強引に潰滅し去り、世界のあらゆる戦史に絶する大戦果を收めたのである。

この間畫夜を分たぬ奮戦よく敵空軍を撃滅して敵地の制空權を確保するとゝもに、地上部隊の進撃に絶大の協力をなしたるわが航空部隊が、その攻撃精神ならびに戦闘技能において敵と格段の懸隔を実證したことは、マレー方面に作戦せる地上部隊の當初の豫定兵力よりもはるかに僅少の兵力をもつて作戦目的を達成したことゝ相俟つて、この際とくに強調せらるべきである。これ眞に傳統の歴史につちかはれ不断の絶えざる訓練に養はれたるわが無敵陸軍の精華を遺憾なく発揮したものであり、神武皇軍にしてはじめてなし遂げ得る偉功といふべきである。

思ふにシンガポールの地たる英國が東亞侵略百年の策源地であり、最近においては対日包圍陣營の軍事中枢據点であつたことはすでに世界周知の事実である。しかもその陥落によつて東亞は米英の桎梏より救はれ、同時に米英がいだける対日進攻の野望は徹底的に粉砕し去られたのであつて、敵牙城シンガポールが期せし一切の機能は、一變してわれのため無限かつ強力に発揮せらるゝことになつたのである。即ちシンガポールは爾今、大東亞南方鎮護の核心となり大東亞戦争勝利の一大據点として永遠に日章旗の下に磐石の不動をほこるであらう。

そも〳〵世界永遠の平和をもつて肇國の大理想とする皇國は太陽の如くあまねく世界を光被するのであつてこれを享くるものは育くまれこれを遮るものは灼熱によつて灼きつくされる。皇軍こそは正に大御心を奉する灼熱の威力であり、いかなる鉄壁もいかなる強敵も忽ちにして爆摧せずんば止まぬのである。故に御稜威をいたゞく皇軍はつねに天佑神助を享受して人爲の判既およばざる神武を発揮するのである。見よ帝國悠久三千年の光輝ある歴史を、今次シンガポール攻略の大戦果はまさにその象徴にほかならぬ。しかも今次戦争は米英が弄ぶ遊戯にあらずしてわれは生死を賭す。その勝敗は米英の唱へる物力にあらずして、わが傳統の心力により決するものである。米英はよろしくこの神聖なる事実を知るべく、米英の後塵に屈する敵性與國また皇軍の真価を仰ぎ見るべきである。

今やシンガポール陥ちて米英凋落の跡を知る。向後なほ米英にしてわれとあくまで決戦を求め大東亞に進攻を欲するならば、これ我軍のもつとも歓迎するところである。たゞその結果たるや敵はシンガポールの轍を踏み惨敗の歴史を繰返すにをはらんのみ。もしまた米英われと決戦を避け長期持久を策せんと欲するならば、これまたわれに應ずる用意がある。すなはち陸軍の精鋭は無敵海軍と相携へ陸に空にさらに雄渾なる進攻を可能とするのみであつて、シンガポールは実にその福軸となり、ビルマ、蘭印は直にわが鉄脚下に伏すべく、東すれば濠洲忽ちにしてわが御聖下に入り、西すればインドまたわが聖戦下に抱擁

せらるゝであらう。

これを要するに、今や大東亞戰爭の天王山シンガポールわれに歸して米英瞰滅の基礎全く成り、皇國一億の火の玉はいよ〳〵燃えて必勝の鬱ひさらに固く、加ふるに南方諸地域の豐富なる資源は擧げてこれを確保するにいたつたのであつて、こゝに天の時、地の利、人の和の具備せる必勝不敗の態勢はいよいよ磐石の固きを加へ、十年百年の決戰に対應し得るにいたつたのである。嚴肅に宣言す『シンガポール陷ちて決戰態勢すでに決す、最後の勝利は炳としてわれにある』と。

シ港陷落の軍事的意義

シンガポール陷落の軍事上の意義に就いて、東條陸相は二月十六日の戰勝祭會における戰況報告において次の三点を擧げてゐる。

その一はわが作戰の自由を獲得したことである。イギリスはこの地を陸海空の大根據地とし、西太平洋、及びインド洋に威威を逞しうしてゐたのであるがいま、皇軍はこのイギリス東亞の大根據を攻略して作戰の自由を獲得すると共に、インド洋に対する制壓の威力をも獲得したのである。

その二は米英両軍の直接聯合作戰の企圖を困難ならしめたことである。米英はその提携を誘ひ、対日旬圍陣の結成を企圖し、太平洋方面諸國軍の直接聯合作戰のため西南太平洋聯合軍總司令部を設置する等活潑なる動きを見せつゝあつたのであるが、その策源地、根據地として最も重要なるシンガポールの陷落により、西南太平洋における聯合作戰の鎖鑰を喪失し、この方面における米英

両軍の直接共同の企圖は殆ど不可能となるに至つた。皇軍がシンガポール市内に突入した二月十一日を以て、フランスのプティ・パリジャン紙は『二月十一日は太陽沒する地なく歴史上未だ嘗つて悲慘なる敗北を喫したることなしと謂つた英帝國の崩壞を兆す日となつた。軍事的に日本は東亞におけるイギリスとアメリカとを結ぶ鎖番を壞滅した。歴史的な時代は幕を閉ぢ、新しい時代はアメリカの盲目と金權によつて政策を維持せんとする無駄な努力が却つてこれを早めることになつた』と論じてゐる。

その三は米英軍と連衡して行はんとする重慶軍の抗戰企圖を極めて困難ならしむるに至つたことである。重慶は孤立無援の窮地に陷り、その企圖した米英軍との連衡抗戰は空しく水泡に帰するに至つた。

敵海軍はシンガポール軍港の喪失により西南太平洋上に戰艦を收容し得る大船渠を失ふに至つたことは、米英の対日作戰に重大なる制限を附するに至つた。シンガポール軍港施設中最も注目すべきものは、イギリスが誇つた大浮船渠である。これは十余年イギリス本國で造られたもので、船渠の長さ八百八十五フィート、幅百七十二フィート、側壁の高さは底面上五十フィートで五万軍艦を收容することが出來る。乾船渠中最大のものはキング・ヂョージ六世と呼トンのばれるもので、長さ一千フィート、入口の幅百三十フィート、艦木上の水深三十五フィート、三万五千トン級のプリンス・オブ・ウェールズ級の主力艦も楽々と入渠出來るのである。

シンガポールの陷落によつて、米英海軍の対日作戰は重大なる制限を受くるに至つた。敵の反擊作戰はインドとオーストラリアとを據点としてその上に構想されるのであらうが、オーストラリアの各軍港は巡洋艦船渠を有するのであるから、敵は根據地なき大洋上に作戰せざるを得ない羽目に陷り、作戰上に重大なる弱点を抱いてゐる。これに反してわが方は逆にシンガポールのもつ戰略的重要性を强力に活用し得るに至つたので、米英の対日作戰は根本的に建直されねばならなくなり、米英の太平洋作戰延いては世界海軍作戰の樹立に腐心焦慮しつゝある。

戰勝第一次祝賀　宣戰の大詔渙発されてより、忽ちにしてハワイにマレーに、香港に、フイリツピンに、ボルネオに無敵皇軍が海に陸に空に相次ぐ快勝の歓喜はシンガポール陷落して米英東洋侵略の重要據点の覆滅を機に、二月十八日第一次戰捷祝賀式が擧げられ、聖謨高破、勝鬨のどよめきは大東亞にこだました。一億國民は聖戰完遂のその日まで第二次、第三次祝賀の日を心に期し胸に誓つて慶祝した。

マレー血戰記——マレー軍作戰主任參謀談

マレー方面軍の作戰主任〇〇參謀は當時の感激を回想しつゝ三月七日東京において次のやうなマレー血戰の談話を行つた。淡々として作戰の経過を語りつゝも、そこに盛らるゝものは、最高指揮官山下奉文中將以下全軍に横溢する大和魂の顯現であり、果敢なる戰鬪精神発露の姿である、小部隊をもつて敵の堅壘を突き破り、世界のいづれの民族もかつて樹立し得なかつた新らしい戰爭が從絶なる精神力と大和魂の血をもつて綴られたのがこの作戰である。世界はこの作戰を通じて戰ふ神國日本軍の眞の姿を知るべきであり、このマレー血戰記こそは切々として全國民の胸奥に迫り、第四回目の大詔奉戴日を迎ふるに當り更に改めて征戰完遂の誓ひを固くせしめたものである。

シ島攻略までに百日を準備

シンゴラからシンガポールまでの距離は約一千百キロで、約東京から下關までであるといふことは御承知の通りである。詰り東京に上陸して、下關要塞を攻略しようといふのと同じであつて、今までにこれに類する大作戰の記録がない。これをどう突破して作戰をするかといふ点について、過去において何等の記録がない。たゞドイツの西部戰線における作戰とポーランドにおける作戰等の極く短期間のものには、ある程度の基準が出てゐる。私は參謀本部において計畫を樹てゝみた時に、大体ドイツ軍は一日十五キロから多い場合は二十キロの進擊速度をもつて機動力を発揮した。この計算からいふと、北部マレーからシンガポールまでは五、六十日を要することになる。それに上陸までが約一箇月、かうみると三箇月目にはジヨホール・バハルに達するだらう。それにシンガポール攻略に少くも二三週間はみなければならぬと考へて來ると、最も順調に、作戰が出來た場合にシンガポール攻擊は約百日を要するといふことが、まづ一應の目安になつたわけである。私は參謀長から陛下に奏上し奉りし時も、まづ百日を見當に準備をしてをりますと申上げたのである。

若し十一月三日の明治節に開戰となつて戰爭狀態に入つたならば二月十一日の紀元節までにはシンガポールは取れませう、かういふことを申上げて私は出発したのである。紀元節といふことは終始私の頭を去らなかつたが別に理窟はない。たゞ國民的な、祝すべき佳き日に、イギリスの東亞侵略の據点を屠らうといふの

である。私の判斷では十一月三日に攻擊を開始しなければ二月十一日の紀元節にシンガポールを陷すことが出來難いといふ計算が出た。しかし米英に対する宣戰の大詔が渙発せられたのは十二月八日であつたので、十二月八日を最初として計算してみると、三月十日にはシンガポールは攻略出來るといふことになる。

次にこの方面に使用する兵力であるが、〇個師團を中途において返上し、更に作戰において〇個師團を返上し、都合〇個師團を御許退して、自動車〇千輛も途中から返上した。

一番心配したのは　長距離海上輸送の点であつた。三距を基地にして、こゝに出発して數千キロの海上を、敵の飛行機潜水艦の襲撃に晒されながらシンゴラにどうして大兵團を送るかといふことで、果してこの作戰そのものが許されるかどうかといふ点である。常識から申すと、最初は少數の前衛部隊が進み、海軍艦隊の掩護下に上陸を敢行し、そして上陸地点を確保してからのち、主力が上陸するのであるが、今度の上陸はその常識を破つて、いきなり部隊主力がどつと行く。〇個師團といふ大船團が敵の準備周到な方面に向つて、電光拔打的にスポツと上陸するといふ作戰である。東部マレー上陸地点附近には英軍の優秀な飛行場が數個あり、コタバルには魚雷を抱へた英軍爆擊機が虎視眈々として待機してゐる。そこで先づ英軍に我が軍の作戰企圖を察知されないやうに苦心をし、南部佛印に進駐した時のやうに、バンコツクに進駐をするといふやうに見せかけ、南部タイとかコタバルに上陸するのではないといふ望みを英國に懸かせようといふ作戰を執つたのである。極めて大膽に約二十數隻の大船團が堂々と敵の眞先を通つて針路を北方に向け進擊する如くに見せかけて航行し、その途中において、突如百八十度の大轉針を斷行、一路南海を南下、シンゴラに向つて潮の如く殺到したのである。完全な捨身の戰法、肉を斬らして一擊骨を斷つの戰法である。一方海軍の方は初めは『制海權を得ない前にそんな無法に近い作戰は困難だ』といふ意見だつたが、〇〇艦隊の〇〇司令長官といふ人がこれは眞に偉い人であるが、山下軍司令官と話合つた結果、それほど陸軍が固い決意を持つてゐるのなら、よろしい、海軍も一つ全力を擧げて協同しようぢやないか、とこゝに一大決意をなされた。

今一ッ苦心の點は　敵は上陸地点から一〇〇キロから二〇〇キロの箇所に優多優秀な飛行場を持つてゐるのに、わが軍は洋上遠く八〇〇キロのそれも設備の悪い基地しか使用出來ない、南部泰方面に友軍飛行機を進発させて陸上部隊と協力して、泰マレー國境を突破するといふ作戰を執る場合南部泰方面の飛行場といふものは、その規模設備ともに極めて悪い。しかし南部佛印からではマレーまで距離が遠くて攻擊しにくい。マレーに行つて帰つてくるのが最大限である。なかには困難のものもある。そこでこれではいかぬといので探し求めた結果フ・クオクといふ島があるが、この島の中に飛行場適地を見つけて晝夜兼行十五日で飛行場をこゝにつくつてしまつた。これは佛印の総督がなんといつても承諾しないので、眞剣勝負の氣魄で談判をした。そしてこのことは東京にも佛印にも何にもいはずに獨斷でやつた。このフ・クオク岩に飛行場を作つたことが、コタバル上陸作戰の成功の一つの有力なる導因になつてゐる。かくて我が戰闘機も十分上陸地点シンゴラ間を往復出來ることになるので、我が大輸送船團に味方の戰闘機の掩護がつくといふことになり、船團輸送に確信を持つといふわけである。

このフ・クオク飛行場が出來あがつたのは十一月の上旬だつた。

さて南部泰の飛行場といふものは非常に悪いものでいかに優勢な兵力を有してゐても、その優勢を十分に発揮出來ない地形であるといふことが判つた。そこで結論としてはマレー作戰内容を一部變更して、南部タイに一箇月も掛つて飛行場を作らうといふ計畫を放棄して、上陸するや否や間髪を容れず、主力部隊も兵站線確保も待たないで、一個大隊位をもつて、簡二無二突進して行くことにした。

定石無視の快作戰決意

とにかく一歩でも一米でもよいから突進して、ペラクの線まで三五〇キロ、恰度東京、名古屋間位であるが、そこまで、馬車馬のやうに敵中を突破してしまへあつーといふ間に突進してしまへ、とかういふ作戰計畫に變更した。作戰としては常識も定石も踏んでゐない極めて滅茶苦茶な案である。

從來戰つた経驗からして大丈夫だといふ確信を持つて、東京に飛んで參り、作戰一部の變更の報告を中央にしたところ、快く作戰計畫の一部を修正してくれた。これは大本營としてはなかなかの雅量である。私はこの作戰完遂を如何になすか、といふことについて寢ても覺めても頭の中が一杯であつた。そして或る夜夢をみたが、この夢といふのは泰の軍隊とゝもにペラクの橋梁を奪取したといふ夢であつた。そこで私はハツとヒントを得て一つの作戰を樹てた。これは面白さうだ、なんとかいゝ方法はないかと種々考へた揚句泰軍と協同して國境を突破しようと企圖した。しかしこれはタイ軍と英軍とが衝突したゝめ駄目になつた。

シンゴラ上陸　は十二月八日の午前三時四十分、第一回において軍司令官の船を先登に掲つた。この軍司令官が何時上陸するかといふことは、相當問題になつたのであつた。普通の常識からいへば、一個師團位上陸して地歩を確保してから上陸するのである。山下軍司令官は師團長として同行しよう、同じ運送船で行かうといはれ実行された。然し敵の飛行機、潜水艦の猛爆は當然覺悟しなければならぬから、運送船では危險であるから、是非軍艦で行つて貰ひたいと、幕僚や海軍からいはれたが、危險な輸送船に大切な兵隊を乗せて、自分だけ安全な軍艦で行くなどといふことは絶対に出來ない。自分は師團長と同行するといはれた。

この時のお菊持は船團の三分の一は喪ふといふことを見越されて軍司令官か師團長のいづれかの船は沈むであらう。若し自分が沈んだならば師團長が軍の指揮を執れ、万一自分が沈まず、師團長の船が沈んだならば自分が師團の指揮を執る。師團と運命を共にしようといふ悲壮なる覺悟の下に船團を指揮されたのである。

船團は異常な雰圍氣に包まれて順々として南海の夜を縫して進み、シンゴラ沖に到着してみると実に嬉しかつたのは、シンゴラの港には、灯が煌々と点いてゐるではないか。燈火管制もしてゐなければ、全くの無警戒状態であつた。上陸して先づ領事館に乗込むと勝野領事がびつくりして飛起きた。そこで前に打合せした〇〇の準備はどうかと訊くと、何も知らない。八日上陸といふことは何も届いてゐない。それで〇〇の計畫が崩れたわけである。そこで躊躇してはゐられぬから一個中隊をもつて英國の領事館に飛込んだ。英領事のいふのには支那の兵隊か？といふので、違ふといふと、今度は、ちやタイの兵隊か？と訊く。それで馬鹿

をいふな落着いてみろ。日本から來たのだ。といふと、わつ！といつて手をあげてしまつた。その時の態度はまさに驚愕そのものであつた。

つぎに勝野領事と一緒にシンゴラの警察署長のところに談判に行つた。こいつは非日の奴であつて、署の前二十メートル位のところまで、領事と一緒に行くと突然急射撃を浴びせてきた『日本軍は決してお前たちをやつつけに來たのではない、イギリスを叩きつけるために來たのである、お前たちの味方である、射撃をやめろ、誤解だから止めろ！』と叫鳴つたが意外に手間取り、第一日の作戰行動は多少の齟齬を來たした。これは午後三時頃までに全部片附けてしまつた。そこから自動車に分乘して更に

國境に向つて突進

して行くと、國境附近において、タイ國軍とイギリス軍とが交戰をしてゐるといふ情報が入つた。さうしてゐるうちに佐伯中佐といふ○兵の隊長が兵二百名を率れてやつて來た。この隊長は実に積極的な隊長で、私がこれから國境を突破して敵中を引掻き廻すのだといふと『よろしい○君、私も一つ行きませう』と即答してくれ、僅かに二百名で行かうといふ。この時敵の機械化部隊の大集團が急遽北上してくる、といふ情報が飛行機から入つた。待つ間もなく戰車一個中隊、野砲一個中隊を配備して突進して來る。上陸以來サダオにおいて初めてイギリス軍と手合せすることになつた。そこで戰端を開始し夜襲をして敵の戰車を分捕つてみると、非常にまづい戰車であつて、屋根が第一ない、我が軍の戰車に比して非常に粗い、手榴彈を上から投げられたらおしまひだ。こんな戰車なら何百やつて來ようが大丈夫だ。

九日の夜遂に泰マレーの國境に到着した。英領マレーは不氣味に沈默してゐて銃聲一発せず敵兵も一人も見當らない、妙な靜寂さで、ジャングルが黙く塊つて墨色に、氣持の悪い風が流れてゐるだけである。これは想なものである。ゐると思つてゐたところに敵が一人もゐないといふことは、何か敵に謀略のあるやうな氣がして薄氣味悪いものである。しかしぐづ〳〵も出來ないし、敵がゐないのに何も遠慮は要らぬと思つて、九日夜にどん〳〵國境を突破してしまつた。入るや否や大爆音とともに國境内五百メートルのところでひどい爆破をやられた。そしてはじめて敵の銃砲の猛烈な洗禮を受けたが、実は攻撃を受けて安心をした。これは

面白い戰場の心理

である。敵の攻撃を受けてはじめてホッとして、なほも私が曾て教へたことのある大島大尉と二人して尖兵の先登を並んで行くうち、第二の橋梁爆破にぶつかつた。大島大尉は早速偵察し敵はゐるが大したことはありませんとのことだつたが、すぐ二十メートル程さきのジャングルの中から得体の知れない聲が聞えて來た。途端我々に向つて一斉射撃をして來た。そこで尖兵に突撃を命じると、兵は銃聲を潜りに眞暗なジャングルの中にセパードのやうに素早く勇敢に突込んで行くのが闇になれた眼に判る。ジャングルは一瞬混乱に陥り各所に壯烈な白兵戰格闘が展開された。その間も敵機銃はジャングルの闇を閃光を放つて猛射し續ける、鑛戰しつゝ息詰るやうな○○分の後、敵の潜むジャングルから夜眼にもそれと判る白い信号燈があがつた。それと同時に自動車のエンジンを掛ける音がして來、敵の銃砲火が一段と猛烈に集中されて來た。

敵の逆襲だと思ひ、ジャングルの中に腰を下ろしてちつと対策を考へてゐると、エンジンの音が次第に遠のいて行くので、こだは變だな、と思つた瞬間、しまつた、これは敵の退却だ！と直感したので、部隊に大聲で『敵は遁げたぞ！追撃だ！』と叫鳴り、兵とともに直ちに夜間追撃にうつつた。潰走しはじめた敵はもう統制がとれず、遁げるばかりで、遂に敵戰車数台を分捕つた。これが國境内における英軍との緒戰とでもいふか、第一回の遭遇戰であつた。

潰走する敵を追討ちしたのであるが、悲しいかな、遁足の早い敵が橋梁を爆破し、一時追撃が出來なくなつた。そこで私はかうした戰法で敵に遁げながら橋梁を破壞されたのでは駄目だと思つた。東京から下関までの區間に相當する距離で中には天龍川、大井川、利根川のやうな河や大きな橋があるのだから、まど〳〵してゐると一年かゝつても行けないぞと考へ、今までは爆破された橋梁を歩兵部隊が勇敢に突破して夜襲で敵を追散らし、その後を工兵が行つて架橋をしてゐたのであるが、今度は歩兵の挺身隊が敵の陣地の奥深く進入して早廻りし、橋梁の爆破を防止すると同時に、爆破された橋梁に対しては、歩兵の掩護下に工兵が挺身、夜間等を利用して敵前架橋をなし、出來上つたならば、戰車を持つてくる。戰車の後方にはトラックに乘つた歩兵を持つて來て、渡河前進する。そのうちには挺身歩兵隊がまた夜襲でもつてさきの橋梁を確得する。この時にはもう既に後方の橋梁は出來てゐるから味方の機械化部隊が突進して行き、敵の戰車、自動車と一緒にこんがらかつて追撃して行く。さうすれば敵は橋梁を爆破しようと思つても、味方の戰車、自動車が一緒に交つてゐるので爆破することが出來ない。その隙に敵に交つて國子になつて敵中に飛込んでしまへといふ戰法を採ることにし、一氣に敵中を突つ切らうといふことになり、この新しい着想を○○部隊長に申上げた。とにかく今度の戰爭においてはいかにして

橋梁を確保するか

といふ点が最大であつて、潰滅死体や鹵獲兵器よりも、橋梁の確保のはうがずつと大事であつた。アロルスターにおいては、自動車蛍引車に乘つた浅井といふ小隊長以下決死の十名が勇敢に敵中を突破、アロルスター橋梁に向つて突進した。橋梁に近づいたとみると、対岸から急射撃を加へて來た。そこでオートバイに乘つてゐる中山と金子といふ伍長二名と速度を速めて驀らに敵中に躍込んだ。と同時に凄絶な死闘が始まつた。一名は戰死一名は重傷を負つたが、敵のひるんだ一瞬の間隙を利して○隊長はサイドカーを飛降りアロルスター橋梁の両側に設置されてゐる爆薬の電線を切断しようと、敵の猛射中に悠々と作業、その一、二の切断に成功した瞬間、轟然たる大爆音と共に、他の爆弾が炸裂この橋梁は微塵にふつ飛んでしまひ、己が肉体も二百メートル位に分散してしまつた。爆弾三勇士にも劣らぬ実に壯烈無比の一瞬です。この○隊には山下軍司令官から感状を授與されてゐるが、自ら友軍の犠牲となつて勇敢散離し、他の橋梁を、その間に取らし部隊進撃を可能ならしたといふ爆弾三勇士以上の奮闘である。

ジットラ線を潰滅す

ジットラ・ラインはコタバル、クワンタン、メルシンなどとともに敵第一線の防禦陣地であつたが、日本人はあの一帶に一切入れなかつたので、ジットラに陣地があるといふことなどは誰も想像してをらなかつたのである。実は私共も全然知らなかつた。國境の戰闘はこの辺から始まつたわけである。○兵○個隊に極めて優秀な戰車十台と野砲二門、工兵二個小隊を配属し總計四百名で佐伯茂隊を編

成し、決死の挺身隊として、一路チャンルンの陣地を突破し、敵に追尾してジットラを屠り、ペラク河まで一日か二日かで行かうといふ計畫を樹て、十一日の晝頃よりチャンルンの陣地を攻擊した。

チャンルンの陣地は晝頃攻擊を始めて午後四時過ぎ突破したが、殘念ながら橋梁が少しの差で爆破されたので、この戰法は少々遲れ約二時間遲れて午後六時に佐伯枝隊は、橋梁を完全通過した。その頃から正に天佑神助とでも申すか、桶狹間の信長の奇襲の時を偲ばせるかの如き大スコールが猛然と襲來し、自動車の窓を滝のやうな豪雨が横なぐりに叩きつけて、自動車の雨よけを幾ら動かしても全然視野が利かない。從つて戰車自動車の轟音も敵に察知されぬわけで、これ幸とばかり、戰車自動車を駆つてアスファルト道路を驀らに前進して行つた。約二〇キロ突進したとをもふ頃、敵の大砲がいくつもこちらを向いて置いてあるが敵兵の姿が見えない。これはをかしいぞ、と思つてゐるうち、小銃彈が左右から飛來しはじめた。スピードをかけて更に前進すると、ゴム林の中に五、六十台から百台に近い敵のトラックがあり、戰車も交つてゐるが、やはり敵兵はゐない。敵彈の飛來するはうをよくみると、ゴム林の小屋の中から彈が飛んでくることが判つた。それでなる程――と判つた。といふのは余り雨が激しいので戰車や大砲まで道の傍に置放しにして小屋に入り、天幕なんか張つて雨の歇むのを待つてゐた。我々がそこに行くまでは日本軍の戰車や自動車がやつて來ようなどとは夢にも思つてゐなかつたらしい。そこに突如として日本軍の戰車十台と裝甲車、トラック、乘用車などが進入して來たので、敵は非常な周章てかたで、盲射ちをしながら戰車、トラックで潰走しはじめた。

その眞ッ唯中に

友軍戰車が唸りをあげながら飛込んで行く。味方の戰車と敵の戰車とまた味方の戰車といふやうに、戰車のサンドウキッチが出來た。そこで敵の戰車を射たうとしても、味方が余りに近くといふよりは隣合つて前後に進んでゐるので、射つことが出來ない。そこで我が戰車では天蓋を開いて、我員が雨中を疾走する戰車から半身を乘出して一擲一彈必殺の氣魄を籠めて手榴彈、軽銃をもつて敵戰車を攻擊した。ハンドルを切り損つて道端に頭を突込むものや、彈き飛ばされるものや、二十台位の敵戰車を蹂躪してしまつた。十一日の夜の十二頃である、枝隊長と一緒にゴム林の一角に立つて、今度は少し面倒ですな、このまゝの狀態で行けば、路は一本しかないし、大した獲物もないし夜が明れば幾ら敵砲兵が下手でも射たれるから、夜の明けぬうちに陣地を突破してしまはうといふことに決め、枝隊から將校斥候を出すことにした。

これが若い美少年の將校斥候であつて一時間くらゐ経つて帰つて参り、その報告によれば『大した敵ではなく、而も胸くらゐの水深だから渡れますし、歸途イギリス兵が三名をりましたから血祭にあげて来ました』といふ。そして『大した敵ではない、私が案内します』といふので、非常によろこんで、本田中尉の指揮する一個中隊はたゞちに夜襲を決行した。時まさに午前四時、間もなく猛烈なる彼我の銃砲聲が靜寂を破つて交叉しはじめた。私はこの銃砲聲を聽いてゐるうちどうもこれは少し感じが固いぞといふ氣がした。

銃砲聲から判斷して

敵もなかなか頑强であるぞ、と感じた。そのうち負傷した兵が帰つて來て報告するのには、敵は非常な大部隊で、鉄條網も二線も三線もあり、トーチカまである。中隊はトーチカ陣地に突入して唯今手榴

彈戰の最中である、といふ報告である。これが午前四時過のことであつた。

どうもをかしい、と私は思つた。佐伯部隊長も同腕をしつかと組んで、默然として闇のゴム林の中に佇立してゐる。そのうちに敵は砲彈をゴム林に滅茶苦茶に射込んで來た。忽ちゴム林の三分の一位はふつ飛んでしまつた。そこでゴムの樹を傳ひながら、轉々と五分おき位に位置を變へ敵の猛射を避けた。かうして枝隊本部が敵の集中射撃を受けつつある時、東の空が仄かに白んで來た。そして彼我の銃砲聲は益々熾烈の度を加へ第一線の狀況は次第に切迫を加へ死傷も增大して來たので、〇隊長は今一中隊をして左前方の敵に対し攻擊開始を命じた。二個中隊あれば大丈夫だらうといふことになつた。戰車を增援させようとしたが橋梁が爆破されてをつて駄目なので砲をもつて取敢へず掩護し、壯烈な激戰を繰返して、午前八時頃には、約半數近い死傷者を出してしまつた。

〇隊長は敵の集中射撃の裡に腰を下ろして『〇君、俺にもいよいよ最後の時が來た』とかういはれた。そして『私はこんな堅固な陣地はないと思つて夜襲を命じましたが、豫想外に堅固で、このまゝでは〇隊は全滅のほかはない。私も〇隊の將兵と死を共にしたいと思ひます。狀況の判断を誤り部下を苦戰に陥れ洵に申訳ない』と悲壯に覚悟の程をいはれたので、私は『いやそれは違ふ、軍の作戰主任参謀が同行して、私がよいといつてやらしたので責任は私にある』と申した。そして『それでは一つ第一線將兵と運命をともにしよう』といふことになつたが、夜が明けきるとともに敵の砲火は実に言語に絶する程熾烈を極め、につちもさつちも行かない。連絡も何にも全然取れない。まるで身動きが出來ない有様だ。そのうち印度兵が一名のイギリス兵を伴れて投降して來たので、イギリス將校の持つてゐたといふ地圖を見ると

驚ろくべき大規模の陣地帶

の編成が書かれてゐる。全く完璧の陣地であり、一個師團の兵力をもつて攻擊しても、三箇月位は確実に維持出來る陣地である。この堅固な敵陣に僅か四百名足らずで闇にまぎれて飛込んでしまつた。その結果二個中隊の半數が死傷し、未だに苦戰をしてをり、增援は當分見込みないといふ狀況である。そこで一應〇隊はゴム林に待機し、兵團長にこの狀況を報告、指揮を仰ぐべく方針を樹てゐた時、一人の兵隊が全身血潮れになつて上半身素裸のうへに繃帶をして、その繃帶は眞赤に血で染つてゐたが、そのままクリークを泳いで報告に〇隊に還り、〇隊長の前に不動の姿勢をとつて據銃をやり『本田〇隊長は重傷であります。しかしながら〇隊長はじめ〇隊全員非常な元氣で奪取トーチカを確保してをりますから御安心下さい』と報告し終るとバッタリ倒れてしまつた。抱き起してみると胸部貫通銃創でまさに瀕死の重傷である

そのうち〇隊長から報告があり『〇隊は直ちに橋梁に向つて突撃せんとす！』といふ報告が來た。この時実に〇隊の兵力は三十名位である、そこで『中隊を見殺しにするな、救援せよ！』といふことになり、增援に刮着した二個聯隊を整列させて、準備も何もない、直ちに突進せよ！といふので、ゴム林を縫つて猛射をくゞり軍旗とともに突撃、優勢な兵力を有する堅固な陣地に我が方はわづかに四百名で攻撃を敢行し、しかも味方の損害は二分の一を突破し、乾坤一擲最後の突撃をやつた際、敵は退却を開始し、間もなく潰走をはじめた、これがジットラ・ライン突破の真相である。

ジットラより辛くも遁走したインド兵、濠洲兵は英本國兵によつて、後方陣地

に『日本軍はすごい』といふ恐怖と感嘆の放送がされる。このジツトラ陣地の突破といふことは、緒戰においてわれに速度を與へ、味方に必勝の確信を與へ、敵には恐怖、動搖、必敗の感を與へたといふことになり、實に英軍に與へた有形無形の打擊は大きかつた。

アロルスターの飛行場　を占領すると、ガソリンを燃やす暇もなく潰走してをり、こゝに一千本、あちらに二千本といふやうにドラム罐が轉がつてゐた。わが飛行隊はこの飛行場占領と同時に、南部タイの悪い飛行場を便はず、敵の整備準備した優秀な飛行場において、敵の高性能ガソリンを利用して活躍活潑な行動を開始すべく、南部佛印からどん〳〵躍進して行つた。その結果地上友軍部隊に協力して潰走する敵に爆擊したり、陣地の攻擊に協力するといふ作戰が、ケダン州において行はれた、タイピンをとつたのが十二月廿三日、ペラクをとつたのが上陸後十三日三百五十キロを突破してペナンを攻略し、三箇月保つといはれたジツトラ・ラインを强行突破し、ペラクの橋梁の線に到達した。

私は、作戰計畫において困難を感じたことは、かういふ河の多い地形において○○兵團の進擊をどうするか、それからクアラ・ルンプールに至る道は大ジャングル内の一本路で、いかにこの大ジャングルを切拓いて行くかといふことで、最初の問題は、シンゴラにあつた大きな○○艇を、汽車に積んで印度洋に運び、これによつて進擊する計畫を樹てた。これもまた無茶な話で、當時はまだ敵の海軍も全軍も相當あり、武裝の何等ない舟艇で、海上より敵の側背に移動進擊するといふことは、無茶のやうであるが、敵の背後にぐんぐん入つて行き、敵を攪乱しようと考へた、ペラクの橋は爆破されないやうに努力するが、万一爆破された時の対策も考へておかねばならぬ。それで上陸直後、既に舟艇を例すといふ準備をした。作戰は十日ないし廿日間先を見通しながら、先手先手と打つて行くのである。○○兵團は、敵が天然の要害と恃んでゐたペラク河をあつ一といふ間に渡河し、また長驅路も突破した。これは想像もおよばぬ大ジャングルで、人は殆ど通ることは出來ないところである。

不眠不休五週間の急進擊

タイピン附近から○○兵團の○隊を合計五十隻の舟艇に分乘せしめ、大晦日の三十一日進發させ、元旦にさきがけて

カンパル陣地の攻擊　をした。背後に廻つた○大隊は、敵を側面に睨みながらスマトラを基地にして、飛來する敵機の攻擊下に堂々背後に奇襲上陸を敢行するといふ作戰をとつた。この計畫に対し軍司令部では、○○の驅逐は半分は沈むだらうと豫期した。三十一日夜舟艇は順々と進發し、元旦の朝敵機の猛烈な空襲を受け、若干の死傷者を出した。ところがこのカンパル方面はなかなか堅固で、はか〴〵しい進捗をみない、そこで○○兵團の精鋭新部隊が到着したので、これに舟艇を與へて進發させた。

これは対し○○○としては全飛行機をもつて、これを掩護することになつた。成功を神に祈りながら、第一線舟艇部隊に、余り危險のやうな感じを與へないやうにし進發させた。ところが、私達のひそかなる心配を他處に、奇くべきことには、この○○の舟艇部隊はぐん〳〵南下進擊して、一部一中隊は、夜にまぎれてイギリス軍港に進入した。イギリス海軍もまさか軍港の中にまで、日本軍が入つてくるとは思はなかつたらうから、大いに慌いた。そして無防備の○○の舟艇だとは思はず、てつきり日本軍の偵察だらうと誤認し、余り交戰をせずに遁げてしまつた。

こんな大膽なことをやるとは私も思はなかつた。これはイギリス指揮官が悲鳴をあげた戰法だ、この快勝の影響が直ちに各方面にひろがり、マレー聯邦の首府であるクアラ・ルンプール攻擊においては、殆んど大なる抵抗も破壞もなしに我軍に占領された。このクアラ・ルンプールの陷落が、全マレー英軍の士氣の上におよぼした影響は、実に甚大であつて、シンガポール陷落も比すべきもので、この陷落により、全英軍崩潰の兆候はいよ〳〵顯著となつた。

この背後海上迂回によつてあげられた戰果で見逃し得ないことは

スリムの殲滅戰　で、これはその途中において行はれたものである。これは有名だから私が申上げるまでもないだらうと思ふが、スリムの殲滅戰といふものは、突破戰法で破つたジツトラの戰とは異なり本當の殲滅戰である。即ち『ジツトラ』の戰は敵の精神に大打擊を與へたものであり『スリム』の戰は敵の息の根を止めたのだ。

○○隊の驅隊長は、なか〳〵元氣ある人で、これに戰車二個中隊を配屬せしめ先づ敵中を突破、一月七日の朝攻擊を開始し、島田といふ中隊長は敵陣中悠々無數の地雷を處理し、午前五時を期して、一氣に敵陣を突破し、九谷大隊長は敵の退路に出て歩兵戰車工兵が完全一体になつて、敵陣を奪取したが、橋梁にはやはり爆破用電線が張つてある。これをみた戰車隊の渡辺といふ若い少尉は、一躍戰車から飛降りて敵の狙撃を受けつつ、悠々と電線を切斷し、爆破を防いだ。そして敵の本部を急襲し、二十キロにわたり戰車一中隊をもつて蹂躪し、なほ進擊中スリムの附近で百メートル位の大きな橋梁に直面し、その橋畔に敵の旅團司令部らしいものがあつたので、これに対して戰車十台をもつて集中射擊を加へ、旅團長以下ふつ飛ばしてしまつた。そしてこの陣地を突破して進擊した。我が方も相當な被害があり、ある戰車の如きは、敵の十五サンチの砲弾が命中し大きな穴があいてゐた。そして中にゐた小隊長は、あとかたもなくふつ飛んで戰死、銃手は銃把を握つたまゝ、操縦は操縦桿を握つたまゝ壯烈な戰死をしてゐた。

この戰において、野砲三、四十門を分捕つた、遺棄死体も五百を越えてをつた。何しろ一本道路なので、武器などをもつて逃げてゐられない。皆物を捨てゝ体一つで潰走した。捕虜等は実に無數で一々構つてゐられない。吾々が前進すると、道路の両側には、ずらりと捕虜が長蛇の列をなしてをり、その眞ン中、敵中のやうな感じのするところを我が軍は猛追擊した。我々をみると、捕虜達は敬禮をして見送る。スリムの殲滅戰といふのはこんな有樣だつた。

このスリムを潰走した敵は、もはやグリブレドーの線にもとどまることが出來ず雪崩を打つてクアラ・ルンプールに潰走した。そしてこのクアラ・ルンプールを過ぎた敵は、もうジョホールの北までとどまることが出來ぬ。我が軍の進擊もいよ〳〵拍車を加へ一氣呵成に

ジョホール州　に殺到した。クアンタンの海面は実に完璧の防備施設を持つてゐる。困難な通行不能な大ジャングルを昼夜餐行で强行突破してクアンタンの背後に出るなどといふことは、定石外でイギリス軍は全く考へておらなかつたらしい。実に難路を一日平均九里乃至十里を、不眠不休、飲まず食はずで强

行突破奇襲をしたのである。これを敢行したのは〇〇兵團で、非常に强い部隊である。

次に問題は、クアランルンプールを占領した〇〇兵團だが、シンゴラ上陸以來三十五日間、殆どこれまで不眠不休の大進擊を續け、相當疲勞の色が見えて來たので、代りに〇〇、〇〇兵團を以て海岸方面より舟艇にのせて進擊させることにし、〇〇兵團には暫らく休養させることにした。そして〇〇師團の一部に戰車〇隊と工兵を配屬させ特別攻擊隊を編成してクアラ・ルンプールからゲマスへ向つて突進させた。百五六十キロの距離であるが三日と計算してこの間に〇〇兵團には息をつかせた。主力部隊が悠々と休んでゐる時に、快速部隊が工兵を連れて進擊を續け途中の橋梁をみな修復して、部隊の進擊を容易ならしめ、後續部隊主力は一氣に一五〇キロを自動車で突破すれば、結果からみて休まないとおなじことになる。こゝで〇〇兵團は一息入れてから英氣を回復し、ゲマスからジヨホール州の作戰に再びその威力を縱横に發揮したのである。

一方〇〇兵團は、大膽極まりなき海上機動を敢行しながら、逐次側背から敵に無言の壓迫を加へることになつた。敵は今までの敗戰を嘆止め、シンガポール防衛のためにも反擊をせんとし、その最後の抵抗線をゲマスに布いたのである。これは眞面目の抵抗線である。〇〇の一個大隊は、ムアーの線で約一週間激戰を展開してゐる。その半數は損害を蒙るといふ激戰であつた。そしてこの大柿大隊の如き、遂には〇〇中尉が大隊の指揮をとるといふ有樣であつたが、勇戰し、敵の旅團長以下を捕虜にするといふ大戰果をあげた。頑强に抵抗はしたが、この抵抗線も我が精鋭の前には二週間で潰え去り、クアランルンプール、ムアル、ゲマスの抵抗線を喪失した敵はいよ〳〵こゝにシンガポールに敗走し、シンガポール攻略といふことになる。

シ島敵兵力の分散に成功

もと〳〵シンガポールには、私どもの判斷では、海正面の防禦は相當にあるが陸正面の防禦は大したものではない。四十五サンチの巨砲も、大部分海正面の攻擊に對してのものである、そして我方の意見も敵が遁走しはじめたのでシンガポールにおいても案外簡單に遁げるだらうといふのと、最後の一兵まで抵抗するであらうといふ二つがあつた。一月十一日午前我が先遣部隊がクアラ・ルンプールに突入し、十三日に主力が入つた時から私共はシンガポール攻略の作戰を樹てた。そして私は、野砲一門に対し、彈一千発を當てたが、これは陸の戰鬪としては豐富な彈である。舟艇は〇〇〇隻を計算した。そして作戰の主眼としたことは、軍の全力を擧げて一兵もあまさずに戰鬪に參加させるといふことである。

そこでできるだけ早く鉄道を修理してジヨホール・バハルの線に一門一千発の割合で彈丸を急送するやう案を樹てたが中には『〇參謀はどうかしてゐるのぢやないか、そんな無茶に多い彈を運つて何をするのだ、そんなに敵は强くない』といふ意見が出たが、私は『いやさうぢやない、絶はんで濟めばそれに越したことはないが、作戰は最悪の場合に應ずる準備をも講じて置かねばならぬ』と通張つた。それで攻略作戰は大体〇〇、〇〇兵團と〇〇、〇〇兵團を攻擊にあて、シンゴラに上陸した〇〇、〇〇兵團を全トラックをもつて シンゴラまで迎へて行つた。詰り下關に上陸した部隊を東京からトラックを派遣して下關まで迎へに行つたといふ訳である。

海上妨害の多いところを、危險を冒して兵團を輸送するよりは一兵も損せずに、制海制空權下の安全なシンゴラに揚陸しようといふことに決り、上陸地点を變更したわけである。一月三十一日には私は確実なる見通しをつけ、總ての計畫を進めた。

最初の攻擊の作案

としては、新鋭〇〇、〇〇兵團をもつて、敵の脇腹に匕首をつきつけ、〇〇、〇〇兵團は陸橋方より進攻、〇〇、〇〇兵團は西から行かうといふ案を樹てた。ちつと考へてみると〇〇、〇〇兵團はかなりの損傷をこれまでに受けた。〇〇、〇〇兵團は極めて新鋭である。一方英軍側を觀察すると、敵は續々兵力をシンガポールに集中して、チヤーチルなども最後の一兵まで戰へといふやうな放送を頻にしてゐたので、敵が如何なる手を打つて來ても絶対に大丈夫な案をとらうといふところにおいた。そして軍の一兵一銃と雖も無駄なく攻擊に參加させ、敵を分散せしめる作戰を執つて、その間隙に乘じて、我が方は集中攻擊を敢行しようといふ案を樹てた。これがためには我が作戰企圖を敵に察知されないやうに努めることが第一要件であり、その次ぎには敵部隊を出來るだけ分散せしめておき、こちらは一点に集中するといふ方針を執らねばならぬ。

そこで各兵團の狀態を考へ結局〇〇、〇〇兵團はシンガポール島に沿つてジヨホール・バハルから東方にニセの行動を起し、東方ジヨホール水道方面より渡過する如き夢をみせ、積極的に戰を挑み、〇〇、〇〇兵團は眞中に集結して、敵を威壓し、〇〇、〇〇兵團は後方のゴム林中深く徹底的に隱す、といふ作戰を執り、この基礎態勢の下に將校斥候だけをジヨホール・バハルの線に沿つて出沒させ、附近住民には三日以内に二〇キロ以北の線に全部引揚げさせ、一人も殘さないやうにした。これは機密漏洩防止と危險を避けるためであつた。これで實は私は閉口したのだが、狀況を觀るため自動車を驅つて行くと私のうちの子供みたいな八つか十位の子供を連れ、赤ン坊を背負つた女が、力なく、しかし一生懸命に、北に向つて避難民もまた長蛇の列をなして北へ北へと避難してゐたが、これをみた時私はこの民衆にこれ程の苦勞をさせねばならぬかと思はずホロリとさせられた。しかしこんなところで脆い氣持を出してはいかぬ、心を鬼にして、知らぬ顔をして通り過ぎたが、結果からみて、この住民を退去させたことにより、最後まで敵は我が企圖を察知出來なかつた。藤原は先程申したやうに一門一千発でジヨホール・バハルの線に重砲を全部展開させて、〇〇、〇〇兵團は東方におき自動車の往復を頻繁して、夜間などもヘツド・ライトを東方に敵を牽制するに努めた。

陣頭指揮の軍司令官

ジヨホール水道にウビン島といふ小さい島があるが、この防備に弱点のあるのを探知し、二月八日の夜主力の渡る前の晩に、約四百名で夜襲占領した、かうして敵軍に東方からシンガポール島攻略の定石の実行の如く見せかけた訳である。

八日の晩は私もこの水道の岸に立ち、戰況を視てをつたが、秘かに感嘆したことは、妙な顔ひたが、なるべく激戰になつてくれどうか一つ、敵が猛射を始めて

くれと顧ひながら、ぢつと視てゐると、夜襲の舟艇は枚を銜んで黙々と水道を渡過、ウビン島に向つて進撃して行く。緊張の叡分がすぎたが、潮騒のほかに銃聲一つ聞えぬ。そのうちウビン島から上陸成功の信号燈が揚つた。しかし依然として靜寂そのもので、憤懣ながら期待してゐたやうな激戦にならない。それでウビン島上陸によつて、敵の注意をこの東方に集中兵力を分散させる計畫は一應うまく行かなかつた。それで仕方なしに山砲をこのウビン島に揚陸して、こゝからシンガポール島にビシ〳〵叩き込んだ。

八日の晝になつて、敵も少し應射をして來、そのうち段々砲聲が激しくなつて來た。これは厭があるなと、一先づ安心して、別の渡渉を指導したのだが、両軍の火砲はまるで両國の花火を観るやうに壯観で、一門一千発といふ、とてつもない砲彈を、思ふ存分使つて、百門の砲が一斉にシンガポール島に砲彈を叩き込んだので、まことに壯絶な光景で、殷々たる砲の咆哮は、既に完全にシンガポールを制覇した感があつた。この位壯快な戰をしたことはなかつた。

山下軍司令官は、どこにをられたかといふと、ジヨホール・パハルの突角であつて、ジヨホール王の宮殿であつた。六十日のマレー作戦中、天幕を張り、まるで乞食生活をつゞけて來たので、イギリスの東亞侵略の據点シンガポールが、今正に我が百門の火砲の咆哮の前に潰滅し去らんとする時、これを見晴しのよい王宮から作戦指導するといふことは、何かイギリスに対して小氣味のよいものであつた。そして〇〇、〇〇兵團作戦主任参謀を電話で呼出して軍司令部はジヨホール・パハル突角に進出せり！といふと、各兵團とも『軍司令部が前方に進出したぞ』といふのでどん〳〵兵團司令部を前進させてゐるといつた狀況で八日の夜十二時を期して豫定通り各兵團は

敵前上陸を敢行

した。成功を祈りつつ待つことしばし青い信号弾が夜空に尾を引いてあがる。〇〇、〇〇兵團の上陸は成功したのだ。ついで赤い信号弾があがる。遂に〇〇、〇〇兵團の敵前上陸も成功したのだ。南海の夜空に、大小の光を現いて、銃砲彈が実に美しく交叉しつづける。八日の夜はジヨホール州方面からシンガポールに向けて、かなりの颱風が吹いてをり、味方の砲聲は、マレーを揺がして、腹の底まで轟きわたるが、シンガポールから射つてくる敵の銃砲聲は余り聞えなかつた。それで実は第一線兵團の敵前上陸も、比較的楽に出來たと錯覚を起して、報告を欣んで待つてゐると相當な激戦を報告して來た。

十日の朝は、〇〇、〇〇兵團も、シンガポールに渡渉、テンガー飛行場あたりに進出したが、私はそれより少し前に、牟田口閣下のところに行つたが、兵團司令部を、のぞいてゐると今作戦を練つてゐられる牟田口閣下の左肩に、血がいつぱい滲んでゐるのに氣がついた。『どうなされたのですか？』と訊くと、手を振られて『默つてをれ』と合圖された『これはやられたな』と私は瞬間思つた。しかし牟田口閣下は、部下を心配させまいとして、天幕の中に立つて、平然と指揮をしてゐられる。ふと氣がついたのだが幕僚の数が足りない『井野参謀はどうしたのです？』と訊くと『殘念ながら重傷を負つた』といふ。そこで『何んの傷だ？』と訊くと『手榴彈創だ』といふ。そこで私は兵團長が負傷し、兵團参謀が手榴彈で重傷を負ふやうでは、これは並々ならぬ激戦だと思つた。砲彈破片創や、銃創ならなんでもないい、戦場において普通のことである。しかし手榴彈創となると少し違ふ。手榴彈は近接戦でなければ使用しない。普通十五メートル以内で使用する。つまり兵團司令部は、敵と十五メートルの近距離にあつて戦つたことになる。死傷はどの位あるかと調べてみると一千名からある。

彼我の殷々たる銃砲聲と戦車の轟音、飛行機の爆音、爆彈の炸裂音の裡で私は立竦して考へた。種々の情勢を即断しながら作戦を樹てた。〇〇、〇〇兵團の一部は

ブキ・テマ高地

に向つて突撃した。一回、二回狀況は變らない、私の見た一部隊は世名をもつてトーチカに突撃して行つた。敵味方の遺棄死体の中で壯烈な白兵戦が展開される。かういふ狀況であつた。狀況は砲兵の威力を要求する。しかし軍の決心は今十日夜、夜襲を決行し銃劍の力をもつて敵の主陣地を奪取し明日の紀元節までにブキ・テマ高地を万難を排して確保せよ！といふ方針に決した。損害またやむを得ないといふのである。

これに対し牟田口閣下は『軍がさういふ方針ならば万難を排して今から攻撃を開始しませう』と突撃を命令された。他の兵團も〇〇兵團が突撃するならば、砲兵の援護など要らぬ。歩兵の銃劍だけで突破してみせる！　と悲壯な決心をもつて十日ブキ・テマ高地の奪取方針が決つた。

これには私確信があつた。敵は如何にもあはてゝ動揺してゐる。味方の有力な砲兵を持つてゐたのでは敵にも落着きを與へることになる。こゝで二、三日の暇を敵に與へたならば、敵も増援し、コンクリートの主抵抗線に入つてしまつふ。さうすれば、十日や二十日攻撃しても、簡單には拔くことは出來ない。潰走する敵に追迫り、敵を動揺さしてゐるから今攻撃の潮時だと決断した。これは結果からみると見事に圖に當つた。各兵團は極めて勇敢な行動で攻撃を開始し、十日午後五時より夜襲突撃により白兵戦を敢行、十一日早朝遂に標高一七七メートルのブキ・テマ高地を奪取した。この奪取によりはじめてシンガポールを取つたといふ感がした。

兵に泣く牟田口兵團長

十一日の午前飛行機によつて降伏勧告を行ひ降伏ビラをバラ撒いた。ところが十一日の夕方になつても返答がない。それどころか十一日の夕刻に至り、戦局は今までにない激烈さを加へて來て、実に凡ゆる火砲を使用しての敵の猛射は物凄く、第一線部隊は攻撃前進が出來ない。機をみて敵は猛烈な勢で逆襲して來た。彼我大小三百の火砲は狂つたやうに咆哮をつゞける。ブキ・テマ高地は火柱に包まれた。しかし我が第一線部隊は十二日より一寸刻みに敵を壓迫、十三日朝にはマクリチ貯水池を占領、ブキ・テマ砲台附近では肉彈戦を展開、アンモキオ渓谷の激戦は彼我入亂れて物凄く、右翼部隊はバシヤバンジヤン附近のキヤブロード要塞を攻撃した。

この頃には我が砲兵部隊も戦闘に参加、市内中央部ブアーレル公園やカニング兵營附近の、敵重砲部隊と熾烈に交戦する。恰度〇〇重砲が戦場に到着したのでこれに対し『シンガポール市内の目星しい建築物は何れも軍事施設なるを以て片端から破壊せよ』と命令した。この戦闘が余り物凄いので総督夫人が蒼くなつて、総督に『こんな怖ろしい戦は早くやめてくれ』と頼んだ。これは十五日であ

る。かういふことがシンガポール陷落を早めた一つの有力なる要因になつてゐるかも知れん。シンガポールはなか〳〵陷ちるどころではない。イギリスにしても列國に対する面目問題もあり、一等國としての誇りもあり、またシンガポールの陷落がおよぼす重大な影響といふことはよく知つてゐるわけである。攻めるもの、守るもの正に激闘に激闘を繰返した。十五日もしかし朝來激戰で、少しも陷ちるやうな氣配はない。第一線部隊はたゞ攻擊に攻擊をもつて晝夜をくり返してゐた。

一門一千發の砲彈　はどうしたかといふと、ジヨホール・バハルに布陣して渡過前に既に四百発をシンガポールに叩き込み、六百発を持つてシンガポール島に渡り戰闘に参加、十五日朝までに四百発を射つて射つて射ちまくつて残り二百発になつてゐた。これが十五日朝の戰況である。牟田口兵團は、午前十時を期して敵最後の要塞據点に突擊を敢行といふ報告があつたので、私は視察に一線に出た。敵の火砲の集中射擊は至つて熾烈で一線附近の家屋の屋根はポンポンふつ飛び、自動車で前線に向つたが窓ガラスは銃彈で飛散してしまつた。十時少し前に第一線の聯隊本部に行くと、想像もつかぬ位敵の射擊は猛烈で、まさに集中射擊の眞ツ唯中に置かれた感じで、銃砲彈の飛散する破片、その度に頭からかぶる土砂、それにまじつて飛び家屋の破片などで本部の周辺は包まれ、色々の錯雜する轟音で大聲をあげても聞えない。伏せてゐる兵の鉄兜や体にはさまざまな破片がぶつかり、鉄兜はその度に音を立てゐた。今まで私はどんな戰闘にも鉄兜は冠つたことがなかつたがこの時ばかりは、鉄兜が欲しいやうな氣がした。兵隊は鉄兜で破片をはじき返して猛射應戰してゐるが、私はいろ〳〵な破片の飛來で疲つも彈が出來た。この時は敵砲彈が至近の距離で間断なく炸裂し、破片の飛散と爆風で、本管に息ができなかつた。蒙々たる硝煙と砂で本部から十メートル先も見えない。時々火砲の発射光が彼方に点滅する。かういふ戰況であつて突擊豫定の十時になつたが、全然顔もあげられない熾烈さのため延期のやむなきに至り部隊待機のまま激戰を繰續するうち正午になつた。しかし戰況依然として進展をみず敵銃砲火は少しもおとろへず突擊不能の狀況であつた。我が方も全力をあげて應戰制壓に努めたが、午後三時になつても、戰況は同樣で、眼もあけられぬ激戰の繰續だつた。

そこで部隊本部では、いつまで待機してもおなじであるから、一つ突擊を敢行しようといふ

悲壯な空氣　が漲つてきた。そこで私は、この熾烈な十字砲火中に突擊しても、損害はかり甚大で、豫期した戰果を擧げ得るかどうか疑問だつたので『余り突擊はお急ぎにならぬはうがよろしいでせう、日暮まで待機して、夜襲をもつて突擊し山を奪取したはうがよい』といふ意見をいつた。

一旦私は軍司令部に戻つて案を樹て夕方近く車を飛ばして〇〇兵團司令部に入つて行くと牟田口兵團長は今から第一線に出るといふところで、参謀等が兵團長が一線に出ては危險であるし、万一のことがあつてはかへつて兵團の行動に支障を來すから、といつておとめしてゐるがきかれないから君からとめてくれ、といふことなので、私が行つて

閣下が今第一線に進出されるのは適當な時期でない。閣下の部隊は今戰力を蓄して奪戰中であり、突擊を待機してゐるが、今は敵の集中射擊が熾烈なので

薄暮を利用して突擊といふことになつてゐます。第一線將兵の士氣は極めて旺盛ですからどうか御安心下さい。それに今兵團長が第一線に進出されると、部下の聯隊長は、突擊時期が延びてゐるので、激勵督戰に來られたのかと思つて余計な無理をして强行攻擊をやり、不必要な損害を出すかも知れぬ。今は不適當です、明朝にして下さい。

といふやうなことを申上げた。すると兵團長は、〇〇兵團司令部の天幕の中に默然と立つて聽いてをられたが、ポロリと涙を落されて

〇〇君、俺はそんな氣持で第一線に出るのではない。決して督戰などといふケチな考へで一線に出るのではないし、また俺の部下は俺の一線進出を知つて督戰に來たなどといふ水臭い氣持や考へを持つものは誰一人をらぬ。恐らく今夜部下の聯隊は軍旗を先登に決死の突擊をやるだらう。さうすれば聯隊長、大隊長はじめ部隊將兵の多くが戰死をするに違いない。俺は部下將兵が戰死する前に一目會つて手を握つてそして立派に戰死さしてやりたい。俺の氣持は皆部下がよく知つてゐてくれる。欣んで迎へてくれるだらう。俺も安心して行ける。

といはれ、またポロリと戰塵に汚れた赭顔に涙を落された。私も思はず貰い泣きした。この上下渾然たる兵團一体の統制と氣持、今夜戰死するであらう部下に戰死の前に、親しく手を握つて死なしてやりたいと願ふこの兵團長の部下を憐ふ氣持、これを知り兵團長を欣然迎へ榮爾と死地に突入する部隊將兵の意氣、私は実に尊い日本獨特の統帥だと感じた。逝るもの、征くもの、死生は固より論ずるところではない。しかしこれこそ本當の武人の情であらう。私は涙が流れてしようがなかつたが、湧然と嬉しさが胸に満ち〳〵た、最早やいふことはない『兵團長閣下第一線に出てやつて下さい！』兵團長も嬉しさうに肯かれた。

激戰最中、降伏の飛電　この間終始敵彈は周辺に落下してゐる、私は最前線の戰況を軍司令部に報告せねばならぬので、〇〇兵團司令部より帰途についたがその途中緊急電話が掛り『英軍降伏せり！』と報告して來た。この降伏せり！　の報告を受けた時は、まだ〇〇兵團攻擊正面においては從來にない程の激烈な戰闘が展開されてをつた。兵團全部悲壯な氣持で待機してをつた。私は〇〇兵團だけしか見てゐないが、他の数々の兵團においても、シンガポール攻擊軍全部至るところ、かういふ日本軍獨特の美しい情景が溢れてゐたと思ふ。全攻擊軍が一体となつて、かういふ氣持になつて、果敢な突擊を決行し、遂にシンガポールの死命を制することが出來たのである。

敵はこちらに來ると思つて準備してゐたが一向來ない。遲をかいたわけだ。かうして各兵團併進し特に要衝ブキ・テマ高地も日本軍の十日夜の夜襲によつて取られ手も足も出ずシンガポール市周辺において窮鼠猫を噛む体で逆襲を繰返して來たがその都度撃退、〇〇兵團が前進敵の退路に廻り遮断態勢をとり、他の兵團がテツビルギー高地を奪取し一部は市街に突入敵を制壓、連絡路線を寸断した。遂に英軍はたまりかねて十五日午後七時五十分我に数倍する兵力を持ちながら手を揚げてしまつた。初め敵の兵力は〇万と推算し〇万ならこちらとトン〳〵だから心配は要らぬから押しまくれ、といふので猛烈に攻めたが、敵もなか〳〵

頑强で銃砲火も凄じかつた。それもそのはずで降伏後判つたことだが実に我に〇倍する兵力であつた。この防禦線についてゐる〇倍以上の敵に対し攻撃を加へたのだから戰鬪も激烈を極めた訳である。捕虜に『何箇月くらゐ持てると思つてゐたか』と訊いてみると『何箇月なんていふことは考へてもゐなかつた、何年といふ問題だつた』といふ。そして『一、二年シンガポールで頑張つてゐればそのうちドイツが参つてしまふから、さうすれば聯合軍は非常に優勢になるから、結局シンガポールは永久に陷ちないと思つてゐた』といふことだつた。

シンガポール總督　といふ奴は実に傲慢な奴でチャンギーの監獄にぶち込んでしまつた。これにはかういふ話がある。このチャンギー監獄は中に英人用と東洋人種用の二種の様式があつて英人用の獄舎にはベツドや洗面所などがついてゐるが、東洋人種用のはコンクリートの土間だけだ。このコンクリートの獨房にわが外交官等を監禁してをつたといふことが判つたので『何故あんなコンクリートの土間の監獄に入れたのだ』と詰問したところ『あの監獄が最も安全だと思つたからだ』といふ。そこで『よし、ぢや貴様だけを今から一番安全なところに入れてやらう、安心して入つてゐろ』と今まで豪壯な總督官邸で生活してゐた彼をチャンギーのコンクリートの獨房に入れたのである。昨日までの豪奢な生活から急轉直下、一升壜をぶら下げて炎天下四里の路を後からせき立てられながらテク〳〵歩いてチャンギー監獄に行き、彼が東洋人を收容するために作つたコンクリートの獨房に自分で入つて毛布に包まつて寢るといふことになつてしまつた。傲慢な總督はこゝでどんな夢をみてゐるだらう。実に我が同胞は彼等のためにひどい虐待を受けてたのである。まるで尼港事件を思はせるやうだ。

イギリス騎士道の正體　邦人の監禁された跡を廻つてみると、壁に爪でもつて腕を掻きむしられるやうな悲痛な遺書や英軍の暴狀ぶりが書き連ねてある。幾多の同胞が死ぬにも死ぬぬ程の侮辱と虐待を受けたのだ。一例をあげれば重油タンクの中にぶち込まれたり、監禁するに事も缺いて、ひどい腐病院の中に患者と一緒に入れてゐたり、何もない原つぱに鉄條網を幾重にも卷き雨露もしのげないやうな場所に監禁したり、食事だつてほとんど與へてゐない證據もある。我が日本人に対し、かういふひどい言語に絶する取扱をマレーやシンガポールにおいてまざ〳〵とみせつけられた我々は『よし、先方がさういふ氣持なら、徹底的に英國をやれ！』といふ決心をもつて彼を監獄にぶち込んだ。まつたく武力のない同胞に対してあんな非道なことを平氣でやりながら、よくもぬけ〳〵と降伏なんかで済ると思ふ。これが正義、人道、正騎士道を謳るイギリス人の実体である。

英軍捕虜は、時に應じて必要な勞力は、少數の護衛つきで五十人、百人と市街に引張り出し跡片附けや溝さらへをやらしてゐる。これをみてゐる警備はじめマレー人、印度人等は、今まで王様のやうに威張つてゐたイギリス兵のあのざまはなんだ、とすつかり呆れ返つて半ば茫然と見てゐる。そして日本といふ國は何んて偉いのだらう、日本の兵隊はなんで强いのだらうと、心服の度を深めてゐる。以上お話した種々の日本軍の猛烈な戰鬪狀況がシンガポール脱出兵等によつて逸早く聯印にひろまり、聯印は戰前早くも戰々兢々

一種の恐怖症に　陥つてしまつた。そしてシンガポール攻略軍の東海林枝隊がジヤバに敵前上陸をして進撃中聯印軍が降伏を申込んで來た、この東海林枝隊には山下参謀といふ少佐がゐたがこの山下少佐が敵將と會ふことになつたところ、山下と聞いて聯印側は軍司令官の山下將軍が早くもシンガポールから進撃して來たと勘違ひしてしまつて、大いにその神速ぶりに愕き大恐慌を來し聯印軍全体が大動搖を來してジヤバ及びスマトラ方面は大して抵抗せずに潰走してしまつた。軍司令官の山下將軍ではない少佐参謀の山下だといつたが敵は判らなかつて。かくして大南方作戰の峠を制したといふ感じがした。

これを要するにマレーの作戰は終始定石を踏まず、確信をもつて一見無茶苦茶の作戰を樹て先手先手と敵を制した。敵に対した我が軍はまさに精鋭中の精鋭で軍の方針もまたマレー作戰第一主義で、協力してくれた海軍もまた〇〇提督といふ勇將をあてられ、總てが一丸となつてイギリス東亞侵略の據点シンガポールの攻撃に集中し、軍司令官以下兵と共に辛苦を分ち、各兵團長また自ら陣頭に立つて積極的に協力し總ての点が綜合集中されてシンガポール陥落といふ歴史的作戰が成つたのである。決して一人の力ではない。生殘つたものの功績でもない。マレー、シンガポールに壯烈な戰死を遂げた

三千三百の我が英靈　がこの大戰果を挙げ得た不動の基礎であることは申すまでもないのである。シンガポール陥落後、入城式をやる、やらぬの問題があつたが、山下軍司令官は

生殘つた者に何んの功績があらう、戰はまだ終つたのではない。これからである。次の戰鬪の準備をしなければならぬ。

といふ方針の下にこれを省略せられた。しかしシンガポール入城を期して中途において散華した三千三百の英靈に対しては、日章旗の聯へつた昭南島を奉告し讃んで冥福を祈らう、といふことになり慰霊祭を執行、全軍の代表者をあつめてその面前において先程申したシンゴラ、コタバル、ジツトラスリム、クワンタン、シンガポール攻略等に於て勇戰奮鬪した武勲拔群の部隊に対し感状を授與した。これは遠からず発表になると思ふ。かういふ方針でお祭騒ぎはやめ直ちにスマトラ作戰に手を着けたのである。私は山西、漢口、ノモンハン等の戰鬪に参加、身をもつて経驗したのであるが、一番强いのは支那兵、これは嘘や掛値はない。その次がソ聯兵、次がイギリス本國兵、オーストラリア兵、印度兵といふ順である、將來の戰爭を考へる時、同じ東洋民族である支那が一番强いといふことは、一つの示唆になると思ふのである。

十一　東インド諸島作戰

十二月八日帝國が米英両國に対し宣戰を布告するや、聯印のオランダ當局はロンドンに亡命中のオランダ政府と呼應し、米英に追隨して直ちに我方に対して戰爭狀態に入る旨を通告して來たが、帝國は戰禍の聯印七千万住民に波及することを慮り、徐に聯印當局の反省を求むるため、極めて自重靜觀の態度を持せるにも拘らず、聯印は戰禍波及を妨止せんとするわが方の努力を無視し、米英両國に対し空軍並に潜水艦の基地を提供したに止らず、その潜水艦および航空兵力を以て屢々わが作戰を妨害し反軸聯合軍總司令部をバタビヤに設置するなど全く米英

の偶像と化し、奮もその態度を改むる氣配を示さなかつた。大東亞戰勃發以來蘭印が示した対日軍事行動は次のやうに幾多の具体的事実となつて現れてゐる、すなはち

（一）去る十二月十七日皇軍が英領ボルネオのミリ附近に上陸するや蘭印飛行機はわが部隊の上空に飛來しわが軍に空爆を加へたがわが方の攻撃によつて撃退された事実

（二）つゞいて英領ボルネオのクチンに上陸作戰の際蘭印潜水艦がわが軍の艦船を積極的に襲撃した事実、しかしわが海軍のためその潜水艦は撃沈せられ乘組の蘭印将校はわが方の捕虜となつた

（三）マレー戰線では去る十二月九、十両日にわたつてパタニ上陸のわが船團を同蘭印潜水艦が襲撃し、わが船舶に損害を與へた事実

（四）フイリツピン、ミンダナオ島のダヴアオ方面では、距離的に近い関係から蘭印の潜水艦と飛行機は頻々と出没飛來し、この方面におけるわが軍の作戰に対し常に妨害的行動に出でたる事実

（五）シンガポール附近の英空軍はすでにはやく潰滅せられたが、最近にいたつて再びシンガポール附近に空軍が若干增加した形跡がある。これは蘭印飛行機がこの附近に增援して來た事実は疑ひもないところである

（六）蘭印は如上の敵対行動に出づるの方途をとるのみでなく、さらに積極的に敵國米英に軍事基地を提供し、スマトラ島のメダン飛行場には最近にいたつて英國空軍が進駐して來た事実

（七）蘭領ボルネオの北部飛行場には多數の飛行機を集結しわが軍の地上作戰をつねに妨害してゐる事実

ここにおいて帝國は断乎として應戰を開始することとなり、比島方面及び北ボルネオの敵定作戰を妨碍するオランダ軍の根據地破碎のため一月十一日ボルネオ島東北端の蘭領タラカン及びセレベス島のメナドに上陸作戰を開始するに至つたのである。

（一）オランダの敵性行爲破碎

大本營発表（一月十二日午後六時）＝帝國陸海軍部隊は緊密なる協同の下に一月十一日未明蘭領ボルネオタラカンに、また帝國海軍特別陸戰隊はセレベス島メナドにそれ〴〵敵前上陸に成功し、十二日タラカンの敵はわれに降伏しメナドはわれに占領せられたり。右はわが比島方面および英領ボルネオ方面の敵定作戰を妨害する敵航空基地並に海軍基地を奪取せんとするものなり

かくて政府はこの强硬方針の断行に伴ふ帝國の眞意並に一切の措置闡明のため、上奏御裁下を仰ぎ十二日聲明を中外に発表した。（第二部『大東亞建設の進展』参照）

政府聲明にも闡明されてゐる如く、帝國の蘭印に対する軍事行動はあくまでも米英の術に陶つて皇軍に挑戰し、敵対行動をとりつゝあるオランダ當局を目標とするものであり蘭印七千万の住民に対しては、毫も敵意を有せざるのみならず寧ろ共存共榮の興亞理念よりその繁榮を助長せんとするものである。

蘭印の兵力は次の如くである。

陸軍兵力　正規軍七万二千、義勇軍その他二万五千

海軍兵力　乙級巡洋艦六隻、駆逐艦十隻、潜水艦十五隻、水雷敷設艇五隻、掃海艇八隻、海防艦一隻、魚雷艇七隻、砲艦一隻その他四隻、計五十七隻

航空兵力　三百七十機（戰闘機百、爆撃機八十、偵察機九十、水上機百）

（二）ボルネオ島を席捲

わが陸海軍の精鋭は緊密なる協同の下に一月十一日未明ボルネオ島東海岸蘭領ボルネオのタラカンに敵前上陸を敢行し、戰意を喪失した敵は抵抗を断念して降伏した。

蘭印軍當局は十三日タラカンの蘭印軍の一部が小船で退避したほか大部分が日本軍に投降したことを確認した。わが海軍特別陸戰隊は十二日陸軍部隊と協力してタラカン飛行場を占領しタラカン泊地哨戒中の我が海軍航空部隊は十二日蘭印の双発爆撃機一、B一七爆撃機一機を、十三日敵双発爆撃機四機を撃墜、わが艦艇はタラカンを脱出せんとするオランダ軍艦プリンス・ブアン・オラニエ（一、二九一トン）を撃沈したが、わが方も掃海艇二隻を失つた。

タラカンはボルネオの東海岸タラカン島の南西部に位し人口六千、タラカン油の產地として有名である。海岸のリンカス村はその積出港で長さ五百メートルの桟橋二本を有し、給油管は桟橋に取りつけられてゐる。軍事施設には海軍航空隊、陸軍常備隊及び常時には一、二〇〇トンの水雷敷設船一隻が配備されてゐた。陸上飛行機基地もあり、民間航空機も一週二回寄航してゐた。

メナド及びタラカンにおける最初の蘭印に対する両上陸作戰の成功は、赤道に至る全海面の側撃權が全くわが方の掌中に帰してゐることによるものであるが、この二基地が皇軍の手に帰したことによりセレベス海はわが制壓下に置かれ、英領ボルネオの諸要衝の陷落と相俟つて、ボルネオ海に敵の蠢動を許さざるに至り、巡洋艦六隻を主力とし、約六十隻の艦艇をもつ蘭印海軍並に蘭印海域に進入したと傳へられるアメリカのハート大将麾下のアジア艦隊及びシンガポールを脱出したイギリス東洋艦隊の殘存勢力はマカツサル海峡以南のジヤバ海、フロレス海方面に完封さるることとなり、敵の企圖するゲリラ戰は著しく困難となつた。

バリツク パパン占領

タランカン占領部隊の一部は轉進して一月二十四日未明陸海緊密なる協同の下に蘭領ボルネオ東海岸の要衝バリツクパパン附近に上陸し、直ちに飛行場を攻撃してこれを奪取確保すると共に、主力はバリツクパパン市に進撃し、二十五日完全にこれを占領して附近一帶を掃蕩した。

わが輸送船團護衛艦艇は敵駆逐艦、潜水艦及び航空兵力と激烈なる交戰の結果敵潜水艦一隻を撃沈したが、わが方もまた輸送船四隻を失つた。

バリツクパパンは蘭領ボルネオの中央部に位し、ビスマルク群島のラバウルと共に戰前アメリカが対日進攻の一據点として誇示した所謂太平洋南方進攻路の要衝で、バリツクパパン占領はラバウルの攻略と相俟つて、アメリカの南方進攻路を寸断したのみならず、直接マカツサル海峡を制壓し、蘭印の心臟部であるスラバヤに對し鋭利なる匕首を擬したものである。

バリツクパパンはバターフ石油會社所在地として発展して來たもので、一數個港としての色彩はないが、軍事上の要衝として、蘭印陸海軍の守備殿重で、砲台等の施設もあり、水陸両飛行基地が設けられ、タラカンよりスラバヤに通ずる定期航空機が発着し、タラカンと共にボルネオにおける二大要衝の一である。人口

二万九千。

西部ボルネオの戡定　西部ボルネオ方面では英領ボルネオの西南クチン附近にあつたわが部隊の一部が海上機動して、一月二十七日午前七時四海岸バマンカット附近に强行上陸し、直ちに一部を以てサンバスを攻略すると共に、主力は長�আして西部ボルネオ州の首都ポンチヤナツクを衝き、二十九日完全にこれを占領した。また英領ボルネオから國境を越えて南進した部隊は〇月〇〇日ビサン攻略後引續き急進し、一月二十七日シルアス及びサンガウ附近の敵を擊破し、同日午前十時レド飛行場を占領した。サンガウ附近では火砲六門その他多數の兵器を鹵獲し、捕虜百二十、遺棄死体三百の戰果を得た。

ポンチヤナツク占領部隊は引續き西部ボルネオ地區に作戰し、二月十三日以來この一部を以てカプアトス河を遡航してサンガウ及びシンタン附近に機動し、十六日シンタンを占領した。

バマンカット占領部隊は西方約八十キロの洋上にあるタンベラン島に邦人約三十名が監禁されてゐるのを探知し、直ちに行動を開始して二月二十七日同島に上陸邦人全員を無事救出した。監禁者は戰前シンガポールを中心として活躍してゐた沖縄縣漁業者であつた。

バンジエルマシン陷落　蘭領ボルネオの東部及び西部を戡定した皇軍は一月三十一日夜有力なる部隊はボルネオ島東岸の要衝タナーグロゴドに上陸、これを占領し、引續き進擊を續け、陸路四百キロの縣路を踏破して二月十日正午ボルネオ島南岸の要衝バンジエルマシンに突入して飛行場及び市街を占領確保し引續き附近の敵を掃蕩した。同市はボルネオ第一の都會で背後に廣大な農業地帶を控へゴム・米の集散地で南東ボルネオ州の首都である。人口六万、東方二十六キロのウリシーに蘭印航空會社の飛行場があり、パリツクパパン、タラカンに至る定期航空路が開かれてゐた。

わが海軍航空部隊は一月二十七日以來數次に亙りパリツクパパン、サマリンダ、バンジエルマシン、アンボン、ナムレア等蘭印各地を大爆擊し、敵機四十五機（うち飛行艇二）を撃墜破し、各地砲台、高角砲陣地、兵舎など諸軍事施設に大損害を與へた。本攻擊においてわが方二機を失つた。

全島の戡定なる　かくて蘭領ボルネオの要衝は悉く皇軍の掌握するところとなり、西部守備隊長マルス中佐以下二十七名は三月十五日投降、翌十六日は、前ポンチヤナツク行政官二名が帰順を申出で敗敵と續々投降中であり、ジヤバ島の蘭印軍の全面的降伏に呼應して三月十日東部ボルネオのサマリンダに注ぐマメタルハム河上流の敵もわが海軍特別陸戰隊に投降同二十日サマリンダ附近の敗敵も降伏した。この地區で武裝解除された敵兵は將校二七五名、兵一、〇四九名、鹵獲品小艇七〇、高角、迫擊砲各六門、小銃一・五〇〇挺である。かくて全島の戡定は殆んど終了した。ボルネオ島は、対日包圍陣の重要なる戰略的條件を備へ、廣大なる海岸線の各地に点々として海軍根據地、航空根據地を施設してゐたが、いまや敵は本島の喪失により重要なるゲリラ戰の根據地を失つたのみならず、シンガポールの陷落と相俟つてジヤバ、オーストラリアに対し直接軍事的なる脅威を與ふることとなつた。

皇軍は英領ボルネオにおいてミリ、セリヤの油田を獲得し、蘭領ボルネオに於てタラカン、パリツクパパン等の油田並にバンジエルマシンのゴム等ボルネオ島の戰略資源の宝庫はわが戰時経済に多大の寄與をなすこととなつた。

（三）セレベス島を攻略

一月十二日、大本營からわが海軍特別陸戰隊が同十一日未明セレベス島のメナドの敵前上陸に成功し、これを占領したことが発表された。

セレベス島はスンダ群島中の一島嶼、面積十九万平方キロ弱、わが朝鮮よりも小さく、狹長な四條の半島よりなる奇形島で、スマトラ、ジヤバを縱貫する火山脈が聳立してゐる、人口四百二十万、昭和十年において五百七十八名の邦人が活躍してゐた。

メナドはミナハサ地方の首邑、メナド河口に位し、人口三万、赤道直下ではあるがセレベス第一の健康地である。市内に温泉の湧出もあり、戰前日本郵船、南洋海運の寄港地であつた。

メナドを占領せるわが海軍特別陸戰隊は、所在の敵を擊破してトンダノに進擊グマに上陸せる別動のわが特別陸戰隊と合同し十三日カカス飛行場を占領した。この作戰に参加したわが海軍航空部隊は同方面において敵ロツクヒード、ハドソン重爆擊機四機ほか敵重爆擊機三機を擊墜して敵航空兵力を制壓した。ケマは第一次世界大戰當時南太平洋で活躍したドイツ巡洋艦エムデンが食糧を補給してゐたところである。

蘭印作戰で始めて発明された海軍特別陸戰隊は、臨時作戰の必要に應じて各艦〇の兵員を以て編成される所謂陸戰隊とは別個のもので、上海特別陸戰隊と同様、日頃から陸戰の訓練を施し、特殊の裝備をもつた部隊である。

海軍落下傘部隊初陣の殊勳

メナド攻略戰に海軍落下傘部隊が始めて参加したことが、陸軍落下傘部隊の二月十四日スマトラ島パレンバンに対する奇襲降下と共に、二月十五日大本營から発表され、海軍落下傘部隊が初陣に美事殊勳を立てて空陸海一帶作戰の妙味を発揮したことが明かとなり、その神算妙計に世界を驚歎せしめた。同作戰に参加した〇〇少佐は〇〇基地において南海の碧空に綿白の花輪を咲かせた海軍落下傘部隊の偉功を次の如く語つてゐる。

物凄い驟雨だ。両翼端は雨の中に消えてゐる。異気流が重い機体を動揺して外は凄々たる雲と霧を叩くしのつく雨の連續である。まだ暗夜であつた。〇〇基地を離陸してから相當経過してゐるがいつまでも叩きつける驟雨は位置がどこにあるかヒントさへ許さぬ。チラリと操縱者の顔が意識される。この見なれた戰友は悠々と操縱桿を握つてゐる。われ〳〵が〇〇基地に到着したときこの操縱者とは一語ではなかつた。訓練のときいつもかれの操縱機に搭乘したのであつたが、我々がこの飛行機に乗込むまではけふの初陣のこの一戰に目ごろ訓練をともにした戰友の操縱機に乗込めるとは夢にも思つてゐなかつた。驟雨を縫つて落下傘部隊を乗せた〇〇機が進んでゐる。操縱者も落下傘部隊員も今こそ一つに結び合つた戰友であるといふ喜びが強くこみ上げる。驟雨の空を横にみながら離陸地点の天候はどうかといふことが誰の頭にも浮ぶ。落下傘部隊の活躍を迎へるには決して優雅な空模様ではないけれども誰もそれを口にしない。不安からではない。逆に日頃訓練の脱術を発揮する戰場を今こそ得たと思

へば驟雨の中へでも降下して必ず成功する確信が誰の眉宇にも漲然としてゐる。雲が切れたトンネルから抜け出たやうな明るさが雲の中は擴がり、やがてみる〳〵雲が切れたと思ふと、カツと眼に浸む南海の紺青、雨にぬれた機翼にたちまち強烈な太陽の直射が映える。そして振り返る眼に飛び込んで來るのは層雲を抜け出た友軍機の一糸乱れぬ大編隊陣だ。隊長機を先登に雁行した編隊のいくつかの群は、大空に驟然たる

大進撃の隊列

をつくつてゐる。しかも行く手には群峰を抜いてメナド富士の姿がくつきりと雲海に浮ぶ。落下傘部隊の新戰場メナドは足下なのだ。メナドの空を壓してゐるのはわが海軍機ばかりだ。街の數箇所からは早くも斷末魔の白煙が濛々と天に冲してゐる。落下傘部隊〇〇機の大編隊は悠然とセレベス大空を行くのである。蔚藍目の市街はすでに死滅して厳い鉄道に一つの影を曳くものもない。港内に一波のあがるものもない。落下傘部隊の目標は〇〇にあつた。やがて豫定時間になつてまるで伊豆の上空のやうにメナド富士を遥かな背景に赤や黄色い屋根が緑の樹木の中にまた芝生の上には牛や鶏が陽を浴びてゐる。鄙びた景色が厳がつてゐる降下地点はその附近にあつた。總備完了、〇〇機から一斉にツーツーと糸が垂れたかとみえる瞬間パツと開いた純白の落下傘四つ五つ、六つ〇〇機から手繰り出すやうに間隔正しく飛び出す大輪の花は、編隊の幅そのまゝ大空に驟然とした絢爛豪壮な花圃を作つて傘の純白は紺青に映え圏圏に沸く雲と妍を競ひみる〳〵大空を埋めて幾十、幾百、幾千、戰場に搭乗出した人造景観の極致は、メナド富士を背に今靜々と新戰場に降下する。飛行機を離れるとたちまちに機銃の音が耳につく。足下新戰場のこ

こかしこにパツと大地が燃えて敵のトーチカは火を吐いてゐる。見降す着陸地点には亭々たる椰子、有刺鉄條網をめぐらした指馬が一面に置かれてある。落下傘を操縦してどこへ降りるかといふことが問題である。だが全員見事に着陸した。落下傘に無数の敵弾を受けたものもあつたが犠牲者は一人もない。大空の最初の敵前着陸は無血成功であつた。着陸に當つて牛の背に降りたものであつた、近づくと大きな斑の牛だつたので「シツ、シツ」と追つたが牛は大空の勇者を鳥とでも思つたらしい。眼を細くして見上げたまゝ動かなかつた。また大空に手を擴げてゐる椰子に落下傘を受けとめられたものもゐた。天人の羽衣風景を椰子の上に現出した隊員は身体を振るやうにして見事椰子の幹に飛びつき椰子の木から敵前着陸に成功、隊員はたちまち身軽になつて

トーチカに

にじり寄つた。オランダ兵は射撃がうまいことで知られてゐるが、なるほど最初の手合せの敵弾はきはめて低くその無烈なことは文邪事變の経驗の比ではない。間もなく味方の擲弾筒の弾丸がトーチカ附近で猛烈に炸裂し、それに呼應して突撃がはじまつた。無烈であつた敵の攻撃は忽ち潰えた。逃げる敵の一部は落部の中に遁入したが、やがてカカス方面から猛襲を蹴つて裝甲自動車が現れ猛射をあびせかけて救けて行つた。だがこの裝甲自動車も間もなくわが軍の掌中に帰した。水上飛行場占領に向つた友軍の一部が牧場のまん中でさきほどの裝甲自動車とぱつたり正面衝突したのだ。軽機を持つた勇敢な二人は一寸も退かず裝甲車と莫々撃合つた。二人の姿は敵弾があげる砂煙で忽ち見えなくなつた、だが裝甲車が撃ち負けた、徐々に後退しかけたとみるやその機をとらへた隊員は猛然躍出し裝甲車に飛乗つたそして素早く携帯の軍艦旗をその上に翻した。軽機と裝甲車の勝負は鬱倒的な落下傘隊員の膂力によつて見事にわが方に軍配があがつたのだ。裝甲車の中では敵兵三名が負傷してゐた。見渡す限り緑の牧草の上に十六光の軍艦旗が高くひるがへつたことは落下傘隊員の勇氣を百倍せしめた。

カカスの町は忽ちわが掌中に帰したのだ。一方無電班は着陸と同時に無電所を開設した。鍵を握つて友軍を呼び出すとすぐに應答がある。落下傘部隊は敵の真只中に飛び降りたのであるが、味方との連絡はかくの如く完全無速である。この應答の一瞬こそ落下傘隊員の最も感激的なときであつた。降下成功！着陸地占領、カカス占領、電波は忽ち落下傘隊員の勝利を次々に傳へる。第一段の戰闘が終ると空腹と咽喉の渇きが激しく襲つた。着陸地点には靜かに夕暮が迫つてこの方面の戰闘はすでに完全に終了したのだ。戰ひのあとには脱ぎ捨てた落下傘が白く残つてゐる。絹の白さは落下傘部隊の勝利を象徴して誇らかに戰場を掩つてゐるのだ。

海鷲の活躍

海軍航空部隊は蘭印作戰を妨害せんとする敵機の蠢動を制壓するためニューギニアよりボルネオに至る東亞二千百マイルに亙る厳大なる地域に亙り敵基地を虱潰しに爆撃したが、同十二日セレベス島中部東岸トモリ湾コロネダレ水上飛行機基地を攻撃して飛行機格納庫大小九個、兵舎二群その他を爆破炎上せしめた。また他の一部はジロロ島テルナテを攻撃し、大倉庫二個を爆破、五ケ所に大火災を生ぜしめた。

三月二十一日の大本營発表によれば、わが海軍航空部隊は十五日以降連日に亙り蘭印方面一帯に亙り分散せる敵機を索めてボルネオのバリツクパパン、セレベス島のマカツサル、パロポ、コロネダレ、ケンダリー、ハルマヘラ島のチルナテ、ラブハーセラム島のアンボン等の各飛行基地を爆撃、所在機合計十機（内飛行艇六）を撃墜破し、各基地施設を爆破した。同二十六、二十七両日におけるマカツサル海、セラム海、モルツカ海、フロレス海、バンダ海等の厳海域を制壓し、ボルネオ、セレベス、セラム、ブル島諸島の敵軍要航空基地に対し反覆攻撃を敢行し、敵機四十五機を撃墜破（内不確実四）した。本攻撃においてわが方にも未だ帰還せざるもの四機を出した。かくて間断なきわが海軍航空部隊の猛攻により、蘭印各地の敵空軍残存勢力は新に米英よりの増援を得てわが作戰を妨碍せんと試みてゐたが海鷲はマカツサル、セラム、モルツカ、フロレス、バンダの五つの海に亙つて廣大なる海域を制壓し敵空軍再建の企圖も水泡に帰するに至つた。

全島を戡定

海軍特別陸戰隊はラバウル攻撃に呼應して一月二十四日未明セレベス島の東南岸の要衝ケンダリーの敵前上陸に成功し、所在の敵を掃蕩して二十六日これを完全に占領し、マカツサル海峡を制壓して、蘭印、オーストラリアに対し一大重壓を加ふるに至つた。

帝國海軍特別陸戰隊は二月九日セレベス島の南端にして同島の首府であるマカツサルを完全に占領した。引續き奥地に蠢動する敵を撃滅すべく、二十三日マカツサルを出発、マリノ、シンジヤイ、ペンコ各地を攻撃、二十四日にはシンカン、ワタンポウス附近の敵を掃蕩し三月一日マロス東方三十キロのチヤンパを占領した。三月六日までに判明した戰果は俘虜蘭印軍司令官ホーレン大佐以下千六十四名（内蘭人三百五十名）鹵獲品野砲二門、迫撃砲七門、機関銃五十六、小銃、拳銃九百五十、裝甲自動車十、車輌二百二十五輌である。

三月十七日同島中南部の中心地エンレカンに集結した敗敵はわが方の勧告に從つて降伏、更に同地北方のマリリ、パロポ附近の殘存敵兵も同二十七日降伏した。わが海軍特別陸戰隊は二十七日エンレカンに入城し、これによつてセレベス島戡定戰は完了した。わが軍の戰果は次の如くである。

俘虜コルトマン中佐以下五百六十四名、鹵獲品小銃六百二十挺、同彈藥六万七千三百発、機關銃、擲銃百挺、同彈藥三万五千九百発、手榴彈七百八十、車輌二十五台

(四) モルツカ諸島占領

わが陸海軍部隊は緊密なる協同の下に大膽至妙の海上機動戰を敢行し、一月三十一日未明バンダ海の要衝アンボン附近の敵前上陸に成功し、殉々戰果を擴大して同島の東から西へ陸路横斷に成功、二月二日以來、敵を西南端の一角に追詰めつひにこれを戡定した。陸軍部隊の綜合戰果は、敵遺棄死体三百、俘〇二千六百鹵獲品砲（十五サンチ砲を含む）七門、高射機關銃九、輕機百、小銃千二百、快速艇二、自動車三十四、飛行機三、戰車二である。

アンボン島はセレベス東方セラム群島の一島嶼で、蘭印にとつてはスラバヤに次ぐ重要なる海、空基地で、オーストラリア軍及びアメリカ軍がこゝを基地として利用してゐた。敵はこの地を基地として比島、ボルネオその他の皇軍占領地を爆撃し、あはよくば日本々土空襲を決行せんとする野望を抱いてゐたものであるが、皇軍のアンボン占領によつてこの企圖は粉碎されたばかりではなく、逆に蘭印及びオーストラリアに対する脅威が增大するに至つた。

戰前、米英がしきりに誇示した対日包圍陣の一環としての蘭印の軍事的價値はその前面に比島、ボルネオ、セレベス等の前衛基地が存在し、海、空軍がこれを基地として活用することを前提としたものであつたが、これらの前衛據点が悉く皇軍の占領するところとなるに至つて、蘭印は皇軍攻撃の前に裸身に暴露された形で、反撃はおろか自國の防衛さへ不可能となるに至つたのである。

アンボンはモルツカ州の首府で、人口一万七千、スラバヤより海軍航空隊の一部が移駐してゐた。比島、ニューギーランド、スラバヤ、マヌクワリ島との間に定期航空路が開かれ、交通の要衝に當つてゐる。

わが海軍部隊は三月三十一日西部ニューギニア北半の攻略と同時にモルツカ諸島の攻略作戰を開始し、四月十九日その主要点を完全に占領した。この作戰は蘭印戡定作戰の仕上げともいふべきもので、單なる攻略戰といふよりも経済的建設を主としたもので、一面戰爭一面建設の大東亞戰爭の本義を端的に示したものといへよう。

わが海軍が占領したモルツカ諸島の南部セラム島、アンボン島は香料群島といはれる程で、丁子や肉豆蔻を豊富に産出する。セラム島のブラ油田はバタビヤ石油會社の重油産地で日産三百トンを越え、油田用の大機橋、採油突堤七ケ所を備へ相當大規模な採掘計畫が進められてゐた。

(五) 南部スマトラの制壓

南部スマトラに対する皇軍の攻撃は、陸鷲の果敢なる大空襲を以て開始された陸軍航空部隊は二月六日大量パレンバン及びパンカ島のムントク飛行場を急襲して敵機二十八機を撃滅し、更に七日には五十機、八日には十七機を撃滅破して敵空軍に壊滅的打撃を與へた。同十三日には戰爆聯合の大編隊を以てパレンバンを空襲して新に增援された敵機九機を撃滅破して、敵空軍を潰滅したのであつた。

戰史に輝く陸軍落下傘部隊の偉功

シンガポール陥落前日の二月十四日午前十一時二十六分飛力なるわが陸軍落下傘部隊は關領最大の油田地であるスマトラ島のパレンバンに対する奇襲降下に成功し、敵を撃破して飛行場その他の要地を占領確保し、初陣において偉大なる戰果を收めた。陸軍航空部隊は本作戰に密接に協力すると共に十五日早くも同飛行場に躍進して、ジヤバ島外郭の敵空軍基地はわが方のジヤバ制空の强力なる基地に一變した。

久米陸軍落下傘部隊およびこれと直接協同せる飛行部隊のパレンバン奇襲作戰戰闘経過の概要は左の通りである。

作戰開始前における狀況

皇軍空襲の進撃にともないマレー方面の戰況が電撃的進展をみせるやマレー英軍は逐次シンガポール島に壓縮せられ、これに從ひ殘存英空軍は次第にシンガポール島内の四つの飛行場に蟄伏したが、二月初めになると英軍は殘存機全部を集めてスマトラ島方面に退避した。殊に要衝パレンバンはこれら退避空軍の根據飛行場となり、二月五日の偵察では同飛行場には大小型機數五十六機を算へるにいたつた。落下傘部隊の攻撃に先だちスマトラ島の各飛行場に対する攻撃は、十六年十二月二十八日のメダン攻撃を皮切りに一月中すでに三回にわたり攻撃、三十三機の敵機を撃滅破、〇月〇日いよいよパレンバン攻撃に関する南方軍命令が発せられるや、陸鷲選擇部隊はパレンバン附近の敵空軍撃滅戰の本格的殲滅作戰を開始した。すなはち選擇部隊は二月六日以來三次にわたり、十三日にはさらに二次にわたりパレンバン飛行場を攻撃その撃墜機數は約九十余機に達し殘存敵機の大部を撃滅するの成果をあげた。奇襲作戰決行の前日である十三日におけるパレンバン飛行場の攻撃に際しては、ハリケン五機、スピットファイヤー一機と交戰、ハリケン五機（うち不確実二）を撃墜、大型四機を爆破した。その他のスマラト島の飛行場ではバカンバル、パタンに大、中型各々一、二機を認めたのみで奇襲作戰成功の確信をうるにいたつた。

二月十四日の戰闘

落下傘部隊は二月十四日マレー半島飛行場を発進直路ムシ河河口に向ひ航進した。大陸高氣壓は北支那にありマレー半島附近は風弱く晴または薄曇り（層積雲または層雲）雲低は一〇〇〇メートル余、視程二〇キロ以下スマトラ方面は天候弱化の直前にあるものの如く雲形層雲または積雲多く雲低二〇〇米シンガポールの火炎による煤煙は遠くムシ河河口に渦り視程は極めて不良、しかしこの不良氣象はかへつて奇襲作戰成功の一大原因となつた。正に天佑であつた。全部隊鬨聲をつらねて攻撃目標の上空に進入するや、狼狽した敵は高射砲、高射機關銃の猛射をはじめた。午前十時三十分飛行場附近および精油所附近に降下を完了した。また決死着陸機は飛行場西南約一〇キロの地点に飛行筵陣を敷行した。敵の対空砲火は猛烈を極めたが我損害軽微、飛行場方面において部隊降下前輸送機一機受彈のため飛行不能となり、同地附近に飛行筵陣し

た。また須藤機は胴体タンクに引火白煙を吐きつゝも悠々物料投下の任務を完遂した後壯烈な自爆をとげた。大坂部隊は降下部隊に協力して物料を投下、瀬戸部隊は飛行場附近の対空火器を制壓、加藤部隊および中尾部隊は直接降下部隊を掩護し敵戰闘機四機現出するや直にこれを撃墜した。

二月十五日の戰闘

降下急襲部隊増强の任務をもつて発進した第二次落下傘部隊は午後一時飛行場に到達、降下に成功して戰力を増强した。この日早朝中浜部隊の偵察機は飛行場に飛來、着陸して連絡に任じた。爾後荊木部隊の一部は直にパレンバン飛行場に隣進同地の防衛に任じた。降下部隊は午後四時パレンバン兵營攻撃のため出発、午後六時二十分兵營に到着した。かくて市内を掃蕩するとともに、精油所に連絡中午後七時三十分兵營に到着した。降下部隊の先遣上陸部隊と會同、こゝに完全に任務を達成したのである。

わが陸軍戰史に輝しい一頁を記録した陸軍落下傘部隊のパレンバン奇襲降下の殊勳を朝日新聞の日百、横澤、三島三特派員は現地より左の如く報じた。

三谷、麗瀬部隊はパレンバン飛行場（市の北方八キロ）の周圍三ケ所に降下し、安達部隊は後方からの敵救援部隊を阻止すべく、飛行場と市の中間に落下を敢行。飛行場の周圍は深いジャングルである。わが空輸機が空を覆して現れるや、翼を並べて飛行場に待期中の米機ボーイング、英機スピットファイヤ、ハリケンの彼らが誇る優秀機は飛び出す暇もあらず、周章狼狽して地上から一斉に高射砲火を浴せて來る。全くの盲射ちの格好である。しかし精鋭の中の精鋭を選り抜いて、今日に備へこの猛訓練を積んでゐる落下傘部隊勇士は頗る沈着

悠々と降下を開始する。ぱつと開く落下傘の一つ一つが敢闘精神に張りきつて落下する。怖氣づいて射ちまくる支離滅裂の敵の弾道を潜つて落下した地点はほとんどジャングルの中であつた。高い木に引つかかつて木から地上へ、しかもどの地点も頭まではいつてしまふやうな濕地帶である。『おい、おーい』と戰友を呼び合ながら木の根、草の蔓を傳つて濕地を抜けて不敵魂をもつて挺身するのだ。敵の機銃は激しく火を吐く、全身をその弾道の中に曝らされながらも勇士達はひたひたと敵前に這つて進む。手榴弾を投げ得る地点までは如何にもがいても、手足も出ぬ状況である。ずぶ濡れの草たい全身を両手に支へて一尺、四尺と長い間尺取虫のやうに這ひ進んだ。いよいよ着弾距離、三方からじりじりにじり寄つた勇士達は一斉に立上つた。腕もちぎれよとばかり

手榴弾は敵陣に

火を吐く。ぱたぱた仆れる敵、そして逃げる。今度は追ひ撃ちに銃の猛射だ。銃と見て怯つたのか、五、六メートルのところで敵も立直つて銃の應射だ。敵の應戰もわが勇士の前には敵ではない。約六百名の敵は僅か〇〇名の勇士の追撃に崩れるやうに潰走してしまつた。かくて數時間にして敵がスマトラ防衛空軍の本據とたのむパレンバン飛行場はわが手に帰したのであつた。

これより先勇士達の落下を見届けた空輸機は數回旋回した後地上勇士の進撃に呼應して、敵の砲火を冒し飛行場に强行着陸を敢行したのであつた。

一方安達中尉は〇〇名と一路パレンバンへと猛進し約六ケ縁隊で固めてゐるといはれたパレンバン市の防塞を突破し、さらに敗走する敵を急追し、ムシ河を渡つて一斉に鬨印軍兵舎を完全に占領した。時に十五日午前四時、またパレンバン北方十四キロ下流のB・P・M（バタフ石油會社、英國系）R・P・M（コロニアル石油會社、米國系）精油所に落下した中澤不二男中尉以下の勇士は敵の一ケ中隊が固めてゐるトーチカ目がけて手榴弾で決戰を挑み、一つ一つを攻略して進撃する。先にシンガポールから敗退した英軍高射砲隊の一個分隊ジャングルを利用して壯烈な銃戰を繰續し、瞬く間に沈默せしめ、僅か二時間にしてR・P・M精油所を占領した。

かくして〇〇部隊勇士の迅速果敢な戰闘によつて、パレンバン市始め飛行場精油所など軍事、政治、經済の重要地点は十五日朝には完全にわが掌握下に帰したのである。

わが落下傘部隊が確保したパレンバンは鬨印最大の油田地で、同市は油田地帶の中心地を占め、スマトラ島南部油田産出の原油精油所が設けられてゐるが、これがわが手に帰したことは近代資源作戰の遂行に多大の貢献をなすものである。更にスマトラの首都であるパレンバンの占領は政治的に全スマトラを制壓したもので、日夜の猛訓練がここに結実して、初陣にこの一大偉功を樹てた。陸軍落下傘部隊の力戰健闘は爾としてわが戰史に輝くものであらう。

陸軍落下傘部隊へ感狀

陸軍省発表（五月七日）―去る二月十四、十五日長駆スマトラの要衝パレンバンを奇襲し拔群なる武功を樹てたる左記部隊に対し最高南方方面陸軍長高指揮官より感狀を授與せられしが今般畏くも上聞に達せられたり

感狀

勝利の歴史

久米落下傘部隊

直接協同部隊

右諸隊は陸軍最初の落下傘部隊並に協同部隊として二月十四、五の両日に亘り空地の抵抗を破碎しつつ寡兵長駆決死敵中に投じ南部スマトラの要衝パレンバンを奇襲し敵の根據飛行場を其の破壞に先ち占領せり此の破天荒の行動は南方軍の先鋒として克く戰機に投じ鬨印、馬來両方面を分断し且全軍翻後の作戰の鍵鑰を確保せるものにして其の武功は拔群なり

仍て茲に感狀を附與し隷下全軍に布告す

昭和十七年二月十五日

南方方面陸軍最高指揮官　伯爵　寺内壽一

タンジュンカラン占領

わが陸軍主力部隊は十五日ムシ河を遡航し、先にパレンバンに奇襲落下した落下傘部隊と協同し、十七日激戰の後同地を完全に占領した。また有力なる一隊は機を失せず南進して廿日スンダ海峡を隔てジャバに対するスマトラ島南部の要衝タンジュンカランを占領直ちにランプン灣に面する南部スマトラ唯一の軍港テロクベトンに進出してスンダ海峡の關門を扼した。更に廿二日パレンバン西南方百五十キロのラハトを、二十四日ベンクレンを占領してインド洋方面作戰に有力なる基地を確保した。かくてわが軍は旬日を出でずして南部スマトラの主要地區を覆定し、タンジュンカラン飛行場を確保して、ジャバ島の敵空軍を全く制壓しボルネオ、セレベスの戰果、チモール島占領と相俟つてジャバの敵本據を完全に包圍態勢下に置くに至つた。

パレンバン攻略戰の戰果の主なるものは次の通りである。

鹵獲品　戰車十六輌、火砲二十三門、鉄道車輌五百輌、俘虜　四百

（六）バンカ島の攻略

二月六日わが陸軍航空部隊は大擧パレンバンと共にスマトラ東方のバンカ島のムントク飛行場を空襲して敵機二十八機を撃墜破してマレー方面から敗退した敵空軍の大半を撃滅した。

バンカ島はスマトラ島の東方に横はり面積千平方キロ、世界屈指の島である。人口十七万、その三分の一は華僑である。ムントクはバンカ海峽の北門を扼する要塞市である。シンガポール、ジャバ間定期航空路の中間着陸地、飛行場は樅千メートル、幅二百五十メートルの中形飛行場で、蘭印空軍はこの地を前進根據地としてゐた。

わが海軍航空部隊も艦艇部隊に呼應し、シンガポールより脱出せんとする敵を監禁してゐたが二月十四日バンカ島附近の哨戒中ロツクヒード・ハドソン編隊の敵十機と遭遇、交戰三十分にして悉くこれを撃墜した。

二月十五日未明わが陸軍部隊の精鋭は海軍部隊と緊密なる協同の下にバンカ島ムントク附近の敵前上陸に成功し、同日夕刻同島東岸の要衝バンカルビナンを占領し、敵の前進空軍基地を奪取すると共に、ジャバ海の西關門を扼した。

（七）バリ島を占領

わが陸海軍部隊は緊密なる協同の下に二月十九日バリ島南部の要地デンパサルを完全に占領した。

バリ島は一葦帶水のバリ海峽を隔てゝジャバ島の東端に横り、小ジャバとも呼ばれてゐる。北はジャバ海、フロレンス海、南はインド洋に臨み、小スンダ列島の戰略的要地で、島内のジンバラン飛行場は米英空軍の有力なる根據地となつてゐた。二月五日わが海軍航空部隊はこれを急襲して敵八機を撃墜破した。そしてスラバヤ、マランの敵軍本據の目の下にあるバリ島を襲撃し、敵の猛烈なる抵抗を撃破してこれを占領したのである。これによつてジャバ島に対する制空基地を獲得してジャバ島攻略軍の輸送と上陸に多大の貢献をなしたのみならず、ジャバ島と小スンダ列島との聯絡を遮斷した。

（八）ジャバ沖海戰

ハワイ、シンガポールの二大要塞に據つてゐた米英主力艦隊の潰滅後における敵海軍勢力は二つのグループに大別された。一はハワイ海戰當時たまたま港外に出動してゐたため僥倖にも撃沈を免れた米航空母艦及び太平洋沿岸にあつた航母それに開戰後太平洋に劃航されたサラトガ、レキシントン（共に三三、〇〇〇トン）ヨークタウン、エンタプライズ（一九、九〇〇）ワプス（一四、七〇〇トン）の五航空母艦と重巡、軽巡、駆逐艦等若干である。九隻の主力艦はわが海軍の攻撃を恐れて太平、大西両洋岸に釘づけにされてゐるやうである。

第二のグループはマニラにあつたハート大將の率ゐる米アジア艦隊と、英東洋艦隊の残存勢力及び蘭印艦隊とで、マニラ陥落後三艦隊はジャバ附近において合体、西南太平洋艦隊を編成し、司令長官にはハート大將が任命された。艦隊主力は米甲巡ヒューストン（九、五〇〇トン）乙巡マーブルヘッド（七、〇五〇トン）蘭印巡洋艦ジャバ、スマトラ（六、七〇〇トン）デ・ロイター、六、五〇〇トン）トロンプ、ヒームスケルク（三、三五〇トン）の七隻と英の甲巡エクゼクター等若干の巡洋艦からなつてゐた。この聯合艦隊にはこの外に三、四十隻の潜水艦があつて、開戰當初わが近海まで出没してゲリラ戰を企圖したが、その大部分が撃沈された。

航母集團攻撃法

航空母艦を主体とするアメリカ艦隊は、太平洋の制海、制空権をわが海軍に掌握せられてゐるため、航母集團攻撃法による遊撃戰法に出で、わが海軍の監視の眼を盗んでわが基地を襲はんとした。

一月十二日ハワイ西方洋上にレキシントンを中心としてわが本土を窺つて出動中を、わが潜水艦に発見撃沈された。越えて二月一日マーシャル群島附近に航母甲巡・駆逐艦等が襲撃し來つたが、わが守備隊の猛反撃により甲巡一隻は大火災を起し飛行機十一を撃墜されて敗退した。同二十一日ニューギニア東北海上に航母集團が出現したところを、わが航空部隊が発見、壮絶なる体當り戰法を以て新式中型航母一隻を撃沈、軍艦一隻を大破してその企圖を挫折せしめた。その三日後の二十四日早朝大鳥島に敵航母集團が襲來したが、地上砲台の猛攻を浴びて敗退し、四回に及ぶ出撃により航母二隻を喪失し、敵海軍勢力は著しく劣勢となつた。

大本營発表（二月六日午後四時）帝國海軍航空部隊は前日の蘭印空軍撃滅戰に引續き敵艦隊を雲龍中、二月四日駆逐艦数隻を伴ふ敵艦隊主力をジャバ海カンゲアン島南方三十浬海上に発見、機を失せずこれに猛攻を加へ戰闘数刻にして敵蘭巡ジャバ型一隻を撃沈、蘭巡デ・ロイテルを大破間もなく沈没、蘭巡ジャバ型一隻ならびに米巡マーブルヘッド型一隻を中破し五千トン級敵船一隻を撃沈せり、本海戰により開戰以來西南太平洋に策動しつゝありし敵艦隊なかんづく蘭印艦隊主力はこゝに事実上ほとんど潰滅するにいたれり、本海戰においてわが方一機を失へり

【註】本海戰をジャバ沖海戰と呼称す

大本營発表（二月七日午後五時五十分）その後の詳報によればジャバ沖海戰戰果発表中の米巡マーブルヘッド型一隻中破は米甲巡一隻大破、蘭巡ジャバ型一隻中破は蘭巡ジャバ型一隻大破なるほかさらに蘭軽巡トロンプ型一隻（速力三十三ノツト）を大破せること判明せり

大本營発表（七日午後七時）帝國潜水艦は二月五日ジャバ海方面において大型駆逐艦一隻を撃沈せり

わが海軍は敵聯合軍が中樞據点と恃むジャバ島方面の攻撃は二月三日の有力なる航空部隊によるスラバヤ方面軍事施設に対する大爆撃を以て開始せられ、この一帶に敵機八十五機を撃墜破し、更に翌四日米蘭聯合艦隊主力をカンゲアン島南方海上に発見するや機を失せず、有力なる航空部隊を以て果敢なる攻撃をくはへ一擧にして米國大型巡洋艦ヒューストン型一隻、蘭印巡洋艦ジャバ型一隻、及びデ・ロイテルを撃沈、蘭印巡艦ジャバ型及びトロンプ型各一隻を大破し、ここに開戰以來跳梁してゐた西南太平洋の残存海上主力を潰滅したのである。

従來根據地深くひそんでゐた米蘭艦隊がかくも堂々出動したのは英米筋の頻々と放送したいはゆる『マカツサル海峽の勝利』を事実としすでに大東亞海に日本海隊なしと安心したからにほかならず、いはゞ米苦しまぎれのデマ放送が米蘭聯

合艦隊を潰滅せしめたものである。この三日海鷲の猛爆に潰え去つたジヤバ方面の敵飛行機にしてもマカツサル海峡の勝利に酔へばこそ我海鷲制壓下の基地に悠々翼を休めてゐたのである。かくて『マカツサル海峡の勝利』は米蘭艦隊ジヤバ沖の惨敗蘭印空軍の潰滅を生みジヤバ沖海戦の輝ける戦果は米英のデマ放送に最も痛烈かつ深刻な事実をもつて皮肉な妙弁を與へたのであり、かゝる戦果をあげたわが海鷲の殊勲は國民擧げて銘記すべきである。

駆逐艦は備砲、速力その他において潜水艦に勝ること数等であるから、通常潜水艦は駆逐艦を発見した場合は逸早く逃走してその攻撃より遁さかるのであるが勇敢なるわが潜水艦は逆に勇闘これに驀ひかり一撃の下にこれを撃沈したもので、両者正にその位置を顚倒し、見敵必殺の熾烈なるわが海軍魂を遺憾なく発揮したものである。

米の甲級巡洋艦

九、〇五〇トン、乗員約七百、長さ五六九フイート、幅六六フイート、吃水一七フイート、備砲八インチ砲九門、五インチ高角砲四門、搭載機四機、速力三三ノット、ヒューストン、オーガスタスはこの級に属してゐる。

▽ジヤバ、スマトラ号　蘭印巡洋艦、両艦ともに排水量六、六七〇トン、全長五五〇九フイート、幅員五二フイート、備砲五・九インチ砲十門、四〇ミリ高角砲八門、カタバルト一、搭載機二機を搭し、ジヤバ号は一九二一年、スマトラ号は一九二〇年竣工した姉妹艦である

▽デ・ロイテル号　蘭印巡洋艦、排水量六、四五〇トン、全長五五七呎、幅員五一呎、備砲は五・九インチ砲七門、四〇ミリ高角砲一〇門、一七・七ミリ高角砲八門を備へカタバルト一、搭載機二機を有し、乗員四三五名速力三三ノット、一九三五年竣工の最精鋭艦で蘭印艦隊司令官ドールマン少將が坐乗し、旗艦であつた、ド・ロイテル号はオランダ名提督デ・ロイテルの名前をとつたもので同提督にオランダの東郷元帥ともネルソンとも稱されてゐる

▽蘭印トロンプ型　三、五五〇トン長さ四三三フイト、幅四〇フイート、吃水一五フイート速力三三ノット、五・九インチ砲六門、四〇ミリ高角砲八門、一二・七ミリ高角四門、二二インチ魚雷発射管二門、搭載機一機

（九）バリ島沖海戦

大本營発表（二月二十一日午後三時十五分）＝バリ島方面海陸協同作戦実施中帝國海軍水雷戦隊所属〇〇駆逐隊駆逐艦二隻は二月二十日午前零時同島東方ロムボク水道に於て巡洋艦二隻、駆逐艦三隻よりなる敵米蘭聯合部隊に遭遇するや直ちに攻勢に轉じ午前零時四十分砲火を開き戦闘十分にして敵駆逐艦二隻を撃沈、他の一隻を大破せしめ、更に逃走を企てたる敵巡洋艦二隻を急追、午前三時に至り再度これと交戦せり、また分離行動中の同隊駆逐艦二隻も急遽南下し來たりこの敵を攻撃せしが敵は我砲雷撃により損害を受け倉皇として夜暗にまぎれ我が視界外に遁走せり、本戦闘に於て我方駆逐艦一隻損害を受けたるも戦闘航海に支障なし

本海戦は大東亞戦開始以來最初の水雷戦隊による海戦であり、優勢なる敵艦隊に対してわが海軍が殊にその得意とする敢々相撃す夜襲戦において一発轟沈の神髄を発揮したものとして、またまた世界を震撼せしめた。

しかるに大本營は詳細なる戦果判明するに及び同二十七日左の如き発表を行ひ戦果の擴大と共に既知れぬ帝國海軍の威力は世界を驚歎せしめたのである。

大本營発表（二月十七日午前十一時五十分）（一）その後の詳報によればバリ島沖海戦の戦果左のとほりなること判明せり、駆逐艦四隻（米二隻、蘭二隻）撃沈、巡洋艦二隻、駆逐艦一隻大破（二）帝國海軍航空部隊は二月廿二日チモール島附近において蘭敷設艦ヤン・ブアン・ブラーケル型一隻、三千トン級敵船一隻を爆破炎上せしめ、二万トン級敵船一隻を爆沈せり

わが駆逐艦二隻は巡洋艦二、駆逐艦五よりなる敵において壓倒的に優勢なる敵艦隊と遭遇するや敢然として攻勢に轉ず、二対七の砲戦闘十分にして敵駆逐艦四隻を撃沈、一隻を大破せしめ、遁走を企てたる敵巡洋艦二隻を急追すること三時間、艦型において、砲力において我に優る巡洋艦に肉薄して遂にこれを大破せしめ、再起不能ならしめたもので、世界戦史上未曾有の水雷戦隊の大戦果である。

本海戦は帝國海軍が傳統的誇りをもつ水雷戦隊を以て、しかも列强海軍を威怖せしめてゐる夜襲をもつて、平素の猛訓練と体當りの攻撃精神を遺憾なく発揮したものであり、わが光榮ある海戦史に更に輝しき一ページを加へたものである。しかも駆逐艦を撃攻する任務をもつ巡洋艦がわが必殺の砲雷撃を受け、夜陰にまぎれて辛じて遁走せんと企てた無氣力に至つては、まさに鼠に追はれて逃げ廻る猫の醜態にも比すべきで、この戦闘精神の懸隔がこの大戦果を生んだ第一の原因といふべきであらう。

撃沈した敵駆逐艦のうち二隻は蘭印のビートヘン型、他の二隻は四本煙突のアメリカ駆逐艦である。大破した巡洋艦の一はジヤバ型、一はトロンプ型で先のジヤバ沖海戦で撃ちもらされた残りの軽巡である。このうちトロンプ型は當時の狀況より撃沈されたものと推定されるが、確認さるるに至らないため大破と発表されたものである。

水雷戦隊のこの偉功により戦前五隻の巡洋艦と十隻の駆逐艦を擁してゐた敵もこゝに全滅するに至つたのである。

▽ジヤバ、スマトラ型　蘭印巡洋艦、いづれも排水量六六七〇トン、全長五〇九フイート、幅員五二フイート、備砲五・九インチ砲十門、四十ミリ高角砲六門カタバルト一、搭載機二を有し速力三〇〇、乗員五百廿五名、前者は一九二一年、後者は一九二〇年竣工で、一九三九年改装、近代装備が施された

▽トロンプ型　蘭印軽巡で一九三七年五月竣工、排水量三三五〇トン、全長四二六・五フイート、幅員四〇フイート、備砲五・九インチ砲六門、四〇ミリおよび一二・七ミリ高角砲各四門、二二インチ魚雷発射管六、艦載機一

▽ビートヘン型　蘭印駆逐艦、一九二七年四月竣工、排水量一三一〇トン、全長三〇七フイート、幅員三二フイート、吃水一〇・五フイート、四・七インチ砲四門、三インチ高角砲一門、一二・七ミリ高角砲四門等を備へ同型艦四隻がある

（十）スラバヤ沖海戦並にバタビヤ沖海戦

西南太平洋艦隊は蘭印の防衛を最後の頼みとして、大東亞海域における最軍の作戦を阻止せんと企圖してゐた。

一月二十七日エンダウ沖ではわが護送船團を狙つた英駆逐艦二隻がわが駆逐艦

の砲火を浴びて撃沈、二月四日にはジャバ海カンゲアン島南方において米蘭聯合艦隊はわが海鷲の猛攻撃を受けて巡洋艦二隻撃沈、三隻大破された。續いて二十日バリ島沖に出現した巡洋艦二、駆逐艦五よりなる米蘭聯合艦隊はわが水雷戦隊の果敢なる夜襲の前に全滅した。かくて一月二十日のバリ島沖海戦よりジャバ沖海戦までに米英蘭の巡洋艦五隻を撃沈、六隻を撃破した外駆逐艦八隻を撃沈、二隻を大破させて、敵巡洋艦、駆逐艦二十一隻を撃沈破してゐる。この三海戦で大半の勢力を失つた敵聯合艦隊は辛うじてジャバ島スラバヤ方面に退避して余喘を保つてゐた。

米英は相次ぐ敗戦に頽勢の挽回を企圖し、アメリカはグラスホード少将を司令とした合衆國西南太平洋艦隊と、リアリー少将を司令とする濠西艦隊を増派し所謂アンザック・フォースをもつて残存英蘭艦隊と合隊して西南太平洋聯合艦隊を編成し、オランダのヘルフリッヒ中将を司令長官として反撃の機を狙つてゐたが、たまたまわが大輸送船團のジャバ海通過を探知し、出撃し来たつたところを、二十七日薄暮零敵機動中の帝國海軍に発見された。勇躍したわが蘭印方面所在艦隊主力は時は移をず出動、これを邀撃して開戦以来の艦隊主力間の大海戦を展開した。彼我の勢力は巡洋艦において彼優り、駆逐艦において我方優勢であつたが、わが砲撃の精確なる、忽ちにして敵巡艦一隻、駆逐艦三隻を撃沈し、奇襲艦艇は漆黒の海上に残敵を追及した。

二月二十八日午後零時十分大本營は左の如く発表した。

わが蘭印方面所在艦隊主力は二十七日午後六時ジャバ海において敵西南太平洋艦隊主力を捕捉激戦を展開、敵巡洋艦一隻を撃沈、駆逐艦三隻を撃沈し、目下残敵追撃中

三月一日午後大本營はその後の詳報により、スラバヤ沖及びバタビヤ沖両海戦の戦果につき左の如く発表して敵西南太平洋聯合艦隊の殲滅を報じた。

【大本營発表】（三月一日午後四時（一）ジャバ方面海戦において三月一日早朝迄に判明せる戦果左の通り

一、スラバヤ方面海軍作戦部隊は二月廿七日薄暮より廿八日未明迄に敵米英蘭聯合艦隊に属する巡洋艦三隻、駆逐艦六隻を撃沈、巡洋艦三隻を大破せり

（註）本海戦をスラバヤ沖海戦と呼称す

二、バタヴィア方面海軍作戦部隊は三月一日早朝、米大巡一隻、濠巡一隻を撃沈せり

（註）本海戦をバタヴィア沖海戦と呼称す

三、此の両海戦において我蘭印所在艦隊は西南太平洋方面敵艦隊主力を概ね殲滅し殘残敵掃蕩中なり

四、我方の損害は駆逐艦一隻、小破せるも戦闘航海に差支なし

【大本營発表】（三月一日午後四時五十分）帝國陸軍航空部隊は二月廿七、八の両日に亘りその主力を以て西部ジャバ海の敵艦隊を索めて攻撃、スン多海峡に於て三千噸級軍艦一隻を撃破炎上せしむると共に巡洋艦二隻、駆逐艦一隻に各〻確実に直撃彈を命中せしめ之に多大の損害を與へたり

今回の両海戦に敵がかくも多数の艦艇を出撃せしめたのは米英がジャバ沖海戦以来潰滅に瀕した聯合國海軍を救援増強する意圖の下に米英本國海軍よりそれぞれ續々急派し、濠洲艦隊もまた始めて海戦に参加した。

無敵艦隊のこの戦果は米英の企圖を粉砕したるに止らず、大東亞水域の敵艦影を全く拂拭し去らんとするものである。

鷹戦号勝の帝國海軍が世界に誇る水雷艇隊は遂に真價を発揮し、その最も得意とする鷹戦戦法を以て敵聯合海隊をスラバヤ沖及びバタビヤに捕捉し、その巡洋艦五隻、駆逐艦六隻を撃沈、巡洋艦四隻を大破、合計十五隻を撃沈破するの大戦果を擧げた。明治二十六年水雷艇が新しく誕生して帝國海軍に威力を加えて以来五十余年、日夜血の滲むやうな猛訓練を續けて日清、日露戦役に活躍して無敵の榮譽を荷つた奇襲艦隊が、その五十年の傳統を発揮して二月二十七日黄昏より二十八日未明にかけて肉薄捨身敢々相撃する必殺戦を敢行してこの輝く大戦果を獲得したのである。

蘭印軍當局は二十八日夜ジャバ沖海戦に関し次の如く発表して『輸送船團を護送中の強力なる日本艦隊に対し、聯合國艦隊は二十七日攻撃を加へた。戦闘は夜間に及んだがその間味方は相當の損害を被つた』と、かく聯合艦隊の敗戦を自認した。またリスボンにおいて傍受したBBC放送によれば、蘭印海軍當局は二十七日、八両日にわたるスラバヤ沖並にバタヴィア沖両海戦において、反枢軸聯合國海軍が蒙つた撃沈艦船の中に、蘭印巡洋艦反び駆逐艦が含れてゐることを確認した。

甲巡一、駆逐二を撃沈

大本營発表（三月二日午後五時四十分）殘敵掃蕩中のスラバヤ方面海軍作戦部隊はさらに三月一日午前十一時クラガン北方海面逃走中の英甲巡一隻並に駆逐艦二隻を撃沈せり

スラバヤ沖の海戦に徹底的敗北を喫した西南太平洋聯合艦隊の一部は撃沈を免れ遁走を企てたが、スラバヤ方面作戦部隊は三月一日午前十一時頃ジャバ島の中央より稍スラバヤ寄りのクラガン北方海面において全速力を以て逃走中のイギリス甲巡一隻及び駆逐艦二隻を捕捉し、直ちにこれに猛烈なる必中彈を浴せた。前日の海戦において意氣頓に沮喪した敵は煙幕を展張しつゝ、ひたすら逃走に努めたが、鋭切なる海鷲の協力の下に加へられたるわが砲火の前には、その煙幕も效を奏せず、駆逐艦一隻はわが砲撃により瞬時にして撃沈、英甲巡もまたわが集中砲火を浴びて沈没し、次いでわが水雷戦隊の壮烈果敢なる白昼雷撃に最後の止めを刺され海底深く屠られた。殘る一隻の駆逐艦は戦場離脱を企てたが、わが果敢なる追撃に果さず、遂に撃沈されるに至つた。

二敵艦を撃沈

スラバヤ沖、バタビヤ沖の二大海戦において敵西南太平洋聯合艦隊に殲滅的大打撃を與へ、大東亞海の全水域、全空域を完全に掌握した帝國海軍は濠洲及びインドに対し有力なる出撃態勢を整へるに至り、インド洋に進出せるわが艦艇は三月二日ジャバ島チラチヤツプ沖において英駆逐艦ストロンゲホールドを、翌三日米砲艦アセヴルを捕捉撃沈し、敗残の敵艦艇に最後の止めを刺した。

▽ストロンゲホールド　大正八年七月竣工、基準排水量九五〇トン、備砲一二センチ砲三門、機砲五門、発射管四門、速力三一ノット、乗員九八名

▽アセヴル　大正七年七月進水、基準排水量一、二七〇トン、備砲四インチ砲三門、三吋砲二門、一吋砲三門、速力二二ノット、乗員一八五名

兩海戰の輝く戰果

大本營發表（三日午後五時廿分）蘭印方面所在帝國海軍作戰部隊は二月廿七日より三月一日に至るスラバヤ沖、バタビヤ沖両海戰において同方面敵艦隊を撃滅せり、その戰果左の通り

（一）撃沈せる敵艦隊主力　ヒューストン米甲巡、エクゼター英甲巡、パース濠乙巡、ホバート濠乙巡（轟沈）、デ・ロイテル蘭乙巡、ジャバ蘭乙巡（二）その他撃沈せるもの潜水艦七隻、駆逐艦八隻（うち二隻大損傷擱坐）、砲艦一隻、掃海艇一隻、本海戰においてわが方掃海艇一隻沈沒、駆逐艦一隻小破せり

（註）（一）ジャバ沖海戰において撃沈と傳へられたるヒューストン型一隻はオーガスタの撃沈なりしこと判明せり（二）ジャバ沖海戰において大破間もなく沈沒と発表せるデ・ロイテルはトロンプなりしが如し（三）さきにスラバヤ沖海戰において巡洋艦四隻大破と発表せしところうち二隻はその後バタビヤ沖海戰において撃沈せられたるもの、他の二隻は夜間激戰中駆逐艦または砲艦などを巡洋艦と誤認せるものなること判明せり

スラバヤ沖、バタビヤ沖両海戰は、わが巡洋艦戰隊、水雷戰隊の雷撃、砲戰、水雷戰隊の夜襲、潜水艦の奇襲、海鷲の猛爆と水上、水中、空中と三位一體間然するところなき協同作戰、皇紀せる戰法、平素の猛訓練を十二分に発揮した近代的立体海戰の典型的なもので、大東亞戰開始以來の最初の本格的海戰であつた。殊にこの二大海戰がジャバ島攻略の陸軍部隊の輸送船團を護衛中だつた我が海軍部隊によつて敢然闘はれ、聯合國側が唯一の海上部隊と恃む西南太平洋聯合艦隊並に米英両本國よりの新鋭増援部隊を撃破して、わが輸送船團を撃滅せんとする敵の意圖を粉砕して、わが輸送船團を撃滅せんとする敵の意圖を粉砕して、ジャバ島の上陸作戰に大成功を納め得たことは、戰史上最も困難とされる輸送船團護送の任務を、積極的な敵の妨碍を排除して、果し得たことにおいて世界戰史に大書さるべきものである。

撃沈された敵艦の性能要目

◇米甲巡ヒューストン（九〇五〇トン）一九三〇年六月竣工、速力三三、七ノット、主砲二〇、三センチ九門、搭載機四台

◇英甲巡エクゼター（八三九〇トン）一九三一年五月竣工、速力三二ノット、主砲二〇・三センチ六門、搭載機二台、なほ同艦は去る十四年冬南米モンテビデオ沖で獨ポケット戰艦ゲラフ・シュペ号を爆沈せしめた英艦中の一隻であつた

◇濠乙巡パース（六九八〇トン）一九三六年七月竣工、速力三二、五ノット主砲一五、二センチ

◇ホバート　パースと同型で一九三六年一月竣工

◇蘭乙巡デ・ロイテル（六四五〇トン）一九三六年五月竣工、速力三二ノット、主砲一五センチ七門

◇同ジャバ（六六七〇トン）一九三六年五月竣工、速力三二ノット、主砲一五センチ七門

◇同トロンプ（三三五〇トン）一九三八年五月竣工、速力三三ノット主砲一五センチ六門

大本營発表（三月十一日午後三時十五分）

一、帝國海軍巡洋艦戰隊は三月二日濠洲西方印度洋上において濠洲方面に遁走中、米巡マーブルヘッドを長駆捕捉し、これを撃沈せり

二、帝國海軍駆逐艦は三月九日未明バリ島ロンボク水道附近において蘭掃海艇ヤン・ファン・アムステルを撃沈せり

越えて三月二日夜十時二十五分わが巡洋艦船隊はオーストラリア西方インド洋上にオーストラリアに向つて遁走中の敵艦を発見、直ちに砲撃を開始した。同艦はわが的確なる集中砲火を浴びて應戰の遑もなく瞬か七分にして同三十二分インド洋底深く沈沒した。同艦はアメリカ乙巡マーブルヘッド（七、〇五〇トン）でさきのジャバ沖海戰、バリ島沖海戰、並にスラバヤ沖海戰に参加し、損傷を蒙りスラバヤ沖から逃走を企てつゝありしものである。鷹艦甲巡ヒューストン、同姉妹艦甲巡オーガスタンと共に艦隊主力を構成してゐた巡洋艦三隻はここに一隻も剩さず海底の藻屑と化したのである。

一方敵残艦艇を風つぶしに殲滅するため哨戒中わが駆逐艦は九日未明蘭印掃海艇を発見、一撃の下にこれを撃沈し、敵残艦艇を掃蕩し、大東亞水域より敵の艦影全く消へ去らんとするに至つた。

マーブルヘッド　一九二三年十月進水、排水量七、五〇〇トン、六インチ砲十門、三インチ高角砲四門、高角機銃八門、二十一インチ発射管六門、搭載機四カタパルトニ、速力三五ノット、乗組員四五八名

アムステル　一九三六年八月進水、排水量五二五トン、備砲三インチ砲一門、二二、七ミリ高角機銃四門、普通機銃一、速力一五ノット、乗組員四六名、掃

海艇でありながら機雷敷設々備をもつてゐた。

大本營発表（三月五日午後四時）ジャバ島南方インド洋に進出中の帝國海軍部隊は三月二日ジャバ島チラチャツプ沖において英駆逐艦ストロングホールドを、また翌三日米砲艦アセヴルを捕捉、交戰少時にしてそれぞれ撃沈せり、本戰闘において我方損害なし

勝敗の鍵は國民性の優劣

アルゼンチンの海軍評論家として知名なるM大佐は三月七日のパンペロ紙にジャバ・スラバヤ沖海戰について論文を寄せ、米英側の公報が常に虚構と欺瞞とに満ちたものであるがアメリカ海軍省の公報は日本軍の戰果の前に粉砕されたと痛撃した後、日本海軍の勝因を究明して左の如く論じた。

日本の提督等は聯合艦隊に遭遇すれば既に最初から日本海軍の必勝を信じてゐる。その確信を実現せしむるものは、即ち日本海軍の提督等の能力並に將士の勇敢さが聯合軍のそれに対して優つてゐるからである。日本海軍を勝たしむるものは見せびらかしの演習ではない。実戰における豊富な経驗及びその光榮ある傳統である。このバタビヤ沖、スラバヤ沖両海戰に日本海軍が眞の海のエキスパートであることを證明した。日本海軍は米海軍より強いといふ余の論文は正しかつたことを證明した。余は日米両海軍が顔を合せるならば、國民性の優劣がその勝敗の鍵であると結論した。今や余の結論は実現され、日本海軍の偉容は正にアジヤの波荒き洋上にふさはしきものであることを證明した。日本の建艦技術の優秀さと兵員の訓練の素晴しさは、日本軍の自己犠牲の貴き精神と共に今や明白にされた。

ジヤバ、スマトラの失陷は聯合國にとつて最大の悲劇である。濠洲の運命は皮肉だ。自國の肚丁を他國に送り、自國の防禦は恃むべからざる米英の救援を必要としてゐる。自國の飛行機は他國の背空の下で戰つてゐるが、かれらの妻子は日本航空部隊の爆撃の下に戰慄しながら他國に送るべきでなかつた息子や兄弟の歸つてくるのを徒らに待つてゐるのだ、これは自國の運命を自覺しなかつたものに対する大きな教訓であり、また銘むべからざる『民主主義』聯合國の永久にやつて來ない救援の手を信じ込んだ大いなる醜ひである。

米英の共同敗戰報告

米英両國はスラバヤ沖、バタビヤ沖海戰における西南太平洋聯合艦隊潰滅の事実を隠蔽し得ざるに至り、海戰後二週間後の三月十四日始めて出來得る限り粉飾に努めた左の如き共同敗戰報告を公表したが、それすらなほ國民に一大衝動を與へずにはおかなかつた。

當局としてまだすべての報告を受け終つたわけではないが、二月二十七日の海戰およびその後日本軍がジヤバ島上陸にいたるまでの數日間におけるジヤバ海戰に關し左のごとき結論に到達した。

二月二十七日の午後濠洲巡洋艦パース、英巡洋艦エクゼター、米巡洋艦ヒユーストン、オランダ巡洋艦デ・ロイテル及びジヤバよりなる聯合艦隊は英駆逐艦エレクトラ、ジユピター、エンカウンターオランダ駆逐艦コルテナーエルの四駆逐艦とともにスラバヤ北方の海上を遊弋中であつた。右聯合艦隊司令長官は旗艦デ・ロイテルに乗組んだドールマン提督であり、さらにオランダ海軍のヘルフリツヒ大將の指揮の下に行動をとつてゐたものである。二十七日午後四時十四分スラバヤとバエアン島（スラバヤ北方一五〇キロ）の中間で日本艦隊と遭遇するや、たゞちに砲撃を被り、聯合艦隊も砲火をもつてこれを迎へた。間もなく魚雷攻撃を受けた。英巡洋艦エクゼターは魚雷攻撃を蒙けつゝあるうちに、機関室に砲弾を受け、このため速力減退、艦列を離れるの止むなきに至つた。最初の魚雷はオランダ駆逐艦コルテナーエルに命中、同艦はたゞちに沈没、これに対し英駆逐艦三度に反撃命令が下されたが、その結果についてはいまだ何等報告に接してゐない。エレクトラ号は煙幕の中に姿を見失はれたがそのまま連絡が絶え、沈没と確認された。

ドールマン司令長官は艦隊を北東に向けて航海せしめたが、再び日本艦隊と遭遇する機會を得なかつた。二十七日夜に至り聯合艦隊は日本輸送船を発見英これに対して砲火を浴びせたが、戰果不明である。ドールマン司令長官は右輸送船を見張りこれによりさらに北方を航行中と想像される日本輸送艦隊の存在を確保せんと試みた。しかし輸送船の速力が早いため右の方法は不適當なことが判つたので、ド司令長官は艦隊をジヤバ島に向け南下せしめ、ジヤバ島の沿岸沿ひに西に航行して日本艦隊を迎へ撃たうと計畫したのである。しかるにジユピターは西航半時間にして艦底破裂のため航行不可能となり、四時間後沈没ひにしてジヤバ島よりあまり遠からざる海上であつたため、乗組員の一部は救助され現在濠洲に行つてゐる。

午後十一時三十分聯合艦隊がレンバン北方十二浬の地点にさしかゝつたとき日本軍艦がわが軍隊と沿岸との中間に出現、直ちに砲撃が開始されたが、まづデ・ロイテルは最初の命中弾をうけ方向の大變換を行つた。魚雷を避ける措置であつたかも知れない。かくてデ・ロイテルおよびジヤバ両艦がほとんど同時に水中爆破を起したため他の巡洋艦は艦隊の再編成を行つた。前記二艦は間もなく沈没した。その間における日本艦隊に與へた打撃は正確に断定するのは困難のやうである。巡洋艦パースは損傷をうけたまゝ二十八日午前七時バタビヤの外港タンジヨンプリオクに到達した。聯合艦隊としてはジヤバに残つてゐる聯合軍側の船をその危險な狀態から救ひ出さねばならぬ困難な仕事が残つてゐるのだ。しかもジヤバ島では日本の海空軍力は壓倒的であり、一方濠洲までは海上六百浬、そこもまた日本軍の支配下にある所である。二十八日夜の來るのをまつてパース号はタンジヨンプリオクを出港、夜の明けないうちにスンダ海峡を通過する計畫であつた。

ところが、夜中同艦よりの無電によれば、午後十一時セイント・ニコラス地点で日本艦隊と遭遇、その後パースならびに米巡洋艦ヒユーストンより何の消息も得られなくなつてしまつた。同夜、エクゼターも駆逐艦エンカウンターおよび米駆逐艦ホプキンスを伴ひスラバヤを出港した。エクゼターよりの來電によれば三月一日の午前日本軍艦が、同艦目がけて急航するのを発見したといふが、それ以上エクゼター、エンカウンター、ホプキンス三艦よりの消息が絶えてしまつた。

一方オランダ駆逐艦エハートセンもスンダ海峡で日本軍艦と遭遇し、砲撃を受けたのち擱坐してしまつた。駆逐艦ストロングフオールド、濠洲スループ帆船ヤラは共に行方不明である。スンダ海峡戰における敵艦の損害も調査不可能である。

なほリスボン発トランスオツエアン電は『聯合軍のコンミユニケによると右海戰の損失は十三隻なり』とその艦名を左のごとく報じてゐる（括弧内は國籍とトン数）

一、撃沈されたもの甲巡ヒユーストン（米九〇五〇）同エクゼター（英八三九〇）乙巡パース（濠六九八〇）同ジヤバ（蘭六六七〇）同デ・ロイテル（蘭六四五〇）駆逐艦ホプキンス（米一一九三）同コルテーナエル（蘭一三一〇）同エレクトラ（英一三七五）同ジユピター（英一六九〇）同エンカウンター（英一三七五）同ストロングフオールド（英九〇五）他に艦種不明の濠洲軍艦

二、大損傷をうけたもの艦名不明の英駆逐艦

英國民の驚愕

イギリスではジヤバ島の陥落後の小康狀態と、ソ聯軍のドイツ軍に対する反撃とによつて幾分の光明を見出さうとしてゐたが、両海戰の敗報にロンドンは失望落膽の陰鬱な空氣に包まれてしまつたと、三月十五日ストツクホルム発の朝日新聞特電は報じてゐる。海國民たるイギリス人は一般に陸上の敗戰に関しては比較的に無感覺であるが、海戰における敗北に対しては病的にまで敏感であり、両海戰によつて受けた衝動はマレー沖海戰の場合に劣らぬものがある。マレー沖海戰においては、イギリス空軍の援護がなかつたから、敗北を喫したのだと自ら慰めてゐたが、米英蘭濠聯合艦隊が二つの海戰によつて全滅したことは、七つの海の王者の誇りを完全に喪失した。イギリス國民はいまや、强力なる陸、海、空軍を有する恐るべき大敵と直面してゐることを深酷に意識せざるを得なくなつた。イギリス國民が特に痛憤してゐるのはラプラタ海戰においてドイツ海軍の誇りであつたグラーフ・シユペー号を自爆せしめたエクゼター号の撃沈である。同艦はこれまでイギリス海軍の傳統的な勇氣と優秀な訓

練の象徴と見られてゐたのである。スウェーデン各紙も日本側の報道は余りに一方的大勝であるとして、先の日本の公表には僅かの紙面を割いたのみであつたが、米英が共同発表において日本の発表を裏書きしたので、始めて想到し得られなかつたことが厳然たる事実であつたことを知り、大々的に報道して國民を驚かした。

イギリス諸新聞は完敗を認めながらもなほ『日本海軍が優勢であつた』ことに唯一の慰めを見出してゐる。メルボルンに逃げ延びたデイリー・メール紙の特派員は十六日左の如く報道してゐる。

日本海軍の砲撃が衰へてゐるといはれたのは全くの宣傳に過ぎなかつた。生存者は口を揃へて日本海軍恐るべしといつてゐる。彼等は日本海軍の砲撃を第一級と評價してゐる。更に日本海軍の乗組員の規律は眞に厳然たるものがあり、この点イギリスには一つの慰めにならう。何となればわが俘虜はよき待遇を受けるであらうから。

米國の憂鬱　アメリカにおいても國民に與へた衝動は頗る深酷なるものがあるやうである。聯合國艦隊の全滅により太平洋における彼我の海軍力に大きな不均衡を生じたものとして民衆の動揺甚しく、政府當局に対する非難が囂々と擡起り、戦争の前途に対し悲觀の色はますゝ濃化して來た。サンデー・スター紙は十五日社説で

ジャバ水域海戦における日本海軍の大勝利は、この方面の戦況を決定的なものとした。本海戦後ジャバは日本軍の一撃の下に脆くも潰え去つたのは當然のことであつた。また日本軍の全西南太平洋制覇はジャバ沖海戦を契機としていよ〳〵浮動不動のものとなつたのである。日本軍の能力の眞髄はいふまでもないが、聯合軍が数において、火力において日本軍より劣勢であつたことは事実である。軍艦、戦車、飛行機及び大砲において日本軍に優越せざる限り、反枢軸國聯合軍に勝利を期待することは、凡そ酷の至りである。

更に痛烈なる抗議はアメリカ海軍内部より起きた。ポーツマス軍港司令長官ジェームスはジャバ沖海戦は史上空前の凄惨かつ壮絶な海戦であつたが、聯合國艦隊の敗北は忍苦より安易を求めた當然の帰結であるとて次の如く述べてゐる。

『ジャバ沖海戦は海で戦はれた戦争のうちで最も血闘くかつ無拠な戦闘であつた。英米蘭三國の聯合艦隊は最後の一発までも敢闘したが敗戦の悲涙を嘗めなければならなかつた。これは我々が曾てバンと大砲のいづれかを選擇しなければならぬ破目に立至つたとき、バンを選んだ結果であり、これがジャバ沖海戦の敗北となつたのである。今日我々には軍艦を選ぶか、有するもの〳〵悉くを海底の藻屑とするかの二途しか残されてゐない。國民は今や十分の覚悟をもつてこのうち一つを選擇すべき重大関頭に立つてゐる。

（十一）ジャバ島攻略戦

シンガポールの陥落によつて皇軍の西南太平洋制覇は、孤立するジャバ島を残していまや一應の完成を示すに至つた。東條首相は二月十六日議會において『米英と提携して敢て抵抗を續くる蘭印に対しては、帝國は徹底的にこれを撃滅せんとするものであります』と言明し、皇軍の鋭鋒は直ちにジャバを衝かんとするに至つた。

攻略上の困難　蘭印はジャバとジャバ以外の領域とではその開発の上に霄泥万里の懸隔がある。ジャバは二千年の文化を存し、オランダ本國にも劣らぬ物質文化を有してゐる。蘭印七千万の住民中その五千万が面積一割余のジャバ島に蝟集してゐる。これに反して外領は殆ど原始林を以て蔽はれ河岸又は海岸に点々として資源要点が散在してゐるにすぎない。この蘭印における開発の差違に、主作戦目標たるジャバ島攻略の困難があつたのである。

ジャバ島には無数の航空基地が設けられてゐるが、外領においては飛行場も少いし、設備も至つて不十分である。ジャバまでの距離が遠い上に、修理工場もなければ、燃料の貯蔵もない。しかしながらこれらの飛行場を占領確保しなければ、ジャバ島攻略は出來ないので、皇軍はボルネオ島東南隅のバンジェルマシン、セレベスのマカツサル、ケンダリー、スマトラのパレンバン、タンジョンカラン、バリ島のデンパサルを占領して敵航空基地を奪取してジャバ島空軍に対する包圍陣を形成するとともに、一月二十日チモール島のデリー飛行場を占領してオーストラリアからの増援の道を遮断した。この間ジャバ島の敵空軍基地に対して果敢なる猛攻撃が反覆せられ、陸軍航空部隊は一月十九日四十六機、二十日二十七機、二十一日二十四機、二十二日十五機、二十四日の如きは敵機六十八機と六日間に百八十機を撃墜破して敵航空兵力を殆ど壊滅したるのみならず、この間敵巡洋艦四隻、駆逐艦一隻等に直撃弾を與へ、わが海軍の善戦健闘と相俟つてジャバ島攻略軍の輸送並に爾後の作戦に貢献なからしめた。海軍航空部隊も二月三日スラバヤ、マランのジャバ島主要航空基地を空襲して敵機八十五機を撃墜破したのを皮切りに殆ど連日に亘りジャバ島方面に対し大規模な空襲を決行して敵本

壌の航空兵力を破摧し、またチモール島及びオーストラリアのポート・ダーウインを空襲して敵聯合軍の後方聯絡並に補給の機能を喪失せしめ、敵側に與へた有形無形の打撃に甚大なるものがあつた。

全島の要塞化　蘭印の軍備は元來米英に依存しシンガポールの一翼として対日包圍陣の重要なる一環をなしてゐたが、ジャバ島は蘭印防衛の核心であつた。戦前約五万の兵力が駐屯してゐたが大東亞戦開始直前には米英豪より多数の兵力増援を受けて戦前の約二倍に増強され総数約十万を算するに至つた。

装備も近來著しく充実され、近代軍の実質を具へるに至つた。島内を地理的関係によつて東部、中部、西部北部、西部南部の四區にわかち、マラン、スラバヤ、スマラン、バンドン及び首都バタビヤ等の重要都市を中心として各地に兵力を分散配置、特に東部地區ではスラバヤ、西部ではバタビヤ、バンドンに全力を傾注してこゝに大軍事據点をつくり、その防衛に主力を集結してゐた。蘭印軍當局はバタビヤが攻撃に容易なることを懸念し、全蘭印軍司令部（軍司令官テル・ポールテン中将）をバンドンに設置した。バンドン、バタビヤ、スラバヤ、チラチヤツプの五地には堅固な要塞を構築して全島の要塞化を図りつゝあつた。飛行場は島内に七十を設け空軍によるジャバ島防衛を企図してゐたが、特にバタビヤ・バンドン、スラバヤ等の周辺には二、三の大型飛行場を有して居り、カリジヤチ、マオスバテ、ジヨクジヤカルタの四飛行場と共に蘭印空軍の基地として、その完備した施設を誇つてゐた。

包圍態勢なる　この作戦の構想を検討すれば、皇軍は一月三十一日蘭領ボルネオ島タナクロゴトの敵前上陸に成功、二月十日バンゼルマシン及びポン

チアナツクを完全占領して、ジヤバ海に面する南部ボルネオの觀定作戰を終了し北部からジヤバ島攻略の態勢を整へたが、シンガポール陥落後皇軍の鋭鋒はスマトラに延び、陸軍部隊の一部は二月十五日バンカ島ムントクに上陸してバンカ海峡を扼し、先に十四日パレンバンに奇襲降下した陸軍落下傘部隊と協力して十七日同地を占領、二十日南部の要衝タンジユン・カランを、二十四日ペンクレンを攻略し、旬日を出ですして南部スマトラの觀定を終了、ジヤバ島に対し四部からの脅威を加へた。

更にジヤバ島東部方面においては二月十九日バク島に上陸した皇軍は要衝ベンバサルを衝き、また他の一隊は二十日未明チモール島デリー附近及びクーパン附近の上陸に成功、ここに東西北の三方面よりするジヤバ島挾撃態勢を完成し、ジヤバ島防衛の前進據点を虱潰しに撃摧してジヤバ島を全く孤立無援の孤島と化せしめた。

更に陸海軍の航空部隊は連續空襲により米英蘭濠空軍の六百八十機を撃滅破して敵空軍に殲滅的打撃を與へ、更に帝國海軍は數次の海戦において敵西南太平洋聯合艦隊を全滅し、かくてジヤバ島は戦略的には全く襖の一孤島とするといふ放膽、巧緻を極め、上陸作戦における近代戦の典型であつた。

敵前上陸に成功す

蘭印作戦全期間を現地にあつて直接作戦の枢機に参畫した大本營陸軍部派遣参謀〇〇中佐の語るところによれば（四月二十九日朝日新聞）敵の戦力に籠み必勝の信念に燃ゆるわが攻略軍は兵力を分散して各方面一齊に上陸を開始する作戦が立てられた。即ち『〇〇兵團はスラバヤ西方クラカンに上陸し一挙にスラバヤを屠る。これと同行した坂口兵團――この兵團は先に比島から次々と五段跳して來た部隊だが、さらに六段跳を演することになつた。――がソロ、ジヨクジヤを一氣に席卷して敵軍唯一の退路たる印度洋岸の良港チラチヤツプを抑へる。

東海林部隊――これは〇〇の激戦に参加して來た二段跳び部隊――がこれこそ危險至極だつたが敵の本據バンドンの眼の下にあるジヤバ第一の飛行場カリヂヤチを抑へる。〇〇兵團はジヤバ西北端の岬に上陸して先づバタビヤ、バイテンゾルグを略し次いで最後にバンドンを陥すといふのである。ここでスラバヤに上る兵團と西部ジヤバに上る兵團との距離は東京と下關の距りがあるのである』

大本營発表（三月二日午後零時二十分）新鋭落國陸軍部隊は我海軍援護の下に昨一日末明空陸海よりする敵の猛反撃を冒しつゝジヤバ島東部、中部、西部各方面の强行上陸に成功し引續き戦果擴大中なり、本上陸作戦における我船團の損害判明せるもの沈没一隻、〇〇三隻なるも揚陸過半終了せるものにしてこれが人員の損害殆と皆無なり。

わが蘭印攻略軍は海軍と相協同して三月一日末明ジヤバ島西北端アウラン岬附近、バタビヤ東方パトロール附近及びスラバヤ西北方ゲラガン附近の敵前上陸を敢行した。

ジヤバ島中部方面に上陸したわが部隊はジヤバ島を東西に二分し、その各々に堅固なる地歩を占むるに至つたが、また西部方面では敵は道路橋梁を徹底的に破壊して皇軍の前進を阻止せんとしたがわが東進部隊は獨特の機動作戦により二日早くもバタビヤ東方に進出し、わが猛攻の鋭鋒に蘭印政廳はバタビヤを放棄してバンドンに移轉した。しかしながらバンドンもまたわが猛爆下に曝され、防衛軍は混乱に陥つた。一方スラバヤ西方ケラガンに上陸したわが機甲部隊は蘭印軍を一蹴し、二日來海軍基地たるスラバヤに肉薄、必死の防戦を試みる米英蘭印聯合軍と壯烈なる肉彈戦を展開した。かくて北部海岸の鉄道幹線は全く遮断され、バタビヤ、スラバヤも共に孤立に陥つた。

敵總司令官の逃亡

この混乱のさ中に聯合軍司令長官ウエーヴエルは難免されて、三日空路インドに引揚げた。ウエーヴエルの難免は西南太平洋聯合軍司令部の事実上の解消を意味し、四月ウエーヴエルの後を襲つた蘭印軍司令官ヘーン・テル・ポールテンに対してはジヤバ島防衛作戦に関する事項以外には何等の權限も與へられてゐない。シンガポールの陥落、スマトラ南部の制壓、チモール島上陸等日本軍の作戦の完全なる成功により反樞軸聯合軍は相互の聯絡を遮断され、總司令部の存續は無意味となつたので、ウエーヴエルは總司令部を解消し、孤立無援のジヤバ島の防衛を蘭印に委ねてインドに引揚げたといふにあるが、イギリスは皇軍のジヤバ島上陸四十八時間にして早くもジヤバを見限り、ウエーヴエルを突如インドに復帰せしめ、危機切迫せるビルマ、インドの防衛に主力を傾注せんと宣するものであるが、ジヤバを以て聯合軍最後の據点とし死守すると豪語してゐたイギリスがジヤバを放棄したことは既に聯合軍の戦略が軍事的のみならず精神的にも弱体振りを暴露したものである。ニューヨーク・タイムス紙ロンドン特派員は總司令官の更迭は聯合國の太平洋作戦が崩壊し、ウエーヴエル就任の主要目的が解消したゆゑであるとて次きの三つの理由を挙げて説明してゐる。

（一）ジヤバの戦闘は同島の防衛を主とした獨立した戦闘であり、ウエーヴエルが總司令官に就任した當初の綜合作戦の一部とは見做し得ない。

（二）かくて聯合國の太平洋作戦は遂に崩壊したのであるが、綜合作戦崩壊後におけるジヤバ島防備は同島の防備を極力準備し且つその防衛作戦に最も精通してゐる蘭印側にその指導を譲渡するのが妥當である。

（三）しかして聯合國側ではジヤバ攻略後の日本の次ぎの襲撃は濠洲よりもインドに向けらるるだらうとの見方が有力であり、從つてウエーヴエルは日本の襲撃が最も强いと豫想されるインド地區の防衛に當らされることになつたのである

蘭印の悲歎

ウエーヴエルの退陣は蘭印當局に一大衝撃を與へた。バタビヤ官辺は『ウエーヴエルこそは沈み行く船から逃れる鼠にも等しい』と非難したが、殊にブアン・モーク蘭印副總督は三日左の如く聯合軍總司令部の怠慢を痛罵した。

日本軍の蘭印各地特にジヤバ島上陸は海軍の活動によつてのみ阻止し得たのである。しかるに西南太平洋反樞軸聯合軍總司令部は手を拱いて傍然なすべきことすらなさなかつた。米英はビルマのことのみ考へてジヤバの防衛など念頭になかつた。ジヤバを救ふか、ビルマを救ふか、二者その一を選ぶ場合ジヤバ救援が第一であるのは理の當然ではないか、聯合軍總司令部は米英によつて支配されて居り、オランダは司令部内に名を留めてゐるのみで、発言權すら與へられてゐない。日本軍は遠距離を冒してジヤバに上陸を敢行した。この点から見れば米國が遠距離を權にとつて蘭印へ増援軍を送り得ぬといふことは理由に

ならない。

ロンドンのオランダに命政府外相クレフエンスも『大東亞戰爭は遂に反獨軸側の敗北となつた。蘭印をこの悲境に陷れた責任は米英両國にある』と米英の非を鳴らした。

敵空軍を殲滅　ジャバのみならず、チモール一帶から遠く濠洲北部に亙りジャバ島周縁の敵空軍基地に徹底的爆撃を加へた帝國海軍航空部隊は三月三日鵬翼を張つて再び濠洲本土爆撃を敢行し、ポート・ダーウイン西方の要衝ブルーム・ウインダムを急襲、ジャバ島救援のため発航準備中の最新鋭飛行艇群に銃爆撃を加へ、所在機全部二十八機を爆破した。三月一、二日には東部ジャバ島及び同島以東のスンダ列島の全航空基地を攻撃、殘存機並に新着機二十六機を撃破、進えて四日にはジャバ島バンドンを強襲、殘存十八機を潰滅し、敵空軍を殲滅してジャバ島以東の上空に敵機影を見るを得ないまでに完全なる制空權を確保した。

敵首都を占頭　ジャバ島西部セラン西北方三十キロの二地点に上陸した部隊は直ちに猛進擊に移り、一日午前十時半早くもセランを占領、クラギランを突破して同日午後三時には長駆してランガスビトンを屠つた。三日にはバイテンゾルク西方六、七キロのチサダネ河左岸地區を確保し、四日午前十時半にはバイテンゾルグ西方のルウイリアンを奪取した。この百キロを突破する奥地進擊はバタビヤ、バンドン間の連繫を絶ち、首都バタビヤを全く孤立せしめた。わが軍は四日夜有力なる敵の軍事基地バイテンゾルクを夜襲し直ちにバンドン要衝に向つて敵を急追した。クラギラン方面より東進せるわが精鋭に対して、敵はつひに抵抗の術もなく五日午後九時三十分に至つて敵首都は完全に皇軍の占領するところとなつた。

バンドンに肉薄　中部方面においては一日未明インドラマユ西方地區の上陸に成功するや直ちに戰果を擴大、パカデン方面に進出して北部横断鉄道を遮断、一隊はパカデン西南十三キロのカリヂアチ飛行場をめがけて猛進、二日午後零時三十分同飛行場を完全に占領してわが航空部隊をこの地に躍進せしめた。この日スパンゲも皇軍の手に帰し、かくて四日午前七時にはブルワカルタ占領、チカンペックを壓迫、いよいよ戰局を有利に展開し、わが挺身部隊は所在の敵の逆襲を撃破して、五日午後三時チヤスル西南方の分水岭を越えて敵が最後の復讐と恃んだバンドン要塞の北側に迫り、極めて優勢なる敵に対し散然これを攻撃した。バンドンの死命はこの時既に決したのであつた。約二万の兵を擁し各種堅固なる防禦施設を施してるたバンドン要塞守備軍も、この一部隊が進んで危地に投じて敢行した迅速なる攻撃に慴伏したのであらう。假首都防衛司令官ブレスマン少将自ら七日午後十一時三十分わが第一線に來たり停戰を請ふに至つた。

スラバヤを陥落　東部方面においてはレンバ東方三十キロの地点に上陸後各要衝を制壓しつゝスラバヤ攻略の布陣を急速に進めスパン、レンバンを屠り三日にはチエフを占領した。また一部隊はブラを、同日午後四時にはブオルダチを奪取した。四日、スラカルタ北方への進出軍は一気にカラカルタを突破して五日敵中深く挺進しジヨクジヤカルタを占領して、引續き海岸道を突進、ジヤバ島南岸における敵最大の退却路たるチラチヤツプに迫つた。また一方東進部隊は四日にポジヨネゴロを攻略、五日午後五時にはパパツツを屠つて六日ラモンワンに迫り、バンドンへの鉄環を弾く壓縮した。

かかる間にチエフより南下急進を續けた有力部隊は四日ジャルバンを抜き、更に東進して五日正午にはスラバヤを衝きわが精鋭は七日午後三時五十分スラバヤを完全に占領、感激の日章旗を打ち立てたのである。九日カリジヤチ飛行場における敵驀合軍の無條件降伏もこの戰果の前には極めて自然の帰結であつたといふべきである。

敵軍遂に全面的降伏　敵守備軍司令官の停戰申出に対し、わが第一線部隊長は敵をして直ち抵抗を止めべきこと、並に八日時刻を定めて更に會見すべきことを告ぐると共に、現地最高指揮官に報告を請ふた。ここにおいてわが現地最高指揮官は蘭印總督自らカリジヤチ飛行場に來たり交渉に當るべきことを要求した。

八日午後三時五十分に至り蘭印總督チヤルダーは陸軍長官テルボールテン以下を隨へカリジヤチ飛行場に到着した。わが現地最高指揮官は先づ總督及び陸軍長官に対し、その保有する權限につき質問したのに対し、總督は統帥權を有せずと答へたるを以て、陸軍長官に対し『貴官は無條件降伏をするのか』と問へば、テルボール陸軍長官は『バンドンだけ降伏を許して頻にバンドン地區のみの停戰を請ふた。十分間考慮の時間を與へられた陸軍長官は再會談再開さるゝや直ちに全面的降伏を承服した。陸軍長官はわが方の降伏に関する條件に應従し、九日午前中に長官自らわが方の要求を全東インド地域の蘭印軍に対し放送し、その放送をわが方で總取した時その誠意ある降伏を確認することとし、午後四時長官は再びカリジヤチ飛行場に來りわが方要求事項の実行されつゝある状況につき報告すべきことを申渡された。

陸軍長官は九日午前十時半わが方の要求次第に蘭軍な降伏の仕方を全軍に放送し、定刻までにわが現地最高指揮官の許に出頭し、ここに十万に近き蘭印軍及び米英濠軍は武器を棄て、全面的降伏するに至り、あくまで抗戰を豪語した蘭印は皇軍の上陸後僅に旬日を出でずして皇軍の手に帰するに至つた。

わが代表は直ちにバンドンに入城し、同地に集結中の敵西部防衛軍主力並に中部防衛軍の一部六千を武装解除した。バンドン東北方地區及びチラチヤツプ地區の敵軍に対しては九日深更テルボールテン陸軍長官の名を以てバンドン集結が命ぜられた。

蘭印方面陸軍最高指揮官　九日午後十時二十五分大本營より蘭印方面陸軍最高指揮官は今村均陸軍中将なることが公表された。

ジヤバ攻略軍を指揮した覆面の最高指揮官は、今村均中将と発表されたが、上陸作戰を主体としたこの作戰の指揮官としてさすがにその人を得たりの感を深くしたのである。今村将軍がジヤバ上陸軍の最高指揮官としてそこに打つてつけの感を與へるのは、実に上陸作戰の堂々たる経驗ずみの将軍であるといふ点である。昭和十四年十一月の騰軍二十個師を壓滅した南寧作戰における南支北海の上陸作戰で中将は感状を授與されたが、"上陸作戰史上未曾有の荒天下に狂瀾怒濤と闘ひ至難なる水路を克服して敵前上陸を敢行"したといはれた如く、この作戰の経驗は今次ジヤバ島上陸に満々たる自信を與へたこと勿論で、また大東亞海を闊しつゝ敵前上陸を敢行しなければならなかつたジヤバ作戰に中将が被擢起用を

受けた狙ひでもあつた。ジャバ最高指揮官に出るまでには山田教育総監の下で本部長として約二ケ年在任した。

翌れば三月十日、陸軍記念日の意義深き日、今村最高指揮官はオランダの壓制より解放された悦びに熱狂する住民の歓呼に迎へられてバンドンに入城した。

ジャバ攻略戰綜合戰果

大本營発表（三月十一日午後五時二十分）蘭印方面帝國陸軍部隊のジャバ攻略作戰において攻めたる戰果の主なるもの左の如し

（註）本数量は敵の無條件降伏に方り提示し来りしものなるをもつて実際においては若干の誤差あるべし

一、俘虜九三、〇〇〇（内将校約二〇〇〇）内訳＝在ジャバ部隊六〇、〇〇〇、在外領部隊一八、〇〇〇、義勇軍一五、〇〇〇

二、鹵獲品飛行機一五二機　内訳＝爆撃機二四機、戰闘機四五機、其の他八三機、戰車（裝甲車を含む）三六七輌、火砲七三門、機関銃（主として航空機用）一、五六七挺、銃器九七、三八四挺、爆弾四、一〇五個、爆薬二二〇、〇〇〇個、各種砲弾二三〇、〇〇〇発、手榴弾三四、〇〇〇発、各種銃弾七二、三一七、一〇〇発

俘虜八萬二千六百余

大本營発表（四月八日午後五時）＝蘭印方面帝國陸軍部隊の三月二十五日迄に爪哇島内のみに於て收めたる戰果の主なるもの左の如し

一、俘虜総計八二、六一八名（内訳）和蘭軍六六、二一九名、濠洲兵四、八九〇名、英國軍一〇、六二六名、米國軍八八三名、右の内和蘭軍は三月九日無條件降伏時我軍に提示せる人員より六千余名多く、また米英、濠洲軍は翌三月十日降伏を申出たるものなり

二、鹵獲品▽飛行機一七七臺▽火砲総計九四〇門（内訳）重砲一〇八門、野山砲一六一門、高射砲八三門、機関砲、迫撃砲等五八八門▽重軽機関銃四、二三八挺▽小銃及騎銃八〇、七七八挺▽照空燈五、一五三台▽弾薬火砲弾薬一、七二八、五八五発機関銃及小銃実包八九、〇七一、八一〇発、爆弾三六、〇〇〇個▽車輌　戰車、砲甲車及特殊車輌一、〇五九輌、自動車九、五〇〇輌、鉄道車輌七、一〇八輌▽糧物十万人分の約一ケ年分△本期間に於ける我軍の損害戰死八四五名、戰傷一、七八四名

陸軍航空部隊の偉功

ジャバ島攻略における陸軍の活躍はまた目覺しいものがあつた。即ち去る二月十五日シンガポールの英軍無條件降伏によつてマレー半島作戰を終つた陸軍航空部隊は息つく暇もなく直ちに蘭印方面に進出し二月十九日ジャバ敵航空撃滅第一撃を敢行して、四十数機を血祭りに擧げ、爾後二月二十七日まで西部ジャバ各飛行場を剿すところなく襲撃し、その間実に敵飛行場攻撃延回数十七回、撃墜破敵機数また二百機を越え、二十八日には既にジャバ上空に敵機影を認めず、僅かに東部奥地の秘密飛行場に逃避隠遁せる敗残の敵機も全く戦意を失ひ伏するのみであつた。かくて行動を開始した上陸船團は連續出動して掩護に當るわが航空戰隊部隊によつて安全性を保たれ三月一日未明東部、中部、西部三方面よりする歴史的ジャバ島敵前上陸に成功したのであつた。この間陸軍部隊はジャバ近海に徘徊する敵軍艦及び遁走を企てる敵船舶群を所に捕促爆撃を加へ、敵巡洋艦四隻、駆逐艦一隻に直撃弾を命中大破せしめた。しかして三月二日急進部隊のカリヂヤチ飛行場占據を認むるや、時を移さず同飛行場に躍進し、戰場上空を縦横に翔破して地上進撃部隊に直接協力し、戰況を有利ならしめると共に敵最後の據点と頼むバンドン西飛行場を連續攻撃して、残存敵機の蠢動を完全に粉砕し去つたのであり、蘭印軍が脆くも潰え全面的降伏を見たのは実に陸海空一体となり緊密に協同進攻せる作戰の賜といふべく、眞に皇軍の眞髓を発揮せるものと言ふべきである。なほ三月九日までに判明せる同方面航空戰果次の通り

敵飛行場攻撃延回数　三六回△敵機撃墜破数　四〇八機（内不確実一一二機）
△撃沈破艦船船九隻△我損害　三三機

脱出救援の敵船二十一萬トン撃沈破

大本營発表（九日午後零時十分）ジャバ島攻略戰に行動中の帝國海軍部隊は三月より三月八日に亘りジャバ島周辺海上並に印度洋に脱出または救援企圖中の敵船五十二隻約二十一万トンを撃沈破しその殆んど全部を覆滅せり

潰滅の悲運に喘ぎジャバ島から脱出救援を圖らんとした敵輸送船團に対し、一艦一隻も逃がさじと帝國海軍部隊はかねてよりジャバ島周辺に警戒、航空機、潜水艦の空海水中の三位一体の水もらさぬ立体的封鎖陣を布き監視し、封鎖に引掛つた船舶を猛烈爆撃し悉々八日間に敵船五十二隻（廿一万トン）を撃沈、これを覆滅した。その内訳は、一万八千トン級の商船一、八千トン級以上の商船十隻四千トン級二十一隻を始め武装商船、輸送船、油槽船等でかくの如く脱出の企圖を未然に挫折された蘭印の潜戰人員、物資の損害は莫大なものと見られる。しかして西南太平洋東南印度洋がわが制海空權下にあり、大量の船舶の回航等思ひもよらぬとき一舉に五十二隻といふ輸送に快適の大中型商船を喪失したことは、反枢軸聯合軍今後の南方防衛作戰に甚大なる打撃を與へたものといへる。

東インド作戰を御嘉尚

【大本營発表】（三月十日午後三時五十分）大元帥陛下には本日陸海軍高級長を召させられ南方軍総司令官並に聯合艦隊司令長官に対し左の勅語を賜はりたり

勅語

東印度諸島方面ニ作戰セル陸海軍部隊ハ緊密適切ナル協同ノ下ニ長途難多ノ困難ヲ克服シテ勇戰奮闘克ク敵航空兵力及艦隊ヲ撃滅スルト共ニ諸方面ニ至難ナル上陸作戰ヲ断行シ隨所ニ勁敵ヲ破摧シテ神速果敢ク其主要根據地ヲ覆滅シ以テ敵勢力ヲ一掃セリ

朕深ク之ヲ嘉尚ス

必勝不敗の態勢なる

一月十六日蘭領ボルネオ東岸タラカン島にわが最初の鉄槌が下されてから五十余日、ジャバ島を最後として蘭印全域の據点は焼けて皇軍の確保するところとなつた。かくてイギリスに次ぐ大植民地王國オランダは三世紀に亘る侵略の歴史を

殘して全面的に潰滅し去り、僅に西インド諸島中のギアナ、キユラソウの二島に名目のみの存在を留むることゝなつた。

西南太平洋聯合軍總司令部が設けられてゐた敵最後の據点も大東亞戰爭開始以來僅に三ケ月にして陷り、対日包圍陣はこゝにあへなく終焉を告げ、あくなき対日敵性をほしいまゝにした西南太平洋の諸地域はいまや擧げて皇威の下に帰伏し數世紀に亙り東亞諸民族を迫害搾取した、米英蘭諸勢力は大東亞より一掃されて漸く御稜威の下にその本然の姿に復帰せんとしつゝある。

全蘭印の戡定によつて大東亞海の南辺に鋭々として横はる東インド諸島は軍事的にはわが東亞防衛の自然の防壁として、敵の反撃を防ぐと共に、今後わが新なる躍進の根據地として極めて重大なる役割を負ふに至り、また経済的に見ればこの諸島に賦存する豐富なる天然資源は擧げてわが活用に供せられ、わが戰爭條件はいよ〳〵有利となり、その反面これが敵國への流出を封ずることによつて敵の抗戰力を低下せしめ、消耗戰における彼等の優劣は次第にその差を開かしむるに至るであらう。

かくてこゝに皇軍は必勝不敗の戰略態勢完成し、この壓倒的優位を利用して更に米英撃滅戰の展開への飛躍を試みんとしてゐるのである。

米英呆然自失す　ジャバの全面降伏は蘭印側の驚語してゐた無士抗戰を信じきつてゐた米英に衝撃的衝動を與へ、米英朝野を呆然自失せしめた。敗戰につきものの責任問題がまた擡頭したがニューヨーク・ヘラルド・トリビューン紙は三月九日の紙上で蘭印軍を日本に降らしめた責任はアメリカにあるとして、左の如く政府を痛罵した。

ジャバ島の運命を決したのは聯合國空軍の無力にあるが、この事実にアメリカにとつて無限の恥辱である。ジャバ島空軍は相當數の爆撃機はもつてゐたが、これを護衛すべき戰鬪機が不足だつた。対日開戰後すでに三ケ月を終へた今日、聯合國がジャバ島の如き軍要據点の防衛に関して責任ある計畫を樹立せず、場當り主義で、ありあはせの武器軍需品のみを用ひようとは我々の全く想像だにしなかつたところである。アメリカは敗戰の都度、アメリカがその全力を発揮する時が近づいたと教へられて來たが、この希望はまたもや裏切られた。

戰捷第二次祝賀　シンガポール陷落を機に二月十八日第一次祝賀後僅に二旬余、無敵皇軍進撃の前に忽ちにして米英濠蘭の聯合軍を屠りスラバヤ沖、バタビヤ沖両海戰の大戰果、ランゲーンの攻略、全蘭印の戡定なり、大東亞戰は武力戰に輝く第一段階を畫するに至つたので三月十二日第二次祝賀が擧げられ、休會中の帝國議會は本會議を開いて謹々たる戰況を感謝謹祝した。

（十二）北、中部スマトラの戡定

南部スマトラの戡定を終へた皇軍は更にその戰果を北部方面に擴大し二月二十四日パレンバン西方二十キロのスルランゲンを急襲して五百の敵を包圍殲滅した急進を續けて二十八日砲兵を有する敵を撃砕してスルランゲンの西北百キロのムアラテホを占領、同日ジャンビー飛行場西方ムアラブンゴ（ムアラテホ西方約五十キロ）を占領した。越えて三月四日午後五時中部スマトラの要衝ジャンビを占領すると共に同地南方一帶の油田地帶を確保した。

ジャンビは南方にハリ河流域を中心とするジャンビ油田地帶を控へ、蘭印における最も重要なる油田地として知られ、戰前においても歩兵敢ケ大隊が常駐守備してゐた。

殘敵殲滅戰　スマトラ島における殘敵は蘭印軍司令官の降伏命令の不徹底により、なほ各地に組織的な抵抗を續けてゐたが、わが軍は三月十八日北部ランバハンの敵陣を撃破した。同地方敵軍最高指揮官バーマー・ブラン・テンブレス大佐は遂に降伏した。十九日フオルトリコで監禁中の邦人女子三名、ドイツ人三十九名、イタリア人三名を救出した。

北部スマトラ上陸作戰部隊は三月十二日未明北部スマトラ各要地の無血上陸に成功し、この戰果を擴張して同日正午すぎスマトラ最北端の要地タクラジヤを占領、ドクニガ飛行場を確保した。ウエ島に上陸した部隊は未明までにサバンを占領、またタブラハンルクに無血上陸した部隊は十三日午前八時半北スマトラの首邑メダンに入城した。西進部隊はパリケより南進、上陸以來五日間に五百キロを突破して十七日午前三時スマトラ西海岸の要衝パタンを占領して、インド洋岸に進出した。これによりスマトラの中、北部二千キロに及ぶ大作戰は五日間にして完了し世界戰史稀に見る電撃作戰を展開し、皇軍の勇猛果敢を遺憾なく発揮したいまその作戰の全貌をを一瞥しよう。

メダン戰線　十二日拂曉、北部東岸〇〇附近に奇襲上陸した部隊の一部はもの凄く爆破された道路、鉄橋を修理しつゝ夜を徹して進撃續け、翌十三日午前八時早くも北部スマトラ第一都市メダン市突入、八時三十分には原住民大歓迎のうちに進撃、主力部隊が堂々入城し多數の殘敵を掃蕩とした。一部は息つくひまもなくメダン咽喉たる東方約三十キロの港ベラワン市（人口約二万）を攻略ゴム濟載の貨車多數を鹵獲し、附近の掃蕩と相俟つてこゝに北部スマトラ地區はわが軍の完全占領するところとなつた。

中部戰線　上陸地点より西南部に進撃した主力部隊は十三日朝ベマタンシヤンタに進出、抵抗を排除して山岳の急坂道路を猛進し、同夜トホ湖畔に進撃湖の東南ポルセア附近の岩山に據り抵抗を試みる敵約三百に対し、湖上よりの機動作戰と相俟つて奇襲を敢行、白兵戰により敵を潰滅するや敵はバリゲ部落附近の橋梁に爆破裝置を施し忽ち四散した。わが軍はさらにジロングバロン、タルトン間五十キロの羊腸たる道路を急進して十五日未明には西海岸の商港シボルを占領、ゴム機械類多數を押收した。同日午後六時にはパダン・シジンバン市を攻略し、十六日午後四時二十分中部スマトラ山間の都市コタノバンを陷れた。

かくて猛進撃をつゞけたわが先遣部隊がパダン市北方約百七十キロのロボクシカビン部落の南方に迫るや敵は道路上に白旗を掲げて降伏して來た。これは敵の補給兵であつた。さらに赤道直下を南進しパダン北方九十キロのフオード・コツク市においては無抵抗の敵兵舎内にあるオランダ兵三百二十五名を捕虜とし、さらに我が軍は急進して十七日午前三時三十分つひに西海岸最大都市パダンに突入、直に市街掃蕩を終へ飛行場を占領した。同市ではシンガポールより逃亡した英國兵八百六十六名、オランダ兵三百余名を捕虜とし直に武裝解除してパダン兵舎に收容、こゝに中部スマトラ作戰を完了した。パダンで武裝解除した英軍は八百七十三（内將校六十一）蘭印軍九百十一（内將校十六）であつた。

北部戰線　さらに北部戰線においてはスマトラ東北端に位するウエ島東

南岸に十二日午後二時半奇襲上陸を敢行したわが部隊は、同日精瀧を完了してガソリンタンク七、石炭一万トンを押へ、また十二日午前三時二十五分スマトラ島北部都市コタラジヤ附近に敵前上陸敢行部隊は響恥に富る約六百の敵を撃退して十時四十分には同所を完全占領、午後二時ドクニガノ飛行場を占領した。また十二日午前五時半北部スマトラ東海岸イヂ南方に上陸した部隊は、一舉に数百キロを南下して北部スマトラ唯一のランサ油田地帯を占領したが、

ホコンブでは多数のセメントを押收した。

かくて五日間をもつてスマトラ北中部二千キロの全作戰を完了し、いまや我軍の指導下に、オランダの壓制から解放されたインドネシヤ民族の感激に溢れた善政が施され、新生スマトラの建設が歩一歩と固められつゝある。

北部スマトラ作戰において三月二十二日までに判明せる戰果は

(1)俘虜　オランダ將校七三、下士官兵一、九三九、英將校六二、下士官八一一、合計將校一三五、下士官兵二、七五〇、敵遺棄死体一三五

(2)鹵獲品　馬五〇、火砲二、要塞砲七、高射機関砲一、迫撃砲二、重機二七、軽機六三、自動小銃二、二五一、拳銃二七四、裝甲車三、機関車一二三、客車六三、貨車一〇八

十二　ビルマ作戰

ビルマの敵性がわが國民の眼前に眞正面から登場して來たのは、所謂援蔣ビルマルートの名においてであつた。支那事變が勃発してから蔣政權の四川奥地への逃避と、日本の全面的海上封鎖、さらに蘇ソ戰による西北援蔣ルートの遮断により雲南ビルマルートは一躍蔣政權の抗日戰闘力に対する唯一最大の輸血路として注目されるに至つた。

かくて重慶援助の名の裏には、米英が北中南支で失つた勢力をこの地に再建扶殖し、西南支那、要地ビルマの資源を搾取せんとする飽くなき侵略的意圖があつたのである。

昭和十五年二月ビルマ下院は絶対多数を以て『英本國がビルマ國民の同意を得ずしてビルマを参戰國としたことは遺憾である』との反英決議を採擇したことは當時各方面から注目された。

すなはち英側必死の宣傳にも拘はらずビルマ兵の犠牲において、己は安全な彼方から魔の糸を繰るイギリスの例の手はつひに、我が今次大東亞戰爭遂行上の一環として英勢力の駆逐を目ざす堂々の陣に震伏せざるを得なくなつた。

香港を失ひ、英領ボルネオを制せられ、シンガポールの命旦夕に迫つた頃もなほイギリスは矣止にも唯一の反撃據点と呼稱してビルマに必死の防衛陣を張つては見たが、まづ我が驚愕の猛爆撃下に曝されることによつて大東亞戰爭勃発直後の昭和十六年十二月十三日以來引續きビルマは皇軍の猛攻下に震撼してゐる。

空軍勢力を潰滅

大本營陸軍部発表（十二月十四日午後一時）帝國陸軍航空部隊は十二月十三日大舉馬來及びビルマ方面敵空軍基地を空襲し、敵の熾烈なる防空火力を冒して大爆撃を敢行し、これに多大の損害を與へたり

すなはち、本十二月十三日ビルマに対する陸軍初度の急襲はビクトリア飛行場に猛烈な攻撃を加へ、また他の一隊はビルマ領メルギー飛行場の猛爆を敢行したのであるが、引續き十四日には我が陸軍部隊の精鋭はビクトリア飛行場を攻略してしまつた。即ち

大本營陸軍部発表（十二月十八日午後三時）馬來方面（一）八日未明タイ領馬來海岸に上陸進駐せる部隊はタイ國に不法侵入せる英軍を撃退しつゝ進撃をつゞけ、十四日にはその一部はクラ地峡西岸の要衝ビルマ領内ビクトリア飛行場を攻略してクラ地峡を完全に制せり（二）シンゴラ、コタバル附近に上陸せる部隊は國境陣地突破後、熱帯特有のジヤングル地帯を克服しつゝ隋所に英軍機械化部隊を撃滅して進撃をつゞけ、戰況極めて有利に展開しつゝあり、當地方面陸軍航空部隊は惡天候を冒してビルマ、英領各方面の敵空軍基地を急襲して航空撃滅戰を敢行し多大の戰果をあげつゝあり

これよりさき『日本空軍はビルマのテナセリム地方上空に現はれ、同地方に対し銃爆撃を加へた。現在までに判明せる死傷者は七名なり』と朝日新聞ベルリン電報は傳へるなど、大東亞戰爭勃発以來、英、米海軍の惨敗は無論のこと、マレー半島東部海岸の上陸作戰に成功した日本軍が、さらに戰果を擴大中との報はビルマ全土に一大衝動をあたへ、首都ランゲーンはすでに大混乱に陥り市民は續々避難を開始した。

ランゲーン爆撃

次いでわが荒鷲は十五日、〇〇機より成る大編隊をもつてランゲーンを奇襲、同市内外に巨彈を浴せたのである。これら皇軍の空、陸よりする大進撃に備へて英軍、インド兵の混合大部隊は十八日よりランゲーンを中心に増援され、ランゲーン死守の戰闘準備に忙殺されてゐる旨（アヴアス電）傳へられる最中においてさきに我が空爆を受け、地上進撃部隊に攻略されたビクトリア飛行場は、これを守備せる英軍約五千名といはれたにもかゝはらず皇軍の猛進撃をきいて逸早く遁走、何らの抵抗をもなさず、イギリス空軍の根據地として誇つたビクトリアポイント一帯は、我が軍の無血占領するところとなりビルマよりのマレー救援の道を遮断した。

わがシンガポール攻略戰の進捗と共にビルマ防衛も直接の脅威にさらされてゐる狀況に鑑み、アメリカ空軍参謀長ブレット少將は二十日空路ランゲーン着で派遣され、英、米空軍の緊密なる協力強化により航空勢力の立おくれを回復せんとする懸命の努力をなすところとなつた。

大本營陸軍部発表（二十四日午後八時四十五分）帝國陸軍航空部隊は第一次ランゲーン爆撃に引つゞき二十三日午後さらに第二次大空襲を敢行、同市上空において敵戰闘機三十二機と遭遇、機先を制してこれを攻撃し二十一機（うち九機は不確実）を撃墜したのち、さらに悠々爆撃を実施し埠頭に碇泊中の大型船舶二隻を大破、三隻を中破せしめたり、我が方未だ帰還せざるもの二機なり

空軍再建の企圖粉砕

ブレット少將麾命の空軍再建工作がいまだ実現を見ざる間に、かくまたランゲーンはわが荒鷲の空爆に脅威されるに立至つた。二十三日に敢行されたランゲーン大空襲は壮絶きはまる大空中戰を展開したが、一瞬にして大修羅場と化したその日のランゲーン爆撃を空から目撃した朝日新聞特派員は次の如く報道してゐる。

この日、ランゲーンには敵戰闘機約三十機、その北方のトングーには十一

機、モールメンにもイギリス空軍がゐるとの情報により出撃した我が空軍に対し、ランゲーン市街の上空に至るや敵機も襲撃し來たり、高射砲の地上砲火もあり、死闘二十分もつゞき、飛行場、總督府、電信局、貯油場、停車場など黒煙に包まれて眞赤な炎に燃え立つた。敵機は一機また一機と落ちてゆく。想像に絶した本空中戦でわが直撃弾を受けた停車場、總督官邸からは火を発し、石油貯蔵庫の爆撃もあつてランゲーン上空は終日黒煙天に沖しイギリス人の心膽を寒からしめた。また特にイギリス軍の集結せるペンガラドン地區に甚大なる被害があつたとランゲーン敵放送局からは敗戦慌諤の悲壮な放送を行つた。

我が空爆に周章狼狽したランゲーンでは市内各所に壕掘、防空壕を掘り戦闘準備を整へつゝあつたが、政府當局はさらに市内二十箇所に防火用ポ、大型貯水槽の建造を命じるなど大騒であるにもかゝはらず一般市民は不安動揺に脅え、政府の勧告に耳を貸すことなく田舎へ用舎へと退散して行く状態であつた。

大本營陸軍部発表（二月六日午後一時三十分）帝國陸軍航空部隊は二月五日戦闘機および爆撃機より成る聯合大編隊をもつて大舉ランゲーンに対する第三次猛襲を敢行し、周章反撃し來れる敵のビルマ方面戦闘機全力と激烈なる戦闘を交へ、左の如き大戦果を收めこれに壊滅的打撃を與へたり。

（一）空中戦闘において敵機四十（うち不確実八）を撃墜し、地上にありし敵機八を爆破せり

（二）ランゲーン飛行場全域を徹底的に猛爆破壊せるほかランゲーン発電所を爆破炎上せしめたり、我が方の損害は九機（うち一機はタイ領に不時着）なり

右発表によるランゲーン大爆撃は第一回に優る大編隊群をもつて敢行されたが、ハリケーン、スピットファイヤーなどの敵戦闘機群の間隙を縫つて目的物に必中弾を浴せ、まづ発電所二箇所を破壊炎上せしめ、次でイラワジ河岸に山積された軍需物資の集積庫を猛爆、總督官邸にも必中弾を浴せ、一方ランゲーン東北郊ミンガラドン飛行場に向ひ、編隊は心ゆくまでこれを爆撃、使用不可能に陥らしめ、燃料庫二箇所を爆破炎上せしめるなど、小憂にも我に刃向ふ敵数十の戦闘機はわが爆撃の妨害を企圖したが、ハリケン、スピットファイヤーの高速機も忽ち我が戦闘機群の好餌となり、ビルマ空軍は潰滅したも同然の状態となつた。

日本航空部隊の矢つぎ早やのランゲーン大爆撃はビルマ駐屯のイギリス軍に大なる脅威をあたへるとともに、インドのイギリス軍にも多大の衝動をあたへたがイギリス軍當局は十二月二十八日ニューデリーにおいて被害状況を左の如く発表した。

二十三日のランゲーン爆撃は死傷者六百名を出し、二十五日の爆撃では前回よりも僅少である。ウエーベル英印軍司令官はランゲーン飛行場に居合せ危く九死に一生を得た。

モールメン陥落す

マレー戦局の急展的進展にインドへの脅威は刻々加重された。英側の焦慮は鉛ふべくもなく、英印度軍総司令官兼ビルマ軍司令官ウエーベル将軍は遽々と救援軍を派遣するなど、インドの前衛地たるビルマの守備に躍起となつてゐるが、二十八日英印軍當局から次の如き見解を発表、インド方面への日本軍の攻撃が切迫したこと並にビルマ防衛の重要性を警告してゐる。

日本軍がビルマに根據地を獲得すればインド方面へ出撃する可能性が出で來て、インド全土の英空軍基地とインド洋の各港口、および航行船舶は日本軍の爆撃下にさらされることゝなる。しかもビルマは交通の要衝で特に重慶への物資援助の基地であるから、援蒋物資は完全に杜絶する。

大東亞戦爭勃発直前英軍はタイ國に侵入すべく八千の軍隊をタイ國境に集結してゐたが、そのうちにはビルマ兵が含れてゐた。またランゲーン防備には四千五百のビルマ人と三千のインド人と二千六百のイギリス人軍隊が集結された。ビルマ兵の大部分は學生でイギリスのため強制徴発されたものである。

さらに蔣介石の最新鋭部隊は英蒋軍事同盟に本づきビルマに派遣され、ウエーベル将軍の指揮下に入り、イギリス、インド、ビルマ軍と協力してビルマ防衛に當ることになつた。その数二十五万とも傳へられ、ビルマ防衛戦線は異常な緊張を呈するに至つた。

タヴオイを占領

さきに皇軍の一部はクラ地峡西岸の要衝ビルマ領内ビクトリア・ポイントに進出したが、今やマレー半島戦線は半島の大半が皇軍によつて席巻され、シンガポールの命脈は旦夕に迫りつゝあつたとき、わが陸軍部隊は突如ビルマ領南方タヴオイ東北地區に進出、タヴオイ並に同地附近の陣地を占領した。

大本營発表（一月二十一日午後六時）帝國陸軍部隊は一月十七日カウメインダン（タヴオイ東北方二十八キロ）附近に陣地を占領せる約六百の敵を夜襲これを潰滅し、さらに十九日未明タヴオイ附近の敵陣地を攻撃して午後七時三十分タヴオイを完全に占領せり

タヴオイ附近攻略の戦果左の如し。

鹵獲品山砲二門、機銃十一挺、銃器三百十八挺、各種銃弾約十万発、自動車十輌、その他多数、俘虜百五十一、遺棄死体五百七十

地上部隊の進撃と相呼應して一月二十日陸軍精鋭はビルマ第三の都市モールメンの飛行場を奇襲、敵四機を撃墜し、地上軍全面の頑強な抵抗に猛撃を加へ多大の戦果をあげた。ラングーンラヂオは「タヴオイの飛行場が無傷で日本軍の掌中に帰した、日本航空部隊は早くも同飛行場を基地として活発な行動を開始してゐる。日本航空部隊はビルマ中央部ならびに各地の主要都市数市の軍事施設を爆撃した。モールメンはまたもや日本航空部隊の空襲をうけ十九名が爆死を遂げた」と放送した。

タヴオイ飛行場の占領はビクトリア・ポイント飛行基地の確保と相俟つてその後における我が航空作戦のベンガル湾及び、ビルマ方面に対する自由な活動を可能ならしめ、ひいては航空作戦によるビルマルート制圧を期し得る重要な意義を有つたのである。

モールメンに進撃

起伏重畳、幾多の渓谷を乗り越え自然の要塞たるビルマ領大密林地帯を猛進撃中の皇軍精鋭は途中反英獨立の同志を糾合し、皇軍の進撃を待ち構へてゐたビルマ〇〇軍と固い握手を交すなど炎熱下のジャングル進撃の難行軍中に感激の一瞬を喜び、〇〇部隊はモールメン東方地區へ向つて進撃を開始、一部の精鋭部隊は快速部隊を先鋒に强行軍を開始し、ビルマ防衛第一線基地たるモールメン目指し一齊に進撃したのである。

ビルマ進駐の皇軍はタヴオイの占領と共に、直ちにラングーン、シンガポール

間の海上交通に重大脅威を與へつゝ、一月二十一日には早くもイギリス軍の二大部隊をミヤワジの北方十マイルの地点に壓迫して追擊の手を緩めず、モールメン東北地區で頑强に抵抗するイギリス軍と激戰を展開、モールメン東方戰線に大兵力を集中し、一方運日活躍をつづけつゝあつた陸鷲精鋭のモールメン奇襲（一月二十二日）の大戰果に呼應してモールメンまで〇〇キロの近距離に肉薄した。

ビルマ民衆に布告　我が現地軍最高指揮官は一月二十二日ビルマ千五百万の民衆に呼びかけ、その自覺を促すため大要左の如き布告を発した。内容は東條首相が議會演說において明らかにした帝國の大東亞戰根本方針に則り、皇軍のビルマ進入の目的はビルマ全民衆をイギリスの搾取と壓政より解放、その獨立を支援する旨言明し堂々帝國の意圖を闡明したものである。

【布　告】（大要）　日本軍のビルマ進擊の目的は最近百年間の搾取と壓政とをこと〻せるイギリス勢力を一掃し、ビルマ民衆を解放して、その宿望たる獨立を支援し、もつて東亞永遠の安定確保と世界平和に寄與せんとするに他ならぬ。そも〳〵ビルマ人は日本人とひとしく東亞民族であり、熱烈なる佛教徒である。況やわが軍はビルマ解放のため進攻するものなるを以て、我が軍に対してはその身分職務の如何を問はず、各々その分に應じて協力の誠を致すべきである。日本軍また我に協力するものは何人たるを問はず、これを我が味方としてあるひはこれに保護を加へ、あるひはともに相携へて目的の達成に努力するであらう。これに反し我が軍に反抗し我が方の軍事行動を妨害するものは悉く東亞の敵として取扱ひ、断乎として膺懲の鉄槌を加へるであらう。即ちビルマ人と雖もわが軍事行動を阻害するものは東亞を裏切るものとしてこれを容赦せずこれに反して従來已むを得ず英國軍隊に入れられ、英國政權及び蔣介石政權と關係ありし者と雖も過去の一切の關係を絶ちて來るものは、これを我が同志として迎へ保護を加へるものである。今や東亞民族開放戰は開始された。東亞の同志民衆よ、東亞民族たる自覺のもとに一齊に起つて我が軍の作戰に協力せよ。しかして勇敢なるビルマ獨立義勇軍諸子よ。今こそ祖國の獨立と榮光のため蹶起すべき秋ぞ。必勝不敗の大日本帝國軍は諸子とともに進軍す。

モールメン平原に進出　ビルマ進擊中の皇軍はモールメンに向ふ鋭々たる山岳中の難路を衆群部隊を濠成して猛進、英ビルマ軍の意表を衝いて一月二十二日モールメン平原に進出、同二十三日陸鷲精鋭はラングーン飛行場を奇襲、敵戰闘機十機と猛烈な空中戰を交へうち八機を撃墜し多大の戰果をあげた。かゝるときビルマ文相ウー・バー・イムは一月二十二日夜イギリスの不信を痛撃した放送を行つたが、イギリス勢力と密接な關係を持つ同文相の放送は英、米の打ちつゞく敗戰と日本軍のビルマ進擊によつて英國的旧秩序がまさに崩潰せんとし、ビルマ國民が如何に混乱してゐるかを如実に示すものとして注目された。

陸鷲のビルマ強襲、我が陸鷲の精鋭はさらに一月二十三日午前、午後にわたり大挙ラングーン飛行場を空襲、激烈なる空中戰闘ののち敵戰闘機三十五機を撃墜また同日モールメン市街をも空襲し、甚大なる損害をあたへた。引きつづき同月二十四日にラングーンを襲撃し八機を撃墜破、さらに二十五日もラングーン上空にて重爆機と空中戰を展開し十機撃墜破するなど首都ラングーン初めビルマ南部地方は我が空軍の爆撃下にたゞ戰々兢々として、ビルマ英、軍慶空軍は我が荒鷲の好餌として慄へられたる観を呈するのみであつた。

タイ國軍ビルマ領へ進擊　タイ國政府は一月二十五日緊急閣議を開き、同日の正午を期して暴戾米英に対し宣戰布告を正式に決定した。それと同時に過去一箇月余日本軍と協力、タイ・ビルマ國境において嚴然と國境警備についてゐたタイ國數十万の軍隊に一齊に進擊命令が下つた。從來、ビルマ軍の國境侵略を防守警備するのみであつたタイ軍は日・タイ協同作戰の妙を発揮して同月二十五日俄然攻勢に轉じ、ビルマ領への積極的進擊を開始したのであつた。一方タイ國軍のビルマ進擊前後よりビルマの民衆はイギリス軍に信頼を失ひ、タイ國領へ續々と移動し來たり、すでに約二千名のビルマ人が國境を越えて北部タイのチエンマイ方面に逃げて來た。またこれよりさき一月十七日カウメイダン（タヴオイ東北方）附近を占領せる約六百の敵を夜襲し、潰滅した皇軍ビルマ進擊軍は十九日末明ミツター、タヴオイの両要衝を完全占領するとともに、さらにシヤシ山脈の天嶮を突破、二十二日午後カウカレイを占領、二十三日は更に西へ向つて猛進中で、他の部隊はモールメンに迫つた。一月二十五日のラングーン放送は『ビルマのイギリス軍は優勢なる皇軍の攻擊に抗し切れず、モールメン地區から撤退を開始した』と傳へ、またロイター通信、ラングーン電は『テナセリム地方のイギリス軍潰崩れの事実を自認した』旨を報じ敵のモールメン撤退が確認された。

當時モールメンには三千の敵兵がおり、うち二千五百名はインド兵、三百名はビルマ兵、英兵は約二百であり、インド兵の如きは續々逃亡を企てた。且つビルマの戰況逼迫に伴ひ蔣僑の大量引揚げが注目された。

モールメン陥落　イギリス軍は日本軍怒濤の進擊に抗しかね、防禦線を全面的に放棄し、一月二十八日東南方ビルマのメルグイより續々敗退し始めた。皇軍〇〇部隊の精鋭が突破したビルマ國境からビルマ大平原を横断して進かインド平野に鎬鑢つゞくイギリス東亞軍のマヂノ線ともいふべき防備第一線陣地は実に三千メートル高地の嶮であつた。メソード方面よりの進擊部隊は二十九日夕刻にはアタラン河の線に進出して、モールメンを指呼の間に望んだ。かくてテナセリム平原に突進して重要據点カウカレイを占領した皇軍は破竹の勢を以て所在の敵を撃破、三十日朝來航空部隊の協力の下に敵が不落を誇るモールメン南方高地による殲滅を攻撃して同高地一帶を占領した。三十日アタラン河を渡河、三十一日午前九時モールメン市街の南側に位置する小丘陵の北端に突入し、こゝにモールメンの死命を制したのであつた。

大本營発表（二月二日午後四時十五分）ビルマ方面帝國陸軍部隊は豪雨を冒して敵の抵抗を撃破し一月三十一日モールメンを完全占領せり

かくてビルマ防衛の要衝モールメンはつひに陥落し、ビルマルート以東には敵影なく、援蔣ビルマルートもこゝに完全に我が皇軍の翼下に睥睨されることゝなり、事実上援蔣輸血路は全く遮断されてしまつた。

ビルマ進攻作戰はタイ、ビルマの國境を突破、軍事行動を開始してから十二日間にして、その軍事的心臓部モールメンを陥落し、赫々たる大戰果を收めたのであるが、敵首都ラングーンはも早や手足を失ひ軍事的孤立に陥り、命すでに定まれりといふべきであらう。

首都ラングーンを攻略

皇軍破竹の進擊に要衝モールメン陷ち、いよ〳〵サルウイン河を渡れば、首都ラングーンまで阻むものはない。當初ラングーン一帶は我が猛空襲に敵の陣容が軽はず、重慶側から青天白日のマークを描いた米國製カーチスホークを救援せしめ、アメリカ人義勇軍の飛行兵が應戰するなど苦肉の策を弄してゐたが、忽ち我が陸襲に叩き落され、いまや敵殘存空軍は、米英機合せて僅かに〇〇機を算するのみとなつた。

かくてサルウイン河左岸地區に進出した我が軍は二月十日周到なる準備の下に數方面から果敢なる敵前渡河を敢行、同日午後一時サルウイン河口の要衝マルタバンを攻略し、引つゞき爾後作戰の準備中であつたが、二月以降三月初めまでにおける主なる戰果のうち判明したるものは次の如くである。

遺棄死体三千五百三十七、俘虜二千三百九十八、鹵獲品戰車（裝甲車を含む（十二輌、火砲八十八門、機關銃百六十一挺、銃機一千三挺、自動車五百七十七輌、銃砲彈約五十万発、鉄道車輛二十輌、その他各種軍需資材多數

陸軍航空部隊は地上部隊に密接に協力し、その進行作戰を容易ならしめるとともに、しば〳〵ミンガラドン、トングー、マンダレー、パツセイン各飛行場を急襲、航空撃滅戰を敢行し、ビルマのイギリス空軍再建企圖を破碎した、しかしてこの間の撃墜破は六十四機の多數に上つた。

マルタバンを占領したわがビルマ進擊部隊はその後の企圖を秘匿しつゝ敵を各所において撃破しながら進擊を續行した。即ち二月十六日から十九日に至る間に

ビリン河畔においてねばり强く抵抗した兵力約一個師團余の敵を撃破し、さらにこれを急追、シツタン河以東の地區にこれを捕捉殲滅した。ついで三月二日夜から逐次シツタン河を敵前渡河し三月三日夜からラングーン攻略戰を開始、敵軍主力をペグー及びラングーン附近において撃滅、七日午後ペグーを、八日午前敵首都ラングーンを完全に占領したのである。以下ラングーン占領までの主なる戰局を詳述しよう。

マルタバン占領　大本營発表（二月十二日午後六時）ビルマ方面帝國陸軍部隊は敵の抵抗を排除し二月十日午後一時サルウイン河右岸の要衝マルタバンを完全に占領せり。

二月八日夜半モールメン地區よりサルウイン河を奇襲し、敵前渡河した我が有力部隊は十日午後一時マルタバンの市街を完全に占領した。これよりさき航空部隊は進日ラングーンを空襲してをり、九日には大編隊が大挙してサトン（マルタバン西北方）を爆撃した。サルウイン戰線では十日來マルタバンの北方において皇軍はイギリス防備戰を突破し、さらに我が有力部隊は敵後方を迂回し、敵陣を混乱せしめ、すでに戰意を失つた敵を蹂躙し、サルウイン河潮江の大體極まる作戰を敢行、猛烈なる激戰を展開しイギリス軍をして悲壮なる敗戰を喫せしめたのである。

難攻不落、イギリス軍が鉄壁の陣を誇つてゐたサルウイン河を數個所より突破し、破竹の勢をもつて猛進擊をつゞけてゐた我が精鋭諸部隊は、ビルマ中部地帶に一齊に進出しその先遣部隊は二月十五日敵の要衝サトンを一擧に攻略、余勢を駆つて更に猛進し十六日午前モールメン北方百キロ、ビリン河西岸において敵

却收容を急ぎつゝあつた裝甲車、迫擊砲隊を含む數百の敵集團を撃破し、同日ビリンを占領した。

かくて中部ビルマ深く進入した我が先遣部隊はビリン河北方地區においてイギリス兵を主力とする約三百の機械化部隊と遭遇、激戰を交へてこれに殲滅的打撃を與へたのである。

ラングーン陥落す　大本營発表（三月九日午前十一時十五分）ビルマ方面帝國陸軍部隊はペグー及びラングーン附近に於て敵軍主力を撃滅し七日午後ペグーを、八日午前十時ラングーンを完全に占領せり。

ビルマ方面陸軍部隊は二月十日マルタバンを占領後、我が企圖を秘匿しつゝ所在の敵を撃破して果敢なる進擊を續行し、二月十六日及至十九日に至る間ビリン河畔において執拗なる抵抗を續けし一個師强の敵を撃破し、さらに急追してシツタン河以東の地區にこれを捕捉殲滅し、三月二日以降逐次シツタン河を敵前渡河し、三日夜よりラングー攻略戰を開始せるものにして、ラングーン攻略によつてビルマにおける英軍の本據を覆滅すると共に、ビルマ・ルートを完全に遮断したのである。

これよりさき二月二十六日月明を利してシツタン河を奇襲渡河した我が精鋭部隊は所在の敵を蹂ちらし、シツタン平野を西方地區に向け猛進、二日ペグー北方三キロのピンガン附近の頑敵を撃破し、イギリス並に重慶政權が虎の子として死守してゐたビルマ・ルートに結ぶビルマ鉄道遮断に成功した。一方シツタン河下流方面より壯烈なる敵前渡河を敢行した〇〇部隊の精鋭は戰車群をもつて抵抗する英軍を粉砕、果敢な進擊をつゞけ三日ペグー防衛の要衝たるペグー北方十五キロ〇〇を占領、直ちにビルマ鉄道を遮断、つひにビルマ・ルートは二個所を完全に切断、重慶政權の死命を制するに至つたのである。

しかしてラングーン占領にさき立ち三月七日ビルマ最大の飛行基地として知られたミンガラドンは脆くも我が軍の手に帰した。

ラングーン完全攻略が持つビルマ作戰を大東亞戰の雄渾なる全作戰の一環として見るとき、その戰略的意義は極めて重大なるものがある。即ちまづ第一に印度方面からなるイギリス軍の反擊企圖を完封したものゝ、今後の武力戰遂行に資源作戰完遂に側面脅威を排除したといふ軍事的意義をもち、第二にはあくなき敵性を保持しつづけて來た援蔣路の遮断、ビルマルートの完全封鎖である。第三にはイギリス軍にとつてインド防衛の前衛據点が遂に皇軍の印度攻略の対する前衛據点として全く戰略的に百八十度の變貌をきたしたことで、インドの脅威は加速度的に重壓を加へられて行くのみである。

最高指揮官は飯田中將　大本營発表（三月九日午前十一時二十分）ビルマ方面陸軍最高指揮官は陸軍中將飯田祥二郎なり。

飯田中將は昭和十六年七月日佛印共同防衛に本づき堂々皇軍が南部佛印へ上陸したときの最高指揮官である。この作戰の指導者として南部佛印にあつて重慶をめぐる南方の動向を身を以て視察する立場に置かれてゐた飯田中將が起用されたことは、いふまでもなくそこに人事の狙ひがあつたといふべく、

支那事變勃発當時杉山陸相、梅津次官の下に兵務局長として約一年間、事變處理をめぐる軍中央部の樞機に參畫し、翌十三年現地要職に轉じ、同十四年再び現地部隊長として南支に出征して征旅前後二年、南支の諸作戰に足跡あまね

く、熱帶作戰にも豐富な經驗を有し、今次ビルマの首都ランゲーンの攻略と同時にその覆面脱いだ鮮爽たる雄姿が全世界の前に公表された訳である。

マンダレー占領

大本營發表【五月二日午後四時十五分】ビルマ方面帝國陸軍部隊は三月下旬以降、英重慶聯合軍を翌所に撃滅しつゝありしが、五月一日ビルマの要衝マンダレーを攻略し、その軍事據点を完全に崩壊せしめたり

マンダレーは五月一日夕ひに我が軍の手に帰し、感激の日章旗は敵の卑劣な焦土戰術によつて半は廢墟と帰したマンダレー城頭高く翻つた。英聯聯合軍はマンダレーにて日本軍と決戰せんと豪語し頑強に抵抗したのであるが、怒濤の如く殺到した我が精鋭部隊は一擧にこれを撃砕、住民の大歓呼裡に續々入城、大佛跡に燦たる共榮の慈光をもたらしたのであつた。

わがマンダレー攻略部隊は援蔣ルートたるランゲーンよりマンダレー方面の間においてトングー、プローム、ピンマナ、イエナンジョンなどの要衝で激戰を展開わけてもイラワジ河畔イエナンジョンでは小癪にも逆襲し來つた英軍機械部隊を奇襲をもつて徹底的に殲滅するに至つた。

すなはちマンダレー攻略までの戰鬪経過は

一、トングーの戰鬪　わがマンダレーの中央進擊部隊は去る三月二十四日より同月三十日までの七日間にわたつて、重慶軍の精鋭第二十二、第二百の両師團を撃滅し敵に三割以上の損害を與へた。トングーはランゲーン北方約二百五十キロの地点にあり、わが進擊部隊はまづ〇〇より主力部隊が北上

し、一方企圖を秘匿しつゝ一部隊をもつて嶮峻を突破し敵の背後を衝き、二十九日朝トングーに據る重慶軍第二百師を破り、同所に設置されてあつた敵軍司令部の本陣奥深く突入、さらに翌三十日背後を迂廻して敗走する敵を徹底的に撃砕した。敵は同所に数線にわたる堅固な陣地を設け、わが進擊を喰ひ止めようとしてゐたが、同所での大撃滅戰を容易ならしめたのは、トングー西北方ナチユンにわが別働隊が二十七日早くも進出して同所の陣地に據る約三千の敵兵の進擊を拒否したためであつた。

二、プロームの激戰　イラワヂ河に沿つて進擊したわが軍は三月末から翌四月二日までの間にわたり、プローム（トングー西方約百三十キロ）で精鋭をほこる英軍機械部隊を撃滅、重迫擊砲二門、小銃三百挺をはじめ客車機関車、貨物車等二百六十二輌その他多數を鹵獲した。

三、ピンマナの戰鬪　ピンマナ（トングー北方約百キロ）ではトングーよりの進擊部隊はピンマナを中心に附近で戰鬪を展開したが、同所では戰ひそのものよりも百三十余度の酷熱を征服して軍事行動をとつたことが特記すべきものがあつた。

四、イエナンジョンの激戰　プローム北方イラワヂ河沿岸のイエナンジョンの戰鬪は四月十七日わが軍の奇襲によつて展開されたが、これは英印聯合軍が重慶の支援を唯一の頼みとして、小癪にも逆襲して來たのを奇襲により捕捉し、翌々十九日までの三日間で英印機械化部隊を徹底的に粉砕した。

交戰兵力は英印重慶軍約五千でこのうち適遺屍死体二千六百七十、捕虜千六百七七名にのぼり鹵獲品は戰車十五、加農砲一、〇彈砲一、山砲五、重迫擊砲十九、速射砲二、索引車三でこゝに敵機械化部隊を殲滅するに至つた。

一方わが方の損害は戰死七十名でかくて敵軍は戰意全く喪失し、加ふるにわが陽動が敵空軍勢力ならびに敵軍事據点を潰滅し、遂くインド洋方面のチタゴン（カルカッタ附近）の飛行場まで飛翔、巨彈の雨をふらせ、またマグウエーの飛行場には、わが陽動に撃砕された六十数機の敵機の殘骸がさらされてゐたほどで全く陽空の密接な協力による立体的攻擊戰によつて敵要衝マンダレーはランゲーン攻略後五旬余我軍の手に帰したのである。

米英蔣共同戰線の撃摧

回顧すれば去る二月十六日乃至十九日に至る間にピソン河畔において執拗なる抵抗を續けた敵一個師を撃破、急追してシツタン河以東の地區にこれを捕捉殲滅し、三月二日夜以降シツタン河を强行渡河に成功した皇軍は三月三日夜よりランゲーン攻略戰を開始し、同八日朝ビルマの首都ランゲーンを完全占領したが息つく暇もなくさらに北上、ランゲーン――マンダレー間六百二十キロを百三十度の炎熱、酷暑に屈せず、ビルママラリヤをはじめ幾多の惡疫を克服して進擊を續行したもので、殊に同地方は米以外の物資に乏しく、皇軍の困苦は言語に絶するものがあつた。

あまつさへ英、米、重慶は多数の兵力を配備して共同戰線を敷け、特に重慶は蔣介石麾下の機械化部隊を、米國はスチールウエル將軍を送つて防衛に狂奔したが皇軍猛攻の火鋒にビルマ防衛軍はもろくも崩潰したのである。

陸上部隊のの作戰に呼應してわが航空部隊活躍もまためざましいものがあつた。

即ち三月二十一日より同三十一日までの間にマグエ、アキヤブ、プローム、パンバカアエーン、ロイレム、ヘーホ、サモンカン、サンドウエー各飛行場を虱潰しに攻擊し、壊滅せる敵機は百三機の多数に及び、ビルマ敵航空兵力に潰滅的打擊を與へ、陸上部隊の進擊を促進した。

インド解放の氣運を促進

大本營陸軍報道部長談

英國、重慶合作の要衝マンダレーは遂に我が陸軍部隊の猛攻により陥落した。かくてビルマ・ルートは完封されて重慶は文字通り孤立無援の國際環境下に追ひこまれ、今後における抗戰力は重慶自身の持つ地理的離散的等の特殊性のみに依存せねばならなくなり、我が対重慶處理は今後格段の進展を豫想せらるゝに至つた。しかして我が陸軍部隊のインドに対する進攻態勢の確立は、我が海軍部隊のインド洋制壓と相俟つて、インド人に覺醒を促し、インド解放の氣運はますゝ顯著となつた。かくの如き赫々たる戰果の陰には、我が陸軍部隊の筆紙に盡し難い勞苦があることを忘れてはならない。ビルマ地方は他の南方作戰地と異なつて、炎熱酷暑氣溫百三十度の連續であり、マラリヤ等惡疫猖獗を極め且つ米を除き軍用に供すべき現地物資が殆どなく給養には頗る困難といふ有様であつた。ビルマの民族は擧げて皇軍を歓迎し、あらゆる協力を惜しまなかつた。これは皇軍が威あつて猛からず、恩を施して矯らぬ結果であるが、敵軍特に英國軍が殘忍惡虐、戰場を焦土と化し、無辜の民衆を塗炭の苦に陷れたことが彼等の怨憤を爆発せしめた事実を見逃してはならない。

重慶猛省せよ

蔣介石は重系秘藏の機械化部隊を離卓英に指揮せしめ

て、この方面に繰出したのである。我が軍は今次重慶軍と英國軍とに同一戰場において相見えその戰力を比較檢討し得る機會を得た次第であるが、英國軍の脆弱さ加減には驚嘆したのである。また英國は危しと見るや逸早く退避するので終始我が矢面に立ち甚大なる損害を受けたのは重慶軍であつたことも氣の毒に思ふ。他の國家、他の民族を相剋鬪爭せしめ、他の犠牲において己の安全繁榮を圖るといふ英國多年の老獪なやり口はビルマ戰場において特に歴然たるものがあつた。ビルマの失陷は重慶の苦惱であり、英國の動搖であり、インドの解放でなければならぬ。英國の權威は地に墜ちた。英國軍の実力は如何なるものであるかを英國の援蔣の実体、インド統治の眞相は如何なるものであるか、今こそ認識を新にしたはずである。從來英國に対し屈從的といふよりは寧ろ隷屬的心理に生きて來た重慶は深刻なる反省へ、そして欺瞞と威嚇とに慴伏したインドは偉大なる蹶起へと邁進し、ともに大東亞の魂へ回帰する近き將來を期待するものである。

アキヤブ飛行場占領

大本營発表（五月六日午前十時十分）ビルマ方面帝國陸軍部隊は五月四日緬印國境附近のアキヤブ飛行場を占領せり

ビルマ方面作戰の陸軍部隊はビルマ・インド國境近くに師を進め五月四日アキヤブ飛行場を占領した。アキヤブはインドよりビルマに対する補給路の要衝であつて同飛行場は戰前東亞と欧洲を結ぶ民間航路の最大空港として繁榮してゐた。大東亞戰爭勃発するや英國はインド防衛の前進航空基地として同飛行場の增强を圖り、ビルマ、マレー方面の空軍補給地として活発な動きを見せてゐた。英國はランゲーン陥落後こゝを前進飛行基地として殘存空軍を支配しゲリラ的にわが作戰地上空に蠢動してゐたもので今回飛行場がわが手中に帰したことは敵空軍に深刻な打撃を與へるものである。

タイ軍、蔣軍牽制　敵は、マンダレー正面の防衛に全く戰意を失ひわが軍は二日これを完全に占領したのである。このやうな作戰において特筆しなければならないのはタイ軍の檢討である。タイ緬北部國境に集結した蔣軍四十九師九十五師を惑殺と戰ひながら完全に牽制、マンダレー作戰にこの二個師の轉用を敵に許さなかつた功績は大きい。現在の戰況は敵がマンダレーの線が以上の作戰により完全に断たれたためマンダレー方面の重慶第五軍と東方にあつた第六軍の連絡は断たれ早くも両者の潰滅戰に入つたといへる。第五軍は四散遁走して全り壞滅の日を待つ有樣である。

重慶軍の亂脈ぶり　ビルマ戰線での重慶軍の亂脈ぶりはひどいもので例へば退却に際して暴行掠奪は勿論駐在地區のビルマ人を時には全部日本軍に讒報するといふ理由で皆殺しにしたり金員を强行したりしてゐる。このためビルマ人の反感は極端なもので各所でビルマ民衆が蹶起し重慶軍の行動を牽制してゐる。

最後にこの作戰の持つ意義を述べよう、重慶と英米の連絡がここに全く断たれたといふ事実、つまり戰前到底考へられなかつた滇緬鉄路による援蔣ルートが目の前に打ち切られたといふこと、次にかつては重慶の誇る最强主力であつた蔣介石直系の第五軍が完膚なきまでに打ちのめされ、大東亞戰の軍略的にも重大なる段階を畫したといふ二点で、この重慶軍のビルマに來たことは軍事的以外に政略的意味が多分にあることを忘れてはならない。

蔣の迷蒙を破る

この狐狸の策はつまり重慶にとつてはマンダレー、ラシオの確保によつて將來長期の間、英米から武器の補給を受けると共にビルマの米と石油をどさくさにまぎれてとらうとしたこと、また英米にとつては暫時重慶軍にビルマをゆだねるのは止むを得ないが、もしビルマ戰線が長期となれば日本軍も消耗するだらう。そのためには存分に重慶軍を使つてやらうといふ両者の腹黑い意見が一致したことによる。ところがどうであらうか。ラングーンが陥落後、蔣にとつて生きる唯一の夢であつたこのインド、ビルマ、雲南の連絡は切れ、英軍との聯合はぱつさりとうつちやりを喰つた。そして英國はインドに送る米もそして東亞唯一の殘された油田を放棄するほか直接カルカツタ軍工業地帶の脅威を增大したゞけであつたのだ。

重慶敗戰に驚愕　この事実は聯合國によつては正に致命的なことであらう。敗戰に次ぐ敗戰にも拘らず米國を首魁とする敵性陣營は今何といつているか「重慶の無限の兵力に米英の海空軍を合した時將來必ずや攻勢に轉ずるであらう」然しどつこい今度のビルマ作戰で蔣直系軍が見事に叩きつけられたことはこの根據を反古にするには余りに大きいと同時に重慶無導の民も第五、六軍ありと徒らに豪語した鳴り物入りの大見得も幕を開ければ竹光よりもまだひどいものだつた。恐らく重慶側にとつても驚愕を通り越し今後の抗戰に重大な支障を來すことだらう。

ビルマ遠征、雲南進攻

大本營発表（五月八日午後二時五十分）ビルマ方面帝國陸軍部隊は敵軍を急追して四月二十九日ラシオを、五月三日バーモを攻略、更にその先鋒は雲南省境を突破して五月五日龍陵を占領せり

日本軍はつひにビルマ、支那國境を突破し、遂ぐ雲南省に突進した。ラシオ附近一帶のビルマ、支那國境の各要衝を攻略確保した我が軍は五月三日ビルマ、支那國境を突破雲南省に進擊、滇緬ルート上の援蔣物資集積地、畹町、遮放、芒市を次々に奪取、五日午前十一時國境を距る百五十キロの龍陵に突入し、我が迅速果敢なる進擊に啞然たる敵を一擧に粉碎し、各地各倉庫に殘存せる多數の援蔣物資を獲得した。この間我が軍と抗戰した敵は第九十三師の第五十團に屬するものおよび裝甲車數輛を有する約一千であつて、從來の支那軍が數個の部隊をもつて逐次抵抗したのに反し、我が軍が國境突破後に抵抗した部隊は前記の部隊だけであり、ラシオ附近において、我が軍と抗戰した第二十八師、第九師に遭遇しないのは敵軍の極度の混乱を実證するものと見られてゐる。ビルマ方面帝國陸軍部隊空地の精鋭は緊密なる協同の下に立体的作戰を展開して八日大本營発表のごとく援蔣ルートの重要據点たるラシオをはじめバーモ、さらに長駆緬支國境を突破して雲南省龍陵を完全に攻略、こゝに全く援蔣路を断ちビルマ作戰の重要意義を顯示するに至つた。

ラシオを屠る　マンダレー、ラシオを屬りビルマ戰局を決定的ならしめたわが精鋭は息もつかせず殘敵を掃蕩、赫々たる戰果を收めてゐるが四月十日

にはラシオ北方地區で支那軍二個師に屬する五百の敵を擊破、五月三日にはマンダレー方面のわが精鋭はマンダレー東南地區に於てわが包圍網の中にある殘敵の掃蕩を續け多大の戰果ををさめ、四日午後四時二十分にはアキャブ飛行場も皇軍の手に歸し、かくて皇軍は怒濤の如くビルマの敵要衝を潰滅させたのである。敵は目下全く戰意なく、わが巧妙なる作戰に分斷せられて一部はサルウイン河に他の一部はイラワジ河に沿つて必死の遁走を試みつゝある。また完膚なきまでに叩きつけられた英印軍は印緬國境に何とかして逃げ込まうと努力してゐる。一方わが海軍もその翼下に敵を制壓、四日は有力なる戰爆混合部隊を以てビルマ・ルートの要衝永昌（大理西南百二十キロ）を急襲し敵機小型二機を撃墜し、ついで大型一機、小型六機を地上撃破し敵軍事施設を完膚なきまでに爆砕して全機悠々歸還した。ふかくその企圖を秘匿し遂くビルマシヤン高原地方に所在の敵を撃破猛進擊を續けつゝあつた我が軍は天長の佳節四月二十九日午前十一時半ラシオに突入、逃げ惑ふ敵を同地北方に捕捉殲滅、十二時には完全にこれを占領した。敵は市街の入口で頑強に抵抗したが、市中では我が軍の猛進、急追に反撃の暇もなく潰滅せられラシオは完全に近い姿で日本軍の手に歸した。ラシオは四方緑の山に圍まれ海拔三、六〇〇フイートの都市、氣候は内地のそれに似て松の木が点々とそびえ、並木は櫻と菩提樹である。櫻の花は既に散り可憐な桃が赤々と色づいてゐる、破壞を免れた水道も勢よく出で、ゴルフリンクには戰勝も知らぬげに犢が春の花をはんでゐる。

敵總指揮は羅卓英　援蔣公路の名で馴染深い滇緬公路は大東亞戰爭勃発とともに逆轉して蔣介石の援蔣路として役立ち、英蔣軍事協定にもとづく軍慶軍のビルマ遠征軍出師となり、蔣介石は虎の子の第五軍を第一線に押立て、第六軍をも加へて意氣揚々滇緬公路を南下し來つたのである。しかしながら日本軍の鐵袖一觸、重慶が鉄壁を誇る堅陣もいたづらにこの脆弱性を暴露するにすぎず、いまや日本軍はビルマ全域にわたつて長驅路破し、重慶軍の退路を遮斷するとともに漸次包圍を縮め、包圍圏内を右往左往する敵軍を蹴散らしつゝある。

すでに退路を切斷された敵はもはや再起不能に陥り四分五裂、山中を彷徨してゐるにすぎない慘澹たる有様である。支那大陸第九戰區の司令長官として聞えた羅卓英を起用、ビルマ遠征軍第二路軍司令長官のいかめしい肩書をあたへ烏滸がましくも第三國ビルマへの遠征を試みた蔣介石はこの慘狀を聞いて勇躍征途に出で立つた愛兒の身の上を案じるとともに細まり行く重慶の窮狀を思うて心中穏やかたるものがあるであらう。今次大東亞戰爭の南方戰線における重慶軍との交戰はビルマ戰線が唯一つであり、雄渾なる南方作戰の一翼としてビルマ戰定作戰の特色の一つは敗走英軍壊滅もさることながら日本軍との初顔合せに氣負ひ立ち、日本軍何するものぞとばかりにビルマに侵入し來れる重慶軍に再起不能の大打撃を與へ、南方戰線において重慶壓迫の鉄鎖を下すことであつた。ランゲーンを喪つた英國は早くもビルマを断念し、ビルマ防衛を主として重慶にまかせたのであるが重慶にとつては命の綱であつたビルマ・ルートの起点ランゲーンを日本軍に制壓されては抗戰資材の輸血はもとより不可能であるのみならず、援蔣ルートの存在によつて辛くもつないでゐた米英の重慶への精神的連絡路が切斷されることになつたわけで、如何なる手段によつてでも南方よりの米英への通路は保持せざるを得ず、北部ビルマの防衛には蹶起となつたわけである。

蔣の敗軍彷徨す　遠征軍の總指揮には一時米人ジヨセフ・スチルウエル中將が當つてゐたと噂傳されアメリカ戰爭省もこの任命について発表したのであるが、スチルウエルは依然來支當時の任務である蔣軍顧問であり、同軍の總指揮には前記羅卓英が當つてゐたことが判明した。米人將校が指揮することに対する陣營内の爆発による士氣不振を懼れ、やむなく外人指揮を避けたものと見られる。部隊は支那大陸の戰線でも日本軍との交戰を避けて秘藏してゐた直系第五軍第二百師、第九十六師ならびに新編第二十二師を日本軍中央部隊の眞正面に配置し第六軍の第四十九師、第九十三師、第五十五師をシヤン・ステート内に布陣、その他第二十八師、第三十八師、第二十八師、第三十八師、第二十九師などをその間隙に置いてランゲーン、マンダレー間のビルマ公路より東北方地區防衛に當つたのである、更に英國は重慶軍をビルマ防衛に繰出すためにシヤン・ステートを重慶に割譲してゐた事実がある。

蔣介石ほどの人物が自己の虎の子部隊十万余の出兵の反対給付としてシヤン・ステートを割譲されたところで、所詮日本軍の一撃に遇へば粉砕されて元も子もなくなる位の判断がつかぬはずはない。重慶のビルマ遠征の裏面には、大東亞戰爭における日本軍との交戰によつて、その実力なるものを米英聯合國側に顧示しまさに絶えんとする米英の重慶への関心を驚きとめ、且つは北部ビルマ國境に残されたる援蔣路の保持を圖らんとする魂膽が置されてゐたのである。さらに考へられることは抗日戰五年を闘つて來た重慶治下民衆の疲弊に伴ふ厭戰機運の瀰漫を今次大戰への出兵とこのデマ宣傳によつて阻止し、民衆の耳目を掩はんとする意圖のあつたことである、重慶軍はビルマに入るや、例によつて「ビルマ民衆に告ぐゝ」の書を発し重慶軍はビルマ防衛の大義にもとづき英軍に協力し、日本のビルマ進攻を阻止せんとしてビルマに侵入したものである。

重慶軍の行動に関して民衆のあらゆる便宜協力を望む旨の威嚇と嘘顔を織り込んであるが、重慶軍のビルマにおける暴虐ぶりはビルマ人蘇崇の的であるバゴダを陣地化し、寺院を爆拂ふのはもちろんあくなき焦土戰術に出たのである。支那の戰線の焦土戰術と比較してその徹底ぶりは驚くべきものがあり、彼等はある都市に進駐するとまづ防禦に必要なる建物のほかはこと〳〵く爆拂ひ、ビルマ人を追出し退却の際には、さらにそれらの残存建築物も爆却して遁走するので各都市の繁華街はもとより住宅街に至るまで一物も残さぬ完全なる焦土化を勵行してゐる。マンダレーの如き人口二十万に達する大都市が四月初旬から爆けはじめ五月一日日本軍入城の時は全市灰燼と化し、焦土の匂ひもないほど早くから爆いてある有様である。

ビルマ民衆の怨恨　かうした計畫的な大規模焦土化によつて彼等のいはゆるビルマ防衛の大義なるものは地に墜ちてしまつて、狂躁的な敗走譜が奏でられるのは理の當然である。ビルマ民衆の暴戻重慶軍に対する怨恨は日を逐うて深刻となり、敵愾心の表現は勢ひ日本軍への協力となつて裏面化し、重慶軍得意のゲリラ戰術はビルマ人によつて封じられてをり、北部ビルマを横行闊歩した重慶軍はいまや日本軍の鉄鎖とビルマ民衆の憎悪とによつて一箇月前までの嬌爽たる勇姿がビルマから影を沒する日も間近に迫つた。重慶がバリ〳〵の援征軍はビルマの山野に死を待つばかりに追込まれた、連日叫びつゞけたビルマにおける重慶軍の大勝のデマ宣傳も日本軍の実力の前に脆くも粉砕されてしまつた。ラン

ゲーン攻略後細々と續けてゐた印度、インパール方面からの援蔣路もすでに潰滅した、重慶の企圖したビルマの防衛も空しい努力に終つた。東亞唯一の反英兒蔣介石は何處へ行く、日本軍の重慶壓迫の手はまだ緩んでゐない。

ビルマ作戰を御嘉尚

大本營發表（五月十一日午後五時三十分）大元帥陛下には本日陸海軍幕僚長を召させられ、南方方面陸軍最高指揮官並聯合艦隊司令長官に対し左の勅語を賜りたり

勅語

緬甸及印度洋方面ニ作戰セル陸海軍部隊ハ長驅曷域ニ進攻シ或ハ炎熱ヲ冒シ險峻ヲ踏リ神速克ク敵ヲ撃滅シテ對支補給路ヲ遮斷シ或ハ敵海空軍ヲ隨處ニ撃破セリ

朕深ク之ヲ嘉尚ス

重慶、米英の連繫切斷

ビルマ作戰は大東亞戰爭の踏作戰中米英、重慶の具体的戰術を示すビルマ・ルートを包含する地域に英印軍および蔣直系軍總計約二十万を相手とした大作戰だけにマレー、蘭印、比島等における主軸作戰とはみづから異る困難を隨伴してゐた。すなはち泰緬國境を突破して火鋒を切つたビルマ作戰の緒戰はまづ南部ビルマに展開され、一月十九日未明、タヴオイを、同三十一日モールメンを占領、次いでサルウイン河を突破し二月十日マルタバンを、三月八日遂に首都ラングーンを占領した。ビルマルートはその開口を完全に遮斷され有名無実の窒息狀態に陥つた。しかし隘路マンダレーを経て緬支國境ラシオ、バーモ、ミイトキーナに至るビルマ・ルートの根幹をなすビルマ鉄道、これに並行する鉄道街道、さらに奥地まで舟行可能なイラワジ河の航運を擁し、英印蔣聯合軍の蠢動する以上當然ビルマ奥地進攻作戰が要請されたのである。かくて展開されたのが酷熱摩擦下、峻險なる山岳地帶に遥距離突破の大地作戰と五箇月にわたる航空作戰さらにこれを擁護する海軍部隊のベンガル灣、印度洋作戰であつた、ラングーン陥落後、ビルマ・ルート北上作戰は二箇月にわたり五月一日中部ビルマの最要衝マンダレーの占領について石翼部隊は遂に緬支國境ラシオ、バーモ、ミイトキーナを連續攻略後、先鋒部隊は五月三日長駆雲南省に突入重慶軍の退路を遮斷しつゝ五日龍陵を、翌六日同省内イラワジ河上流の怒江東岸に進出した。一方左翼部隊はイラワジ河西方から雪崩を打つて西方に退却せんとする英軍の退路を斷ちここに壮絶なる野戰殲滅作戰を敢行しこの結果わが陸海空の歴史的戰果は印度に戰慄的脅威を與へ、ビルマ全域を曳げて大東亞共榮圏の傘下に收めると共にビルマ・ルート完全遮斷を以て重慶―英米の連繫を如実に切斷して大東亞戰爭達成の飛躍的段階を畫したことは大いなる戰略的意義を持つてゐる。

大本營發表（五月十一日五時二十分）ビルマ方面帝國陸軍部隊は、敢敵を隨處に撃滅しつゝ、五月六日雲南省怒江東岸に進出し、八日ミイトキーナを完全に占領せり

陸鷲部隊の綜合戰果

大本營發表（五月十一日午後六時四十五分）ビルマ方面に作戰せる帝國陸軍航空部隊の開戰以來五ケ月間の綜合戰果左の如し

（一）敵飛行場攻撃延數百二十六回（二）撃墜破飛行機五百五十四機（三）撃破せる自動車ならびに自動貨車千二百十三輌（四）撃破せる戰車ならびに裝甲車三百三十三輌（五）撃破せる鉄道車輌千五百四十三輌及び百十五列車（六）撃沈破せる船舶九十二隻（七）爆破せる敵軍重施設六百六十六箇所

ビルマ方面陸軍航空部隊は昨年十二月十一、十三両日タヴオイ、メルギー、ヴイクトリア・ポイント等泰國境に近い敵前進飛行場を攻撃し機先を制してまづビルマ空軍の出撃企圖を破碎したが、事実上ビルマ航空作戰は十二月二十三、二十五の両日に亘るラングーン大空襲に始まるといふことが出來る。この両日に早くも敵機九十機以上を撃墜破し、ラングーン附近に集結中の敵空軍を覆滅した。その後一月中はモールメン、ラングーン飛行場群、二月にはペセインを連續攻撃し、ラングーン陥落にいたるまでミンガラドン飛行場だけでも攻撃回數は三十九回に達してゐる。一方モールメン、ペグー、ラングーン間の地上戰闘に協力し連日出動せる回數は數を知らないほどで、三月九日のラングーン陥落にいたる地上作戰に多大の貢献をした。ラングーン陥落後北上する地上兵團に呼應、ビルマ縱貫鉄道に沿つて、專らニユーアンレビン・ピンマナ間の敵軍を捕捉連爆中の航空部隊は三月二十一日以後更に新作戰を開始し、四月初旬にいたるまで印度方面より増援の敵空軍根據飛行場たるアキヤブ、マクウエ飛行場およびその前進基地たるタウンギー飛行場群を連續强襲しこの間百二十六機を撃墜破して残存ビルマ空軍の大部を撃滅した。ついで四月に入ると地上作戰の進展に從ひピンマナ、マクウエ以北の中部ビルマの敵軍輌、陣地等を猛攻しつつ、タウンギー飛行場群を連爆し、その機能を完全に破碎した。さらに緬支國境に重慶空軍所屬米國義勇軍の前進基地として三飛行場を擁しゲリラ戰を試みてゐたローウインに対しては、四月八日以降前後四回に亘つて進攻し、敵機二十九機を撃滅してその出撃企圖を完全に封じた、五月に入つて戰況の急進展に從ひマンダレー以北に敗敵を急追してラシオ、ミイトキーナ等の飛行場はもちろん、五月四日から寇く雲南省へと飛び保山、昆明を連續襲撃して敗殘支那軍の後方を脅威せしめた。一方ビルマ西岸アキヤブには新旧合せて四飛行場が設けられ印度チツタゴン方面よりの補給基地として活躍してゐたが、三月二十三日以來同月中に三度、四月中には四度、五月に入つて二回大空襲を敢行、五月四日には遂に地上部隊これを占領するに至つた。また五月八日印度防衛第一線基地たるチツタゴンに初空襲を敢行しその後猛襲を反復しつゝある。

十三　米太平洋南進攻路を撃摧

大東亞戰爭前アメリカが日本を恫喝する種として豪語した対日進攻路には三つあつた。ハワイ・ミツドウエイ・ウエーキ・グアムの所謂太平洋の飛石傳ひに比島・香港に至る中央略、アリユーシヤン列島から北部日本に通ずる北方路、それにサモア群島、ナウル島、ビスマーク群島、ニユーギニヤ島及びチモール島を結ぶ南方路がこれであるが、この南方路は濠洲を中心に無數に散在する南太平洋の島嶼と共に最も地形に惠まれた対日軍事據点をなし、殊にグリラ戰のための潜水艦基地としては最適の場所である。たとへ中央・北方両進攻路を攻略されてもこの據点が残る限り、太平洋における長期戰は遂行出來ると考へてゐたものの如く太平洋の危機せまると共にこれら諸島に対する米英濠諸國の軍備増强には狂的な

ものがあつた。

しかるに一度戰火太平洋に爆発するや中央進攻路があへなく粉碎の血祭りにあげられたのは勿論、最後の頼みの南方進攻路も次ぎ次ぎにわが精鋭に蹂躙せられ、チモール・ニューギニヤ・ビスマーク群島を奪はれてしまつては南方進攻路の本據濠洲大陸も全く手足をもがれた達磨にしか過ぎなくなつた。

戰爭勃発前中央進攻路を粉破されても、南太平洋の基地がある限り対日反攻はわが手にあると自負してゐた米英濠にとつて、この開戰僅か五ケ月の大戰果は余りにも大衝撃であると共に呆氣ないものであらう。大上段に振りかぶつた大刀を打ち下ろす暇も與へず突きの一撃で咽笛を突き刺された形である。かくて遂に米の新作戰部長キングは『アメリカ現在の戰備では攻勢作戰は不可能である』と悲鳴をあげ、陸軍長官スチムソンも『西南太平洋方面へのアメリカの增援軍派遣は容易ではない』と劣勢を認めざるを得なくなつた。

いま島軍のこの大戰果のあとをたどつてみよう。

開戰劈頭の八日、早くも日本軍は英委任統治領のナウル島を攻撃した旨カーチン濠首相は発表したが、十二日には日本空軍は四回にわたつて同島を猛爆し、全島を震撼したと濠洲放送は傳へた。この日遇く濠洲北部のポート・ダーウインにも初の日本空軍編隊があらはれ濠洲はじめての空襲警報が二時間にわたつて発せられ、十八日にはニューギニア東部サロン市が空襲された。

ビスマーク群島占領

正月早々メルボルン電報はビスマーク群島の空爆を傳へた。日本爆撃機編隊は四日再び濠領ニューギニヤのビスマーク群島上空にあらはれ哨戒飛行を行つたのち、正午および午時二時の二回にわたりラバウル飛行場及びその周辺地區を爆撃し、飛行場設備を破壞した。第一回の攻勢は深夜敢行され少數の爆彈が投下されたが、程なく數十機の大型飛行機による第二回目の攻撃がはじまり飛行場に相當の損害があつたと。

海鷲の連續的猛爆　大本營発表によれば帝國海軍航空部隊は十五日までにニューギニヤの西部パポ、ソロン、モルツカ諸島のアンボン、ニューブリテン島のラバウル等に対し數次の攻撃を敢行し、その重要軍事施設を炎上または爆破した。同十六日にはわが海鷲は六時間半の長時間に亙つてビスマーク群島の爆撃を繼續し、さらに十八日、二十日、二十一日と殆と連日しかも毎度數時間におよぶ猛爆にラバウルはじめカヴエイアンなど各地の軍事施設、港灣は爆碎され碇泊中の船舶は火炎を起すなど大損害を與へた。これに関し、濠洲當局コンミニケは『ビスマーク群島およびニューギニヤ東北においては日本航空部隊の猛攻が益々加はることを覚悟せねばならない。日本空軍大編隊はさる二十日ラバウルを猛爆し、地上軍事施設數棟、港灣設備、貨物船を次ぎ次ぎに爆碎した。二十一日には大編隊がニューギニヤ東北岸を空襲、軍事施設を爆撃した。二十二日の空襲について、ロンドンBBC放送は『濠洲の前哨基地たるニューブリテン島首都ラバウルに対する日本航空部隊の爆撃は二十二日朝來熾烈となり、この日〇機編隊爆撃が二回にわたつて行はれ、同地の重要軍事施設は大損害を蒙り、メルボルン、ラバウル間の通信聯絡は同日午後に至つて不通となつた。ラバウル住民はすでに立退いたものと思はれ、無電局、電話局は濠軍の手により破壞されたものと推定される』と報じた

かくの如く海軍航空部隊はわがセレベス島上陸作戰およびタラカン方面作戰を防碍せんとする敵機の蠢動を完封するため、長駆ニューギニヤよりボルネオに至る敵基地を虱潰しに爆撃してゐることが発表された。海鷲の翼下に制壓せられた地点は東は、ニューブリテインのラバウルから、西はセレベス、ボルネオに至り戰線の長さは実に東西約二千百マイル、作戰舞台の廣大なること驚嘆すべきものがある。右地点中アンボンは東部蘭印の中央位置をしめ、比島とニュージーランド、ジヤバ島、スラバヤとマタクワリ間の海空交通中継地として重要なる基地でオランダ軍は航空および海軍勢力の一部を集結してゐたものである。またラバウルは濠洲、ニュージーランド防衛の第一線として重視し英軍が防備を固めてゐたもので、他の諸基点と共に海軍航空部隊の猛襲をうけ軍事施設を破碎された。

ニューブリテン島に敵前上陸

大本營発表（一月二十四日午後五時十五分）

一、帝國陸海軍部隊は緊密な協同のもとに、一月二十三日未明、敵の抵抗を排除してニーギニヤ島東方、ニューブリテン島ラバウル附近の上陸に成功し、着々戰果擴大中なり

二、帝國海軍特別陸戰隊は同日未明ニューアイルランド島カビエングの敵前上陸に成功せり

カビエング上陸に関し朝日新聞特派員は次の如く報じてゐる。

基地を勇躍出発した海軍部隊は遂に赤道を突破して、二十三日未明陸海協同の主力部隊ラバウル攻略に呼應し、特別陸戰隊の輸送船團のカビエング揚陸に成功、これを無血占領し、南半球東部の濠領に最初の軍艦旗をかゝげた。この日未明、南十字星は冴にかゝつて、海上は無風絶好の上陸日和に惠まれたが敵軍は皇軍來るの報に奮ろいて、�橋に放火、飛行場を爆破して逃走、わが陸戰隊が上陸に成功した時には敵影はすでになかつた

更にラバウルに上陸した日本軍は、二十六日來ニューブリテン島にある濠洲軍に対し猛攻を開始し、同島一帯にわたつて彼我両軍の間に激戰が展開された。ついでカビエングを中心とする附近の大小諸島嶼の掃蕩戰を完了しそれぞれ丘上高く軍艦旗を翻へし、居残つた住民に大日本軍司令部の布告文の趣旨を告げて、ニューアイルランド島その他附屬全島嶼はすべてわが軍政下におかれることを明示し、安んじて生業を營むやう諭告した。

ツツイラ軍港猛攻

これより先一月十二日、ニューギニヤ島をさる東方二千浬、日本より四千浬にあるツツイラ軍港は日本軍によつて攻撃された。すなはち米海軍省は日本軍が南太平洋サモア群島中第三の大きな島ツツイラ島の軍港を攻撃したと十一日発表した。この島はサンフランシスコへ四千浬、パナマ運河へ五千浬、シドニーへ二千浬の要衝を占め、米大陸と濠洲との最も重要な仲継、連絡の拠点をなしてゐる。この敵の優深く飛込むわが海軍の大膽不敵な行動は米濠の心膽を寒からしめるものがある。

米濠の聯絡切斷

ラバウル・カビエング両要衝占據によりわが南太平洋に対する戰略上の立場は著しく强化された。アメリカが開戰以來の劣勢挽回のため必死になつて南太平洋を通じ濠洲との聯絡幹線確保につとめつゝある最近の太平洋作戰に根本的變化を招來し、米濠聯絡線の完全遮断に成功したところに

今回の大作戰の重大な戰略上の意義がある。すなはち

一、今回皇軍が上陸したニューアイルランド島とは第一次大戰の結果、ドイツ領から濠洲委任統治領となり、濠洲防備の前進據点となつてゐた。大東亞戰物発前後を通じて対日包圍陣中において南太平洋における米英の最主要なる連絡戰略路線を形成してゐる。米國本土からパナマ・ハワイを通じて、ニューアイルランド、ニューブリテン、ニューギニヤ、蘭印、シンガポール路線と、米本土、ハワイ、ニューアイルランド、ニュブリテン島、濠洲、蘭印、シンガポールとの二つの米英濠の戰略路線の連絡據点として米英陣營にとつては最も重大な戰略的意義を形成してゐた。

二、今次二大新作戰はこれら米英の戰略的據点を破碎したばかりでなく、さらにこの新なる軍事據点を中心として、すでに西太平洋の制空權を掌握したわが空軍はさらに南太平洋に空軍基地の推進に成功、遠く濠洲にまでわが鬪翼をのばし得る極めて優勢な地位を獲得したものであつて、濠洲に対するわが攻勢と脅威は絶大なものとなつた。

三、米國は米濠をつなぐ戰略路線確保に躍起となり、濠洲を通じ蘭印、シンガポールの防衛に腐心してゐたがこの新作戰によつて、皇軍はニュージーランド附近の水域一帶を確保して、米濠運絡を遮断し得ることゝなつた。さきのグアム、ウエーキ両島の占領とゝもに今回の新作戰の成果はさらに今後南太平洋上縱横に攻勢を展開すべきわが絶対有利の態勢を確保するに至つたものといふべきである。

二月九日帝國海軍特別陸戰隊はニューブリテン島南側の要地ガスマタを完全に占領せる旨発表された。

チモール島に進駐

他方ニューギニヤ島の西方チモール島に対する攻撃も漸く活潑となり、ニューギニア島に対する包圍の環は日一日とせばめられて行つた。

かくて二月二十日チモール島敵前上陸は成功裡に行はれた。

濠蘭軍の不法占據

十二月十七日開戰間もなくポルトガル政府は濠洲兵並に蘭印兵が突如獨領チモール島に侵入した旨発表した。さらにこれに対してサラサール葡首相は同二十日の議會において次の如く演說してゐる。『濠洲及び蘭印軍のチモール島占領はポルトガル政府と英國との間に交渉進行中に行はれたのみならず、エスキヴエルチモール島總督が同軍の上陸を拒絶したにもかゝはらず與行されたものである』と、かくの如く英國はまたしても中立國を戰禍に巻きこむ老獪な手段を弄したのだ。同島はわが南洋委任統治領と密接な関係にあり、日本の立場を十分に諒解し、あくまで平和政策をとる葡國政府は米英濠蘭各國の侵略政策たるABCD包圍陣に参加せずかへつて日本との友好政策をふかめさる十一月わが南洋委任統治領のサイパンとの間に定期航空路を開設する航空協定を締結する程の親善振りを示してゐたのであつた。

濠蘭軍降伏す

皇軍は獨領チモール島に対するわが方作戰の進展に伴ひ自衛上、濠蘭軍が不法占據してゐる葡領チモールより濠蘭軍を徹底的に駆逐すべく、二月十七日海軍航空部隊はチモール島クーパンを空襲し、砲台並に兵舎倉庫群二十棟を爆碎し同方面所在の敵船三千トン級一隻を撃沈したが、遂に同二十日未明わが陸海軍部隊は緊密なる協同の下にクーパン及びデリー方面に敵前上陸

を敢行すると共に海軍落下傘部隊もクーパン附近に奇襲降下し、敵の頑強なる抵抗を排して同日午前十一時デリー飛行場を占領、翌二十一日クーパン東方十五キロのブトン飛行場を奪取確保し、全島の濠蘭軍を降伏せしめ蘭印、オーストラリヤ間の交通聯絡遮断に成功した。皇軍の、ポルトガル領チモールへの進駐に関し帝國政府は次の如き聲明を発した。

昨年十二月十七日英蘭両國軍は葡領チモール総督の拒否にも拘らず同領に侵入し、これを占據するの措置に出でたり。爾來英葡両國間に撤兵方の交渉開始せられ、ポルトガル政府は事態改善のため努力したる模様なるも、事態は何等變更を見ずして今日に至れるところ、今般蘭領チモールに対するわが方作戰の進展に伴ひ、自衛上帝國政府は葡領チモールにある英蘭軍勢力を駆逐するの必要に迫られるに至れり、英蘭両國の國際信義を無視せる行爲のため、多大の迷惑を受くるに至りたる葡國の立場は帝國の十分諒とするところにして、帝國政府は葡領チモールの領土保全を保證し、かつ葡國政府が中立の態度を維持する限り自衛上の目的達成の上は速かに兵力を撤收せんとするものにして、帝國は葡國に対し何等他意ある次第に非ざることをここに闡明す

ポルトガル政府もこれを諒承し、英國の中立國を対日戰に引摺り込み、一方同島に軍事據点を作らんとする企圖は完全に挫折した。

チモール島攻略戰に参加中の帝國艦艇は二十日クーパン南方セモウ海峡において蘭國商船トペロ号ならびに給油船一隻を拿捕する戰果をもあげた。

皇軍ニューギニアに進撃

東ビスマーク群島、西チモール島を皇軍に占據され、東西から挟撃の形となつたニューギニヤは皇軍の進駐に戰々兢々たるものがあつたが、遂に二十四日濠領の首都モレスビーに対する最初の空爆が濠洲空相ドレーク、ブオードから発表された。二十八日の空襲では大型飛行艇三機炎上、三機大破、陸上大型機二機中破同小型機三機中破の戰果をあげた。爾來殆ど毎日、時には日に二回以上もの爆撃が行はれたが、遂にジャバ島の全面的降伏に先だつ一日、三月八日皇軍のニューギニヤ上陸は敢行された。

大本營発表（三月十二日午後三時十分）帝國陸海軍部隊は緊密な協同の下に三月八日未明、ニューギニヤ島東岸の要衝サラモア並にラエの敵前上陸に成功し十日敵機約六十機の反撃ありしも四機を撃墜してこれを撃退、目下戰果を擴大中なり

キヤンベラよりの英側情報は『日本軍輸送船はサラモアの沖に突如として出現し、その奇襲上陸は海軍の砲撃と空軍の掩護爆撃の下に極めて短時間で見事に敢行され、防衛に當つてゐた濠洲防衛軍は完全に撤退した』と。同島はオーストラリアとは一衣帶水の間にあり、オーストラリアはこの地を防衛の第一線と恃んでゐたのでその抵抗振りは十日約六十機の敵空軍の反撃があつたことから推しても相當頑強なものがあつたであらうことは推測するに難くない。同島の最大據点は皇軍が上陸したサラモアから一跳びの距離にあるポート・モレスビーで、オーストラリアはその防衛據点としてこの地に軍事施設殊に空軍施設の整備に全力を傾

注してゐたのである。

わが海軍航空部隊のモレスビー空襲は二月二十四日を以て開始せられ、三月十日までに十回に亙る猛攻撃が加へられ、同地の敵空軍は殆ど潰滅し、モレスビーは死相を呈するに至つた。同十日の大本營発表は同日までにわが海鷲は同地に潜伏中の敵機十六機を爆破炎上し、その重要軍事施設を爆砕したことを報じた。オーストラリア各紙は筆を揃へてオーストラリアが既に戰火に投ぜられたことを注進のやうにわめき始めた。

一方サラモア及びラエに上陸した皇軍はマーカム盆地に沿ひポート・モレスビーに向つて急進を續けた。ポート・モレスビーからの情報は原住民が皇軍に呼應して蜂起し歩兵部隊を組織し、皇軍に協力せんとしてゐると傳へた。

皇軍のニューギニヤ上陸とともに敵の南太平洋據点に対する攻撃は益々猛烈を加へた。すなはち大本營発表によると『帝國海軍航空部隊は三月十三日モレスビーを强襲し、敵増援機十一機を撃破、さらにソロモン諸島ブロリ夕島およびワナワナ島附近の敵要地を爆撃、同十四日豪洲本土北端ホーン島敵航空基地を急襲し、敵機十四機を撃墜破した』

ブカ島占領　一方三月十日わが海軍艦艇は英領ソロモン群島北端ブカ島クキールカロラ湾に進入し、その陸戰隊をもつて同島の敵を掃蕩した。北東の地位から豪洲を覆ふ帽子の如くその防衛前哨基地をなしてゐる同島はニューギニヤ島と共に重要な防衛的戰略價値を有するものである。

また十四日わが海鷲が導く雷霆をのばして空爆したホーン島は木曜島附近トレス海峡にのぞみ、最近軍事施設を擴充してポート・モレスビーに対應する豪洲北端の重要基地となつてゐるもので、この附近一帶の島嶼中唯一の航空基地を有する島である。ポート・ダーウインの対岸僅か一浬、日本人の採貝で有名なトレス海峡と木曜島もかくてわが無敵艦隊の威力の下に慴伏した。

モレスビーを猛爆　サラモア、ラエに上陸してジヤングル地帶を縫ひ、三、四千メートルの嶮峻を突破し、要塞のマラリヤ地帶を强行する地上部隊に呼應する空軍のモレスビー攻撃は日と共に熾烈をきはめ、三月二十八日までに二十四回の連續爆撃の記録を作つた。メルボルン電報によれば廿三日午後日本航空部隊はポートモレスビーに対し白晝大爆撃を敢行、前後二回にわたつて痛烈なる攻撃を加へ、諸軍事施設に甚大な損害を與へ各所に大火災を生ぜしめた。

三月廿四日の大本營発表は

帝國海軍航空部隊は三月十七日以來連日豪洲本土北部、ニューギニヤ島、ソロモン諸島一帶を制壓、敵要地を爆撃し、その軍事施設を破壊せり、主なる爆撃箇所次の如し

ポート・ダーウイン、ダービー、ブルーム、ウインダム、ホーン島（豪洲）ポート・モレスビー、ツラギ

豪洲からの通信は日本航空部隊の豪洲北辺に対する壓迫は日に猛烈を加へつゝあり、爆撃回數の増加に伴ひその機數も日一日と多く日本空軍の爆撃圏はポート・モレスビーをふくむパプア湾一帶はもちろん、豪洲北岸ではポート・ダーウイン、ブルーム・ウインダムなど北部沿岸の要地は悉く爆撃の対象となり、これら諸地方の住民は極度の恐慌狀態に陷り續々東岸地方に避難しつゝある。

【大本營発表】海軍航空部隊は三月二十四日より同二十八日迄で連日ポート・モレスビーを攻撃、敵戰闘機六機を撃墜し、飛行場、高角砲陣地、兵舎等を爆破せり

豪洲防衛のため敵は南豪方面より新鋭機をポート・モレスビー方面に増援して、最後の抵抗を試み、蠢動を續けてゐるので、わが海鷲はこれに対し攻撃を反復し、増援敵機を片つ端から撃滅してゐる。モレスビーで撃墜した敵機はホーカー・ハリケーンおよびスピットファイヤー戰闘機のとつておきのもので、敵がニューギニヤ防衛に懸命の焦躁ぶりがまざ〳〵と窺はれる。

大本營発表（四月二十一日午後三時三十分）帝國海軍航空部隊は四月一日以後ポート・モレスビーおよびポート・ダーウインに対する數次の攻撃ならびに味方基地に飛來せる敵機との交戰により四月二十日までに敵機六十六機を撃墜、二機を撃破せり

廣大な太平洋海域に縱横の活躍をつゞけつゝあるわが海軍航空部隊はさる二月十九日のポート・ダーウイン初空襲以來四月一日までに三十九機、モレスビー方面で三十三機、合計七十二機を撃墜してをり、今回の戰果を加へると百四十機が撃墜破され、また三十余回に亙る空爆で地上、港湾設備に大損害を與へたのである。さらにその後も連日爆撃を續けてゐるが二十三日の如きは三回にわたりモレスビー之空に乱舞、軍事施設に巨彈の雨を降らせた。

西部ニューギニヤを戡定

（大本營発表（四月二十八日午前十時四十五分）帝國海軍部隊は三月三十一日モルツカ諸島並に西部ニューギニヤ北半の攻略作戰を開始し、四月十九日同方面諸要点を完全に占領せり

帝國海軍部隊の西部ニューギニヤならびにモルツカ諸島の作戰は擲弾戡定作戰の仕上ともいふべきもので、豊なる攻略戰に非ず、経済的建設を主とせるもので、一面戰爭、一面建設たる大東亞戰の本義を端的に明示した。占領した諸要点は一、ブラ（セラム島にあり、採油所あり）二、ファクファク（ニューギニヤ西端）三、パポ（ニューギニヤ西端）四、ソロン、五、テルナテ（ジロロ島西端中央都要衝）六、マノクワリ（ニューギニヤ北部）七、モミ（同上）八、セルイ（ニューギニヤ北部セルイ島）九、ナビテ（ニューギニヤ北部）十、サルミ（同上）十一、ホランジヤ（同上）

ニューギニヤ西部の戡定部隊と共に東部ニューギニヤの攻略も北方からポート・モレスビー目ざして南進する陸上部隊に呼應するわが空軍の攻撃は休む間もなく續けられ、二十九日も三回に亙つて日本空軍大編隊がポート・モレスビーを空襲してゐるとサンフランシスコ放送は叫びつゞけ断末魔せまるモレスビー港爆撃を報じてゐる。

さらに四月三十日海軍航空部隊は豪洲北端のホール島に第二次爆撃を行ひ、飛行場施設滑走路中央に全彈を命中、四ケ所を炎上、地上銃撃によつて敵戰闘機一機を炎上、三機を大破せしめた。また同日ソロモン島ツラギを空襲した海軍航空部隊は同地軍事諸施設を爆撃大損害を與へたが同地には敵機影を認めず、両攻撃とも我方には一機の損害もなく全機悠々歸還した。

五月三日日本空軍部隊のモレスビー大爆撃がメルボルンから報ぜられた。西南太平洋反福軸軍司令部発表によると『日本航空部隊は三日モレスビーに來襲、飛

行場に猛烈な爆撃を加へた。また濠洲ABC放送によればポート・モレスビーに対する日本航空部隊の攻撃は最近頓に熾烈の度を加へ、四月二十一日より二十九日に至る九日間に空襲回數十三回、來襲せる機數は合計〇〇台以上に達したと。

濠洲に重壓

米英撃滅の大東亞戰爭開始以來五ケ月にして遽く、東はソロモン、ニューブリテンまでもわが皇軍の占據するところとなり、四月十九日にはニューギニヤ島西部の戡定を完了し、ここに西南太平洋から米英勢力は完全に駆逐され、いまは僅かに東部ニューギニヤのモレスビーがわが航空部隊の三月初旬以來殆ど連日の猛爆に斯末魔の余喘を保ちその運命は風前の灯同様になつておるのみで、また米英の稽となる最後の砦たる濠洲が南太平洋に遺憾見的存在として戦々兢々たるのみである。これに対してわが軍はスマトラ、ジャバ、チモール、ニューギニヤ、ニューブリテン諸島を鴉ねる四千浬にも亘る占領地域から膠寇を擲げて濠洲を包み無言の威圧を加へ、濠洲をして手も足も出ぬ不動金縛り状態を取り、米濠の焦躁はいよ〳〵深く、彫に脅ゆる濠洲の軍備は狂的なものがある。危機の切迫に対し首相カーチンは義務兵役施行を決定、十六才から六十才までの男子を徴用することを決定した。

しかし西の印度洋、北東の南、西太平洋と悉く日本海軍に制せられた濠州の運命は俎上の魚にすぎない。

十四　オーストラリアの戰慄

オーストラリア本土に対する攻撃は、二月十九日、北岸最大の海空基地ポート・ダーウインに対する空襲をもつて開始された。この作戦は翌二十日のチモール島上陸作戦を前に敵來援の企圖を粉砕するため行はれたものであつた。この日、わが海軍航空部隊は大編隊をもつて南太平洋上を長駆、爆撃を敢行、ダーウイン湾所在の敵機二十六機を全部撃墜破し、在港の敵六千トン級特設巡洋艦一駆逐艦二、潜航艇一、輸送船九を撃沈、駆逐艦一を大破し、更に東西両飛行場格納庫全部（三棟）、兵舎（二棟）、海軍司令部、官廳街、桟橋等を爆破、炎上せしむる大戦果を擧げ、闇印方面に対する敵増援の途を完全に絶ち切つた。

ポート・ダーウインに対する空襲は、三月四日（二回）と同七日（同）とを始め殆ど連日の如く繰返され、同月二十八日の如きは、擬装隠匿中の敵機三機を発見、炎上せしめ、帰途米増援の戦闘機も機の退路を受けるや敢然空中戦を交へその四機を撃墜、また同三十日の空襲に當つては、わが戦闘機隊は敵戦闘機十機と交戦、その九機を撃墜した。攻撃は四月に入るとともにいよ〳〵猛威を加へ、同二十一日の大本營発表によれば、四月一日より同二十日迄でにニューギニヤ、モレスビー方面の戦果と合せてダーウイン方面において撃墜せる敵機六十六、同撃破二機の多数に上つた。

北西岸各要地攻撃

一方、わが海鷲は三月三日、ダーウインと並んで北西岸の要衝たるブルームを初空襲し、発進率揃中の敵最新鋭行艇（コンソリデーテッドPBY、同PB2Y）その他を攻撃、所在機全部二十八機を撃破しさらに他の一隊はウインダムをも空襲、敵輸送機一及び格納庫一棟を銃撃炎上せしめた。また同二十日にはダービーにも初空襲を加へた。

ホーン島空襲

海鷲の果敢なるオーストラリア攻撃は、その本土の北

端ヨーク岬の北方に本曜島と相対するホーン島にも伸び、三月十四日、長駆爆撃を敢行、重要軍事施設を爆砕した。同二十四日、大本營発表によれば、同十七日以來ダーウイン、ダービー、ブルーム、ウインダム、ホーンの各要地に連日猛攻を加へつゝあり、北辺一帯は全くわが荒鷲の翼下に悩伏した。

敵聯合軍總司令部設置

右の如く、本土北岸及び北西岸の各要地はわが荒鷲の制壓下に帰し、加ふるに濠領ニューギニヤの首府モレスビー、及びソロモン群島もまた制空權をわれに奪げ、一方シンガポール陥落、全闇印戡定により、オーストラリア北辺の護りは悉く潰え去り、僅かに南太平洋を通ずるルートによりアメリカと結び、南インド洋を通じてアフリカ経由英本國と聯絡し得るのみとなつたオーストラリアは辛うじて孤立無援の一歩手前に踏み留まる状態で、カーチン政府の焦燥と狼狽はいよいよ度を加ふるとともに、シンガポールを逐はれ、闇印を失つた敵米英闇陣營は今やオーストラリアを根城に作戦建直しに狂奔することゝなつた。

一方、オーストラリア政府は英本國の軍事力に見限りをつけた結果対米依存の度はいよ〳〵高まり、特に対日反抗基地として今やオーストラリアが唯一の残された要地であることを強調し、米軍、特にその空軍の來援を要請した。外相エヴアットは本問題に関し米當局と直接交渉をとげるため空路渡米したが、その間三月十七日、比島ベタアン戦線に於てわが猛攻に敵しかねた米比島軍総司令官マックアーサーは難儀とともに比島を逃れ、辛くもオーストラリアに到着し、これと同時にスチムソン米陸軍長官はマックアーサーを西南太平洋反福軸聯合軍総司令官に任命する旨発表した。

聯合軍統帥權の紊亂

三月二十日、ワシントンに到着したエヴアットは米首脳と会見の上、從來の英米を根幹とし、ロンドンに重心を置いた太平洋軍事會議に代るものとしてオーストラリアにも発言權を與ふる新軍事會議の開設を提案したものの如く、ルーズヴエルト大統領は同三十日、米英のほかオーストラリア、ニュージーランド、カナダ、オランダ、重慶各代表者をも構成員とする太平洋戦爭會議を創設した旨発表、四月一日第一回會合をホワイト・ハウスに開催した。討議範圍は戦略のほか外交政策、生産、供給、海上輸送等全般に亙つたものと信ぜられ、特に太平洋の軍事に関する限り、ロンドンよりワシントンの方が指導的立場を取ることに落着いたものの如く、この点ではオーストラリアの希望は大半達成したものと見られたが、マックアーサーの西南太平洋反福軸聯合軍総司令官任命に対しては頗る慊らぬものを示し、オーストラリアは太平洋戦爭會議の議決に基く正當の結果である權限すら委譲しないことが四月十五日オーストラリア派遣米軍司令部代弁者から発表され、端なくも聯合軍の統率指揮權の紊乱を暴露するに至つた。即ち米軍司令部の発表するところは

マックアーサー大将は公式には米東亞軍の陸空軍司令官であつて、今日なほ大将は司令部を比島からオーストラリアに移したことと、オーストラリア派遣米軍の指揮權を新たに掌握した以外、從來と何ら變つた權限をも與へられてゐない。

と露骨に憤懣の意を洩した。こゝにカーチン首相は狼狽し

オーストラリア政府に関する限り、マックアーサー大将が西南太平洋聯合國

軍最高司令官であることは何らの疑念を挿む余地はない。

と聲明するとともに同大將に対し西南太平洋地區における聯合軍司令官として戰略上のあらゆる權限を附與することに決定した。こゝにマツクアーサーは同十八日正式に西南太平洋反樞軸聯合軍司令官に就任、その權限は陸海空軍一切の統率權を含む旨、同日夜半マツクアーサー司令部から発表され、同時に

全地上部隊司令官　トーマス・ブレミー大將
全空軍司令官　ジョージ・ブレット大將
全海軍司令官　リアリー大將

の人事を発表した。

かくてジヤバ失陷に先んじてウエーヴエル大將がインドへ逃亡した結果、自然消滅の形となつた西南太平洋聯合軍総司令部は、英將ウエーヴエルの代りに米將マツクアーサーを戴いて復活した訳で、その編成に當つてオーストラリア軍は全く有名無実化し悉くアメリカの牛耳るところとなり、オーストラリアの米属國化はいよ〳〵濃厚となつた観がある。

十五　インド洋を制壓す

シンガポール攻略とゝもに、蘭印の主島ジヤバ、スマトラに対する作戰も本格的展開を示すことゝなつたが、二月末、ジヤバ神海戰に敵西南太平洋聯合艦隊を撃滅し去つた帝國海軍は一擧にインド洋制覇に乗出し、攻撃の火蓋は先づ三月一日、英領クリスマス島空襲をもつて切つて落された。

クリスマス島攻略

クリスマス島はスンダ海峡の南方二百二十浬に横はる面積六十平方マイルの小島で、燐鑛石の產地として著名であるが、皇軍によるマラツカ海峡遮断以來、インドとオーストラリヤとを結ぶ連絡基地として重大なる役割を演じ、特に同島の地理的優越性に着目したアメリカは大東亞戰爭勃発に先つて、同島を英國より租借し軍事施設を强化しつゝありとさへ傳へられてゐた。

三月一日の空襲に當つてわが海鷲は同島大無線台を始め、同島唯一の港灣たるフライイング・フイシユ灣その他英米聯合艦隊の諸施設に巨彈を浴せ徹底粉砕、全機無事歸還したが、續いて海軍艦艇は同七日、同島に対し痛烈な砲撃を加へ、軍事施設に大損害を與へた旨、同十一日、大本營から発表された。相次ぐ猛攻に在島の敵軍は全く戰意を喪失し撤退したもの〻如く、同月三十一日、帝國海軍部隊は全然敵の抵抗を受けることなく無血上陸に成功、たちまち全島を占領した（四月十日大本營発表）。

アンダマン諸島占領

三月二十四日の大本營発表によれば、帝國海軍航空部隊は三月十七日以來、西南太平洋一帶の要地とともにアンダマン諸島方面を制壓、敵要地ポート・ブレアを爆撃、その軍事施設を破砕したことが明らかにされた。

アンダマン諸島はシンガポールとインドを結ぶ東亞進攻路の中継地として驚て英國が防備强化に力め、マドラス、カルカツタ、コロンボへ等距離にあるその位置は、とりも直さずインド防衛の外郭をなしてゐた。ポート・ブレアは南アンダマン島の東岸にあり、全諸島を通じて最大且つ最重要の港都であり、英國は陸上飛行場の建設を進めてゐた。

アンダマン諸島爆撃は皇軍によるインド洋制覇がいよいよ巨歩を踏み出したものとして英國並にインド當局を震撼させたが、皇軍の精鋭は、三月二十三日未明北、中、南各島の數ケ所に奇襲上陸を敢行、在島英軍をして無條件に降伏せしめた（三月二十六日大本營発表）ついで二十四日にはヘイブロック、エルフインストン島をも攻略、一方ポート・ブレアを占領した海軍部隊は二十五日同港を発し、スチユアード・サウンド、ポート・マンウエスト両島に上陸して掃蕩を終へこゝに東インド洋上の最大の要衝もわが手に帰し、インド本土東岸及びセイロン島はわが攻撃の前に裸同然の狀態となつた。

セイロン島及びインド本土攻撃

アンダマン諸島及びクリスマス島を占領し東インド洋の敵基地を潰滅した皇軍は、いよいよインド攻撃を開始するに至り、海軍部隊は四月五日、インド洋における英國最大の軍事據点たるセイロン島の首都コロンボその他を攻撃、同方面の所在敵艦艇、船舶、航空兵力並に重要軍事施設に大損害を與へつつある旨、同六日大本營より発表された。

同時に東條首相は、去る三月十二日、議會において聞明した帝國の大方針を更に敷衍し

今こそインド人のインド建設の絶好の機會であり、インドが依然として英の支配下に留まる限り、帝國が英國撃滅のため行ふ攻撃により、インドが甚大なる戰禍を蒙ることまた止むを得ない。

との警告を発し、折柄進行中の英印會談の成行を注視しつつあつたインド民衆に多大の衝動を與へた。

翌六日皇軍の鋭鋒はつひにインド本土に迫り、セイロン島の北方八百キロ、マドラス州北部の要衝コカナダ及びコカナダの北方百二十八キロのチカコルを空襲、軍事施設に大損害を與へた。同日、インド軍司令部は

ウイザガバタム、コカナダは六日日本軍の空襲を受け、また日本艦隊はベンガル灣に出現、艦砲、搭載機をもつて商船多數を攻撃した

と発表したが、五、六の二日間における敵船舶の撃沈は數十隻に上ると報道された。

四月七日までの戰果として大本營より同九日発表されたところによれば

一、驅逐艦撃沈　英甲巡コンウオール型一隻、同ロンドン型一隻
一、船舶撃沈　二十一隻、十四万トン
　同　大破　二十三隻、十二万トン
一、飛行機撃墜　六十機
一、陸上施設　飛行機格納庫三棟、修理工場一棟、その他重要施設數ケ所破壞

と、量、質ともに赫々たるもので、英印當局をして色を失はしめた。これに対しわが方の損害は飛行機五機を失へるに過ぎず、驅逐艦は何らの損傷をも受けなかつた。

しかも、わが海軍部隊は矢継早に九日、セイロン島東岸の軍港ツリンコマリ方

面を强襲左の如き戰果をあげ、英インド洋艦隊を大半覆滅するの偉績を樹てた。

一、艦艇擊沈　英航母ハーミス（一〇、八五〇トン級）駆逐艦一、哨戒艇一
同　大破　英乙巡リアンダー型一
船舶擊沈　六　隻
飛行機擊墜　五十六機
同地上炎上　四　機

一、その他軍事施設に大損害を與へた

この日、わが方の損害は飛行機十機を失ふに過ぎなかつたが、以上、インド洋作戰の綜合戰果として、四月十三日、大本營は

艦船擊沈破六十五隻、飛行機百二十機粉碎

と発表した。

コロンボ及びツリンコマリ両軍港は、シンガポール失陷後、英國が有する最東端の軍事據点であり、その宝庫インドを死守すべき最重要基地であつたが、皇軍の勇猛果敢なる攻擊の前に敢なくも屈し去つた結果は、ビルマよりカルカツタを経てセイロン島に至る廣大なるベンガル水域は全くわが制壓下に帰し、インド本土の東部一円はわが軍事行動範圍に落ち、殘る西岸唯一の基地ボンベイの作戰的價値また著しく減殺され、英印軍事當局をして狼狽の極に陷れた。一方またインドとオーストラリアとの連絡は殆ど遮斷され、オーストラリアは僅かに南太平洋を通ずる米との連絡コース、アフリカ南端を経由する対英連絡コースに活路を見出すのみとなり、同時にインド、アフリカ間の連絡もまた危殆に瀕するに至つたためアフリカ、特に南阿聯邦に対して微妙な影響を及ぼすに至つた。

十六　アメリカ本土を攻撃

太平洋沿岸の海上交通を脅威

大東亞戰爭が勃発した十二月七日午後十時三十分（日本時間八日午前九時三十分）のワシントン・ラジオ放送はホワイト・ハウス當局は、サンフランシスコの西方約千三百浬の地点を航行中のアメリカ輸送船團は潜水艦の攻擊を受け、うち二隻は沈没したことを発表したと放送し、アメリカ太平洋沿岸の海上交通が早くも日本潜水艦の脅威に曝らされつゝあることを明にしてアメリカ國民の不安を煽りたてた。

アメリカ海軍當局は十二月十一日左の如く発表した。

敵潜水艦はアメリカ太平洋岸で活動を續けてゐる。アメリカ油槽船アギワアールド号（六、七七一トン）は敵潜水艦の攻擊を受け、またエミジオ号（六、九一三トン）は砲擊を受けた後魚雷攻擊を蒙つたため、乗組員は同船を放棄の已むなきに至り、救命艇に乗移つたが、乗組員は砲火で破壊された。救出された乗組員は三十二名である。

わが潜水艦がアメリカ本土沿岸に活躍し、開戰頃頃において油槽船二隻が血祭にあげられたことがアメリカ海軍當局より正式に発表されたゝめ、アメリカでは各新聞とも隻を揃へて、アメリカ海軍の対潜水艦戰の不活潑に対し非難を集中し遂にノックス海軍長官はこの攻擊に対し弁明せざるを得ない立場に陥り『アメリカ水域内及び水域近くにおける敵潜水艦の活躍は切迫し來つたので、當然これに対應する措置は講ぜられた』と稱したが、その處置が如何なるものかに就いては『それを発表することは徹に利用されることになる』と逃げを打つた。

次いで同二十日米海軍當局はラハイナ号（五、六四五トン）が十一日サンフランシスコに帰港の途中潜水艦の攻擊を受け沈没し、また二十日アメリカ汽船がカリフオルニア近海で潜水艦の近距離攻擊を受けたと発表した。

二十二日午前八時半サンフランシスコとサンヂエゴの中間にあるアルゲロ岬附近航行中の大型油槽船一隻は潜水艦より砲擊を受けた。攻擊の光景は海岸から手にとるやうに目擊され、附近住民は余りにも近く現れた潜水艦の大膽不敵の行動に大恐慌を來した。

二十三日サンフランシスコ放送局はアメリカ油槽船數隻がカリフオルニア沖で日本潜水艦の襲擊を受け、そのうちモンテベロ号は同日午前四時擊沈され、若干の乗組員が四隻の救命艇で海岸に漕ぎつけたと報じた。

翌二十四日アメリカ海軍當局はサンフランシスコのマコミツク汽船會社の所有の貨物船アブサロカ号（五、六九三トン）がカリフオルニア沖で日本潜水艦によつて擊沈された旨公表した。二十五日にはカリフオルニア沖で木材を積んだ四本マストのアメリカ貨物船が日本潜水艦に襲はれたが消息不明であると発表した。

二週間に十八隻を擊沈

かくてアメリカ本土沿岸及びハワイ方面に作戰し、同方面の敵海上交通に深酷な打擊を與へたわが潜水艦の十二月二十五日までに判明した戰果は、同二十九日の大本營発表によれば擊沈船舶十隻七万トン、大破三隻二万トン、その他損傷を與へた船舶五隻約四万トンの多數に上つてゐる。

方面の戰場にアメリカ增援軍を派遣することは容易ではない』とて、增援軍を送るべき戰場がよしまた西南太平洋に殘されてゐるとしても、增援の輸送船團は直ちに日本潛水艦の好餌となるべきことを認めてゐる。

米本土に初砲撃

大本營発表（二月二十五日午後一時三十分）帝國潛水艦は昨二十四日夜間米國カリフオルニア州沿岸の軍事施設を砲撃して大なる戰果を收めたり

開戰以來遠く太平洋を横斷してアメリカ本土沿岸に活躍し、アメリカ朝野の心膽を寒からしめてゐるわが潛水艦は遂にカリフオルニア州沿岸に悠々と姿を現はし、アメリカ本土の軍事施設に、最初の砲撃を加へたのである。アメリカ本土が直接攻撃を受けたことは、第一次、および第二次世界大戰を通じて初めてである。わが潛水艦の無敵の活躍振りは大東亞戰爭を激発せしめたアメリカの自國の武力に対する自信を根底から撃ち拉きアメリカは固より反樞軸陣營の諸國民を震慄せしめた。

ロンドンBBC放送によれば米本土に対する最初の砲撃が二十三日午後十時十八分（東部戰線時間）カリフオルニア洲サンタバーバラ附近で潛水艦によつて行はれた。右時刻はルーズヴエルトが鳴物入りで豫告したワシントン生誕記念燭辺談話放送時刻に相當し、その演說がはじまつたとき忽然宵闇のカリフオニア洲海岸、しかも眼と鼻の間にサンジエゴの大軍港を控へたサンタバーバラ海峽に潛水艦が白波を蹴つて姿を現し、映畫のロケーションで有名な緑の都サンタバーバラより八マイルを隔てた地点――おそらくロサンゼルス要塞地帶の入口を扼する防備施設がある場所と思はれる――へうづけさまに二十発の砲彈を見舞つた。右潛水艦の所屬國籍についてはなんら発表されず、また『被害はまつたくなし』と主張されてゐる。

ルーズヴエルト大統領は二十五日記者團との會見において、わが潛水艦のアメリカ本土砲撃は『優秀なる政治的謀略の一例である』ことを率直に認めざるを得なかつた。

リスボン電報はアメリカの驚愕振りを左の如く報じてゐる。

樞軸國潛水艦のカリフオルニア海岸砲撃は警察當局の調査では結局二十五発砲撃されたといはれるが、狼狽した當局は砲撃後時余にわたつて現地一帶に燈火管制をやるやら大騒ぎを演じたがあとの祭りで、そのうへ海陸軍當局ともに『これに対しどういふ対策を講ずるかいますぐに発表できない』と言明するだらしなさだ、この砲撃を目撃した勞働者スターリスは語る『いやびつくりした。凄く大きい軍艦のやうに思へたがあれが潛水艦かね。堂々と水上に現れて一マイルぐらゐ沖から二十分ぐらゐ射つてゐたよ。おまけに砲撃がすんでも一向沈まうとせず傲然と浮いてゐたが、そのうち夜闇でみえなくなつてしまつた』

米海軍當局は日本海軍潛水艦のカリフオルニア沿岸砲撃に関し左の詳報を発表した。

日本潛水艦と覺しき潛水艦は二十三日午後七時（ワシントン時刻）から同八時にわたりカリフオルニア州沿岸エルウツド附近のバンクライン精油工場に砲彈多数をあびせた。この潛水艦はサンタバーバラの西南十二マイルのエルウツド沖合四分の一マイルの海面に突如現れて多数の砲彈を連續的に発砲したもの

である。米空軍はたゞちにこの潛水艦の捜査に努めてゐる。なほ米第一警備區司戒部も右に関し左のごとき発表をした。

日本潛水艦のカリフオルニア沿岸攻撃の際精油工場の油井に直撃彈數発が命中相當の損害を被つた。石油タンクの周圍にも多數の砲彈が落下したが砲撃は心憎きまで落着き拂つて行はれ、二十五分間にわたつて多數の砲彈を悠然と浴びせかけた。

日本空軍襲來の幻影

わが潛水艦のアメリカ本土砲撃により人心動搖してゐる折柄、同廿五日は拂曉にロサンゼルス及びその郊外にけたゝましい空襲警報が発令せられ、午前二時半厳重な燈火管制が実施されてから三十分後ロサンゼルスの高射砲は俄に発砲を開始した。探照燈の光芒は漆黑の夜空を縫ひ対空砲火の炸裂は頭上に絶え間なく繰廣された。該飛行機はロサンゼルスの西方ハンチントン公園の上空を南方に太平洋岸ロングビーチ方面に向ひ飛翔しつゝあつた。目撃者の談によれば編隊は午前三時三十分にはロングビーチ南方シナグル山麓の貯油地帶上空に姿を現したものと思はれると。サンピドロ、サンタモニカおよびサンフランシスコにも一警に燈火管制を施行した。

アメリカ政府當局は二十五日正午（日本時間二十六日午前一時）記者團との會見において同日拂曉アメリカ西部海岸上空に二編隊の敵飛行機が來襲したと発表した。陸軍長官スチムソンは参謀總長マーシヤルより入手した情報により二十五日午前三時十二分より同四時十五分までの間に『國籍不明の飛行機約十五機がアメリカ西海岸上空に飛來した、同地區の高射砲陣はこれに対して火蓋を切つた。怪飛行機は九千乃至一万八千フイートの高度で飛翔し速力は三百二十キロに近いものであつたが爆彈は一発も投下しなかつた。従つてアメリカ側にも犠牲者を出さなかつた』と発表した。

しかるにロイター電は『これは最初のアメリカ本土空襲であるが全く奇怪である』と題して左の如く報じた。

サンフランシスコ警備軍當局では二十五日未明太平洋沿岸の防備軍は國籍不明の飛行機襲來に対し一警に高射砲を発砲したと発表してゐるものの、各地から來る報告は區々で全く一致せず、目下確報を得ることに努力してゐる。同地方では國籍不明の飛行機編隊が発見さるとの警報と同時に、警備司令官の命令一下直に燈火管制を実施したが、一向に編隊を認めず、爆彈の投下もなく一機も撃墜されてゐないと追加発表してゐる。

一方地方紙はこの國籍不明の飛行機がロサンゼルス市郊外に発見されたことは戰時下としてあり得ることではあるが、同飛行機が三十六キロの航行に三十分もかゝつた事実から見てこの奇怪な空の怪物は恐らく敵國の小型飛行船と思はれると恐怖まじりに報じた。また他の地方紙は襲來と同時にアメリカ空軍機はたゞちに基地を飛び立ち應戰したが、監視兵の語るところによると、サーチライトに浮き出された編隊は米機だつたとアメリカ警備軍の無能振りを皮肉交りに報じた。軍部ではこの奇怪な点について各方面について情報蒐集に大量であるがワシントンにおいてノツクス海軍長官は二十五日記者團との會見に際し

海軍當局への入電は『ロサンゼルス上空に日本機現るとの報は誤報である』との報告があるのみで私の諒解するかぎり二十五日朝はロサンゼルス上空には機影を認めず、アメリカ空軍偵察機は太平洋岸を厳汎にわたつて偵察飛行中で

ある

と語り日本空軍の襲來說の眞僞を繞つてアメリカ陸海軍の対立となつたが結局日本空軍の襲來はアメリカ國民の恐怖が捏き出した幻影であることが明らかとなつて、スチムソンは更に聲明を下げた。

翌二十六日午前十一時三十一分首都ワシントンに突如空襲警報が鳴りひびいたが、十三分の後解除された。重要な造船工場街であるヴアージニア州ハンプトンロードでも同日拂曉空襲警報が発令されて、再びアメリカ市民を不安のドン底に陷れたが、これも疑心暗鬼であつたことが間もなく判明した。

高射砲の彈幕を冒して夢魘の如くアメリカ本土上空を翔ける飛行機の幻影は打ち續く敗戰に銷沈するルーズヴエルトの眠りを一層不安ならしめ、潜水艦の砲撃に續いて起つたこの疑心暗鬼は西都海岸は勿論アメリカ全國民の周章狼狽振りを物語るものであると共に、日本に対する恐怖が如何にアメリカ全國民に大きな影を投げかけてゐるかを示すものである。

アメリカ國民精神の敗北　わが潜水艦によるアメリカ本土攻撃にアメリカ國民は周章狼狽、大國民としての矜持を失ひ、醜態をさらけ出したが、敵もまた我に対し同樣の手段を講ずるやも測り知れず、その際大國民としての憂悟が必要で、戰捷に安堵して戒心を怠ることなきやうにわが陸軍當局は二月二十七日左の談話を発表した。

帝國海軍潜水艦は去る二十四日夜米國加州沿岸軍事施設に奇襲砲撃を加へ大戰果を收めたが、その実質的效果にもまさる大戰果は全米國民に與へたる精神的打撃であつて、朝野を擧げての大狼狽は日頃の豪語にも似ず、大國民たるの矜持何處にありやとの嘲笑を禁じ得ない。引續き二十五日以來無線の妨害に依え、心の落ちつくところを知らない。戰爭の勝負は既に國民精神により決したといへる。

二十隻十六萬トンを撃沈

アメリカ海軍當局はスタンダード石油會社所有の油槽船アール・ブレリー号（七、四五トン）が二月二十七日太平洋アメリカ近海で獨逸潜水艦のため撃沈され乗組員三十八名中三十三名が救助されたと公表した。またアメリカ油槽船ウイリアム・ボルグ号も三月三日夜太平洋岸において日本潜水艦の攻撃を受け撃沈されたと外電は報じた。

大本營は三月十六日アメリカ本土西岸方面で作戰中の帝國潜水艦は三月一日サンフランシスコ沖合において一万トン級油槽船一隻、同二日メンドシー近海において七千トン級貨物船一隻を撃沈したことを発表した。

開戰以來アメリカ本土沿岸で活躍中のわが潜水艦の戰果は、上記二隻の撃沈により船舶二十隻十六万トンに達した。アメリカが太平洋岸に就航せしめてゐる船舶が極めて少數なる事実に鑑みて、この戰果がアメリカに與へた軍事的経済的打撃は極めて甚大なるものといはなければならない。加ふるにサンフランシスコはアメリカの西南太平洋に対する交通の起点である。この航路が常にわが潜水艦の脅威を受けることは、アメリカが最も苦痛とするところで、國内のアメリカ海軍に対する非難が増大することは必定であり、わが潜水艦のアメリカ本土攻撃と相俟つて、わが潜水艦の通商破壞戰はアメリカ國民をして不断の不安に陷れるであらう。

十七　敗戰焦慮の敵襲

緒戰以來敵艦艇の損害は戰艦七隻、航空母艦四隻はじめ、艦沈破実に二百余隻船舶の損失二百五十余隻、飛行機撃墜一千五百余機の驚異的大戰果に比し、敵のわれに対する反撃は余りにも僅少である。これ偏へに御稜威の然からしむるところとはいへたわが忠勇無双の海上部隊と航空部隊將兵の崇高なる威勳の賜として感謝の辞もない。

開戰以來一ケ月間全く機先を制せられた敵海軍も嘗々たる國内輿論の非難にたまりかねて漸くゲリラ的反攻に出てきた。その最初の犠牲となつたのが第一雲海丸だ。

第一雲海丸雷撃を受く　大本營発表（一月九日午後六時）一月七日早朝伊豆半島沖において第一雲海丸は敵潜水艦の魚雷攻撃をうけ船体に損傷を蒙りたるも同船乗員は全部無事なり。

第一雲海丸は中村汽船會社所屬、大正七年の建造にかゝる総トン數二、二三五トンの貨物船で、損害は極めて軽微であつた。

病院船哈爾賓丸撃沈さる

大本營発表（一月十四日午前十一時三十分）病院船哈爾賓丸は一月十日朝南支那海において敵の攻撃を受け沈没せり、乗組員及び患者の大部は救助せられたるも六名はなほ行方不明なり。右は明治四十五年一月十二日ヘーグにおいて締結せられたる『ジユネヴ條約の原則を海戰に應用する條約』に違反せる非人道的行爲にして帝國の最も遺憾とするところなり

病院船は戰時に交戰國間において特別の取扱ひをうけることは國際條約にも明記せられてゐる。すなはち明治四十五年一月十二日のヘーグにおいて締結せられたる『ジユネヴ條約の原則を海戰に應用する條約』の第一條および、明治十九年十一月十五ジユネヴにおいて締結せられたる赤十字條約の第一條において、病院船に対し危害等を加ふべからざるを厳然として規定してゐるにかゝはらず、今回の敵潜水艦による帝國病院船の撃沈行爲は、明かに如上の條規に違反するはもちろん、正義人道上断呼として排撃非難すべき行爲であり、帝國としては断じて默認し得ざるところである。戰前常に正義人道をかゝげまたは國際法規遵守の本尊であるかの如き言動をなしてゐた米英が一度開戰するや假面を脱いでかゝる血迷つた惨ぶてを余りある非人道的不法行爲をなすに至つたことに対し、帝國としてはこれに應ずる断呼たる決意の用意がある。

レキシントン型航空母艦を撃沈

大本營発表（一月十四日午後三時）帝國潜水艦は一月十二日夕刻ハワイ西方洋上において米國太平洋艦隊所屬航空母艦レキシントン型一隻（三万三千トン）を雷撃、魚雷二本命中を確認、同艦は沈没せること確実なるものと認む

レキシントン型が基地を進発して進撃してきた意圖としては、ハワイ敗戰の出來るだけの反撃として、あはよくは日本本土を空襲し、敗戰米海軍の余勢を内外に示さんとし、もしそれがならずばジヨンストン島に飛行機を輸送、好機あらば

附近海面に活躍するわが艦艇を攻撃しようとしたものと想像され、いづれにしてもわが海軍の大戦果による米國内の不安、米海軍にたいする非難にゐたゝまれず出撃したものである。

米國政府はレキシントンの爆沈をひたかくしにしてゐたが同二十一日ブエノスアイレスUP電が『レキシントン号撃沈』のニュースを米國に打電し米國民に大衝動を與へた。米海軍はこの暴露にも依然沈默してゐるがこれは從來の米の潜り方である默認を意味するものである。『殊勲の潜水艦』から海軍省に提出された戦況は次の通りである。

わが潜水艦がレキシントン号を遥か水平線上に発見したのは十二日夕刻である寝む敵艦しかも航空母艦の出現に勇躍した勇士達は逃がさじとその航路速度を仔細に偵察した。當時のレキシントンは甲級巡洋艦、駆逐艦数隻を伴ひ潜水艦への警戒も厳重に一路日本本土に向つて波を蹴たててゐた。潜航、直に接敵行動に移つたわが潜水艦は沈着大膽な運動を行つて敵の警戒陣を突破、至近の距離で必中の魚雷を発射すると同時に敵巡洋艦、駆逐艦の死者狂ひの爆雷攻撃を避けるため潜没した。しかしあくまでも沈着、『敵を倒さずんば死なじ』の気魄に生きる勇士達は水中をけた走る魚雷の行方を聽音してゐた。爆雷のすさまじい爆音、水面を縦横に馳せ巡る敵護衛艦の推進器の音響、わが放つた魚雷の航走音、これらを明確に識別して敵艦の撃沈を聽音することは至難なことだ。魚雷が敵艦に命中すべき豫定時間に乗員は聽音係りから『命中』の報告をきいた。まさに至妙の境地であつた。そして、七分ー二回にわたつての大爆音だ。それきりレキシントン号の推進器の音響は勿論、それまでレキシントン号が発してゐた音響一切ピタリと止つたのだ。打續く爆雷に爆音ーそれこそレキシントン号が海上から消えた轟音であつたのだ。

マーシャル群島の敵襲を撃退

大本營発表（二月二日午後七時三十分）二月一日未明航空母艦、甲巡、駆逐艦等よりなる敵部隊マーシャル群島方面に出現したるも、われは直にこれを反撃撃退せり、本戦闘において敵甲巡一隻を爆撃大火災を生ぜしめ、敵飛行機十一機を撃墜したる外、他の艦艇に若干の損害を與へたり、わが方は小型特設艦船一隻中破したるほか、その他の艦船ならびに陸上施設に軽微なる損傷を蒙り合計二十八名死傷者を生じたり

中型新式航空母艦を撃沈

大本營発表（二月二十六日午後四時四十五分）帝國海軍航空部隊は二月二十一日ニューギニヤ島北東方数百浬の洋上に航空母艦を含む有力なる敵部隊を発見、機を逸せず敵上空に殺到、敵戦闘機群と壮烈なる空中戦闘を交へその一部は猛然機体もろとも体當りを以て敵航空母艦を大破、大火災を生ぜしめ他の軍艦一隻にも大損害を與へ、敵戦闘機十機を撃墜せり

右の航空母艦は沈没を確認せられなかつたと発表されたが、詳報判明するに及び三月七日『さきにニューギニヤ島北東方洋上においてわが決死の攻撃をうけたる敵航空母艦は沈没確実ならずと発表せるも、その後寫真その他當時の狀況より察し沈没確実なること判明せり、なほ本航空母艦は中型新式航空母艦なり』と追加発表された。

さる一月十二日ハワイ洋上で撃沈されたレキシントンも甲級巡洋艦と駆逐艦を随伴してゐたが両者とも所謂『航母集團攻撃法』といふ米海軍獨特の攻撃戦法によつたものである。

大鳥島來襲の米艦隊を撃破

大本營発表（二月二十八日午後三時四十五分）大鳥島（旧ウエーキ島）海軍部隊は二月二十四日未明、敵航空母艦一隻、巡洋艦二隻、駆逐艦六隻を発見し同島陸上砲台は直にこれを砲撃し、敵巡洋艦一隻に火炎を生ぜしめ駆逐艦一隻の艦尾に命中弾を與へ、また同方面所在海軍航空部隊は敵大型巡洋艦一隻の後甲板に爆弾を命中せしめたるほか、敵機五機を撃墜し、さらに所在航空部隊の総力をもつて、これが撃滅を期し発進せるも、敵は逸早く遁走し、洋上遠く韜晦せり、本戦闘においてわが方監視艇一隻沈没、陸上施設に軽微なる損害を蒙り、数名の死傷者を生じたり。

大鳥島に出撃したる敵艦隊は航空母艦を中心に巡洋艦、駆逐艦を随伴したもので、明かに米海軍の航母集團であつた。同島は敵航空母艦の放つた敵機数十機の來襲をうけたが、同島をまもるわが海軍陸戦隊は陸上砲台をもつて猛攻、砲火をつるべ打ちにあびせ、遁走せんとする敵艦隊追撃に移つた海鷲の猛爆撃に協力して敵艦三隻に大損害を蒙らしめた。すなはちわが海軍部隊の反撃は敵出動の企圖を微塵に粉砕し、赫々たる戦果を收めたもので、敵の大損害に対しわが被害はまことに軽微なものであつた、これは敵の戦闘意識の低いことを如実に物語るものである。

航母集團による遊撃戦法はまづ一月十二日ハワイ西方洋上にレキシントンを中心としてわが本土を窺つて出動中をわが潜水艦に発見され、魚雷二本を喰つて一瞬間に撃沈されてしまつた。越えて二月一日、マーシャル群島附近に航母、甲巡駆逐艦などがあらはれたが、わが海軍部隊に反撃され、甲巡一は大火災を起こし、飛行機十機を撃墜されて姿を消した。二十一日またしてもニューギニヤ東北方海上に航母集團があらはれたところを直に発見され、マーシャル群島の戦闘以來待ち構へてゐたわが海鷲は一斉に飛び立つて、猛襲また猛襲、凄絶な体當り戦法で敵母艦を沈没せしめた。それから三日目の二十四日朝、大鳥島に敵航母は四度び出撃、わが地上砲台と航空部隊の猛攻をあびて敗退した。

南鳥島來襲の米空軍を反撃

大本營発表（三月五日正午）三月四日未明、敵機約三十機、南鳥島上空に出現、われ直に反撃を加へ、敵機七機を撃墜、内戦約一時間にしてこれを撃退せり、本戦闘においてわが方建物一棟炎上、死傷八名を生じたり、（註）敵機は未だ直接わが本土に出現せざるも今後一層警戒を要する狀況にあり

南鳥島は、本州の南方約二千キ、小笠原島の東方約千キロの洋上にある孤島で周囲十三キロの小島に過ぎない、二月以來敵は大東亞海における徹底的敗戦を糊塗するため航空母艦集團による出撃を續けしきりに太平洋上に出没、その都度わが海軍部隊によつて撃退されてゐるが、それにも性こりもなく出撃して來たのは蘭印諸島を遂く失ひ、西南太平洋聯合艦隊全力を完全に覆滅せられたる醜態をお

ほゞ自國宣傳の言にせんとしたものであることは明かで、わが方の損害は発表にもある通り極めて軽微で敵は却て大損害を受けて遁走した。

英機病院船朝日丸を爆撃

大本營発表（三月三十日午後四時）帝國病院船朝日丸は三月二十六日午前七時、チモール島クーパン湾を単獨航行中、突如英國所屬の飛行機一機の爆撃をうけ、爆弾五個同船左舷後方六百メートルに炸裂せり、當時同船の二浬圏内には他に船舶なし。同船はジュネヴ條約の原則を海戦に應用する原則にもとづき船名および船型を敵國政府に通告ずみの病院船にして、條約所定の塗粧および標識を施しある外、対飛行機用標識として最上部甲板および後部電信室上部縦横六、五メートルの赤十字旗を描き、併せて後甲板に縦横六メートルの赤十字旗を展張しあり　當時の視界は良好にして上空より一見して病院船なること明瞭なりしにかゝはらず、英國飛行機は條約にみとむる病院船の保護を無視し甚だしき不法行爲を敢てせるものなり。

朝日丸は総トン数九、三二六トン、日本郵船の所屬船で支那事變以來病院船として活躍してをり、すでに列國に署名なものである。同船は明治四十五年一月十二日ヘーグで締結された『ジュネヴ條約の原則を海戦に應用する條約』に本づきすでに船名並びに船型を敵國政府に通告ずみであり、かつ條約に定められた塗粧を施し、船体は白色に、中央部に幅一メートル半の緑の線を描き、船腹に赤十字の標識を施してゐる外、甲板には飛行機用の赤十字標識あり、大赤十字旗をも展張し、國際法上における手續は万全であつた、當時の視界は一万メートル先をも見透し得る良好なものであつて、視界不良のため病院船を誤認したといふやうな弁を許さぬ状態であり、加ふるに當時同船の周辺二浬圏内には一隻の影もなし、他の軍事目標を爆撃したあふりが同船に及んだといふやうな抗弁の余地なく、あらゆる点からみて、敵が國際法を徹底的に無視し單獨航行中の保護なき病院船を明確な故意に本づき攻撃しアングロサクソンの非人道性を世界に暴露したものである。さきに一月十日支那海で敵潜水艦が病院船ハルビン丸を攻撃したその記憶も生々しいのに今また敵は彼等が従來ことごとに金科玉條としてゐた國際法遵守を蹂躙の如く投げすてて再度の暴挙を敢てしたことは敢戦に喘ぐ敵の焦躁ぶりを暴露する以外の何物でもない。次は病院船朝日丸が爆撃された実情を語る乗組員称賛の実見談である。

わが海軍病院船朝日丸が目さすチモール島クーパン湾に入つたのは去月二十六日朝七時半過ぎで、朝飯を終つた乗組員達は、甲板に上つて爽かな朝の空気を満喫しながら次第にハツキリと姿を現はして來るクーパンの街の有様を眺めてゐた。長い旅路の終りに近づく喜びに船足も軽く、見る〳〵街の家屋が大きく浮び出て來る。この時船尾の遠か後方雲の中から飛出して非常な快速力で真つすぐに近づいて來る一台の飛行機が見えた。高度は低い、少しのためらふやうな氣配もなくグン〳〵近づいて來る『曇軍の飛行機だ』『限りない嫌もしさだ』と心強さに一同伸び上るやうにしてその姿に見いつてゐるうち、その型が、その爆撃が曇軍の飛行機と異なつてゐることに気づいた。あつ！ロツキード機だ。不吉な予感がさつと全身を走る。しかし船は病院船だ。國際法に規定する

赤十字の標識

は明示してある。高度はわづかに五百メートルぐらゐ標識は完全に見えるはずだ。その上周囲に他の船がゐない。不法な攻撃を受けるはずはないと考へた瞬間、パラ〳〵と黒点が飛行機の機体を離れて船尾からわづか百メートルばかりの近くに五、六本大爆音とともに水柱が立ちあがつた。しかも敵機は悠々と船尾から船首へと斜に横切つて飛んでゆく。われに防禦砲火のないことを知る敵は依然として高度五百メートルを離へない。両翼方向翼に付した赤や青のイギリス帝國機の標識、さらに搭乗員の顔もハツキリ見える、人道上許すべからざるこの暴虐、小銃一つ持たぬ病院船として、かゝる暴行に対しても一矢も酬ゆることは出來ない。一同は危険も忘れて甲板上に地團駄踏みながら前方の雲の中に隠れて行く敵機を睨むばかりだつた。しかし驚愕のやうな敵機の拠戦はこれだけでは終らなかつたのだ。翌二十七日朝から降つてゐた雨が夕方から晴れ上り、また空のあちこちに残る雲が美しく輝き終らうとしたころ、そして満月近き月がほの白い姿を現はした午後七時半頃だつた。雲のきれ目から三機編隊の敵機が突然急降下に近く襲降りて來た。このとき恰度船橋に立つて陸般の指揮に當つてゐた病院長〇〇海軍軍醫大佐は病院船の碇泊地に近い陸上から赤や青の火箭が怪しい光を放ちながら打上げられるのを認めた。敵機が襲來するとき、陸上から火箭をあげてこれを誘導することがあるとかねゝ〳〵注意されてゐたのをとつさに思ひ出した院長は、直ちに総員退避を命じた。そして院長自身も主た船橋から中甲板まで駆け降りた瞬間、轟然響渡してある船体がぐら〳〵と不氣味な衝動をうけた。はつと息をのみ倒れんとする身体を踏んで立つた瞬間、船尾をわづかに離れた水面に猛烈な火煙と水柱が高く上げられるのがちらつと眼に映つた。天佑、再度の爆撃も間一髪免れ得たのだ。

米機本土に來襲

この詳細に関しては二十日大本營より左の通り発表された。

『四月十八日未明航空母艦三隻を基幹とする敵部隊本州東方洋上遠距離に出現せるもわが反撃をおそれ散へて帝國本土に近接することなく退却せり、同日帝

都その他に來襲せるは米國ノースアメリカンB廿五型爆撃機十機内外にして各地に一乃至三機宛分散飛來し、その殘存機は支那大陸方面に遁走せるものあるが如し、各地の損害はいづれも微めて軽微なり』

この敵側の卑劣暴虐なる行爲に関し防衛司令部参謀長小林少將は『彼等は軍事施設を殆ど爆撃することなく、無辜の民衆に対する爆撃を行ひ、その暴戻は誠に憤むべきものがある』と発表して米の非人道的態度を天下に公表した。

また敵機が帝都上空に來襲した数時間前、十八日未明、航空母艦三隻を主力とする敵艦隊が本州東方洋上に出現したことが明かにされた。敵海上部隊は航空母艦の外巡洋艦、駆逐艦を随伴したもので、すでに数度太平洋上のわが占領地域附近にあらはれ、その度に撃退されてゐる航母集團であることは明かである、米本土の太平洋岸はわが潜水艦の活躍するところとなり、南は濠洲、西はインド洋に至るまで洋々たる海域にわが海軍に制覇せられた敵海軍が何らかの反撃態勢に出なければ國内に対して弁解の余地ないところであらうし、反撃に出るには主力艦はなしといふ現状でゲリラ戦に出づるほか方途のないことは自明の理である。今回の相當有力な勢力をもつてする航母集團の出現もかゝる意圖から出たことは想像に難くないところである。敵海上部隊の出現に、わが海軍、航空部隊は逸早く出動したが、敵の所在は洋上遥か至遠距離にあり、艦上より航空部隊を発出せしむると共に反轉態勢をとつて遁走した。敵本國の出撃は航母三隻を出動せしめてゐる点よりみて、さきの大鳥島、南鳥島の來襲に比して遙に強力なものであつたが、これは敵の從來の出撃がわが海軍部隊の反撃にあつて悉く失敗した敗戦の事実に鑑み、全力をすぐつたものと想像され、今回の出撃に対する敵の期待は相當大なるものがあつたと思はれる、一方わが本土に來襲した敵機は僅か十機内外で、わが空地両航空部隊の活躍と沈着冷靜な國民の協力によつて損害はきはめて軽微なものにすぎず、眞相判明と共に敵の焦躁ぶりは一段と増すであらうが、敗戦糊塗に躍起の敵が今後もかゝる企圖に出ることは考へられ、より固い國民の覚悟が要請された。

十八　珊瑚海海戦

大本營発表（五月八日午後五時二十分）ニューギニヤ島方面に作戦中の帝國海軍部隊は五月六日、同島南東方珊瑚海に米英聯合の敵有力部隊を発見捕捉し同七日これに攻撃を加へ米戦艦カリフオルニヤ型一隻を轟沈、英甲巡キヤンベラ型一隻を大破し、英戦艦ウオスパイト型一隻に大損害を與へ、更に本八日米空母サラトガ型一隻および米戦艦ウオスパイト型一隻を撃沈し目下尚攻撃続行中なり

（註）本海戦を珊瑚海海戦と呼稱す

マンダレー、ラシオの占領、コレヒドール要塞の陥落とビルマ及びフイリツピン戦線における皇軍部隊の豪快なる戦果に、國を挙げて歓喜あがる時、更にまた海軍部隊の珊瑚海々戦の雄渾極りなき偉勲が報ぜられ、銃後の感激は火の如く燃ゆるばかりである。

大本營発表（五月十二日午後四時三十分）五月七日、八日珊瑚海海戦における綜合戦果左の如し

一、艦艇　米空母サラトガ型一隻撃沈、米戦艦カリフオルニア型一隻轟沈、米戦艦ラ型一隻大破、巡洋艦（艦型不詳）一隻大損害、駆逐艦一隻撃沈、給油艦（二万トン級）一隻大破

二、飛行機＝九十八機撃墜

三、我方損害＝小型航空母艦（給油船を改造せるもの）一隻沈没、飛行機三十一機未帰還

海軍航空部隊の勇戦を御嘉尚

大本營発表（五月十二日午後五時）大元帥陛下には本日海軍幕僚長を召させられ聯合艦隊司令長官に対し左の勅語を賜はりたり

勅　語

聯合艦隊航空部隊ハ勇戦奮闘珊瑚海ニ於テ大ニ米英聯合ノ敵艦隊ヲ撃破セリ朕深ク之ヲ嘉尚ス

珊瑚海に敗残の米英艦隊を急追中であつたわが海軍部隊のその後の戦果につき大本營より翌九日左の如く発表され相次ぐわが海軍の完勝に神経を麻痺した世界をして、余りにも一方的な戦闘にまたまた驚歎これ久しうせしめたのである。

大本營発表（五月九日午後三時四十分）珊瑚海方面に於て攻撃続行中の帝國海軍部隊は更に巡洋艦一隻（艦型不詳）に対し雷撃機の体當りを以てこれに大損害を與へ、又駆逐艦一隻を撃沈せり、一方七日以來彼我上空に於て敵機八十九機を撃墜せり、この間我方小型航空母艦一隻沈没、飛行機三十一機未だ帰還せず

（註）沈没せる小型航空母艦は給油船を改造せるものなり

二回にわたる大本營の公表により珊瑚海々戦の輪郭が次第に明かとなり、実にハワイ海戦以來の歴史的大海戦であることが深く印象づけられた。

敵米英聯合艦隊の編成はなほ明かではないが、ハワイとオーストラリア及びニユージーランドを結ぶ南太平洋方面においてなほ蠢動の余地ありと考へたる敵がアメリカ航空母艦の中でも最も精鋭を誇つたサラトガ及びヨークタウンの両空母を一隻に出動せしめ、これに米英二主力艦ならびに巡洋艦、駆逐艦などの多数艦艇を配するといふこれまでにない強力な新しい空母集團陣型で出撃して來たのである。

わが海軍部隊はこの有力なる敵聯合艦隊を珊瑚海に発見捕捉し、これを撃滅したのであるが、この間わが方にも小型空母一隻、飛行機三十一機といふ開戦以來單一の海戦においては曾つて見ざる損失を記録したことを以て見ても、この大海戦が如何に壮絶にして、またわが必殺の総攻撃が熾烈であつたかを如実に示してゐる。戦闘の経過はなほ明かにされないが、発表により推測されるところによれば海戦は先づ彼等それぞれ母艦を飛立つた航空兵力を以て開始せられ、華々しい大空中戦を展開し、敢て体當りを辞せざる烈々たる闘志において、見敵必殺の術力において敵を圧するわが海軍は敵空軍を撃滅して艦隊主力に迫りこれを撃撃したものであらう。わが海軍が撃墜した八十九機と共に、二隻の敵空母の艦載機は母艦と運命を共にし敵航空勢力はこゝに全滅したことを意味し、わが空軍の先制の勝利がこの大戦果をもたらしたことが明かである。戦力の差は彼我損失の数字に

よつて示されてゐるが、驀撃された敵機八十九機のうち六十一機は敵上空、二十八機はわが上空で屠られたことを思へば、闘志と術力との懸隔が如何に甚しいか、容易に推測し得らるゝであらう。凡そ近代海戰において航空兵力が殆ど死活的重要性をもち、その强弱が勝敗を左右することに想到すれば、珊瑚海々戰の勝利は近代海戰における帝國海軍の威力を如実に示したものとして、極めて意義深きものがある。

覆滅した敵艦の性能

サラトガ　一月ハワイ海上でわが潛水艦に撃沈せられたレキシントンの姉妹艦、米海軍最大の航空母艦として米海軍が映畫に、寫眞に强がりの宣傳材料に使つてゐたので馴染み深い航空母艦である。元來レキシントンと共に一九一六年計畫の巡洋戰艦コンステレーション級六隻の中に計畫建造されたが、ワシントン軍縮會議の結果空母に改裝せられた、排水量三三、〇〇〇、速力三三・九ノット、一九二七年十一月竣工した。飛行甲板はとくに厖大で全長二七六メートル、幅三二・三メートル、人員は二、一一二名搭乘出來、七千トン以上の重油を積載航續力に優れ、搭載機數は八〇乃至九〇機、戰時は一二〇機まで搭載可能といはれてゐる。

ヨークタウン型　米の最新鋭中型航空母艦で艦載機は常時八〇台、戰時には百台となし得る。サラトガ級に比し艦型は小さいが空母としての戰時性能は殆ど優劣なしといはれてゐる。排水量一九、一〇〇トン、速力三四ノット、飛行甲板は全長二四六メートル、幅三三メートル、サラトガ、ヨークタウン両艦とも艦橋が甲板の片側に設けられてゐる島型（アイルランド型）である、同型にエンタプライズがある、乘員は二、〇七二名

カリフオルニヤ型　は排水量三二、六〇〇トン、速力は二一・五ノット、主砲は三五・六サンチ十二門、同艦型に屬する戰艦はカリフオルニヤ（一九二二年九月竣工）テネシー（一九二〇年九月竣工）の両艦で、このうち一艦は開戰劈頭にハワイ海戰で撃沈されたので、これで同艦型はすつかり影り去られたわけである。カタバルト二基、水上機四台を有し、乘員は一、四八〇名

ウオスパイト　同型にヴアリアント、クイン・エリザベスがあり排水量三〇、六〇〇トン、速力二五ノット、主砲は三八サンチ八門、一九一二年起工、一九一五年竣工した。一時地中海艦隊の旗艦としてカニンガム提督が坐乘してゐたことがある。竣工後二回の改裝を經てゐる。昨春地中海で損傷をうけ、一たんシンガポールに入港したが、傷ついたまゝ出港米國太平洋岸の某港で修理中であつた。タイ佛印國境紛爭にはシヤム灣を游弋してタイに示威したこともあつた。その後、修理なつて米海軍の太平洋艦隊に加へられ行動してゐた、乘員は一一二四名乃至一、一八四名

キヤンベラ　は一九二八年七月竣工した甲級巡洋艦で濠洲海軍に屬してゐた。基準排水量は一〇、〇〇〇トン、速力三一・五ノット、主砲二〇サンチ八門、その他小口徑砲廿六門、五三サンチ水雷発射管八を有してゐる。乘員は六七九名である。

十九　支那戰局の進展

聖戰茲に第六年、昭和十二年夏七月七日、日本が抗日支那軍を相手に戰火を交へて以來、我らの胸搏つものは支那事變が年を逐うて世界史的意義をいよいよ濃化して來るといふことである。現在支那大陸の空、陸、海に互つて皇軍は抗日勢力への殲滅的作戰を繼續してゐるけれども、日本の意思は飽までも領土的野心なく、また賠償の要求をも伴はないことは帝國屢次の聲明によつて明らかなる如く、実に支那國民が欧、米依存の迷夢より覺めて、眞に日本と提携し、東亞の安定に邁進することをひたすら念願するにほかならない。かくてこの支那事變が聖戰と呼ばれ、東亞新秩序の建設が戰爭目的として宣示せられた所以である。幸に日本の眞意は次第に支那國民の腦裡に共感を呼び、この目覺めゆく支那大衆の東亞保衛の理念は新國民政府の樹立となり、政治部門における建設の巨歩が踏み出されて着々とその実績があがつてゐることを銘記しなければならない。

支那事變が建設的工作を完遂してゐる反面に今日なほ大陸には軍事的行動の激烈なる破壞工作が敢行されつゝある事実の中心は何であるかと檢討すれば、まづ蔣介石の指揮下にある重慶政權であるが、五年の長きに亙つて抗戰し得るのは実に彼らの背後に英米その他敵性國家の一群があるからである。

支那事變より大東亞戰爭へ

しかるところ帝國は、この米、英両國を打倒し、大東亞の地域に『共榮共榮』の理想的新秩序を建設するため昭和十六年十二月八日堂々米英両國に対して宣戰を布告するとゝもに、大東亞地域の安定勢力としての帝國の大理想を簡明直截に表現するため『大東亞戰爭』とする旨を発表、過去四年有年に亙つて遂行された『支那事變』も大東亞新秩序建設のため米、英両國の傀儡化した重慶政權の打倒を目指したものであり、その目的は今次の対米、英戰と同一であり、その本質も異るところなく、從つて『大東亞戰爭』の名の下に含められることになつた訳である。

重慶の動搖混亂

果せるかな大東亞戰爭勃発と同時に皇軍が獲得した赫々たる戰果は、重慶政權内部の親米、英思想を極度に減殺し、共產党は重慶政權の親ソ派放任を非難し、また林森を中心とする重慶國民党元老派並に知日派何應欽、親獨伊派陳立夫兄弟、張治中などの間に湧然として対日和平論が擡頭し蔣介石を惱ましつゝあるといふ事実も傳へられ、一方米、英よりの援助を期待することが全く不可能となつたため今後はソ聯に物資の援助を齎るべく前駐ソ大使立派するなど米、英と一味徒党の重慶は俄然周章狼狽その極に達したのであつた。

一方在支米、英權益も今や全く皇軍に摺伏して背日の面影なく、大東亞戰爭の進展に伴ひ香港、ビルマルートなど相次で潰滅し、重慶の抗戰繼續力はいよ〳〵衰微し、反蔣和平氣運、あるひは第一線將領の背反など、重慶内部に一大混乱を生じつゝ奥地支那に余喘を喘る重慶政權は今後極めて粗野なるゲリラ軍隊を指揮してのみ抗戰態勢が可能なだけである。しかしビルマ・ルートに代るインド・ルートの発見は英、米との連絡動脈を設定せんとする重慶に唯一残されたる輪血路であるが、これとても実際は非常に困難なる公路建設によらねばならぬからビル

マ・ルートの喪失は重慶の崩壊に更に拍車をかけることとなつた。

かくて支那事變では無數の大作戰を續行したが、その戰果が今次の大東亞戰爭をして磐石の安きに置いたこと、重慶の防衛力は甚だしく弱化したが、さらに抗戰力においても著減したこと、北方においてはこの情勢を前にして有事即應の態勢を完備し、北辺の護りはまさに鉄壁であることなどは、蒙疆二万キロの戰線に日夜活躍してゐる我が忠勇なる皇軍の奮戰によつて確得されたる貴重なる大戰果である。

つとに全支の中樞を制し、敵を錯亂に陷した支那派遣軍はその作戰目標を敵中央軍の撃滅に指向し、一ケ月平均二千回以上に及ぶ大小の作戰を敢行したのである。この默々たる勇戰、奮闘こそ実に今次大東亞戰遂行を磐石の安きに置く確固たる根基となつたといふべきであらう。

重慶戰力の破摧

ここに今事變第五年（昭和十六年三月までの戰局は前輯登載）第六年に亙る皇軍の大戰果と、若干建設工作につきその大要を記し特に軍大作戰と大東亞戰爭勃発以後の戰局に就てはやゝ詳述することにした。

元來、重慶側を壓倒し、聖戰目的を完遂するためには政略、戰略上の各種施策を必要とすること勿論であるが、就中敵の戰力破摧と封鎖の强化とに主たる努力が拂はれてゐる。故に昭和十六年四月以降の各作戰行動においてもその主たる目的はここに置かれたのである。即ち同年五月の中原作戰、九月の長沙作戰、同じく九月の沁河作戰などは敵の戰力撃摧のため決行されたる主要作戰であつた。

五月中旬より行動を起した北支軍は企圖を祕匿しつつ急襲的に山西省南部中條山脈に蟠踞する約二十万の正規軍を各方面より完全に包圍し これを悉く殲滅した。この中原作戰と並行して同時に行はれた江北作戰は所謂助攻作戰で河南省の敵を撃破して中原作戰の成果をいよ〳〵大ならしむるに與つて力があつた。

かくして山西省南部の敵正規軍約二十万は中原作戰において完全に殲滅されたが、その後沁河河畔に共產軍および敵第九十八軍が潜入したのを北支軍は神速果敢なる行動により九月二十二日にはまづ共產軍を、次で二十七八両日には第九十八軍を完全に包圍して敵軍長、師長以下を捕虜とし敵を完全に撃滅して中原作戰の戰果をして更に擴大せしむるところがあつた。

さらに北支においては治安の癌として久しく山西、察哈爾、河北三省境の山岳地帶に余喘をかゝる共產軍根據地覆滅のため八月中旬より行動を開始し十月十日に至り作戰を終了した。

中支軍は長沙附近の敵に対し昭和十六年九月十八日作戰を開始するや疾風迅雷三百キロに亙る嶮嶮を利用する數線の敵陣地帶を突破して敵を寸断し、或は包圍して敵の大兵團を潰滅し、且つ甚大なる損害を與へつゝ長駆して同月二十七日には長沙に、二十八日には株州に進出した。この約十日間に亙る作戰により完全に作戰目的を達成したので、軍は十月一日より反轉して原態勢に復し錄を納めた。この長沙作戰に呼應し廣東北方地區において南支軍は同地附近の敵を痛撃した。また北支軍の一部は十月二日拂曉とともに新旧黃河分流点附近より黃河を渡河し、同月四日には早くも鄭州を占領し附近の敵を潰滅し、十月末原態勢に復したが、本作戰も中支軍の長沙作戰に策應したものである。

封鎖强化と清郷運動

また四月下旬より海軍との緊密なる協力のもとに浙東地方及び福州附近に行はれた浙東作戰、福建作戰は我が聖戰の遂行を妨害するために狂奔しつゝあつた第三國の援蔣行爲に本づく補給を遮斷する目的をもつて行はれた作戰である。

中支揚子江下流三角地帶に於て昨年七月初頭より清郷工作を開始し九月二十日その第一期を終了し引つゝき第二期工作、目下第三期工作実施中であるが、本工作において我が軍の統一指揮の下に日華両軍がまづ武力による清郷を行ひ匪團と民衆とを分離し、そこに國民政府がその理想とする政治を樹立する方式をとるものでその成果は着々と擧つて大なるものがある。

昭和十六年の戰局

支那事變第五年（昭和十六年）の戰闘を一覽すれば左の如し（但し前輯々錄以後）

（一）蘇北作戰（中支江蘇省北部北＝二月中旬より三月上旬）交戰兵力約五万、遺棄死体三千（内溺死八百）捕虜九百九十、鹵獲火砲十五、重軽機三十四、小銃二千九百、資艇三、棉花三千擔、塩三百五十四トン

（二）晋南作戰（北支山西省南部＝三月上旬より三月中間）交戰兵力約五万、遺棄死体四千二百、捕虜二百七十、鹵獲火砲十、重軽機五十三、小銃八百十三

（三）淮南作戰（中支安徽省東部＝三月上旬より三月中旬）交戰兵力約二万、遺棄死体三千五十、捕虜五十、鹵火砲一、重軽機十七、小銃四百八十七

（四）錦江作戰（中支江西省中部＝三月中旬より四月上旬）交戰兵力約七万、遺棄死体八千九百、捕虜七百五十四、鹵獲火砲十二、重軽機四十、小銃千二百

（五）太湖西方作戰（中支、江蘇、安徽、浙江省中間地區＝三月下旬）交戰兵力約五万、遺棄死体二千五百、捕虜二百、鹵獲火砲三、重軽機三十、小銃五百

（六）甬東作戰（南支廣東省東部＝三月下旬）押收援蔣物資鉄鑛類一万トン、油六千罐、綿布一万三千梱など

（七）浙東作戰（中支浙江省四月中旬より五月中旬）交戰兵力約十万、遺棄死体九千五百、捕虜千三百六十、鹵獲火砲三十一、重軽機百五十六、小銃四千三百、トラック、客貨車等九十二、レール七千本

（八）福建作戰（南支福建省東部＝四月中旬より四月下旬）交戰兵力約二万、遺棄死体千三百、捕虜五百六十七、鹵獲火砲四十五、重軽機四十五、小銃九百、油類五千罐

（九）中原作戰（北支山西省南部＝五月上旬より六月中旬）交戰兵力約二十五万、遺棄死体五万、捕虜三万一千、鹵獲火砲百七十七、重軽機六百五十七、小銃一万

（一〇）江北作戰（中支湖北省東部＝五月上旬より五月下旬）交戰兵力約六万、遺棄死体七千、捕虜三百五、鹵獲火砲七、重軽機七十五、小銃千五百

（一一）東江作戰（南支廣東省東部＝五月中旬）交戰兵力約二万、遺棄死体二千、捕虜八百、鹵獲火砲二、重軽機小銃四百二十

（一二）冀東作戰（北支河北省東北部＝五月上旬より六月上旬）遺棄死体千五百、捕虜百、鹵獲軽機小銃八百

（一三）第一期清郷工作（中支江蘇省南部＝七月上旬）遺棄死体三百、捕虜二千五百、帰順八千五百鹵獲火砲六、軽機小銃六百

（一四）新四軍掃蕩戰（中支江蘇省北部＝七月下旬より八月上旬）遺棄死体千

七百十、捕虜二百二、投降八百、鹵獲火砲軽機小銃等七百、押收物資多數

（一五）宜昌西北及澧江南方作戰（中支湖南省南部＝七月下旬より八月上旬）

遺棄死体四千

（一六）晉綏寧辺區肅清作戰（北支、河北、山西省＝八月中旬より十月上旬）

交戰兵力約五万、遺棄死体六千、捕虜三千五百、鹵獲火砲五、軽機五十、小銃二千百

（一七）江南反擊作戰（中支江蘇、安徽、浙江省＝八月下旬）　遺棄死体約二千

（一八）長沙作戰（中支湖南省東部＝九月中旬より十月上旬）　交戰兵力約三十万、遺棄死体八万、捕虜八千三百、鹵獲火砲百五、軽機千五百、小銃一万三千七百

（一九）北江、西江作戰（南支廣東省＝九月中間より十月上旬）　交戰兵力約五万、遺棄死体六千三百、捕虜投降七百、鹵獲火砲四十、軽機五十六、小銃二千五百、油類一万五千罐

（二〇）博西作戰（山東省中部＝九月中間より十月初間）　遺棄死体三百、捕虜七百

（二一）沁河作戰（山西省南部＝九月下間）　遺棄死体二千、捕虜五千、鹵獲火砲十、軽機百三十、小銃千二百

（二二）鄭州作戰（北支河南省北部＝十月上旬より十月下旬）　交戰兵力約十二万、遺棄死体五千、捕虜三百二十八、鹵獲火砲五、軽機八十

（二三）魯南掃共作戰（北支山東省南部＝十月下旬より十一月）　交戰兵力二万千七十、覆滅せる敵側施設兵器車六、被服庫二、共產學校一、糧秣庫三、遺棄死体千六百五十四、捕虜三百二十九、鹵獲小銃千八百九、小銃彈一万五千七百、手榴彈十万二千

中原大作戰

黃河を渡り北岸に進出した敵は、第一戰區司令官衛立煌の指揮する第五集團軍、第十四集團軍、第九軍など總計約二十數箇師、總兵力約二十万と見られ、黃河を背後に標高一千メートル以上の山地帶に防禦陣地を占領してゐたが、この方面の敵は事變以來、皇軍が數度の蹂躙、ことに昭和十五年春の晋南作戰によつて大打擊を被つたにもかゝはらず、この地帶の確保に必死となつた。といふのはこの地帶が北支擾乱の策源地であるため『黃河を死守せよ』との賜の厳命であつたからである。

この敵を一擧に捕捉殲滅すべく、我が北支軍は昭和十六年五月七日日夜より一齊に攻擊の火蓋を切つたのである。本作戰の構想はまさに北支においては徐州戰以來の大作戰であつた。

我が軍は速やかに敵の退路を遮断し、次でこれを完全に包圍殲滅せんとする計畫作戰の下に敵第五集團軍約十箇師を黃河北岸において九日正午までに完全包圍した。一方、我が左翼方面の敵第十四集團軍に対する果敢なる戰闘は敵の頑强なる抵抗を排除しつゝこれまた袋の鼠となつた。

また沁陽本地方面においては同十一日正午ごろ西方より前進した友軍と相會し、敵第十四集團軍に対し完全なる包圍体形を完成した。

かく我が軍の黃河渡河南進を恐れた衛立煌はにはかに豫南地區から湯恩伯集團軍の北上を命じて我が進擊に備へたが秋すでにおそく河北約二十万の敵はこゝに文字通り潰滅に瀕した。作戰行動を開始して以來旬日にして蔣が總反抗の春季大抗戰も、我が忠勇なる將兵の奮闘によつて徹底的に覆滅された訳である。

本作戰における戰果は次の如く大なるものがある。遺棄死体五万（師長一名を含み戰死を確認されたる軍長、參謀長各一名）捕虜三万一千（師長、副師長各二名などを含む）

東江作戰

さきに我軍が占領した香港ルート奪回のために南下、惠州を中心に集中した敵に対し我が軍は陸海両方面より包圍作戰を敢行した。即ち昭和十六年五月十一日南支石龍、增城、深圳墟方面及び海上から前進した我が軍は敵を撃破しつゝ前進、同十四日敵を惠州附近に包圍した。包圍圈を脱出する敵に対しては協力中の飛行隊が猛爆を加へ大なる損害を與へた。

冀東作戰

北支冀東小岳地帶に蟠踞して後方の治安を攪乱し北支治安の癌をなしてゐた共產系冀察挺身軍（軍長李雲漢（を主力とする麾下第十一團豊總貴第十二團陳謨、第十三團包森の約五千の敵軍に対し我が諸部隊は昭和十六年五月二十六日以來逐次行動を起し聞鐵の火蓋を切つたが、同三十一日包圍網を完成した。

本作戰は濟洲國熱河と北支とを結ぶ赤色兵站ルートを遮断するとともに、後方の治安攪乱を企圖する執拗きはまりなき共匪軍を駆逐し、冀東地區の一般民生を向上せしむるために多大の戰果をあげた。

また冀中北部地區に蟠踞して道路、通信網を破壞するなど、治安攪乱に執拗なる蠢動を續けてゐた朱占魁を團長とする共匪三千に対して徹底的鉄槌を下すべく我が諸部隊は六月十八日より逐次行動を開始し、齊所に捕捉殲滅戰を敢行した。

朱占魁匪は昭和十三年以來白洋淀附近地區に横へ、我が數次の討伐にも巧みに逃亡し、余命を保つてゐたものであるが、匪團員は附近村落から徴発してゐた關係上、附近の居住民と密接な連絡をとり、地理にくはしく、鄙すれば便衣に着替へ、我衣を地中に埋め農民化するため本作戰遂行上その捕捉に非常な困難を極めた。

晋察冀邊區作戰

北支における八月中旬より十月上旬に及ぶ北支共產軍の根據地覆滅作戰ともいふべく、交戰兵力実に七万の敵大兵であつた。すなはち京漢線、石太線、粛寧間の地區で共產軍の大掃蕩戰は單に敵を掃蕩するに留まらず、徹底的に敵の巣窟を覆へし、再び起つ能はざらしめるために行はれたばかりに作戰は極めて地味であり、宿營休養の便が少しもない奥地にあつて山猿の如き共產軍相手の戰闘であつたゝめ、參加將兵の勞苦は察するに余りあるものがあつた。

本作戰において次の如き二つの結論を得て共產軍の弱点を暴露したことは注目すべきことである。即ち

（一）敵の遊擊根據地ともいふべきものは敵側の豪語する如く大したものでなく、辺區建設といふも悉く日本軍のため脆くも崩潰し去つた。

（二）敵の空室清野の政策も我が軍の速進速退の場合は一應出來るが、今次作戰の如き長期戰の場合は失敗に終り、民心離反その極に達し、糧食を抱へて逃げられなかつたために彼らの政治工作の狡猾を露呈した。

長沙作戰

湖南作戰は敵第九戰區を主力とする敵三十余箇師、約六十万

といふ大軍を完膚なきまでに壞滅するの畫期的大戰果をあげ、支那事變戰史に燦たる一ページを飾つたが、この作戰の成果として特筆すべきは

(一) 重慶をして武力抗戰の望みを失はしめたこと

(二) 重慶防衛の最重要關門たる長沙方面の防備戰潰滅によつて抗日陣營に多大の精神的衝擊を與へたこと

の二点である。潰滅されたる三十余箇師のうち中央直系軍が十四個師をかぞへ重慶中央直系軍總數五十八箇師のうち約四分の一は殆んど再起不能にまで叩きのめされた訳で、このみじめな敗戰は重慶の武力抗戰の前途に一大暗影を投じたこと必定である。なほまたかの最精鋭といはれた七十四軍は完全に覆滅されたことは蔣介石がいかに建軍工作に躍起となり抗戰建國を呼号するも所詮は無駄であることを明瞭に実證したものとして重慶軍首腦部は勿論、一般軍官民に深甚なる反省を强いずにはおかなかつた。さらに蔣介石が米、英の援助により空軍の擴張に努めつゝあつた矢先、その空軍が全く実戰の用をなさず、しかも一機が投降し來るなど、その弱体振りが本作戰で暴露されたが、これによつて蔣政權の空軍擴張計畫に一大挫折を來したことは明かに看取された。

なほ本湖南作戰開始以來、我が荒鷲精鋭部隊は連日湖南戰場を縱横に馳り地上作戰部隊に密接に協力し、空陸一体戰の使命を発揮し、敵陣營を震撼せしめたが、その空軍戰果は左の如き赫々たるものがあつた。

▽出動回數、五百三十回▽攻擊せる敵兵力六万四千▽確実に破壞したる敵軍用列車三十八輛、船舶五百三十隻▽攻擊破壞せる敵根據地、長沙、株州、劉陽、永安、平江、閔王橋、水口橋、馬鞍鄉、福林鋪、水渡寺、上沙市など

鄭州作戰　河南作戰の主要目的とするところは同地一帶の蔣系軍を壞滅し、進行大作戰のため黃河南岸前進據点の確保といふことであつた。軍は昭和十六年十月二日未明黃河および新黃河の奇襲渡河に成功し、猛烈なる敵の抵抗を各所に擊破し、僅か五十三時間にして鄭州を陷落せしめ、以來同地周辺の蔣系敗殘軍の掃蕩に當るとともに、數々の戰果を收めて旧京漢線鉄道を修復する一方、対岸要地に前進基地を構築中であつたが、これが完成を見たので鄭州そのものは現在わが空軍の爆擊と蔣系軍の自己破壞により軍事、政治、経濟いづれの見地より見るもその價値を喪失し、しかも所期の目的を達成したので皇軍は同地駐留の必要を認めず、精鋭語部隊の一部主力を対岸要地に殘し十月三十一日鄭州より撤退を開始した。皇軍の鄭州撤退に際しては、このときとばかり重慶側は同地奪還の戰勝デマをもつて敗戰を糊塗せんとしたが、彼らのデマ報道は上海の米國系評論家すら認めるところであり抗戰末期的症状に過ぎざるものであつた。本作戰において特筆すべきことは新旧両黃河渡河作戰の脅威的成功といふことである。この成功の経驗と旧鉄橋の復活と前岸陣地の確保とにより黃河南北は全く稔讓の地となり、皇軍は第一戰區の正規軍を擊破しここに南岸一帶の死命を制する結果となつたのである。

魯南剿共作戰　山東省魯南の山岳に蟠踞し北支治安の攪乱を企圖しつつあつた徐向前麾下の共產軍二万を一擧に殲滅し、さらに同地帶の共產施設を徹底的に覆滅すべく、皇軍精鋭は十一月五日拂曉一斉に進擊開始、蒙陰、沂水、臨沂の三方面より緊密なる包圍線を形成しつゝ猛攻の火蓋を切つた。

本作戰は昭和十六年六月の冀東、冀中作戰および八月から九月にかけての晉察冀赤色作戰とともに北支の赤色三大作戰とも呼ばるべきものにして、その作戰的重要性は北支治安の最大の癌的存在である山東赤化根據地の徹底的覆滅芟除であつた。徐向前麾下の第十八集團軍の共產軍約二万を初めとし醜種の赤色施設は我本寨源的に剿滅されんとする最後的關頭の運命に立至り、本作戰が現実にもたらした意義としては北支前線赤化基地として延安が最も期待をかけてその再建强化を企圖しつゝあつた重慶赤色廻廊、すなはち河北、河南省附近を起点として南下し安徽、江蘇の北部を迂廻して山東へのびんとする残された北支唯一の赤色ルートが山東の出端において深刻な打擊を被つたことにより、同ルートも全く假死狀態に陷つたことである。

しかして皇軍が帰共作戰を敢行したこの魯南地區は、本地區の天嶮を利用して徐向前軍が根を下し、皇軍占據地外における山東の重慶側勢力の劣弱化に乘じて、着々と赤色地帶を獲得、所謂党軍政三位一体のソ聯機構の下に根强きアミーバ的浸蝕を續け北支治安を攪亂し來たのである。從つて本作戰は赤色抗戰陣營に痛撃を與へる武力戰たる反面において、亦赤色組織の破潰剿共から建設へと三階梯にわたり、経濟政治工作が附隨する特種作戰の相貌を有してゐた。湖南作戰鄭洲作戰の如く花やかな面こそ無かつたが、それだけに事變處理全体の構想において積極的意義を有する作戰として注目された。しかも壓倒的大兵力の行動の反面、これに隨伴する剿共軍、鄉區要人など支那側機関の活発な自治的協力のほか新民會員その他の文化諸工作などが本作戰を特色づけた。

勝利の歴史

海軍部隊の戰果

帝國海軍作戰部隊は陸軍部隊との緊密なる協同の下に極めて最大なる地域に亙り幾多の困難を克服しつゝ勇戰奮闘し、ひたすら戰目的完遂につとめてゐるが、まづ揚子江方面の作戰を見れば河口から約八百浬に及ぶ揚子江上及びこれに連絡する水路の安全確保を主とするもので、所要水域の機雷その他の障害物を排除掃海するは勿論、附近に蠢動する敵兵に対ししば〳〵水上艦艇、陸戰隊及び航空部隊をもつて積極作戰を実施しその撃破に力めた。

その主たるものは昭和十六年九月中旬、陸軍部隊と協同して湖南作戰を実施し、航空作戰、水路啓開、陸軍部隊護導および陸戰隊をもつてする各要地の攻略に任じ、一方江上部隊の作戰は極めて地味なる上に機雷處分の如く大いなる困難と危險とを伴ふ作業が多いにもかゝはらず、中部支那の大動脈たる揚子江の交通の安全を確保し、作戰部隊の後方補給路を維持する重要任務を遂行しつゝある。

沿岸封鎖作戰は全支那二千八百浬の海岸線にわたり、敵側の海上交通を遮断しまたこれに関聯する沿岸諸作戰に任じ終始厳密なる海上監視に當るのみならず敵側物資出入の基地、その他重要なる地点を積極的に攻撃し專ら封鎖の强化に努力した。

すなはち三月初旬には陸軍と協同して廣東州沿岸數ケ所の要地を急襲し、四月には同樣福州攻略作戰並に浙江省沿岸の寧海、寧波その他數ケ所に亙る要地の奇襲上陸を敢行、いづれも敵の據点を覆滅して大なる戰果を收めてゐる。この種上

陸作戰を行つた地点は大小合せて二十數箇所に及び沿岸封鎖の完璧を期した。

航空部隊の作戰は殆んど支那全土を覆つて不斷に敢行され、その中主なるものはビルマ公路その他の西南輸送路及び要地に対する攻撃で、何れも多大の困難を冒し頻繁に反復実施した。特に重慶方面に対しては五月以降しばしば攻撃を加へ、中にも八月中旬の如きは大兵力をもつて一週間のうちに晝夜連續四十回の猛爆を加へ、敵軍事施設その他中樞機関を完膚なきまでに爆砕、惨憺たる窮狀に陷れたのである。かくして今や敵戰意は奥地に喘ぐみにして制空權は完全に我軍に帰して終つた。

以上各作戰のほかに海南島においてはしば〳〵大規模なる掃蕩作戰を行ひ東北地區に蟠居する敵匪の本據を覆滅して多大戰果をあげ島内治安は顯著なる向上を示した。

北支作戰　北支部隊は前年に引續き、その擔任區域の警戒に任じ、密輸ジヤンクの臨檢、匪賊の討伐等に陸軍部隊と協力しつゝあつたが、青島海軍部隊は威海衛において敵の大隊長以下約五百の游匪を帰順せしめた。

中支作戰　中支方面においては揚子江部隊が長江流域八百浬に亘り江岸の残敵を掃蕩し陸所に陸戰隊を揚陸せしめ敵匪の根據をつき、あるひは陸軍部隊を援護して多大の戰果をあげた。しかして我が江上艦艇が舟山列島を中心に出動した敵機雷は四百二個に達し、また鎮江方面の砲艇隊は陸軍の蘇北掃蕩戰に協力して揚子江から高郵湖に通ずる大運河の交通線を確保した。四月十九日未明護衛艦隊は陸軍輸送船團を護送して浙江省沿岸の奇襲上陸を敢行、陸戰隊は陸軍部隊と協力して鎮海城に突入し、水路啓開隊は甬江を遡江、寧波に達した。また福州方面陸隊は

閩江上流の馬尾を占領したが、本作戰は海陸空軍の密接なる協同作戰の下に援蒋捕給路及びその施設を遮斷覆滅し多大の戰果を收め、敵水雷艇、汽艇十余隻と數百個の機雷を鹵獲した。かくて中南支沿岸の主要都市寧波、臺州、温州、福州を完全占領し、續いて浙江沿岸の各要衝に奇襲上陸して敵の密輸路を完全遮斷したが、これより先四月十七日には支那方面艦隊司令長官の名を以て南支沿岸澳門以西南朗島に至る海面並にバイアス灣及び甲子港、神泉方面海面を出入禁止區域とし、次で六月十七日より汕頭附近海門灣、企嶺灣、新林灣、詔安、銅山、浮頭灣などもこれに追加する旨宣言した。

南支作戰　南支海軍部隊は援蒋物資の輸送路として利用された香港路に対して二月四日、敵前上陸遮斷作戰を実施し、三月三日拂曉には陸軍部隊と緊密なる協同の下に雷州半島方面沿岸延長四百キロ以上に亘り奇襲上陸作戰を敢行し多大の戰果をあげた。つづいて五月十二日より行はれた南支陸軍部隊の瓊州攻略作戰に対し、同方面海軍部隊はこれと協力、東江を遡江、陸軍部隊と共に惠陽に入城し、また紅海灣方面陸軍部隊の上陸を援護成功せしめた。

海上封鎖の強化　一方海上封鎖部隊は多大の艱難を克服して全支沿岸における支那船舶の交通を遮斷し、敵性輸送船の禁總並に主要港灣の閉鎖を敢行するとともに占領地域の諸島嶼に蠢動する残敵を掃蕩し、さらに支那方面艦隊司令長官は数次警明を発して中南支要衝海面の船舶出入禁止を强化し海上封鎖の完璧を期してゐる。殊に二、三、四月に亘り中南支沿岸各地に対し封鎖遮斷作戰を実施した結果は敵側及び援蒋國家軍に甚大なる経済的影響を與へた。例へば上海法幣及び香港弗の対英米相場の動の如きは、我が封鎖遮斷戰の强化につれ軍

勝利の歴史

興に対して大なる下落を示し、香港路の遮斷作戰により香港弗の暴落といひ、その他重慶側に與へた経済的打撃と脅威とは豫想以上に深刻なるものがあつた。

以上の作戰は一月より五月に至るまでの概要であるがさらに六月に至り北支運港附近の敵を撃破し、揚子江上における艦艇はその流域三十數箇所に陸戰隊を揚陸せしめ、鎮海方面では舟山列島の敵匪を各多數撃破、帰順させた。また海南島内の完全掃蕩に從ひ、陸戰隊は各地に連日出撃し共產匪、游撃匪など計三千名を捕捉攻撃、大部分を殲滅した。なほ沿岸航行遮斷に從事してゐる艦艇は北支方面三千三百五十一隻、中支方面黄浦江に二万八千七百十三隻、揚子江及び浙東沿岸に二千六百三十七隻、南支方面百四十六隻、海南島附近十七隻計三万五千八百六十四隻のジヤンクを臨檢し、多數の援蒋軍需品を発見處分した。七月に入り艦艇陸戰隊は各擔任領域の警備、水路確保、治安維持に任するとともに揚子江下流における蘇郷工作に協力し且つ海軍砲艇隊は陸軍部隊の新四軍殲滅作戰に協力する傍ら水路を確保し、また艦艇の敵性機動船、ジヤンク臨檢数は北支において三千五百九十四隻、中支において二万二千十七隻、海南島附近において四百隻、その間敵の武器弾薬軍需品など輸送中の約百九十隻を発見しこれを抑留または處分した。一方黄浦江上において約三万九百四十六隻のジヤンクを臨檢し、多數の軍需品を押收、陸戰隊は海南島において約六十回出撃し敵多數を殲滅した。

湖南作戰に協力　沿岸及び内河の航行遮斷、水路の啓開確保に多大の戰果をあげつゝあつた艦艇及び陸戰隊は長江流域十一箇所に上陸殘敵を掃蕩し、また舟山島、台洲列島及び漁山列島に陸戰隊を揚陸、治安を完成し、福洲方面における艦艇は八月二十六日三都澳を完全に掃蕩、海南島方面にあつては島内完全

鷹潤のため約百十五回の出撃を試み多大の戰果をあげた。沿岸封鎖部隊は浙東沿岸で一万二千七百四隻のジヤンクを臨檢、うち援蒋物資精麻の三十八隻を抑留または處置し、黄浦江上では一万五千五百八十八隻を臨檢し多數の敵性軍需品を押收した。さらに海南島近海では軍需品搬入中の五隻を発見處分した。

九月中旬に至り揚子江艦艇の有力一部隊は陸軍護送船團を誘導しつゝ洞庭湖を横断し、陸戰隊の一部を鰐湖山に揚陸しこれを占領、つゞいて蓋石山、鹿角及び九馬嘴を占領するとともに蓋石山前面における敵機雷五十七個と大防材を爆破して水路啓開に成功した。蘇東方面の有力部隊はその一部を以て西江遡航作戰を開始し、陸軍部隊に協力しつゝ下旬新昌を確保、赤勒埠に進出し、一方北江遡江部隊は清遠下流十浬までの水路を啓開するなど敵陸上部隊に猛撃を浴せこの方面各地に亘り殲滅的な打撃を與へ、航行遮斷艦艇は揚子江下流及び浙東沿岸で二万三千四百七十八隻、黄浦江上で二万六千九百四隻のジヤンク、機動船を臨檢し利敵物資多數を押收、なほ北支方面では三千四百隻のジヤンクを臨檢、敵性七十九隻を處分、九月中に處分した敵機雷数は湘南で百十五個、南支方面で七百三個計八百十八個、そのほか湖南作戰で百一個あつた。

三千浬の海上封鎖　國慶記念日の双十節を期し、重慶軍は黙賞金つきで長江遮斷を目さし各所に蠢動を開始しつゝあつたが、我が艦艇の北は山海関より南海南島方面に及ぶ三千浬の航行遮斷に腰せられた敵はも早や反攻熊夢を呼号したのみで何らの実績あがらず、甘陽河、淮河、揚子江、黄浦江、蘇州河、錫江および洞庭湖、鄱陽湖、高郵湖などあまねく水路を我が艦艇陸に確保された北支においては日照附近において蠢動中の于學忠軍約六百を捕捉攻撃し、且つ全

支滑岸において臨檢したジャンク二万四千六百隻に及び、軍需品多數を密輸中の六十二隻を抑留した。

大東亞戰爭以後の戰果

大本營発表（三月六日正午）支那派遣の帝國陸海軍部隊は大東亞戰爭勃発とともに機を失せず敵性全租界に進駐しかつ香港を攻略して米英勢力を支那大陸より完全に一掃するとともに適時適所に重慶抗戰力を撃砕し、以てわが南方作戰に呼應しあり、大東亞戰爭開始以來三月末日までにおける支那方面綜合戰果左の如し

一、主要なる作戰　三〇回

二、遺棄死体　五八、三一三、捕虜一八、四五三

三、鹵獲品　飛行機五機、戰車一七輌、自動車一、四七〇輌、鉄道車輌三〇九輌、魚雷艇二隻、各種火砲二〇一門、重軽機一、三五三挺、小銃一二、四四三挺

四、撃墜（破）飛行機三〇機

五、撃沈（破）艦船砲艦四隻、船舶一三隻

本期間における我軍の損害左の如し

戰死二、五三六戰傷六、三八二

皇軍完封下の重慶

大東亞戰爭発以來シンガポール要塞の陥落およびビルマ路遮断に至る太平洋上および西南太平洋における相次ぐ戰果はそれ自体、重慶に対する偉大な封鎖作戰の成功を意味するものであつた。殊に遮れた奥地諸省を抗戰地盤として立つ重慶にとつては、対日抗戰遂行における対外依存關係はまさに決定的なものであつた。それは單に軍需資材の補給の面においてのみでなく、奥地経済の維持乃至は再編成の面においても同樣である。第三國勢力の利用こそは重慶抗戰体制にとつて重要な支柱をなすものであつた。武漢、廣東の陥落によつて重慶は鉄道による対外ルートを奪はれ、昭和十五年七月の佛印ルートの禁絶によつて、経済的に可能な最後の貿易ルートを喪失したがさらに今次大東亞戰において香港、シンガポールを失ひ、ビルマ・ルートを遮断された重慶はわが完全封鎖下に置かれたわけで、支那事變の完遂の上にもつ意義は極めて大きい。この確乎たる方面において調査した敗戰に喘ぐ抗日重慶の軍事、財政、経済の状況は次の通りである。

軍　事　皇軍がビルマ・ルートを遮断してからは蔣介石はわが占領地に地下工作隊を潜入させ密輸路の設置と治安の攪乱をはかつてゐたが、わが支那派遣軍の威武と徹底的治安工作とにより民衆は皇軍を信頼し、もはや各種のデマ宣傳に迷はず、かへつてわが方に敵状を通報して來る状態で、蔣介石苦肉の策も至るところで挫折した。特に上海、杭州附近は中支における経済、交通の中心にあたるので蔣一派はこゝに宣傳、謀略、諜報の據点を設定すべく計畫してゐたが皇軍の活動により、昨春以來各種軍用施設始め主要道路、鉄道は全く無事故といふ状況で治安の確立を如実に示し、我占領地域と非占領地域とを比較すれば、面積において非占領地域は廣大であるが、資源において全支の四分の一におよばず、あらゆる経済機関および生産地は皇軍の掌中にある。

財　政　重慶の物價は最近急角度で上昇、事變直前の物價に比較すれば最近は約三十倍に達した。大東亞戰によりビルマ輸血路遮断後はこの傾向特に著しく、物價問題だけでも重慶は既に末期的症状を露呈してゐる。昭和十七年における重慶の歳出入豫算はそれ〴〵百六拾五億元といふ尨大な額におよび歳出の大部分は國防費、歳入の大部分は紙幣と國債の増発によつてゐるが、旧法幣発行高はすでに二百五拾億元を突破、物資缺乏とともに惡性インフレを招來し、民族の不安感戰感が高まりつゝある。

經　濟　重慶では次第に生活必需品が缺乏してゐるが、昨年の旱魃に引き續き、わが封鎖、遮断の强化により、食糧缺乏甚だしく、餓死者が續出する状態で蔣介石が如何に総反撃を呼号しても結局は掛聲のみに過ぎぬ。

重慶抗戰力の撃砕

大東亞戰はジャバにおける蘭印軍の無條件降伏とビルマ・ルートの基点ラングーンの攻略により赫々たる戰捷の記録をもつて第一段階を畫した。即ち対日包圍陣を形成してゐた戰略據点は開戰僅かに三箇月にして全面的に覆滅し、逆に敵據点はことゞくわが進攻據点と化するとともに友邦タイ國、佛印と共に、フイリツピン、マレー、蘭印、ビルマを網羅する共榮圏全域に亙る雄渾なる歴史的建設の輝かしき時代に入つた。しかし一方この南方における赫々たる戰果に眼を奪はれて北中南支作戰における皇軍の勇戰奮闘を忘却する傾きがあるのではあるまいか、重慶側も大東亞戰の勃発によつて日本軍が支那方面から兵力を減ずるものと希望的觀察を下してゐたが事実は全く反対であつた。一月六日大本營陸軍報道部長談に明示されたごとく、南方において大作戰が展開されてゐる間も『皇軍は支那から一兵たりとも減退することなく、厳然として重慶軍の撃砕に努めつゝあつた……』の成果こそ今次皇軍の南方に対する大作戰の背後を安全ならしめてゐる』ものである。即ち北中南支に亙りわが軍は昭和十六年十二月八日から今日まで大作戰は実に二十七回、その他の交戰回数は十二月と一月だけで四千四百七十四回、一箇月平均実に二千回といふ驚くべき多數に及んでゐた。大東亞戰勃発以來皇軍の作戰の主なるものを回顧すれば次の如くである。

北支作戰　北支においては蔣系軍共産軍いづれもその活動極めて低調で、大東亞戰爭勃発以來積極的反抗を敢行せるに拘らず、皇軍の相次ぐ鉄槌の前に潛伏の外なき状態である。北支軍の作戰状況を見るに大東亞戰爭勃発と同時にわが軍は敵の反抗および蠢動を豫想し各地兵團は機先を制し、蒙疆オルドス地區傳作義軍に対する黄河渡河作戰をはじめ、山西省西北部、河北省中南部山東、河南両省その他北支全地域にわたる蔣共両軍に対し神速果敢なる鉄鎚を下し敵の企圖を粉砕した。また昭和十七年に入つてからは、蔣系軍は新黄河附近に相活発な動きを見せ淮陽南方に來襲したわが猛反撃に遇ひ忽ち逃走した。

冀東地區治安軍は一月以來わが軍の徹底的な攻撃により全く破摧され、第十三團々長包森は遂に戰死した。また山西省共産軍に対する冬季掃滅作戰および山東省蔣系于學忠軍に対する作戰はともに二月上旬から開始、敵根據地諸施設の覆滅により致命的打撃を與へて終了した。

中支作戰　中支軍は南方作戰に呼應し、旧暦廿四日長沙に対する作戰を開始し、新春早々再度湖南の要衝長沙を蹂躙するとともに、第九戰區および盜

く廣東方面その他より移動せる十一個軍約三十個師の敵を壓制壓碎し、第二次長沙作戰を終了した。なほ皇軍の南方制壓による援蔣路完全遮斷により狼狽の極に達した重慶は、江南、太湖東南地區の湖沼を経由する援蔣中支輸送路の再建を企圖したが、わが中支軍は去る二月中旬からこの輸送路建設の江南忠義救國軍覆滅掃蕩戰を續行し、敵諸施設の完碎、地上地下のあらゆる敵性分子拂拭の目的を遂げ、三月十五日作戰を終了した。

南支作戰　廣東方面においては余漢謀を盲班とせる廣東軍はさらに有力な中央軍を中支方面より南下せしめて、わが香港攻略軍の背後を衝かんとしたが、皇軍の神速果敢な進擊により香港は遂に旧臘二十五日早くも陥落、敵兵力轟用の虚を衝いて突如開始せられたわが中支軍の長沙方面進攻作戰とにより右企圖は有耶無耶に終つた。

上述の如く北中南支における皇軍赫々の戰果を見れば南方大作戰の續行中もなほ瞬時も休む暇なく、支那派遣軍は重慶壓滅に全力を擧げてゐたことが明かである。戰線が南方に擴大されればされる程ひきつゞきその根柢には、支那問題の解決が終局の目的として、一層重要となるもので、南方作戰の展開とともに一面重慶壓滅の手を瞬時も休めない皇軍の意圖はこゝに存するのである。支那事變はなほ大東亞戰と不可分の要因を成し、事變處理の完成は大東亞戰の完遂と、大東亞戰の勝利は支那事變處理の完成と相ともに一体を成すことによつて始めて達成し得られるものである。

米英勢力を一掃　事變が始まつてより大東亞戰勃発に至るまで既に蔣國が支那において擧げた成果は極めて大きく、その成果は今次の大戰遂行の上にも極めて大きな意義をもつてゐる。支那のうち沿岸沿江の要地は既に早くより日本軍の占領するところとなり、わが占領地はそのまゝ帝國と友好協力を誓ふ新中央政權の支配下にある。殘存する抗日政權は奥地へ逃げ込んで僅かに命脈を保つにすぎない。支那全体の樣相は大東亞戰勃発の當初において既に支那事變初期の段階におけるとは全く異つてゐた。支那事變完遂のためにたゞわれ〳〵は日本軍占據地域内に存在する敵性要素の掃蕩と抗日政權に最後の打擊を加へることの二つが殘されてゐた。この殘された仕事たるや全く米英の敵性活動によつてのみ妨げられてゐた。これを具体的にいへば、上海その他の港市の租界、香港、およびビルマ路、この三者の存在が支那の全面的な更生を妨げわれ〳〵の事變處理を妨害してゐた。しかし大東亞戰の勃発に容赦なく敵國の行動を封ずる機會をわが國に與へた。

すなはち大東亞戰勃発とともに蹄を移さず皇軍は上海の共同租界、天津および廣州の英租界に進駐、敵性活動に從事する人物の逮捕、施設の接收、租界の最高機關である市參事會の改組を斷行、租界内における、敵性策動の根源を芟除したが、續いて十二月廿五日には英國の東亞侵略據点として、また事變発生後は支那擾乱の根據としてあくまで敵性策動を擔にして來た香港を無條件降伏せしめ、更に去る八日ラングーンの陥落により、殘された援蔣唯一の輸血路ビルマ・ルートは完全に遮斷され、こゝに事變處理上の三大障碍は全く除去された。

事變完遂の最後的段階　これによつて見るも大東亞戰が支那事變處理の完成のために最後の基礎を据ゑたことは極めて明瞭である。それは單に軍事的な成果であるばかりでなく、同時に政治上、經濟上にも大きな意義を有するものである。時に大東亞戰における皇軍の赫々たる戰果を余りにも脆い英米軍の敗退に重慶政權下の軍官民は抗戰前途に対する失望落膽と、重慶政權への不信頼の念はいよいよ濃きものあり、敵軍部内には反戰、厭戰の氣分横溢し、軍規の弛緩は幹部將領をして私利私慾を追ひはじめ、その亂脈振りはまさに重慶の末期的狀態を呈してゐる。

重慶の敗退に引きかへて國民政府は発足以來政治力の結集に或ひは清郷工作にその育成強化は目ざましい進展振りを見せ、三月三十日還都二周年を迎へる汪主席は『國府は軍事力をもつて保衛東亞戰に參加せざるとも建設方面において刻々戰爭遂行に全面的協力をなす』旨闡明した。

大東亞戰の完勝を通じて軍事的にも政治的にも將また經濟的にも支那事變完遂の基礎が着々強化され、事變處理に最後的な新段階を顯しつゝあることが痛感されるのである。

孫良誠將軍起つ　大東亞戰爭の進展により重慶側陣營の苦悶いよいよ深刻となり蔣政權第三十九集團軍副軍長兼冀察戰區第一遊擊總指揮としてまた支那屈指の將領として旧西北軍時代よりその勇名を謳はれてゐた孫良誠將軍は四月二十三日和平擁護の大旆を掲げて蹶起し、敢然和平陣營に參加と同時に全國に向け烈々たる和平擁護の通電を発し、敵抗戰陣營に一大衝動を卷き起してゐる。

孫良將軍は和平參加と同時に國民政府より第二方面軍司令官に任命され、部下趙雲祥、王清驗副軍長を率いてすでに山東省西南地區に活躍を開始してゐる。新政權の强力な武力的一翼として反共和平陣營における同軍今後の活躍は刮目して期待される。

中東支の空軍基地潰滅

わが荒鷲は昭和十七年四月十九日來、東部支那一帶の敵航空基地に対し連續的に猛爆擊を加へ、浙贛線の要衝玉山、浙江省中部の麗水、湖南省の株州始め、各飛行場の格納庫、滑空路、附屬施設その他集積資材を爆碎または炎上せしめた。これは單に敵航空基地を爆碎せしめたといふだけでなくかねて米、英、重慶合作戰によつて計畫してゐた日本本土空襲の企圖を粉碎したものとして、その意義は極めて大なるものがある。

即ち米國の空軍使節少將クラーゲットは昭和十六年五月十七日重慶着、約三週間滯在、蔣介石はじめ重慶側要人と會見し、さらに成都、桂林、南雄、麗水始め中支各飛行場を視察したがクラーゲットはこのとき既に米、重慶の合作により中支各飛行場よりする日本本土空襲を企圖し、米國の援助による重慶空軍の再建を協議したものと見られる。

その前米空軍の飛行士が多數渡支し、一方中支各飛行場の大改造に着手した。米重慶合作による日本本土空襲の計畫はまづ大理、四昌、松桂の各奥地飛行場を根據地とし、米國製の『空の要塞』ボーイングB十七型爆擊機を輸入、梁山、衡陽（湖南省）贛州、吉安（江西省）を中間飛行場とし、さらに玉山（江西省）衢州（浙江省）麗水（浙江省）建甌（福建省）の各飛行場を前進基地とし、日本本土ならびに台灣の空襲を企圖したものである。敵側最前線の飛行場麗水から台灣の南端までは約七百キロで重慶軍爆擊機の行動圏内にあり、また名古屋は約一千六百キロでボーイングと十七型爆擊機の航續半径内にあるとしてゐた。

重慶が奥地根據地として計畫した四川省の成都、西昌両飛行場は昭和十六年夏ところから敵前に着手、米國製大型飛行機發陣可能な程度にまで工事進捗の旨本國において発表された。また前進基地たる麗水、建甌、衢州、玉山各飛行場は昨年六月から工事に着手、長さ千八百メートル、幅百五十メートルの滑走路ならびに格納庫、燃料庫、爆彈庫等を設備し、なかには放射狀滑走路さへ有するものがある。

わが陸鷲は四月二日以來數次にわたる大空襲によつてこれら飛行場軍事施設の大半を壊滅したが、さらに同十九日から再び連續的に幾回となく猛爆撃を敢行し海鷲も陸軍部隊と緊密なる共同作戦の下に、これら飛行場ならびに軍事施設に反復巨彈の雨を浴びせた。かくて大東亞戰前既に國際飛行場化し、最近に至つては米國飛行場の觀を呈してゐた中支各飛行場は潰滅的打撃を被り支那大陸よりする日本本土空襲の企圖はほゞ完全に挫折したわけである。

大東亞建設方略

大東亞戰爭の戰爭目的が單に、米英の抗戰力を撃滅するにあるばかりではなく大東亞共榮の新秩序を建設し以て世界新秩序建設に寄與するにあることは、宣戰の大詔を謹讀し、日米交渉の経過を見れば明白である。從つて大東亞戰爭は、武力戰によつて米英の抗戰力を撃滅するに止まらず、大東亞において日本を中核とする新しき諸國の秩序を建設繁榮せしめ得た時に始めて、勝利となるのである。決戰は新秩序建設を完遂し得るか否かによつて定まり、長期戰たるの所以またここにある。即ち米英はその武力固より侮るべきではないが、その経濟力の貧弱は彼等が曾も依據するところで、武力戰に敗退してもなほ抗戰を續けるであらうと思はれるのもこゝに理由を求め得るのである。

從來域の下、忠勇なる海陸將兵の奮鬪によつて、赫々たる戰果を擧げ東亞における、敵軍事力の潰滅を見てもなほ「戰は今後に在り」と叫ばざるを得ない所以である。

十二月十二日政府は今回の戰爭を『大東亞戰爭』と呼稱するに當り左の如く発表した。

（情報局発表）今時対米英戰は支那事變を含め大東亞戰爭と呼稱す。

大東亞戰爭と稱するは大東亞新秩序建設を目的とする戰爭なることを意味するものにして、戰爭地域を大東亞のみに限定するの意味に非ず。

大東亞戰爭目的

戰爭の目的を示すに簡にして要を得てゐる。

一　大東亞建設宣言

開戰四ケ月にして大東亞における米英の軍事據点は殆んど覆滅し、興亡文は增援の軍事力を以て時に攻勢を企圖することありとするも、武力戰の部面においては不敗の態勢は整備し得たといふべきである。こゝに戰爭は建設戰の段階に入り、武力戰の基礎涵養、國民生活確保の重要性が俄然增加し、建設方針の具体化が迫まられてゐる。いま開戰後宣示せられたる大東亞建設方略の大綱を記述するのであるが、そのためには昭和十六年十二月十六日第七十八臨會開院式において賜はりたる勅語、並に同日東條首相が行つた演說は、宣戰の大詔と共に今次大東亞戰爭の目的を顯示したる歴史的なるものとして、謹渝記錄すべきである。

勅　語

朕茲ニ帝國議會開院ノ式ヲ行ヒ貴族院及衆議院ノ各員ニ告ク

東亞ノ安定ヲ確立シ世界ノ平和ニ寄與セムトスルハ朕ノ夢念稼メテ切ナル所ナリ然ルニ米英兩國ハ帝國ノ所信ニ反シ徒ラニ東亞ノ禍亂ヲ激成シ遂ニ帝國ヲシテ干戈ヲ執ツテ起ツノ已ムヲ得サルニ至ラシム朕深ク是ヲ憾トス

此ノ秋ニ當リ帝國ト意圖ヲ同シクスル友邦トノ締盟愈ミ緊密ヲ加フルハ朕ノ甚タ慰フ所ナリ今ヤ朕カ陸海軍人ハ力戰健鬪隨處正ニ其ノ忠勇ヲ奮ヘリ朕ハ帝國臣民カ必勝ノ信念ヲ堅持シ擧國一個協心戮力速ニ交戰ノ目的ヲ達成シ以テ國威ヲ宇内ニ發揚セムコトヲ望ム

朕ハ國務大臣ニ命シテ特ニ時局ニ關シ緊急ナル豫算案及法律案ヲ帝國議會ニ提

出セシム鵬等克ク朕カ意ヲ體シ和衷協力以テ協賛ノ任ヲ竭サムコトヲ期セヨ

東條首相演說

本日開院式に當り、特に優渥なる勅語を拜したことは洵に感激感激の至りである。私は謹で聖旨を奉戴して一意專心報效の誠を竭し、此の前古未曾有の重大難局を克服し、以て宸襟を安んじ奉り度いと存ずる。過般第七十七回帝國議會に方て私は國策遂行に關する政府の所信を率直に披瀝して各位の御協力を願つた次第である。其の後も政府は引續き米國に対し既に當時申述べた通り第三國が帝國の企圖する支那事變の完遂を妨害せず、帝國を圍繞する諸國家が帝國に対する直接軍事的脅威を行はざることは勿論、經濟封鎖の如き敵性行爲を解除し、經濟的正常關係を恢復すること、及歐洲戰が擴大して禍亂の東亜に波及することを極力防止することの目的を外交交渉に依つて貫徹せんが爲、忍び難きを忍び耐へ難きを耐へ有らゆる努力を重ねたのである。然るに米國は帝國の隱忍と自重とを以て眞し安しと爲し帝國の公正なる主張に耳を藉さゞるのみならず、從來の彼自身の提案すらも裏切り、密かに英國と謀議して、新たに曩幾たる提案を爲し來つた。其の詳細は既に政府より発表した所である。而して帝國として最も忍び得ざる点は（一）支那及佛印より陸海、空及警察を含む一切の帝國軍隊を撤收すること（二）重慶政府を除く如何なる政權をも軍事的政治的、經濟的に支持せざること（三）第三國と締結し居る如何なる協定も太平洋全地域の平和確保に矛盾するが如く解釈せられざることに同意することの三点に在る。是は換言すれば帝國の支那及佛印よりの全面的撤兵、南京政府の否認、三國條約の破棄を要求するものであつて、米國の意志は絶交と武力脅威とを以て我に挑戰し之に依り帝國を屈從せしめんとするに在ることが明かとなつた。若し我にして米國の要求に屈從せんか、大東亜の安定の爲傾注し來れる帝國積年の努力は悉く水泡に帰するのみならず、帝國の存立すらも危殆に瀕し、且つまた世界平和の克服に協力せんことを約したる盟邦との誓を放棄し帝國の信義の失墜をも魂喪せられるものである。斯くの如きは帝國として断じて忍ぶべからざるものである。

事茲に至つては　如何に平和愛好の念に燃ゆる帝國としても其の權威と自存とを擁護する爲断乎として立たざるを得なかつたのである。即ち本月八日畏くも米國及英國に対する宣戰の大詔が渙発せられた次第であつて、海陸の將兵は未だ旬日を出でずして怨ち敵の要衝を擊破し、ハワイを基地とする米國艦隊の大半を覆滅し、英極東艦隊の主力を壊滅する等敵が誇張し宣傳し且脅嚇に努めて居た対日包圍陣も暗所に突破せられ、既に崩壊の一途を辿りつつある。此の偉大なる戰果は世界の驚異の的となり國威を中外に輝かすに至つた。之れ偏に御稜威の然らしむる所であつて、誠に感激に堪へぬ。

默々として隱忍自重、精年練武の勞を重ねて今日あるの準備を整へ、一度戰となれば君國に殉ぜんが爲生還を期せざる我が陸海軍の勇士の偉大なる力の発揮に対しては、滿腔の感謝と崇敬とを禁じ得ざると共に銃後官民の責任の愈々重大なるを痛感致す次第である。今や帝國の隆運は正に此の一戰に懸つてゐるのである。我が同胞は一大國難に直面すれば、必ず打つて一丸となつて列國の驕慢を粉碎し、如何なる困難をも克服して國威を中外に発揚し國運の隆昌を致して居ることは明かに史實の示す所である。凡そ戰の要訣は

必勝の信念　に在る。私は全國民が我が國體の本義に徹し、建國以來二千六百年未だ嘗て戰に敗れたることなき帝國の光榮ある史實を回顧して、固き必勝の信念の下に如何なる艱苦をも堪へしのび、職域奉公に遺憾なきを期し必ず終局の戰勝の光榮を招來するに至らんことを確く信じて疑はざるものである。然しながら敵は領土の廣大、資源の豊富を誇り、之を以て世界制覇の野望を遂うせんとする米英蘭國である。帝國は大東亜の禍乱を撤定すると共に此の間の強大なる敵を撃かねばならないのである。從て長期戰は固より覚悟の前である。即ち帝國は今後幾多の困難に當面することあるべきを深く肝に銘し、敵兵力の殲滅に愈々奮闘努力して緒戰に於ける赫々たる戰果を擴充するとゝもに新に参加する南方諸地域を加へて各般に亘る一大建設を行ひ、以て此の長期に堪へ得る態勢を速に整備せねばならぬのである。戰は寧ろ今後にある。我等國民は個々の戰勝に酔ふことなく愈々正氣を擴充して互に相偕り相扶け、内は荒怠を戒め外は邪惡思想の滲透を防ぎ必勝の確信の下に飽く迄献身殉國を念とし、謹つて征戰の目的を貫徹せねばならぬ。

此の際盟邦滿華両國が、帝國との一心同体の關係愈々厚く、戰端一度開かるるや、直に帝國に対してあらゆる協力を與へられつつある事については、私は玆に滿腔の感謝の意を表するものである。倘帝國は曩に佛印と共同防衛の約を締結し、今亦泰國と攻守同盟締結に付意見一致し、此等両國が愈々帝國との提携を固くし相共に新秩序建設の爲に邁進しつつあることは欣快とする所である。

抑々帝國が今回南方諸地域に対し新に行動を起すの已むを得ざるに至つたのは、米英の暴政を排除して大東亜諸地域を明朗なる本然の姿に復し

新なる大建設　を行はんとするに外ならぬのである。大東亜數億の住民も亦、帝國の眞意を了解して無益の抵抗を行ふことなく、寧ろ我等の同志として速に帝國の企圖する大東亜共榮圏建設の聖業に参加するに至らんことを切望して已まぬ次第である。此の際重慶政權が尚抗戰を續けて居ることは甚だ遺憾とする所である。若し彼にして今後も依然抗戰を継續するに於ては、帝國は今後と雖も毫も壓迫の手を弛めるものではない。而もその抵抗の根元も今や覆滅に瀕しつつあり、禍乱の撤定も遠からざるものと存ずる次第である。

此の秋に當り盟邦獨伊両國が帝國の開戰と共に参戰し、帝國と共に確固不動の決意を以て一切の强力手段を盡し、世界平和の爲の共同の敵に対し勝利を得る迄は断じて干戈を收めざることを誓ひ、亦相互の完全なる了解に依るに非ざれば米英両國の何れとも休戰又は講和を爲さざるべきこと及び公正なる新秩序招來の爲將來益々密接に協力すべきことを約し、日獨伊三國の締盟愈々固きを加ふるに至つたことを、洵に同慶の至りに思ふと共に、米英両國を屈服せしむる迄は断じて戈を收めざる帝國の固き決意を玆に表明するものである。倘此の機會に於いて私は開戰以來の國民の熱誠溢るゝ愛國の至情に対して、衷心よりの感激を表明するものである。今回政府提出の豫算案及び法律案は何れも戰爭遂行上緊急なる事項に限定されて居るのである。何卒速に審議の上協賛を與へられんことを切望する。

建設大綱の闡明

越えて昭和十七年一月二十一日第七十九議會再開の日、東條首相は世に『大東亞建設宣言』と呼ばれる重要演說を行ひ、大東亞建設の重大方策の骨幹を闡明した。左にその全文を掲げるが要点を摘記すれば

(一) 大東亞戰爭指導の要諦は、大東亞における戰略據点を確保するにあると共に、重要資源地域を我管制下に收め、戰力を擴充しつゝ、米英両國を屈伏せしむるまで戰ひ拔くにあること

(二) 共榮圈建設の根本方針は、大東亞の各國家、各民族をして、各々その所を得しめ、帝國を核心とする道義に基く共存共榮の秩序を確立すること

(三) 共榮圈建設の具体的方針は

(1) 香港、マレー半島は東亞禍乱の基地であつた事実に鑑み、大東亞防衛の據点ならしめるため、帝國固ら把握指導する

(2) フイリツピン及びビルマについては我眞意を了解し、協力し來る場合は獨立の榮譽を與へる。

(3) 蘭印、濠洲も協力的態度をとるにおいては十分の理解を以て力を添ふる。

の三項にあること

(四) 建設の順序は先づ軍政下において、將來大建設の準備をなし、防衛及治安の確立に伴つて、逐次民間參與の範圍を擴張すること

(五) 大東亞建設は國家の總力を擧げて行ふこと

等の五項目に要約し得る。

東條首相演說

大東亞戰開始以來眞軍の奮ふ所敵なく到る處赫々たる戰捷を收め、短時日にして既に大東亞に於ける敵の要衝の大部分を覆滅し、一方軍慶政權に対しても亦益々壓迫を強化し、更に北辺の驚り磐石の安きに在り、依て以て帝國の威武を中外に宣揚しつゝあることは、誠に御同慶の至りである。是れ偏に 御稜威の然らしむる所、感激に堪へない。而して廣大なる地域に亘り、無量を克服して勇戰力闘兇く偉大なる戰果を收めつつある我が忠勇無比なる陸海軍將兵の勞苦と武勳とに対しては、衷心より感謝し且敬意を表する。又護國の英靈に対しては效に敬弔の誠を披瀝すると共に、其の遺族並に傷病將兵に対しては深き同情を表する次第である。

抑々帝國の現に遂行しつつある大東亞戰爭指導の要諦は、大東亞における戰略據点を確保すると共に、重要資源地域を我が管制下に收め、以て我が戰力を擴充しつゝ、蘭伊両國と密に協力し互に呼應して益々積極的作戰を展開し、米英両國を屈伏せしむる迄戰ひ拔くことである。然るに米英両國は永年に亘り世界制覇の基礎を固め世界最大の富强を誇るものである。緒戰の大敗に拘らず必ずや執拗に我に抗し大勢の挽回を計り來るべきは想像するに難くない。故に今後各種の困難な事象が発生して來ることも或は又此の戰爭が長期戰となることも當然覚悟せねばならない。即ち戰爭は正に今後にあるのである。我が征戰の目的を達成せんが爲には、全國民は愈々必勝の信念の下如何なる艱難辛苦も堪へ忍び、以て國家に報ずべきである。而して此の勃發尙武献身報國の精神こそ

は現下の難關突破の爲のみならず、帝國將來の発展の爲にも絕対缺くべからざる要件である。帝國は今や國家の總力を擧げて專ら雄大廣汎なる大作戰を遂行しつゝ、大東亞共榮圈建設の大事業に邁進して居るのである。而して大東亞共榮圈建設の根本方針は実に肇國の大精神に淵源し、大東亞の各國家及民族をして各々其の所を得せしめ、帝國を核心とする道義に基く

共存共榮の秩序

を確立せんとするに在る。而してその建設は廣大なる地域に亘り、各種の民族と相倚り相携へて行はれるのである。而も今回新に此の建設に參加せんとする地域たるや、資源極めて豐富なるにも拘らず、最近百年の間米英両國等の極めて苛烈なる搾取を受け、爲に文化の発達甚しく阻害せられたる地域である。帝國が此の地域を加へて人類史上に一新紀元を劃すべく新なる構想の下に、大東亞永遠の平和を確立し、進んで皇邦と共に世界新秩序の建設を爲さんとすることは正に曠古の大事業である。而して此の大事業の成功は亦我が武力戰の成功を窮極の勝利に導くために必須の要件である。此の建設に當つては、大東亞防衛の爲絕対必要なる地域は、帝國自ら之を把握措置し、其の他の地域に関しては各民族の傳統文化等に應じ、戰局の進展に伴ひ、それぞれ適當なる處置に出づる考である。今や帝國陸海軍は既に香港を占領し、比島の大部分を確保し、又馬來半島の大半を制壓し、更に最近に至つては、蘭印の要衝を占據するに至つた。此等諸地域の内、香港及馬來半島は多年英國の領土であり、且東亞禍亂の基地たりし事実に鑑み、帝國は徹底的に禍根を芟除するのみならず、寧ろ此等をして大東亞防衛の據点たらしめんとするものである。比島に関しては、將來同島の民衆にして帝國の眞意を了解し大東亞共榮圈建設の一翼として協力し來る場合には、帝國は欣然として彼等に

獨立の榮譽

を與へんとするものである。ビルマ等に就ても亦帝國の企圖する所は比島と異る所がないのである。蘭印及濠洲に就ては之れ等が現在の如く帝國に対し抗戰の態度を繼續するに於ては、帝國は容赦なく之を撃砕せんとするものである。然しながら其の住民が帝國の眞意を了解して協力し來つたならば、其の福祉と発展との爲には帝國は十分の理解を以て之に力を添ふるに吝でない。今日尙重慶政權が、無意義の抗戰を繼續しつつあることは洵に遺憾である。帝國は之を徹底的に破碎せんとするものである。私は今こそ彼等が此の世界情勢の大變換を正視し、斷然米英依存の旧套を一擲して大東亞共榮圈の大事業に馳せ參ずべき時期であることを確信する。緬、蘭、泰の諸國民が帝國と一丸となつて大東亞共榮圈建設の爲に不断の努力を爲しつつあり、佛印亦是に協力しつつあることは誠に慶祝の至りである。一方盟邦特に獨伊両國が帝國と共に世界新秩序建設の爲、着々と戰果を擧げつつあることは洵に同慶に堪へない。帝國は是等盟邦との間に軍事、外交、經濟等各般に亘り今後も益々緊密を固くし、以て共同の目的達成に邁進せんとするものである。帝國の企圖する建設は緒戰當初に於ては先づ軍政下に於て戰爭遂行上緊要なるものより着手し且將來の大建設を準備し防衛及治安の確立に伴ひ逐次民間參與の範圍を擴張せんとするものである。而して帝國の企圖しつゝある大東亞建設の方策は

國家百年の長計

たるに鑑み、十分の準備を整へて万全の策を講ずるの要がある。政府は廣く官民各方面の智能を動員して、之が協力に依て、其の樹立と其の遂行とに万遺憾なきを期する所存である。

以上の情勢に應じ國運進展を期する爲に、帝國今日の急務は國家の總力を擧げて專ら武力戰に於て屈敵の戰果を擴大すると共に、戰爭遂行力の强化を促進して必勝の態勢を確保するに在り、各般の施策も亦是に集中すべきことを政府は確信する。ここに於て政府は國政各部門に亘つて戰爭遂行に必要なる方策を確定し、且迅速に之を實行し度いと考へて居る。即ち戰時生產力の維持增强を圖る爲には、特に緊要なる企業中優秀なるものに対し重点的に資材、勞力、電力、資金等を集中し、以て既存設備の最高度活用を圖ると共に重要國防產業の生產擴充に格段の考慮を拂ひ、又國民生活確保の爲には戰時食糧対策の整備に遺算なからん事を期して居る、而して今日に於ける最も重大なる問題は、資源不足に非ずして寧ろ交通運輸の整備如何に存するに鑑み、船舶の建造には特に力を用ひ以て交通運輸の改善强化を圖り度いと存ずる。又國策遂行の爲には民間資金の善用が絕対に必要である。依て政府は國民貯蓄の增强の爲に、今後一層努力を致す所存である。開戰以來我が國民の活動の範圍は著しく擴大せられ、其の責任も愈々重くなつたのであつて、今や國民の素質の向上と人口の增加とは戰爭遂行の爲にも、將又建設完成の爲にも絕対に必要と爲つたのである。是が爲教育金融の刷新强化に大に力を致すと共に、國民保健施設及醫療制度の根本的整備を行ひ度いと存ずる、

尙終りに臨み友邦より帝國に與へられた厚意に対し深甚なる謝意を表明すると共に、國民各位が相協力して戰捷奉公の実を擧げつゝある愛國の至情に対し衷心より敬意を表する次第である。

二　中央における施策

かゝる根本方針に基いて政府並に出先軍は各般の施策を行ひつゝあるが、今中央並に各占領地に於ける主なる事項を列記すれば左の如くである。

（一）爲替政策の根本的變更

大藏省は十二月二十七日從來の爲替相場の表示形式を根本的に改め、円貨を以てする公定制換算率を定むることゝする旨發表した。右は大東亞戰爭勃發に伴ふ當然の措置であると共に、円貨中心の爲替市場設定により大東亞金融圏を建設し、大東亞建設事業に資せんとするものである。

（二）蘭領ボルネオ上陸に際する政府聲明

帝國政府は蘭印に対し軍事行動を開始するに當り、一月十二日左の聲明を発し帝國の眞意を闡明した。

帝國政府聲明

さきに帝國は米英両國に対し開戰するに至りたるも和蘭に対しては能ふれば戰禍を蘭印住民に及ぼさしめんとするの考慮より敵対的措置を差控へたるところ、和蘭政府は帝國が和蘭と緊密不可分の関係にある米英両國に対し戰端を開きたるにより日蘭間に戰爭狀態存在するに至りたるものと認むる旨帝國政府に通告越したるのみならず爾來現実に和蘭軍は帝國に対し各種の敵対行爲に出で更に最近蘭印を米英蘭の対日抗戰の基地と爲すに至れり

帝國に於ては無辜の蘭印住民に対しては何等敵意ある次第に非ざるも和蘭の敵対行爲を破碎すると共に帝國臣民の生命財産を擁護するため遂に帝國陸海軍は一月十一日和蘭軍に対し戰鬪を開始するに至れるものなり

（三）南方開發金庫の設定

一月六日政府は南方地域（當分佛印を除く）資源開発事業統制のため、南方開発金庫法を制定することに決定、閣議を経て要綱を左の通り発表した、その特色とするところは

（1）南方資源の開発利用に要する一切の資金は本金庫を通じて供給し、長期企業金融は全部一元的に統制すること

（2）從つて現地における現存金融機関、例へば正金、台銀、鮮銀その他一切の金融機関は、すべて商業金融に專念せしむること

（3）本金庫は一切の銀行業務をなし得ること

（4）本金庫は投資、融資につき政府の損失補償を受くること

（5）資金は円資金を利用せず、現地に於て臨時軍事費特別會計より現地通貨の會付を仰ぐこと

にあり、七十九議會において同法が成立した

南方開發金庫案要綱

（1）南方地域における資源の開発および利用に必要なる資金を供給し、併せて通貨の膨脹に資するため法律を以て法人を設立すること

（2）本法人は南方開発金庫と稱し、本金庫を東京に置き、政府の認可を受け必要なる地に支金庫及び出張所を置くことを得ること

（3）南方開発金庫の資本金は一億円とし政府の認可を受け之を增加することを得ること

政府は右資本金の全額を支出するを要することゝし、第一回の拂込は資本金の十分の一を下らざる額とすること

前項の政府出資はこれを民間に讓渡するを得ること

（4）南方開発金庫の職員はこれを公務員と看做すこと

（5）南方開発金庫は第一項の目的を遂ずるため必要なる投資融資をなすのほか、預り金、通貨の交換、爲替の賣買等の業務を行ふこと

（6）南方開発金庫は政府の認可を受け、前項以外の業務を行ふこと及び借入金をなすことを得ること

（7）南方開発金庫は拂込資本金の十倍を限り債券を発行することを得ること

（8）政府は南方開発金庫に対し、第五項に規定する業務のうち、投融資により受けたる損失を補償するの契約をなすことを得ること

（6）臨時軍事費特別會計は、南方開発金庫に対し貸付をなすことを得ること

（四）具體的建設方針の發表

一月二十三日の衆議院豫算總會において東條首相の答弁に次いで鈴木企畫院總裁は大東亞總齊建設方略を具体的に発表した。

（1）東條首相答弁（抄）

帝國は目下國家の總力を擧げて專ら大作戰の遂行に邁進し、屈敵の戰果を擴くるとともに大東亞共榮圏の建設を行はんとするものである、しかして大東亞共榮圏建設の恒久的方策については十分の準備を整へて万全を期する要があるが、戰爭の現段階においては先づ重要資源の需要を充足して當面の戰爭遂行に遺憾なきを期するとゝもに大東亞自給自足の体制の基礎を確立するといふことを主眼としてゐる。しかしてこれがため具体的方針としては、第一に資源獲得、特に戰爭遂行上緊要なる資源を確保すること、第二には南方資源が敵性國家に向け流出するを阻止すること、第三には作戰軍の現地の自活を確保すること、第四には在來の企業の我が方に対する協力を豫算すること、以上の四点を主眼としてことを進めてゐる次第である。

（2）鈴木企畫院總裁の說明

次いで鈴木企畫院總裁は大東亞經濟建設方略を具体的に說明したが、これについては第三部『南方開発』の項を參照されたい。

（五）大東亞建設審議會の設置

政府は二月十三日の閣議において、大東亞建設事業に関する綜合的企畫、調査の諮問機関として、大東亞建設審議會を設置することに決し左の要綱を発表した。同審議會官制及び陣容は福密院の議を経て同二十日発表、二十七日初總會を開き以後部會を設けて、政府の諮問事項を中心に鋭意審議を進めてゐる。

大東亞建設審議會設置要綱

第一、方針

大東亞建設に関する綜合的企畫並にこれが遂行に関する國家總力発揮の完璧を期せんがため、左記要領により大東亞建設審議會を設置す

第二、要領

（1）大東亞建設審議會は内閣總理大臣の監督に属し、大東亞建設に関する重要事項（軍事及外交に関するものを除く）につきその諮問に應じて調査審議し及びこれに建議をなすこと

（2）大東亞建設審議會は總裁及び委員四十名を以てこれを組織すること

（3）總裁は内閣總理大臣を以てこれに充つること、委員は學識經驗あるものの中よりこれを任命すること、國務大臣は隨時會議に出席し意見を開陳すること

（4）委員の任期は二年とすること、但し特別の事由ある場合に於ては任期中これを辞任することを妨げざること

（5）特別の事項を調査審議するため必要あるときは專門委員を置くことを得ること、專門委員は内閣總理大臣の奏請に依り関係各廳高等官または學識經驗あるものの中より内閣に於てこれを命ずること

（6）内閣總理大臣必要ありと認むるときは專門委員その他適當と認むるものをして會議に出席し意見を開陳しむることを得ること

（7）總裁は會務を總理すること總裁事故あるときは内閣總理大臣の指名する國務大臣總裁の職務を代理すること

（8）大東亞建設審議會は必要に應じてこれを部會に分つことを得ること

（9）大東亞建設審議會に幹事長、幹事及び幹事補佐を置くこと

幹事長は企劃院總裁を以て之に充つること、幹事は関係各廳高等官及び學識經驗あるものの中より内閣總理大臣の奏請に依り内閣に於てこれを命ずること、幹事補佐は内閣總理大臣の奏請に依り関係各廳高等官の中より内閣に於てこれを命ずること

政府は大東亞建設審議會の諮問事項、部會組織及び審議經過等に付一切これを秘してゐたが、五月四日第二回總會を開き

一、大東亞建設に関する基礎要件

一、大東亞經濟建設基本方策

の二諮問事項に対する答申を決定したのを機會に、幹事長鈴木企畫院總裁談の形式を以て左の如く同議會の審議状況を発表した。

鈴木幹事長談

政府はさきに大東亞建設審議會の設置を仰ぎ、官民緊密なる協力の下に大東亞建設に関する根本方策の調査審議に當ることとしたのであるが、去る二月二十七日の第一回總會において、内閣總理大臣より大東亞建設に関する基礎要件、文教政策、人口政策ならびに經濟建設基本方策の四項目につき諮問あり、これによりそれ〴〵第一乃至第四部會を設け、ほとんど毎週各部會を開き各委員とも飽くまで大東亞戰爭を戰ひ抜く鉄石の決意と、道義に基く大東亞新秩序建設に対する熱意とをもつて真剣に審議を續行しつゝある次第である。

第一部會　は大東亞建設に関する基礎要件を確定し、これを議方策決定の指針たらしめんとするものであつて、三月十三日第一回の部會を開いて以來五月一日迄に六回に亘り審議を行ひ、既に部會において決定せる部分の答申案を本日の大東亞建設審議會總會に諮り、これが決定を見た次第であるが、その中の大東亞建設の基本理念の要旨は次の通りである。

大東亞建設の基本理念は我が國体の本義に淵源し八紘爲宇の大義を冷く大東亞に顯現するに在り、これがため各國および各住民をしてその分に應じ各々その所を得しめ道義に立脚する新秩序を確立するを以て要となす

第二部會　は大東亞戰爭を遂行しかつ大東亞建設の大經綸を具現するため國民をして肇國の大精神に基き國体觀念に徹し、その氣宇を雄大ならしむると共に、智能を向上しかつ軍事上の要請に答ふべき國民の教育練成方策並に東亞諸民族の文化向上の諸方策を確立せんとするものであつて、三月十日第一回の部會を開き爾來今日まで回を重ねること四回に及びなほ繼續中である。

第三部會　は大東亞戰爭を遂行しかつ大東亞建設を具現するため、帝國の人口政策の確立を圖らんとするものであつて、三月十一日第一回の部會を開催後今日まで五回にわたり審議を進め目下なほ考究中である。

第四部會　は帝國の長期に應ずる戰爭遂行力を充実擴大しかつ大東亞諸民族の民生の暢達を期するため帝國を核心とする大東亞の自立經濟を完成する方策を樹立せんとするものであつて、三月十九日第一回の部會を開催、爾來五回に

亙り會議を開き去る四月十七日答申案を決定し、本日の大東亞建設審議會總會において決定を見た次第で、これが方針として大要

一、大東亞經濟建設の目的は八紘爲宇の大義に則り道義に基く大東亞の經濟新秩序を建設し、併せて新世界經濟の建設に寄與するに在り、これがため大東亞の綜合經濟力を発揮し、大東亞防衛に必要なる自主的國防經濟を完成す。しかして當面の施策は大東亞戰爭遂行力の急速なる增强に滑集し併せて恒久的大建設の基礎確立に資す。

二、大東亞の各國は互に相協力し各々その所を得るとともに、各地域の人力および資源の特性を発揮し大東亞全体の經濟力を綜合的に充実す。各地域における經濟施策の実行はその実情に應じ、しかも戰局の進展に樽へ緩急宜しきを圖るものとす

三、皇國は大東亞經濟建設を推進するため益々國民の國体觀念を明徵にし、剛健なる精神進潑なる氣宇を錬成するとともに、これに立脚する國内態勢の刷新を圖りかつ科學技術の畫期的振興を圖る。

四、大東亞の各住民は大東亞建設の成否が大東亞全体の運命に關するものなることを自覺し、共苦偕榮各々その分に應じて協力す

を確立しこれを貫徹するため農業、勞務、財政、金融、交易、交通、科學技術等の基本方策を決定せるものである。

また本日の總會においては内閣總理大臣より諮問第五として大東亞經濟建設基本方策に基く具体的方策を諮問せられ、これに関し新たに部會を設け引續き審議を進めることとなつた。なほ專門委員を任命しそれ〴〵審議に協力してゆくこととなつた。

右の発表によつて明瞭にされたことは左の通りである。

(一) 諮問事項――第一回總會において(一)大東亞建設に関する基礎要件(二)大東亞建設に関する文教政策(三)大東亞建設に関する人口政策(四)大東亞經濟建設基本方策の四項目が諮問され、第二回總會において新に『經濟建設基本方策に基く具体的方策』に就いて諮問された。

(二) 部會組織――基礎要件について第一部會、文教政策について第二部會、人口政策について第三部會、經濟基本方策について第四部會、經濟具体方策について新に部會がそれぞれ設置された。

(三) 各部會審議狀況

(1) 第一部會は六回に亙り會議を重ねた結果、大東亞建設方策決定の指針たらしむべき基本理念を考究し、その一部は四日の總會を経て答申され要旨の発表を見た。

(2) 第二部會はこれを日本國民の教育錬成方策並に東亞諸民族の文化向上方策の確立を目標として考究中で既に四回部會を開きなほ繼續してゐる。

(3) 第三部會は大東亞建設の中核をなす日本國民の人口政策を確立せんとし五回の部會を重ねなほ考究中である。

(4) 第四部會は、大東亞の自立經濟完成に関する基本方策の決定を目的とし部會を開催すること五回にして四月十七日答申案を得、第二回總會において決定を見たのである。発表されたものは經濟建設基本方策の方針の大綱四項目であつて、さらにこれを貫徹するために、農業、勞務、財政、金融、交易交通、科學、技術等經濟各部門につき、一々基本方策が策定された。

(5) 新部會は第二回總會において第四部會の答申が決定されたので、これに基く各部門の具体方策が諮問されたため、新に設置されたものである。

(四) 專門委員の任命――大東亞建設審議會は官民の衆智をすぐつて帝國經倫の雪雪遂行に當らんとするを目的としてゐる建前から、各方面の權威を委員に網羅してゐるが、四日更に各專門部面における知識を動員するため新に二十四名の專門委員を民間から任命した。

(六) 軍政陣容の發表

各占領地は完全占領と同時に軍政が施行され、復興、治安維持及び建設の下工作に着手しつゝあるが、政府は軍政の運用に関し文官又は民間人の協力を求め順次次の如く、陣容を整へつゝある。

(1) 香港占領地總督部設置、一月十九日大本營は「今回香港占領地總督部を設置せられ香港占領地總督には陸軍中將磯谷廉介閣補せられたり」と発表し、軍政首腦部が整へられた。

(2) 二月三日、永田秀次郎、村田省藏、砂田重政、德川義親侯の四氏が陸軍省の事務を囑託せられ、現地軍の最高軍政顧問に起用された。

(3) 同六日、海軍省でも、鶴原俊次郎、竹内可吉、大野龍太、山崎巖、藤山愛一郎の五氏に海軍省顧問の職を委囑した。

(4) 三月十七日、陸軍は更に兒玉秀雄伯、櫻井兵五郎、北島謙次郎の三氏を前記四氏と同樣陸軍囑託として軍政顧問となし、林久治郎等十四氏を司政長官に任じた。

三　占領地における施策

(一) 香　港

昭和十六年十二月二十五日、香港の完全占領成り、直に軍政が布かれてゐたが一月十九日に至り、特に香港占領地總督部が設置された。その後復旧作業進捗し三月二十八日、總督部令を以て左の通り取締令を発し、居住、交易、企業等に関する規準を定めた。これと共に諮民代表會を設置し、華民代表會規定に則り、同地住民の大部分を占める支那人管理の方策を示めしたが、蓋當り治安のため中國人に対し疎散政策を採つてゐる。

取　締　令

香港占領地總督管區における軍人、軍屬及び陸海軍雇傭人以外の者の、出入、居住、軍需以外の物資の搬出入及び企業、營業、機行爲の取締に関する事項を定む。

(1) 敵國人

(2) 敵性外國人（敵性中國人を含む）

(3) 我軍に対する叛逆行爲、間諜行爲、軍機漏洩行爲又は我軍の安寧を害し若くは妨害する行爲をなす者並にその屬ある者

(4) 軍律を紊乱し又は政治經濟思想等の攪乱行爲をなすもの並にその屬ある者

(5) 白痴、癲癇其他精神病者
(6) 獨立して生計を營む資力能力なきもの
(7) 犯罪其他不法行爲を反覆累行するもの及びその虞あるもの
(8) 軍事公安風俗上居住せしむるを不適當と認むるもの
(9) 其他防衛並に軍政施行上有害と認むるもの
等に対してはこれらを許可せざること

(二) フイリツピン

第一 マニラ軍政布告

一月二日皇軍マニラ入城、翌三日比島に軍政を施行する旨左の如く布告を発し軍政の根本原則を明示した。

軍政宣布に關する軍司令官布告

将く比島官廳及民衆に告ぐ
一、玆に軍事行動の結果比島に於ける米國の主權は完全に消失したるを以て、軍は比島に軍政を宣布す
二、日本軍の比島進駐は一に比島民衆を米國の支配より解放し大東亞共榮圏の一員として比島人の比島を建設し其の繁榮と文化の維持を熙謀するに外ならず
三、比島官廳及民衆は米國との關係を斷絶し以て軍の公正なる施政に信頼し命令を遵奉すると共に日軍の佇駐駐屯及び軍需の充足等に協力すべし
四、比島に於ける從來の法律行政制度及司法制度は軍政に支障なき限り取敢へず之を有效として存續せしむるを以て官公吏は其の職に止まり事務を忠実に執行すべし
五、日本軍は比島に於ける信仰居住の自由及び從來の慣行中軍政に支障なきものは寛容すべきを以て民衆は軍の眞意を体し空虛なる米英の宣傳に迷はざることなく輕擧妄動、造言蜚語を慎み苟も治安を紊るが如き行動あるへからず斯る行動はすべて敵対行爲と認め軍律に照し最も嚴烈に處斷し其重きは死刑に處す。

第二 マニラに關する協定成立

一月七日午後四時、軍代表とヴアルガスマニラ市長との間に、マニラに関する協定成立、左の如く発表された。

(比島派遣軍発表) 昭和十七年一月七日マニラ市大日本軍司令部において、大日本軍代表と大マニラ市長ヴアルガス氏の會見議事録

大日本軍代表は大日本軍最高指揮官が昭和十七年一月三日大マニラ市占領を宣言し、同市に軍政を施行せることを述べ、左の各項につき大マニラ市長ヴアルガス氏にその実行を要求せり

一、安寧秩序の維持及び運輸通信、ガス、電氣、水道、衛生、病院、消防等の公共施設の復旧(但し上記施設は市設のものにして公共施設のすべてを包含するものにあらず)

二、大マニラ市よりの及び同市への物資の移出入及び同市内における物資の移動を統制し、以て大日本軍及び市民に対する物資供給を確保すべきこと
三、敵國民及び大日本帝國に対し敵性行爲をなし、またはなさんとするものの取締
四、大日本軍の必要とする勞役及び物資の配給並に施設の使用承認
五、マニラ市内における官公吏市民の所持するすべての銃砲彈藥の引渡し(尤も大日本軍當局より所持を認められたるものはこの限にあらず)
六、社會救濟事業の実施
七、マニラ市における一般行政及び安寧秩序保持に関し、日本人指導監督官及び專門家を招聘すること

ヴアルガス氏は大日本軍の大マニラ市占領を確認しその軍政に服しかつ上記の要求を承諾するの用意ある旨を答へたり、大日本軍代表はヴアルガス氏の陳述を諒とし、同氏の大マニラ市長としての地位及び職權を承認し、かつ同氏監督下にあるすべての官公吏並に市民にして大日本帝國に対し敵性行爲をなさず、かつ敵國を利するが如き如何なる行動をもなさざるにおいては大日本軍は左の各項を許容する意向なる旨を述べたり

一、官公吏の指示及び職權を承認すること
二、生命財産に対し保護を與へること
三、信仰の自由を認めること
四、現行法規並に慣行を承認すること、但し新事態に即應せざるものはこの限にあらず

大日本軍代表は上記要求実施方法に関する詳細については、双方の関係官憲において隨時協議する必要ありと述べたり

右に対しヴアルガス氏は大日本軍代表よりかゝる宣言を聞くことは欣快とするところにして、具体的詳細なる取決めについては、大日本軍関係當局と常に協議すべしと答へたり

昭和十七年一月七日マニラ市大日本軍司令部に於て日本語及英語を以て本書各二通を作成調印せり

第三 治安維持、經濟復舊の措置

軍政宣布後軍司令官は治安維持、經濟復旧に関し各種の措置を採つたがそのうち主なるものは左の通りである。

(1) 敵國人收容目的及掠奪品返還に關する件

(一月九日付軍司令官布告)

一、敵國人(英米人等)收容の目的は、その生命を保護せんとするにある。未だ日本軍の保護下にあらざる英米人は速に日本軍當局に出頭申告すべし。一月十七日までに出頭申告せざる者に対しては、敵対行爲をなしつゝあるものと認め、嚴重なる處罰をなす
二、掠奪せる盜品は速に元の位置に返還すべし、若し返還することなく掠奪の證據確実なるものに対しては嚴重に處断せらるべし

（2）軍律に關する件（二月三日付軍司令官布告）

左の行爲をなしたる者は軍律に照し死刑又は重罰に處す、但し発覺前自首したる者はその罰を免除せらるべし

一、日本軍に對し叛逆をなしたる者
二、軍隊、艦船の嚮導を爲すに當り、虛僞の指導をなしたる者
三、軍事に關する機密を探知蒐集し、またはこれを漏洩、交付、公示したる者
四、軍事に関し虛僞の陳述、または造言飛語をなしたる者
五、軍用に供する陸路、水路、橋梁、鉄道、鉄道の標識、電信電話の機械、船舶及び郵便用に供する物件を損壞し、若くはその他の方法を以て交通、通信を妨害したるもの
六、軍用家屋、倉庫その他の營造物、汽車、自動車、車輛、船舶、彈藥、糧秣、被服その他軍用に供する物件を損壞または毀却したるもの
七、軍事上必要なる諸種の標識掲示を損壞し又はその他の方法を以てその用を失はしめたるもの
八、徵発を免るるため被服、糧秣、薪炭、牛馬、車輛その他軍用に供すへき物件を損壞、殺傷または藏匿したるもの
九、兵器、糧秣、彈藥、被服その他の軍需品または軍の保管にかゝる物件を盜奪したるもの
一〇、戰亂に乘じ掠奪、强奪、殺人、放火、騷擾をなしその他治安を害したるもの

十一、毒を投じ、若くはその他の方法を以て飲料水を汚毀したるもの
十二、敵國軍人、軍屬及びその他の軍從屬者を殺傷しまたはその職務執行を妨害したるもの
十三、軍用手票を偽裝し、その受領を拒絶し又は誹謗謗言を放ち、若くはその他の方法を以てその流通を妨害する行爲をなしたるもの
十四、軍事違反者を奪取藏匿し、または隱蔽したるもの
十五、軍の発したる軍事上必要なる命令に服從せざるもの
十六、その他軍に対し有害の所爲ありたるもの
十七、以上各項の行爲を企圖しまたは教唆若くは幇助したるもの

（3）營業再開に關する件（二月一日付軍司令官布告）

大日本軍は比島經濟活動の迅速かつ円滑なる復旧を希望、よつて日本人商社は勿論比島人及び第三國人商社にして當局によりその營業を禁ぜられたるものを除き、再開可能なるものは速にその營業を開始し、以て當局の施設に協力すべし、業務遂行に関する細目の規定は追つて公布さるべきも、取引の暴利を貪り不當に物品の買占め及び奢侈みなたすものは軍律に照し嚴罰に處す

（4）敵性國人に對する利益配當、利子支拂等の制限に關する件

（二月二十五日付軍政命令）

一、會社銀行その他法人にして本日以降敵性國人に対し利益金の配當、剩余金の分配、利子支拂、社債又は公債の償還等をなさんとする時は右に相當する金額を一括して代表者名儀を以て別に指定する銀行に預入すべし、法人解散の場合における殘金、財産の分配についても亦同じ
二、代表者たるべきもの無きと含又は代表者を定め難きときは利害関係者の申請により大日本軍司令官之を定む
三、前記の預入をなすに當りてはその都度個人別内訳明細書を添付すべし
四、個人別内訳明細書に記載せられたる者が代表者名儀を以て預入せられたる金額中自己に属すべき部分の拂出を受けんとするときは銀行預金等の拂出許可申請の場合に準じ本人及預入代表者連署を以て許可申請をなすべし
但し他に自己名儀の銀行預金を有する者が之に振替をなすための拂出に付ては報告のみにて足り許可を要せざるものとす
五、右に違反する者は法人なるときは法人、其代表者又は事実上の行爲者の孰れか一、若くは二又はその全部を、個人なるときは本人を軍律に照し軍罰に處す

付　則

一、本軍政命令に於て敵性國人とは左記國籍を有する個人、商社及會社その他の法人又は資本の主たる部分か該國籍を有する個人又は法人により占めらるる會社員の他の法人を謂ふ
北米合衆國、英國、和蘭、カナダ、濠洲、新西蘭、亡命波蘭、南阿聯邦、グアテマラ、ホンヂユラス、ニカラグワ、サルバドル、ハイチ、キユバ、コスタリカ、ドミニカ、パナマ、メキシコ、亡命チエツコ、ドゴール、イラン、ノルウエー、軍慶政權
二、本軍政命令は當分の間大マニラ市内に限定す
大マニラ市内における指定銀行は左の二行とす
台湾銀行、横浜正金銀行。
その他軍用手票流通、円札並に外國貨幣流通禁止、暴利取締等についても命令を以てそれ〴〵處置してゐる。

第四　中央行政機關設置

一月廿三日比島派遣大日本軍最高指揮官は左の訓令をヴアルガス氏に與へ、新中央行政機関の設置を命じた。

訓　令

一、貴殿（ヴアルガス氏）は中央行政機関の長官となり、速かに殘存比島中央行政機関を統一編合し大日本軍最高指揮官の指揮命令を承け行政の実施に任ずべし
二、比島中央行政機関の統一編合に方りては概ね左記に據るべし
イ、行政機関の長官に所属の直属機関を附属す
ロ、各中央行政機関は之を内務、財政、司法、農商、教育厚生及び土木交通の六部に統合す
各部に夫々長官を置き行政長官統轄の下に所管の行政を実施す
各部に日本人指導官及同補助官若干名を置く
三、大日本軍最高指揮官は裁判機関を管轄す

四、中央行政機關各部の長官は貴殿の推薦に基き大日本最高指揮官之を任命す
　その他の主要官吏（直屬機關の長及地方行政機關の長を含む）任命に關しては大日本最高指揮官の認可を求くべし
五、中央行政機關各部及び裁判機關の編成は概ね從來の制度に準據すべし、但し其の大綱に關しては大日本最高指揮官の認可を受くべし、將來重要なる改編を行はんとする場合も亦前項に準るべし
六、行政の実施は大日本軍の要求充足を最優先とし先づ速に治安を恢復するを主眼とし行政長官及各部長官は重要事項に關しては大日本軍最高指揮官の命令に依るべし
七、地方行政機關の隸屬系統及其の編成は概ね從來のものに準據すべし
　かくてヴアルガス長官は一月二十六日左の職員を網羅して行政委員會を組織した。

二十六日付派遣軍營局発表
昭和十七年一月二十六日午後三時行政府各部長官その他を任命せり、各部長官及その他の氏名次の如し

行政長官	ヴアルガス
書記官長	マラブツト
主計局長	シソン
内務部長官	アキノ
財務部長官	アラス
司法部長官	ラウレル
教育厚生部長官	レクト
農商部長官	アルナン
土木交通部長官	バレデス
大審院長	ユーロ

一月廿一日大マニラ市長を新に任命參議院を設置、越えて二月三日邦人各部指導官を任命して、五日より中央行政機關の事務を開始し、二十三日には十一州の知事を任命発表した
しかして二月二十日日本軍最高指揮官はヴアルガス行政長官に対し、權利行使に關する根本原則を左の如く訓令を以て明示した。

訓令、準據法規に關する件
比島に於ける立法行政及司法に關しては左記に諸項に據るへし
一、比島行政機關及裁判機關は別命ある迄日本軍政下の新事態に適應せざるものを除き比島從來の法規慣習に準據するものとす
二、比島行政府は豫め日本軍司令官の認可を受け新に立法を爲すことを得

第五　教育方針明示

大日本軍司令官は新比島建設に於ける教育の重要性に鑑み、特に教育革新の根本方針を左の如く指示した
訓令、教育の根本方針に關する件
爾今比島教育は左記根本方針に據り厳に其の革新を期すへし
一、大東亞共榮圏の一環として、新秩序建設の意義を認識せしめ、これに対する比島の負担すべき負担を理解し日比親善關係を強化すること
二、欧米特に米英依存の思想を根絶し東洋人たる自覺に基く比島文化を建設すること
三、物質偏重を排し道義の涵養に努めること
四、日本語の普及を圖るとともに英語使用は漸を追ひ之を廃すること
五、初等教育の普及並びに実業教育の振興に重点を置くこと
六、勤勞精神を鼓吹すること
備考　比島の國語（タガログ）の普及に關しては、教育厚生部内國語調査會に於て審議の上速に促進すること

第六　比島に於ける日本臣民の私權享有制限廃止

從來比島において日本人は私權享有關係に於て各種の制限を受けてゐたので、新事態に即應し之等を撤廃するため、三月十四日左の軍政命令を発した。

軍政命令

比島における日本帝國臣民の私權享有に關する件
第一條　日本帝國臣民は比島從來の法規により外國人に対し加へられたる私權に關する禁止または制限を受けることなし
第二條　比島從來の法規中本命令に抵觸する部分はこれを廃止す
第三條　本命令は係屬中の事件についても亦之を適用し、昭和十六年十二月十八日より效力を有す。

（三）マレー

軍政施行宣布　二月十五日のシンガポール陥落により、英領マレー全部の平定成り、同十八日全マレーに軍政が施行されたが、之に先立ち十六日山下マレー方面軍最高指揮官は左の聲明を発し、マレー統治の精神を明かにした。

山下最高指揮官聲明

抑もシンガポールは英國の印度、濠洲、東亞制覇のため營に聯絡的樞軸たるのみならず又侵略搾取のための牙城にして古來金城鉄壁を誇稱し、難攻不落の要塞として自他共に信ずるところなり、然るに軍がマレー攻略、シンガポール覆滅に着手するや二ケ月にして全半島を席捲し、七日を出ずして堅壘を粉砕し印・濠・東亞における英國勢力は一朝にして土崩瓦解し要なき扇、柄なき斧と化するに至れり。由來英國は極端なる利己獨善の主義を奉じ傲然として他を蔑視するのみならず老獪、欺瞞、驕奢、惰眠を事とし不正不義を敢行して唯自己の利益にのみこれ努め世界を毒せしところ大なりしが、軍の作戦経過に徴するも亦彼等英人のマレー民衆搾取吸血の跡は経營の事實に照し明瞭なるのみならず、作戦の間その退却に際して一般民衆の金品貴重糧秣を徴收强奪、住家を焼却する等民衆を塗炭の苦に投じて顧ず、或は印度濠洲軍を前線に配置し、本國軍はシンガポールに止つて他を駆使しある等その利己主義、不仁不義言語に絶

し眞に人道の公敵と稱すべきなり、帝國が今次決然破邪の劍を揮つて起つに至りし所以は帝國屢次の聲明に明かなるところにして、玆にこれを蠲せずと雖も、吾人の希求するところは曩慘不正義なる英國を精蕩し万民苦樂を共にし、有無相通じ、各民族各個人各々その能に應じてその所を得しむべき所謂八紘一宇の大精神に基き正義のもと、新秩序を聚へ東亞共榮圏を確立して世運の進歩を促進せしめんとするに外ならず。されば軍は今後更に四圍近辺に所在する英兵の殘骸の清掃覆滅を期すると共に永きに亙る英人吸血の禍を懲し又今次蒙りたる戰禍を復興し、マレーの永遠なる発達政策を講ぜんとす。マレー民衆はよく帝國の眞意を理解し軍に協力し新秩序と共榮圏の迅速なる確立を期せんことを願む。もしそれ旧態依然として迷夢を追ひ、私慾に專念し、不逞を重ね或は治安を攪乱し或は軍の指令に服せず、軍の行動を妨害する輩に対しては軍は断乎としてこれを排撃殲滅す

右シンガポール攻略に當り民衆に次を示して覆ふところを明にし過誤なからしめんとす

軍政機關整備

二月二十三日全マレーを統治する軍政機関の構成が左の如く発表された。軍政部長は馬奈木部隊長でその幹に總務、產業、財務、交通の四部から成り、總務部は官房、宗教、教育、衛生監督、警務、司法檢察、調査の七科、產業部は農務、工務、山林、商工水產、交易の五科、財務部は經理管財、理財、專賣、審査の五科、交通部は交通、海運、通信、土木、測量の五科によつて構成され、總務部長は軍政部次長渡辺渡大佐の兼任、產業部長は鈴木重郎、財務部長は原久一郎、交通部長は櫻田修の各氏が選任された。

次いで同二十七日、物價騰貴抑制のため、百種の食糧品について最高價格を決定発表した。

マレー各州知事任命

三月七日全マレー十州並に昭和特別市市長が左の如く発表されたが、その氏名は第一部『マレー』を參照されたい。

マレー統治の根本方針闡明

三月十一日マレー方面軍軍政部次長渡邊大佐は、全マレー建設の大綱を明かにしたが、その要旨は第一部『マレー』に掲げた

(四) 東インド（旧蘭領東インドスマトラ島を除く）

軍政の施行

三月七日蘭軍のバンドン總攻撃開始と共に蘭印軍無條件降伏と共に、同方面最高指揮官は左の布告を発し、東インド地方に軍政を施行する旨を宣布した。

大日本軍布告

第一條　大日本軍は同族同胞たる東インド民衆の福祉增進をはかるとともに大東亞共同防衛の原則に準據し現地住民との共存共榮を確保せんことを期し、差當り東インドの治安を確立し民衆を速かに安居樂業せしめんがために東インド區域に軍政を施行す

第二條　大日本軍司令官は總督の職權を行使す

第三條　占領地における在來の行政諸機関の職域權限及び諸法令の規定は軍政施行の特に障碍されざる限り效當り有效とす

第四條　官民は大日本軍及び大日本官憲の命令を遵守すべし、大日本軍は忠順なる官吏の職權並に良民の生命及び正當なる財產並に在來の宗教はこれを尊重す、官民は大日本軍を信賴し速かに本業に就くべし、但し大日本軍及び大日本軍官憲の命令に違反し、或は治安を紊し、或は我軍の行動を妨害し、或は敵軍に款を通ずるもの、並に濫りに財政經濟を攪乱するもの、或は財產私財を隱匿し、或は資源及び諸施設を破壞することあれば直にこれを軍律に照し嚴重に處斷すべし

第五條　占領地における通貨はギルダー及び軍票とす

第六條　本布告は公布の日より之を施行す

經濟復舊、治安維持の措置

第一　經濟取締暫定方針

三月廿三日我軍政當局はジヤバ島における產業、經濟、交通各部門の取締に關する暫定的方針を左の如く布告した

大東亞建設方略

一、產業

(1) 水利灌漑の諸設備、鉄工業設備、倉庫、栽植物その他一切の生產製造設備を破壞、毀損することを禁ず

(2) 一切の官民は速かにその職場に復帰しそれぞれその業務の維持に努むべし

(3) 輸出入業、卸賣業、製造工業（精米業を含む）栽培企業（砂糖企業を含む）運輸業及び倉庫業の代表者は左記の品目につきその在庫高、在庫場所を速かに大日本軍軍政部に申告し、これが移動、處分に関しては許可を受ぐべし

織物、縫糸、織糸、鉄製品（亞鉛板、釘、瀝鉄板、金屬線）セメント、マツチ、含燐肥料、鑛酸、米、玉蜀黍、規那皮、キニーネ、篦麻子、タンニン材、牛皮、コプラ、パツム油

二、金融

(1) 銀行その他金融機関の保持する通貨、地金銀、有價證券、帳簿等の搬出、湮滅隱匿その他一切の金融攪乱行爲を禁ず

(2) 銀行の業務は一時これを停止す、各銀行の代表者は速かに大日本軍軍政部に出頭、業務再開に関する指示を仰ぐべし

(3) 當分の間大日本軍の許可を受くるに非ざれば不動產及び有價證券、銀行預金等一切の無体財產權の處分を爲すことを得ず